浜松市民文芸
69

浜　松　市

浜松市民文芸

第69集

浜松市

浜松文芸館

先人の感性にふれてみたい
今日のはままつを語りたい
明日を語ってみたい

松島十湖

加藤雪腸

柳本城西

原田濱人

鷹野つぎ

相生垣瓜人

百合山羽公

藤枝静男

清水みのる

小百合葉子

浜　松　市　民　文　芸

第　69　集

松島十湖肖像画　（松島源吉氏寄贈）

浜　　松　　市

選者

小説	竹腰幸夫
	柳本宗春
児童文学	住吉玲子
評論	中西美沙子
随筆	たかはたけいこ
詩	橋本由紀子
短歌	清水正人
定型俳句	髙柳克弘
自由律俳句	宮本卓郎
川柳	今田久帆

☆ 表紙絵

山口貴一

令和五年度　浜松市芸術祭「第71回　市展」
芸術祭浜松市長大賞受賞作品　彫刻部門
題『鍵盤からの試み』

この度は、栄誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。昨年度から浜松に活動の拠点を移し、芸術文化振興に少しでも貢献したいとの思いから出品するに至りました。本作品は鍵盤の形態を出発点として、ピアノの持つ美しさの再構成を試み「音楽のまち浜松」ならではのコンセプトで制作しています。

浜松における芸術文化は、音楽以外のジャンルから見ると寂寥を感じざるを得ません。益々の発展に寄与できるよう、これからも精進いたします。

「浜松市民文芸」第69集　市民文芸賞受賞者

部門	受賞者
小説	加藤　喬
	永井　恒
児童文学	内山　文久
	金指　芙美代
評論	木俣　統裕
	中村　太一
随筆	中津川　久子
	藤原　百合子
詩	乗松　弘幸
	竹内　としみ
	石黒　實
短歌	上村　優里愛
	新村　優奈
	松浦　ふみ子
	赤堀　進
	高橋　祐三子
	竹内　典子
	佐藤　一央

部門	受賞者
定型俳句	有賀　千子
	藤本　幸子
	山口　一郎
	尾林　せい子
	藤井　星子
	太田　沙知子
	藤田　節子
	縣　裕子
自由律俳句	鈴木　由紀子
	大平　悦子
	源　次郎
川柳	中津川　久子
	河合　香織
	浅井　常義
	宮崎　和子
	源　次郎
	竹山　惠一郎

目次

小説

市民文芸賞

エラーから始まる……加藤　喬……10

聞こえなくても僕には足がある。……永井　恒……26

（創作）戦国時代遠つ淡海・女傑列伝……内山　文久……34

入選

蠅……ヨリタユウコ……50

接合……鈴木　篠千……58

登記されていないことの証明……嘉山　春夫……76

選評……竹腰　幸夫……93

選評……柳本　宗春……94

児童文学

市民文芸賞

音楽っていいな……金指芙美代……95

入選

けんちゃんと鬼の子もんちゃん……河島　憲代……103

選評……住吉　玲子……110

評論

市民文芸賞

ノンフィクションという装い……木俣　統裕……111

パンデミックを経験して……中村　太一……119

入選

映画『有りがたうさん』の清水宏監督について……小粥　章司……127

三方ヶ原の戦いにおける武田軍の進軍ルートについて……神谷　司……136

選評……中西美沙子……143

随筆

市民文芸賞

あんちゃと水玉もようと……中津川久子……145

マロがいた日……藤原百合子……147

入選

てんやわんや……大庭　拓郎……149

T君の訃報……加藤　喬……150

マスク作り教室……ほりうちよしひろ……151

お酒の神さま……松田　健……154

それが始まりだった……雨宮　智彦……156

選評……たかはたけいこ……159

詩

市民文芸賞

いきものなまものこわれもの……乗松　弘幸……161
旅路の果てに……竹内としみ……163
朝を届ける……石黒　實……165
想い人……上村優里愛……167
盲目……新村　優奈……168

入　選

アル詩……尾内甲太郎……169
飛行記……ヒメ巴勢里……170
はい　及第点です……中津川久子……171
ゆらゆら……豊田　すず……172
眠い……谷口　慧真……172

選　評

……橋本由紀子……173

短　歌

市民文芸賞

松浦ふみ子　赤堀　進　高橋祐三子
竹内　典子　佐藤　一央

入　選

桜花　ふみ　坂口　ちせ　鈴木　弘子
平野　旭　峯村友香里　渥美　朋可
井口　絹子　池谷　和廣　石井　泰子
石黒　實
岩崎　芳子
青海　まち
加藤　久子
寒風澤　毅
髙木　勝海
名倉　智代
福島　正義
森　都子
和久田郁江
伊藤　早織
伊藤　美代
内山　文久
遠藤　ゆき
大山　啓
岡本　蓉子
神谷　司
皐　月
鈴木　和子
鈴木　善一
鈴木由起子
竹内オリエ
戸田田鶴子
中野万里子
伊藤　久子
梅　鉢　草
大庭　拓郎
河合　和子
柴田千賀子
坪井いち子
西村みゆき
古谷聰一郎
谷野富久恵
相曽多加根
伊藤　友治
井浪マリヱ
内山　正則
大城きみ子
岡部　澄子
小川　道子
川合　陽子
柴谷　俊行
鈴木　勝則
鈴木　壽子
髙橋　幸
谷口　章子
外山　加代
根本　文子
伊藤　米子
江間　得二
小笠原靖子
木下　文子
清水　孜郎
中村　照美
平井　要子
美山　愛
山本　勝彦
安藤　圭子
伊藤　雅章
岩城　悦子
遠藤ひろみ
大檜　一郎
岡部すみれ
加藤貴代美
栗原　惠子
清水　紫津
鈴木　賢三
すずきとしやす
髙山　紀惠
手塚　みよ
鳥井　美代
野末　妙子

袴田　成子　春野　温子　飛　天　女
藤原　孝志　増井　照美　松本ひで子
三　日　月　水野さきゑ　宮澤　秀子
宮本　惠司　吉川　一美　由倉　典之
リコリス　和久田俊文　渡野邉すみ子
選　評……清水　正人……186

定型俳句

市民文芸賞

有賀　千子　藤本　幸子　山口　一郎
尾林せい子　藤井　星子　太田沙知子
藤田　節子　縣　裕子　鈴木由紀子
大平　悦子

入選

伊藤　好子　小粥　通恵　小楠惠津子
小澤　幸一　加藤　喬　河合三代子
川島　泰子　柴田ミドリ　杉田みさき
鈴木　和　鈴木　賢三　竹田たみ子
竹平　和枝　外山　加代　野田　俊枝
橋本　英夫　菱田　淡海　松本ひで子
宮澤　秀子　山口　英男　由倉　典之
渡辺きぬ代　渥美　朋可　池田　智子
池谷　和廣　市川　敏　伊奈　宜子
岩崎　芳子　右崎　容子　内山　昭子
大村千鶴子　岡田　親敬　小川　惠子
小楠　勝代　小栗　道子　小野田みさ子
加藤　雅子　神谷知恵子　笹瀬　幸代
嶋田　好二　清水　孜郎　鈴井あや子
すずき　鈴木　章子　鈴木　敦子
鈴木　浩子　鈴木みちゑ　鈴木　嘉子
竹田　道広　舘石　照子　田中美保子
坪井いち子　戸田田鶴子　中津川久子
中野ふさ子　中村つぎ子　中村日出子
西野久美子　二橋三千代　根本　文子
平野　旭　古谷　とく　まさこ
松島　義徳　松本憲資郎　峯村友香里
宮本　惠司　山川美惠子　山田　知明
和久田郁江　和久田俊文　赤堀　進
飯塚日出子　井口　絹子　池谷　静子
石井　泰子　伊藤アツ子　伊藤　倭夫
伊藤　正　伊藤　久子　井浪マリヱ
岩城　悦子　岩崎　五郎　内山　文久
内山　正己　大田　勝子　岡部　澄子
岡部すみれ　岡本　蓉子　小楠　達司
おっさん　糟谷　修子　勝田　洋子
加藤貴代美　加藤みえ子　要　弘子
金子　典子　嘉山　春夫　菊地奈々子
切畠　正子　熊谷　文昭　齊藤　純子

酒井　浩之　笹本　栄里　清水　康成
鈴木　勝則　鈴木　京子　鈴木　早苗
鈴木　利定　鈴木　俊彦　鈴木由起子
砂間　達也　竹内オリエ　竹平　安則
田中　愛子　手塚　みよ　戸塚　郁代
戸塚　忠道　鳥井　美代　中野万里子
成瀬　喜義　ノーリターン新　野田多満子
袴田　里桜　林田　昭子　藤生　君江
藤原　孝志　古橋美由紀　松本　栖枝
みみハム　美山　愛　村松　道夫
モハメッドマシュルール　あひる　伊藤　美代
榎本　紗希　尾上　正代　加々美さよ
神谷　司　川合　泰子　後藤　とも
柴田　奎哉　杉本　仁樹　鈴木　和子
高木　勝海　高田　周　高山　功
高山　紀恵　田中　菜乃　永田　恵子
中村　大洋　新田　佳音　春元　高
飛天　女　牧　元久　吉野　民子
渡瀬　雄介

選評……高柳　克弘……216

自由律俳句

市民文芸賞

源　次郎　中津川久子　河合　香織

入選

岩本夕津子　河合　香織　源　次郎
中津川久子　雨宮　智彦　伊藤　正
菊川　文江　鈴木　章子　鈴木　和子
戸田田鶴子　豊田　恵子　松尾　尚子
井手賀代子　伊藤アツ子　岩城　悦子
内山　文久　岡本　蓉子　おっさん
加藤美恵子　木俣　史朗　竹内オリエ
ちばつゆこ　中谷　則子　中野万里子
根本　文子　藤井　星子　本藤　一義
リコリス　渡辺　憲三　渥美　朋可
伊藤　美代　小笠原靖子　尾内甲太郎
神谷　司　齊藤　純子　鈴木　勝則
鈴木由起子　戸田　敬三　ヒメ巴勢里
古谷聰一郎　松本　栖枝　美山　愛
山中　伸夫

選評……宮本　卓郎……225

川柳

市民文芸賞

浅井　常義　宮﨑　和子　源　次郎
竹山恵一郎

入選

池田　稔　鈴木　均　髙柳　龍夫

田中　恵子
牧田　龍司
池谷　和廣
小川　憲雄
恭　　子
鈴木　敏子
春元　　高
伊熊　靖子
稲垣久美子
手塚　美誉
藤井　星子
谷田貝忠弘
あ　つ　こ
源　　次郎
竹川美智子
飛　天　女
馬塚　五朗
由倉　典之
岩城　悦子
尾内甲太郎
河合　香織
齊藤　純子
Z　・　K
竹内オリエ
寺田喜代子
山口　英男
池谷八重子
嘉山　和美
鈴木　勝則
鈴木　俊彦
宮﨑　和子
伊藤アツ子
岡本　蓉子
戸田田鶴子
藤原　孝志
山中　伸夫
小川　道子
高原　詩音
竹平　安則
平野　　旭
馬渕　征稍
和久田俊文
内山　文久
加藤貴代美
川上　慶子
鈴木　和子
髙木　勝海
竹田たみ子
徳田美知子
浅井　常義
梅川　一惠
菊川　文江
鈴木　賢三
竹山　容子
宮澤　正人
伊藤　　正
竹山惠一郎
根本　文子
古谷聰一郎
足立　和代
神谷　　司
髙山　紀惠
夏目　正樹
藤田　盛雄
山田　良藏
伊藤　美代
江間　得二
加藤　　弘
河島いずみ
鈴木由起子
髙山　　功
戸塚　忠道
中津川久子
芳　　子
藤生　君江
リコリス
松本　栖枝
選　評 ……今田　久帆…240
「浜松市民文芸」第70集作品募集要項……241

作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。

掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作品は選考順または五十音順としました。

第69集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一一	短歌	四八三
児童文学	五	定型俳句	七八八
評論	六	自由律俳句	二一九
随筆	二五	川柳	四一二
詩	四二	計	一、九九一

小説

［市民文芸賞］

エラーから始まる

加藤　喬

日曜をノースローデイとした稲垣翔一は、代わりに下半身強化の長距離走をすると言い出した。一緒に走る者を募ったが、強風にさらされての十三キロとあっては、野球部の猛者たちも流石にひるんだ。結局伴走を引き受けたのは、長距離走なら陸上部員もかなわないという小沼健太一人であった。

浜松市西区の雄踏総合公園を両手に見て西に向かうとすぐに突き当たり、信号を左に行けば弁天島、右に行けば村櫛町、さらに行けば舘山寺。それが県道三百二十三号線、浜名湖に沿ってなぞるように走る道だ。翔一と健太は舘山寺コースをとった。三キロほど走ると浜名湖ガーデンパーク、もう眼前には海しかない。真夏は早朝に出発し過酷な日差しを避けたが、強い向かい風を受けた時は、それは風ではなく壁だ。その風を押して走ると村櫛海岸、さらに走るとやっと海が視界から消える。それからはなだらかに登ったり下ったりする道を、時に林の中をぬって走る。ついにその道は突き当たり、再び目の前に浜名湖が開ける。その辺り一帯が舘山寺温泉、大きなホテルが居並ぶ。が、中には既に廃業した物が数件あり、蔦の絡み始めたものさえある。その突き当たりの信号を右に走れば、ゴールの浜松動物園の駐車場はもうすぐそこだ。どちらかの家の車が待ち受けている。

翔一はピッチャーのばねか、少し跳ねるような走り方で、長距離を走るには不向きな走法だ。同級生の恋バナなど軽口をたたいていても、口数はすぐに少なくなり、まもなく顎が上がる。長距離走然とした走法の健太は、いつも先に息のあらくなった翔一を見守ることになるのだが、それでも翔一はいつも完走した。なんとしても強くなりたいという翔一の気迫が、健太につんと染み入ってきた。

夏の県大会決勝当日、球場へと向かうバスの中で、小沼健太は稲垣翔一と走った日曜の浜名湖長距離走を思い浮かべていた。健太の後ろの席で翔一は、キャッチャーでキャプテンの遠藤とピッチングの組み立てを話し込んでいる。

甲子園行きの切符は手の届くところにあった。決勝戦の大舞台、浜松育英高校は七回を終えて2対0で勝っていた。しかしあろうことか八回裏に派手なツーランをあび同点に追いつかれてしまった。九回裏はツーアウトまでこぎつけたものの、ランナーを三塁に背負っている。このランナーがホームベースを駆け抜ければ、甲子園切符はスワンと手のひらをすり抜ける。なんとかアウトを一つとって延長戦に持ち込まねばならない。

ピッチャーを真ん中に、キャッチャー・内野陣・監督の伝令を伝える控えの選手が輪になっている。監督の指示は「塁は空いているが敬遠策はとらない。当たりの出ていないこのバッターと勝負する」というものであった。人間の中には、寝ている時以外いつも笑っている者がいるにはいるが、至って普通の奴はこんな時には笑えない。無理に笑おうとして泣き笑いのような顔になっている選手もいる。しかしプレッシャーの最たる餌食となるのはピッチャーだ。そのピッチャーのビビりを少しでも小さくすべく、「打たせて行け、力むな、打たせて行け」と言わなければならないのが、こういう場合の内野陣のサガ。口々にお題目を言いあった。三塁手の健太も言ってやった。彼なりにうまい笑顔を作って。「おう」と掛け声勇ましく輪を崩したが、健太は振り向くともう唇が乾き、（打たせるか、打たせてもいいんだ、サード以外に）と本音では思ってしまった。

右バッターボックスに割と小柄な選手が入る。しかもバットを寝かせて構えているせいで押し出しはさほど強くない。（外角を中心にいけ。なぜかって、そりゃあ俺のポジション的にそうだろ。スライダーを混ぜて、ストライクを先行させた後、焦るな、さらに外角に二つぐらいボール球を見せろ。最後はコースにこだわらず、フォークで三振を狙え。サードに走者をおいてフォークは使いづらいだろうが、キャッチャーはキャプテンの遠藤だ、あいつのメンタルなら大丈夫、それでいけ）健太はそう念じた。

初球は外角をつくスライダー、（よしいいぞ、その球なら打たれない。もう一つ今のでいいんだ）しかし遠藤が要求したのは外角のストレート、それがやや真ん中よりに入るとバッターは迷わずひっぱった。三塁線にやや強いゴロが飛ぶ。普段なら何のことはない守備範囲の打球なのに、緊張の重しが体を固くして一歩目が遅れた。おまけに打球は少しイレギュラーじみた跳ね方をし、硬直した棒のような左腕を差し出すも、ボールはグラブにまあるく収まらず、テケテケと外野に転がって行った。万事休す。

健太は両ひざに手をついてしなだれた。センター奥の電光掲示板を見ると、ヒットのランプが灯っている。それは大人

らしい思いやりに決まっている。甲子園行きのチームが決したというのに、厳密を貫いてエラーをした選手に塩を塗るような真似をせんでもよかろうと。しかしその時はまだ無様な姿は見せたくないという人間らしい気力は残っていて、試合終了のサイレンが鳴ると、自分の力で整列に加わった。相手チームの喜びようがまざまざと目に入る。自然と白い歯がのぞき、目は喜びを持て余している。

整列が解けると、育英高校の選手たちは肩を落とす者、グラブタッチをして健闘を称える者、だが健太はピッチャーの翔一を見て愕然とした。涙が溢れ、嗚咽を堪えようとして口元に肘をぶつけている。翔一の夢を削ぎ落したのは俺だ。絶望の息を吐いた。いや息をする資格すらあるのか。

それから後の事ははっきり記憶にない。おそらく引きずるような足取りで内野席の応援団の所に向かい、ぺこりと頭を下げたのだろう。ベンチに戻るとバットとグラブを持ってロッカールームに移り、監督の三年生へ贈る言葉を承ったはずだ。話の内容はすり抜けているが、監督は最後を「ありがとう」と結んだ。健太にとっては残酷な言葉であった。選手たちは送迎のバスで高校まで帰ることになっているが、健太は応援に来ていた母親の車で帰るわがままを許してもらった。母親は目を真っ赤にしている。他の父母に「うちの息子がエラーしてしまってすみません」と何度も何度も詫びてきたのだろう。やはり親孝行はできなかった。

家に着きシャワーを浴びて、ポカリをがぶがぶとやると寝入ってしまった。夜中に腹が減って目を覚ました。こんな時にも食欲を覚える自分の体が、なんだか借り物のように思われた。母が気配に気づいて夕飯を温めてくれている。親父がにゅっと現れた。彼は自分の気持ちを相手に擦り込むような人間ではなく、健太は父親との関係に苦慮したことはなかった。父はこの時も「まあ二・三日ゆっくりするんだな」と言い残してすっと行ってしまった。自分の気持ちを棚上げして、相手に満足してもらう物言いをする骨折りは免れた。じさま（小さい時から爺さんのことをそう呼んでいる）はもう寝入っているようだ。

翌日になって、少しは正気が戻ったのか、先ず俺がしなければならないことは何だと意識に上った。三年生に謝らなければ。先ずキャプテンの遠藤だ。後にも先にも彼がこのチームを作ってきた。うだりきる暑さの中を高校近くの公園で会うこととなった。

先に着いた健太は、自販機でコーラを二本買うと木陰のベンチで待った。

「この暑いのに、公園で男と会うってか」遠藤は笑い顔で現れた。

「悪かったな、俺のせいで」

「何が、あれはヒットだぞ、電光掲示板見なかったのか?」

「俺だってリトルから野球してきたんだぜ、ヒットかエラーかくらい分かるよ」

蝉がうるさい。人間の気持ちなんかにおかまいもなく、鳴き

たいように鳴くだけ鳴いている。遠藤はコーラを一口飲むと、ペットボトルを首元に当てている。
「みんなにも謝っておくよ、なるべく早くにな」
「それで気が楽になるならいいけど、なあ健太、俺たちのなかにドラフトにかかってプロ入りしそうなやつがいると思うか？」
「いないよな、一人も」
「そうだろ、ならいいじゃん。俺らにとって野球は目的じゃなくて、手段だったんだよ。楽しむための。楽しくなかったか？」
「楽しかった、面白かったよな」
「ほんと楽しかった。だけど野球も奥が深くて、俺らもいっちょ前に業師みたいな顔をして、時々なんか野球理論言いあったりしてな。そのうちにただ楽しめばいいじゃんって、ぽっかり忘れてたんだな、きっと」
「ただ翔一の事が気になるよ。あいつはプロとかじゃないにしても、大学野球なら十分通用する。甲子園に行けなかった事が影響しなきゃいいけどな」
「それは大丈夫だって。監督がどこぞの大学に推薦するだろ、秋にその大学の練習に参加して、実質それがセレクション。そこで大学側の目に留まるかは、翔一の実力次第だからな」
「そう言ってもらえると、少しは落ちつくけど、今さらながらあのエラーはな」

実は、準決勝戦では、七回に健太のツーランで逆転し、そのまま一点差で勝利した。決勝の舞台をあつらえた一番の立役者は健太であった。健太がそのことには一切触れず、決勝のサヨナラ負けの事ばかりを口にするので、遠藤はらしくないことを言った。彼の説によると、人間はプラスの事よりマイナスの事から思い出すらしい。人間というのは大多数がマイナス思考で、過去を思い出す時も、先ず負の事が頭に上ると。

健太は、プラスとかマイナスではなくて、印象に強い方を思うんだ。九回裏にランナーをサードに置いて、キャッチャーのお前がボールを後逸して、サヨナラ負けしたとしたらどうだ。その前の試合で盗塁を刺したことなんか頭に上るか、と返した。

それにしても二人とも高三生、進路の事に話が移る。
「健太は進路決めたのか、大学行くんだろ？」
「今は頭、真っ白だ。今までは大学で野球するって漠然と思っていたけどな」
「まあ、俺らは受験生としたら劣等生だからな。猛勉スイッチ入れねーと無理だな、俺ら野球してんだからそれでいいじゃんって、結局野球に甘えたっつー訳だ」
「遠藤はそのスイッチ入ったのか？俺、猛勉スイッチなんて意識にも上らなかったよ」

それから過去の模擬試験で互いが取った偏差値の事をつついたりしていると、すでに午前もおはようとは言えない時間

になっていた。遠藤が別れ際にキャプテン然としたことを言った。

「野球は団体競技だろ、陸上みたいな個人競技じゃあない。誰かの一振りで勝つこともあるし、誰かのミスで負けることもある。だけど団体競技の野球を始めるにあたって、そういうことがあっても文句は言いませんって、俺らは、野球契約書に一人一人サインしてるんだよ。だから健太、本当に気にしなくていいだぜ」

それから公園の出口まで自転車を引いて歩いた。別れ際の遠藤のセリフはなんだか神がかっていた。

「マイナスの事を思い出しても、本当はそれはプラスの事なんだって思えるようなメンタルでいたいよな」

少し驚いて遠藤を見ると、俺たちはこんなにも日焼けしていたのか、真っ黒い顔が照れたように笑っている。

「じゃあな」、遠藤はペダルに力を込めた。遠藤と会ったことは、気休め以上のものになった。

数日を経て気持ちもないできた七月三十一日、明日からは遅ればせながら受験生たろうと決意して、部室に私物を取りに行くことにした。校門を入り右に折れて五十メートル程歩くと、部室から聞きなれた三年生数人の声が届いた。

「健太をライトからサードにコンバートしたのは、監督のミスだよな。健太、打力はかなりなんだから、そのままライトにおいときゃよかったんだよ。次の年のこと考えて、二年生を押し入れたいのは分かるけど。健太のサードの守備はな」

その声の主は、遠藤であった。負の事を思い出してもプラスに上書きせよ、と数日前に言ったあの遠藤の声であった。後ずさりするように部室から離れ、高校を出た。

翌日、健太は萎え切った気持ちを引きずって、図書館に向かった。図書館にも蝉の騒音、七月を生き抜きいよいよ勢いを得ている。自習室に席を取ると、日本史の教科書と英単語集・模試で得た偏差値ランキング表などをナップから取り出した。

ランキング表をめくってみた。経営学部・経済学部・文学部・法学部・社会学部・社会学部・・・いずれも絵空事の単語にしか見えない。経営学部国際経営学科なんていうくくりを見て、目を輝かせる受験生がいるのだろうか?心の中でため息をつく。

教科書を開くことなく、自習室を出ると本の森に入った。様々な分野の本を眺めながら、小説を読むのも国語か、なんて言い訳をつけてみる。長編小説は身に余り、短編集を探してアンソロジーの棚に止まった。アンソロジーと言っても、様々な分野がある。恋愛小説・歴史物・推理小説・動物をテーマにした物など。さてさてどうしたものかと背表紙を眺めていると、隣にいた男性が、一冊の本を指さし遠慮がちな声で言った。

「この本なんか面白いと思いますよ」

驚いて男性を見やると、五十代ぐらいかと思しき人だ。

「これは失礼、余分なお節介だったね」
少し照れたように小声で言うと、別の棚に歩を進めて行った。
その本を手に取ると自習室に戻り十ページほどを読んだ。それは歴史物であった。どうもいけない、第一歴史小説というのは人物の固有名詞が頭に定着しない。読みづらい漢字も多く、読み仮名をつけるのは作者の責任ではないとしても、編集者にそのぐらいの気遣いはないものかと毒づきながら、この本を断念し、元の棚に返した。
新聞雑誌のコーナーに行くとソファーに腰を下ろした。昨日の遠藤の言葉を思い出す。彼はなぜあんなことを言ったのだろう。公園で会った時と真逆なことを。最後に「なんちゃって」と言って、それが俺には聞こえなかっただけの事か。あるいは他の三年生があのエラーの事がやはり腑に落ちず、俺に批判めいた事を言った。それをなだめようとして、あんなことを口にしたのだろうか。しかしもしそうなら、エラーした当の本人の俺が言うのもなんだが、俺たちが野球をして掴んだものは一体何であったのだろう。俺たちの間に互いに認め合い許しあう絆が出来ていなかったとしたら、夢中になり野球をして何が残ったというのか？
隣では老人が涼しい顔で新聞を読んでいる。ガラスの外に目を向ければ、母親に手を引かれ、幼子が飛び跳ねるように階段を上ってくる。過去からも脱しきれず、未来に向けても勉強スイッチが入らない。それで焦るならまだよい。そんな気持ちもわかない自分を顧みて、ある言葉がうかんだ。「空っぽ人間」今の俺はまさにそうだな。
それでも図書館には休館日以外毎日足を運んだ。言い訳づくりをしていたのかもしれない。気迫のこもらぬ受験生は、エネルギー消費の多い英文読解などはスルーして、暗記物に遊んで時を流していた。あの男性も図書館に来ることを常としているようで、ほぼ毎日見かける。すれ違えば無機質な会釈はしあう。
夏は相変わらず猛威を振るっている。暦の上ではもう秋だ、なんてこの際暦も書き換えた方がいいなと勝手なことを思いながら、この時期に野球をしていないことに安堵している。一日中ほぼ誰とも話さない。母親から言葉をかけられても、「うん」・「そう」で事足りる。
図書館の空気に飽きれば、決まって道路向かいの喫茶店に入った。ある日、図書館よりなお涼しい店内でいつものアイスコーヒーを待っていると、あの男性が入店してきた。視線が合うと互いに驚いて外せないままでいるので、何か言葉を発しないと間が悪い。
「こんにちは」
「やあこの前は悪かったね。読んで面白かった本が偶然あって声をかけてしまった。老婆心だったね」
「いえ、こちらこそお礼も言わずに、すみません」
「ご一緒させてもらってもいいかな」
「ええいいですよ、どうぞ、どうぞ」
彼は向かいの席に座った。

「受験生ですか?大変だね」
「いやあ、大変というほど熱が入ってなくて」
「私が受験生だったのは、もう四十年前になるよ、今さらながら随分年を取ったもんだ」
「どちらの大学に進まれたのですか?」
「名古屋大学の工学部です。学部四年と大学院修士の二年、六年間を名古屋でね、名古屋の夏は暑いよ」
名古屋大学というのは、受験生にとって水戸黄門の印籠にも匹敵する。しかし健太はそれを聞いて劣等感にひるむことはなかった。高学歴の人がそれを明かす時の、隠そうとしてもなおにじみ出てしまう誉のような表情が、彼には一切なかったせいかもしれない。彼の口ぶりは、ただ三年A組ですと所属をいう時のものに過ぎなかった。それから互いの名前を告げた。彼の名前は石塚耕作さんであった。
彼はその後もよどみなく話した。大手の自動車会社を一年前に早期退社して、現在は無職の五十八歳であること。子供はなく妻とは離婚し、館山寺町の独り身にしては大きすぎる家で、天涯孤独の日々をすごしていること。話さずにすめば閉じておくようなことを、事実だから事実として話すんだ、というような口ぶりであった。この夏に負った傷がなおも癒えず、このところ会話らしい会話もしていない、やはり独り身の健太には、人の話を引き出すような空気があったのかもしれない。
父親よりも年齢が上のこの誠実な男性を前に、健太もこの夏の試練を話した。自らのエラーで甲子園行きを逃してしまったこと、野球をして得たものは何であったのかと自問したことや、勉強スイッチをいまだに押せないでいることなども。ほぼ初対面の人に、こんな風に内面をさらすとは意外な事ではあったが、石塚さんを前にすると不思議な感じはしなかった。
石塚さんとはそれからも図書館で頻繁に会った。交わす会釈に表情がついた。喫茶店で一緒になると健太の会計まで済ませてくれるので恐縮したが、健太がいることを見計らって来るようなので、石塚さんの意志であると思って甘えた。ある日駐輪場の所で石塚さんに会った。
「健太君、昼飯に帰るの?わりとうまい店があるんだけど、よかったら行かないか。それともママが言ったかな、知らないおじさんについて行ってはいけませんって」
「知らないおじさんでも、ご飯をご馳走してくれるならついて行きなさいって、ママは言ってました」
冗談で返せた。
石塚さんの車は雄踏町を抜け浜名バイパスに入った。太平洋の白い波しぶきが目に迫る。湖西市街へとバイパスを降り、潮見坂を上がりきる前に古い店に着いた。静岡県の西端である。靴を脱いで座敷に上がった。踏めばきしむ音がする老舗の、太平洋が一望できる席に座った。食事をしながら話が弾んだ。
「健太君、知ってるか?オリックスの山本由伸というピッチ

ャーは年俸六億五千万円だってさ。サラリーマンの平均年収を四百五十万とすると百四十倍だぜ。由伸君のパフォーマンスは日本人百四十人分の労働に匹敵するのかね？そもそもプロ野球選手にとって、野球は究極の趣味じゃないのかな。まあね、プラスに考えればね、年俸六億五千万なんてのは、ぶっちぎりの税率で所得税とられる訳だから、最高にいいんだよ。所得が再分配されるんだからね。だけど正直言うと、百四十人分の汗がって思っちゃうんだな。」

「・・・・あれじゃないですか、ピッチャー山本由伸は一人しかいない訳で、そのピッチングを見たいと思う人がたくさんいるとすると、需要と供給の原則で山本選手の年俸は跳ね上がるんじゃないんですか」

本当はこう言いたかった。その山本投手も何試合も負けが続いたりホームランを打たれて逆転負けをくらったりしたら、そのつらさは、六億五千万円の年俸を得ているというプライドに勝ってしまうのではないかと。しかしそんなしみったれた事を口にすれば、決勝戦のエラーを今だに引きずっていると言っているようなもので、目の前のとんかつ定食には似つかわしくないじゃないか。

図書館への帰路、車中で奇妙な感情にとらわれた。石塚さんとこうして接していられるのはなぜだろう。名古屋大学の大学院まで出たエリートが、今や無職の状況に甘んじている。その上依る身内もないとあっては世間的に言う不遇の身だ。そんな石塚さんの身の上が、今の俺に心やすいと感じているのなら、俺の心根も案外底意地が悪いのかもしれないな。

その日夕方五時ごろ帰宅すると、じさまがハウスに行くところだった。じさまは三つのハウス九百坪で小松菜を生産しているが、夏の盛りは昼寝を決め込み、夕方からもうひと踏ん張りするのが常であった。

「健太、この暑いのに毎日どこへ行ってるだ？」

「図書館じゃん、俺受験生だぜ」

「図書館は本借りる所じゃねーのか？」

じさまは大学なら静大に行けばよいと言った。小学校を卒業したら、行く中学が決まっているような口ぶりであった。なんだかなあと思ったが、今の受験制度を説明するのもおっくうで、口をつぐんだ。それからじさまは遠慮がちに来週ハウスの仕事を手伝ってほしいがと言う。じさまとほぼ同年齢のシルバー軍団にパートとして仕事をしてもらっているが、夏の間はなるべく休ませたいらしい。

「まあやってやるか、受験生の時給は高いぞ」

「そりゃあまあ、仕事ぶりを見てから決めりゃあいいら。あと一人か二人手伝ってくれそうな友達がおらんかな？」

野球部の奴らを誘うのには気が重い。彼等も一応受験生に昇格した今となっては気も引ける。友達と言ってはおこがましいが、石塚さんの顔が浮かんだ。翌日じさまの依頼を伝えると、野菜を自家栽培していると言う石塚さんの表情は明るかった。

八月二十日、暑くなる前に大方の作業を終わらせたいと早

朝六時に仕事を始めた。同級生を連れてくると思っていたじさまは、随分年の離れた友達に驚いた様子であったが、丁寧な対応の石塚さんに好印象を持ったようだ。この三人で、土壌還元という作業を行った。じさまのうん蓄による。

（米ぬかを十分まいて深耕しておくと、微生物が激増する。その時浴びせかえる程の水があり、加えて土壌表面がビニールで覆われていれば、微生物の大量の酸素消費によって土壌が還元化される。嫌気性菌の作り出す酢酸や、太陽熱による確かな地温なども寄与して、病原菌が死滅する。）

じさまは最後を、「～まあともかくいろんなことで悪玉病原菌が死んでくれりゃあいいら」と大雑把に土壌還元の仕組みを総括した。

多量の米ぬかを含んだ深耕済みの土壌表面に、大きな凹凸がないようにアルミレーキで均した。一反のハウス内に一メートル間隔で灌水チューブを引き詰め、接合部分で水漏れがないのを確認して、表面をビニールで覆った。ビニールの端は直管パイプを置き、足で踏んで密封し、ビニール上に灌水して土とビニールを密着させて作業を終えた。後は農業用水の蛇口を開いて、これでもかと言わんばかりに水を注入する。

「数日したらどぶ臭がしてくるでな、それが土壌還元されている証拠だ」と、じさまは全てのうん蓄を使い切った。

石塚さんは五十八歳にしてはテキパキと体を動かした。一つ一つの作業を納得づくでしているようだった。健太も久しぶりに体が喜ぶ汗をかいた。二・三日すると石塚さんは一人でやってきては、どぶ臭を確認したりハウスの周りの草取りをしていたらしい。

九月十日土曜日、ハウスを開放し、土壌表面を覆ったビニールを剥がすことになった。石塚さんはじさまが現れる前にハウスに到着していた。二学期が始まっても、依然として受験勉強に本腰が入らない健太は、むしろ喜んで参加した。ハウスの側面を開け、天井からも空気を入れるともうどぶ臭はしない。

ビニールを剥いで土を踏みしめると、足はくるぶしを超えて沈んだ。ぬかるみに足を踏み入れた時とは違う。例えばばかでかいチーズケーキがあったとして、それを踏んでみたらこんな風になるのではないかと思う。新鮮な驚きであった。石塚さんも感激した様子、沈んだ足を抜こうとはしない。誰の目にもとまらない我々の地味な仕事が、土中に大きな化学変化や生物学的変化をもたらし、土の一粒一粒をしゃんとよみがえらせた。

片付けを終えると、じさまはこれからぼかし肥料をまいて耕運機で耕すという。こんなに良い土を、トラクターに働かせるなんてやぼなまねはしない。耕運機で一歩一歩耕していくのだと言う。二台ある耕運機でじさまと石塚さんがその作業をすることになり、健太の仕事は肥料をまくところで終わった。

翌朝図書館に行くと石塚さんの姿があった。ただし農業の棚の前に。午前は大学紹介の雑誌を見て時間を流し、午後は

夏休みに買った問題集を数ページこなし、日本史の教科書をノートにまとめた。夕方帰宅すると、じさまは耕運機を洗っている。

「健太、どうだ、農業をやってみんか？農業はいいぞ、わしの農業仲間にも農業が嫌いだという奴はおらんでな。昔、農業は割に合わん仕事の筆頭じゃった。だがな、今では農業は特権だぞ。農地があってそこにハウスがある。それは特権だぞ」

「確かに特権だと思うよ。だけど急に言われてもなあ」

「まあ考えてみればいいわ。健太のこの前の作業の様子を見ていてな、お前は体がよお動く。段取りもいい。十分やっていけると思った。一年二年で仕事を覚えて周りに認められたら、うちにはまだ畑もある。そこにハウスを建て栽培面積も拡大できる。借金をすることになるが、農業者のローンの利率は嘘のように安いし、補助金もある。特に新規就農者には手厚いでな」

じさまなりに長考していたのだろう。話はなおもよどみなく続いた。

「ＪＡに求人募集を出してパートさんに来てもらえば、同級生が大学を卒業する頃には、健太は立派な社長だ。社長らしい給料を稼いでいる若手就農者を、わしは何人も知ってるぞ。生産する作物も小松菜に限ったもんじゃない、チンゲンサイでもネギでもセロリでも、そこは健太の経験と考え一つだ。だがな、農業は甘くはないぞ。自然だっていつもわしらの味方だとは限らん。時には牙をむくことだってある。仕事も作物の成長次第では、のんきのろまにしていられん。自分にムチ打たないかんことも何度も何度もあるぞ。健太の未来だ。自分の責任で決めるんだな」

思ってもみなかった提言であり、「‥‥まあ考えてみるよ」そう答えるのが精いっぱいであった。

じさまに振られた大きな転機を前に、頼りになる存在として石塚さんの顔がうかんだ。その夜、石塚さんに相談の電話をかけた。

「そうか、農地があってハウスがあることを、じさまは特権だと言ったのか。ううん、そうか‥‥」

なんだか語尾が消えてゆく。

「どう思います？」

改めて促してみると、いい加減なことは言えないので、少し考えてから電話をくれると言う。相手の進路に軽々に話を括ってよしとしないのは、それはそれで石塚さんらしい。三十分ほどして折り返しの電話があった。

「健太君、簡単な事だったんだよ。仕事だからきつい事もつらい事もあるだろうけど、それも含めてその仕事を好きになれるかどうか、それだけだと思うよ」

一度も仕事に就いたことがない健太には雲でもつかむような話で「はあ‥」と言ったまま二の句を継げないでいると、石塚さんはかみ砕いた言い方をしてくれた。

「カロリー過多の時代にあって、野菜が人々の体に重要なの

は当たり前、野菜は必需品だ、その必需品を作る。そういうのを、あっぱれというんだ。

それに農業は自然と対話しながら、すべきことを自分自身で決められるだろ。しかも誰に媚びることもなく、努力は自分一人が見つめればよい。かっこいいじゃないか。作物の命を感じながら自分の意志で動いて汗をかく。何の矛盾もない仕事だ。それが一番の特権だと思うな。もちろん自然災害をもろに受けるのも農業だろうが、それを含んでもやりがいのある仕事だ。長距離走自慢の高校球児に向いているとも思う」

その口調は想像していたよりも、感情が前面に出たものであったが、結果は健太の予想通りのものであった。石塚さんは農業の道に進むことをきっと賛成してくれる、と思っていた。そう確信していたのは、すでに健太も、農業の魅力を感じ始めていたからかもしれない。ほぼ答えは決まっていると思ったのに、それでも石塚さんに電話した。石塚さんが、「私もその農業に参加させてくれないか」と言ってくれそうな、そんなもう一つの期待があったからだ。

水曜日、いつもの時間に学校に向け自転車を走らせた。しかしその日の気分は学校の喧騒に似つかわしくなく、公園で時間をつぶして図書館に行くことにした。駐車場にはすでに石塚さんの車があった。平日の午前中に、制服とあっては喫茶店に入ることも気が引けて、図書館前のベンチに座って話した。

「健太君、私もその農業に参加させてもらえんだろうか？」

心の中でほくそ笑んだ。石塚さんは確かに、「も」という助詞を使った。俺の気持ちを確認する前に、俺が農業に従事することが確定路線になっている。

「じさまに言ってみますよ」

「履歴書を出さんといかんなあ、五十八歳の男が突然現れたら、あいつは何者だと思うのが普通だよ」

「大企業に就職する訳じゃないんですよ。そんな形式じみたことはいいんじゃないですか。第一毎月決まった固定給なんか払えませんよ。パート代ぐらいしか払えないと思いますが」

「当然じゃあないか、金を稼ぐ先が見つかったなんて思っているわけじゃないんだ。これから一生懸命になれる事が見つかったのがうれしいんだよ」

その晩、じさまに石塚さんの気持ちを伝えた。

「若い人が手伝ってくれるのはうれしい事だな」、じさまは石塚さんを若い人扱いした。日曜日、履歴書をじさまに渡すため、石塚さんが現れた。じさまは「ご苦労な事です」と言って、それを受け取った。

（履歴書）

この度貴殿の農業を手伝わせていただきたく、この履歴書を書きます。本来の履歴書とはかなり趣が違ったものとなると思います。私のこれまでの人生をつまびらかにし、私という人間を知っていただきたく、このような形式をとらせていただきます。

一　出自

昭和四十年・１９６５年浜松市館山寺町に生まれました。両親は旅館を営んでいました。昭和三十九年に東海道新幹線が開通し、舘山寺街道の全面舗装が完了したことで、街には全国から観光客が押し寄せるようになったと言います。両親は子育てと旅館業の同時進行で大変忙しい毎日であったはずです。町は昭和四十年代に入ると旅行ブームにわき、四十四年には東名高速道路が完成し、東京・大阪・名古屋からのアクセスはさらに向上。浜名湖舘山寺の知名度も確実に上がったのです。昭和四十年代は、舘山寺温泉の黄金時代です。「浜名湖パルパル」「ホテル寸座ビラージ」「遠鉄マリーナ」など観光資源も豊かになり、四十九年のオイルショックによる景気低迷をもろともせず、その年舘山寺温泉の年間宿泊者数は過去最高を記録したのです。

父は自ら板場に立ち、母は女将として旅館を切り盛りしていましたが、始終従業員の確保に明け暮れていたようです。旅館の喧騒が増せば増すほど、私はなんだか一層寂しさを覚え、宿題は時間をかけてやりました。それでも時間をつぶせないと算数の教科書を先の先まで読むのが好きでした。

忘れられない出来事があります。あれは高校一年の時ですから昭和五十六年のことになります。当時うちの旅館をよく利用してくれていた企業の部課長さんたち八名が、土日を利用して訪れてくれました。父は地元の漁師から新鮮な魚を調達し、板場で腕を振るいました。いざ提供の時になると、彼等は父の丹精を断ったのです。今日は麻雀が目的だから、ご馳走を食べては眠気が来る、チャーハンか何かにしてくれと。父はおもねた笑い顔を作り、「へい、そのようにさせてもらいます」と言ってチャーハンの出前を取りました。なんともやりきれない気持ちになり、調理場にいた父にたてをつきました。チャーハンはうちで出す料理ではない、当旅館は雀荘ではないと言って、出て行ってもらえばいいじゃないか、とかみついたのです。父はそう四角四面に考えるもんじゃない。お客さんの非は、それを前もって言わなかっただけだから、と逃れました。私は当時旅館を継ぐ気はもはやなくなっていたのですが、ますますその気持ちは確かなものになり、理が通る理系の分野に進もうと決めました。

しかし今にしてみれば父の弱気も無理からぬことのように思われます。昭和五十年代後半になると、舘山寺温泉のブームにも陰りが見え始めたのです。旅行ニーズの多様化で団体客が減り、千客万来の活況は見込めなくなってきました。人気の低迷は次第次第に確実なものになり、高三に進級した時には国立大学以外は無理だなと悟って、受験勉強に拍車をかけました。結局名古屋大学の工学部に進み、大学院修士の二年まで計六年を名古屋ですごし、名古屋が第二の故郷になりました。

平成以降、舘山寺温泉の人気の低迷は深刻なものになり、大型旅館の廃業が相次ぐ有様で、両親もまた廃業に踏み切り

ました。その後病気で体調を崩した父は、２００５年・平成十七年に他界しました。享年七十一歳

二　離婚

私たち夫婦は、子供に恵まれませんでした。父の死後は、妻と母との三人の生活となりました。特記事項が無いような生活が続きます。母は気丈に畑仕事に精を出し、雨の日以外は毎日畑に向かいました。母の作った真っ直ぐな畝を見るにつけ、几帳面さは変わらないんだなあと思ったものです。

ところが母は、２０１７年、七十七歳の時に痴ほう症を発病しました。それは着実に進行し、日曜日に交番に出向いたことが数回ありました。散歩に外に出ると家に帰ることができなくなった母を、迎えに行ったのです。土日の散歩には私が付き添いましたが、平日の介護は妻に任せきりになり、妻にはひどい苦労を掛けました。妻は美恵子といいます。美恵子は大きな忍耐で、母の介護に向き合ってくれました。しかし介護が始まって数年たったある日、事件が起きました。荷物を届けてくれた宅配業者に、「暑くなったから手拭いを持って行きなさい」と言って、取り込んだばかりの妻の下着を、母が渡そうとしたそうです。その瞬間に気持ちはぷつりと切れた、それからは憎悪としか言いようのない気持ちさえ覚えた、と美恵子は言いました。

「お母さんとは血のつながりはないけれど、私に子供がいれば、この老婆は私の子供とは血がつながっている。そう思えれば介護の手も少しは違っていたかもしれない。今さらながら子供を授かれなかったことを、誰に対しても申し訳なく思う」そう言って妻は泣いたのです。

特別養護老人ホーム入所の機会に恵まれ、母を送り届けたその日に、妻から離婚を切りだされました。

「私たちには子供がいない。どちらが先に逝くかはわからないけれど、どちらかがどちらかを看取らなければならない。そんな難儀をさせるより、この際夫婦の関係を清算しておけば、後は自分の身の処し方だけで済む。それは互いに健康な今しか出来ないと思う」

そう言う美恵子の態度には凛としたものがあり、私は受け入れるより仕方がないと観念しました。約四年にわたる母の介護が、妻にそう決意させたのかもしれません。そうして北区に中古のマンションを買い、妻は一人移っていきました。

しかし時々は、メールのやりとりなどしてしまいます。花好きの美恵子は、「月遅れの桜を追いかけて」と題して、北海道で五月に撮った桜の写真などを送ってきます。約束違反ね、と添えて。私も自炊をしていて、いよいよ次の一手が分からなくなった時、ヘルプの電話をしたこともあります。

三　早期退社

名古屋大学を大学院修士号をもって卒業し、アジア自動車に就職しました。研修を終えると設計部に配属され、サスペンションの担当となりました。若手エンジニアが自由闊達に

意見を言える雰囲気に恵まれ、仕事に没頭しました。今でも当時の事をよく思い出します。エンジン本体、ハンドル関係などキャリアを積み、車体課長に抜擢された時には予期せぬ喜びでした。

アジア自動車の社員に、年齢も出身大学も私と同じ、堀田という社員がおります。彼は文系の学部出身で、学部を卒業すると入社したので、入社年次で言うと私は彼の二年後輩になります。彼は総務部に席を置き、会計・人事・総務管理のキャリアを歩きました。同じ大学の出身と言っても、その程度のことだと私は思うのですが、彼は私より母校愛が強いのか、何かにつけて私を意識していたように思います。

車体課長の時、誘われて堀田と酒席を共にしました。勤務態度も技能も群を抜いて素晴らしい派遣社員を、正社員に推薦しました。技能抜群によって、仕事は正確で速い。体も鍛えていたのか、病欠なんかは一日もないし、仕事終わりには掃除までして帰る。巡り合わせが悪くたまたま就職氷河期に当たってしまっただけで、彼は有能な人材だ。正社員に登用してくれないか。そう人事課の堀田に頼んだのです。

彼の答えはにべもないものでした。派遣社員を正社員に登用しても会社の評価は上がらない。俺たちのような大学から何名入社したかで会社の評価は決まるのだ。彼はそう返してきました。私は腹に据えかねました。

「逆境にめげず能力を発揮している者にこそ、光を当てるべきではないのか。毎年大量の新入社員を入社させて、多くの中途退社の社員を産む現在の人事体制を、人事課の堀田自身が反省しろ」

そう言い放って私は席を立ちました。

その後、私は工場長（部長待遇）に昇進しました。進歩急なる自動車業界にあって、現場の実態はなかなか追いつかず、苦労の連続でした。トップは観念の中で命令を下すこともあり、現場の長たる私は何度歯ぎしりをしたことでしょう。ある時電気使用量の節約の命が下りました。操業時間を短縮すれば電気使用量は減ります。しかしハイブリッド車の割合がいよいよ増えるにつれ、工程は複雑なものになるのです。私は部下たちとひざを交え話し合い、改善に改善を重ねた現場にさらに改善を極め、電気使用量の節約に努めるものの、作業の精密さは落とさないこととしました。

部下の所に、総務管理の堀田から電話がありました。彼の電話は大抵「君、困るよ」から始まるのです。部下は苦り切った顔をしています。私が代わって、堀田に問いました。電気使用量が他に優先される依って立つ根拠を教えろと。彼の答えはこうでした。会社員が依って立つ所はなんだ。会社だよ、会社の命令にいかに応えるか、俺たちの根はそこにある。

その後堀田は、総務部付きの常務に昇進しました。私は部長待遇のままでした。それはよいのです。第一私の方が入社年度は二年あとなのです。しかし私の勤務査定が彼に委ねられることになったのは、どうしても受け入れられませんでし

た。私は職業人としての堀田を認めることができないのです。了見が狭いと言われても仕方がありません。既に妻と離婚していた私は、あまり迷うこともなく定年退社まで三年を残して早期退社を決めました。退社の挨拶を済ませ、駐車場から工場に深く一礼をした時、後悔の念は全く生じず、むしろ清々しい息を深く吸いました。

この度農業を手伝わせて頂く機会に与りました。自然と対峙して、土に働きかけ、作物を見守りながら、汗をかく場を得られれば、幸甚に存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

（履歴書閉じる）

石塚さんの長い履歴書を読み終え、「誠実な人なんだなあ」とじさまはつぶやいた。履歴書を読んでいない俺が、要領を得ない顔をしていると、声を高めて言った。

「石塚さんも手伝ってくれると言っている。どうだ、農業をやってみんか？」

「よろしくお願いします。俺頑張るよ。じさま、長生きしてくれよ」

その夜、高校を卒業したら農業の道に進む決意を、両親に伝えた。サラリーマンの父は、その苦しみがしみているせいか、「むしろその方が良いんじゃないか」と賛成してくれた。母も賛成してくれたが、どこか遠くを見ているような眼をしていた。母の目には、野球を始めた小学校二年生の俺の姿が映っていたのかもしれない。三振をするたびにべそをかいていたあの頃の俺の顔も。

九月の終わりに、小松菜の種まきをすることになった。機械が五センチ間隔で種をまき覆土していく。その農機がうまく前進するよう、前日にじさまと石塚さんが耕運機を走らせておいた。三十日から四十日ほどで出荷ができる。清々しい土に根を張り、緑の深い小松菜に育つはずだ。

「今日はもう一人新人が来るらしいぞ」

そう言ってしわだらけの顔が笑った。

石塚さんが美恵子さんを伴って現れた。農機の点検をしているじさまの後ろから、美恵子さんが挨拶をした。

「足手まといになるかもしれませんが、よろしくお願いします」

「なんもなんも。美恵子さんというんだねえ、名は体を表すというが、本当だねえ。美しい人じゃ」

おもわず吹いてしまった。初対面だというのに、じさまは振り向いて美恵子さんと顔を合わせることなく、棒読みのセリフのようにそう言ったのだ。じさまなりに初めて会ったら何と言ってやろうと考えていたに違いない。じさまのやさしさは、土壌還元された土のやさしさに似ている。

昨日高校で遠藤と会った。受験勉強は思うに任せないようで、野球の才能を五とすると勉強の方は一だ、と嘆いていた。翔一は十一月三日に大学のセレクションを受けるそうだ。ま

だ野球の道の上にいる。「ボールの回転は下半身の強化から」が口癖の翔一は、例の浜名湖長距離走の伴走をまた頼んできた。次の日曜日にも走る。強い西風が吹き付けたら、体ごとぶつかってやる。これからの俺の汗は自然の中にある。

間延びした残暑は諦め顔になり、季節は十月を迎えようとしている。

（中央区）

［市民文芸賞］

聞こえなくても僕には足がある。

永井　恒

『聞こえなくても僕には足がある』
どこへでも行けるし、マラソンもできる
前向きな「心」があれば人生はきっと開ける
だからこそ僕は、いつまでも走り続けます

永井　恒（ながい　ひさし）

マラソンが僕にくれたもの

朝目覚めた瞬間（とき）、みなさんの耳には、どんな「音」が飛び込んでくるのでしょうか?!鳥のさえずり、風の音、波の音、もしかすると目覚まし時計の音かも知れませんね。

僕は生まれつき音（耳）が聞こえません。日常生活で会話ができないので、不自由なことに出くわす場合も日常茶飯事です。不自由だとは感じていますが、それがハンディだと思ったことは一度もありません。

僕は長野県と愛知県と静岡県の県境の町で生まれ育ちました。5人兄弟の末っ子です。両親、3人の兄弟は健聴者で、僕と長女だけがろうあ者です。両親は、僕が高校生になるまで兄弟は3人と近所の人たちにも言っていたほどです。家族にとって姉と僕は、きっと恥ずかしい存在だったのでしょう。小さい頃はいじめられたりした思い出しかありません。

そんな僕でも、二十代後半まで挫折や転職を何度も繰り返しましたが、太陽熱温水器を製造する仕事に就くことができ、定年を間近に控えた今でもしっかりと働いています。

仕事以外でも、運転免許も取りましたし、しばしの中断はありましたが中学時代からライフワークとしている長距離、「マラソン」で、全国四十七都道府県制覇（四十七都道府県で開催されているマラソン大会で優勝）を達成することもで

きました。さらに言葉を使った日常会話ができないのに、ひとり旅を含め、これまでにアフリカやヨーロッパなど世界八十四カ国以上を巡り、海外マラソンにも二十回以上出場してきました。

人々が暮らす街並み、美しい山々、そして海。そんな中をただひたすらに走る。その場所を肌で感じ、人に触れ、新鮮な空気を思う存分味わいながらランニングするのが、今の僕の一番の楽しみです。心の鍵を外し、扉を開き、外に出て見なければ、見える景色も変わらない。たとえ音は聞こえなくとも、僕には元気な足がある。だから僕は走り、世界へと飛び出すのです。

健康志向、マラソンブームなどもあり、今では、僕の練習コースなどでも走っている人たちを多く見かけるようになりました。大会なども早く申し込まないと定員オーバーとなってしまうほどです。男性だけでなく若い女性のランナーも増え大会に花を添えています。

もし僕がマラソンと出会っていなければ、趣味もなく、お金もなく、休みの日には、家でゴロゴロと無駄な時間を過ごしていたに違いありません。しかし、走ることで健康のことはもちろん、目標を持つことで生活にハリができ、生きがいも生まれました。

各地の大会で知り合いになったり、ライバル関係になることで、刺激をもらい、トレーニングのやる気・モチベーションアップにもつながっています。

今は仕事が忙しいから、定年になってから趣味を始めようと思っている人が多いのではないでしょうか。でも、それでは遅いのでは?と、僕は思っています。病気になるかもしれないですし、その時にどんな状況になっているかも知れません。先のことなど誰にもわかりません。夢を夢で終わらせないためにも、まずは行動に移してみるという、半分勢い、前向きな心・気持ちが必要ではないでしょうか。

一般の方でもそうである以上に、ろうあ者の多くが運動やスポーツをさけています。だからこそ、僕は、ろうあ者にもマラソンの楽しさを知ってもらいたいと常々考えており、そのための活動もしています。自らの身体を張ってアピールし、参加を呼び掛けるようにしているのはもちろんのこと、元オリンピック選手を招いて、ろうあ者のランニングセミナーを開いたりもしてきました。

決して諦めない。人生は一度きり

六十歳を目前に、自身の半生を振り返ってみれば、中学入学と同時に、背の小さ体力の無さを友人や先生にまで指摘され、やりたかった野球部ではなく無理やり卓球部に入れられましたが、長期休暇を利用した新聞配達で鍛えた足腰を活かしマラソンに目覚めたことで人生が大きく変化しました。

走ることが大好きで、長距離をやりたいという一心から高校入学と同時に、たくさんの人たちの協力を得て、それまで学校にはなかった陸上部を立ち上げました。その後は、先生

や周囲の反対を押し切り、地元・静岡の強豪校（高校）や実業団チームの練習に参加させてもらうなどしながら、コツコツ走力、そして心を磨いてきました。

少し無謀で世間知らずなところもありましたが、どうしてそんなことができたのか。それは、「健聴者に負けたくない」という気持ちも心のどこかにあったと思いますし、それ以上にマラソンを通じて得た自信をバックに、「自分に負けたくない」「どんなことにもチャレンジする前に、諦めたくない」という強い意思が、それまで引っ込み思案だった僕を一歩前に進めてくれたと思っています。

歳をとると身体もあちこち痛くなりますし、疲労回復も遅くなってきます。やはり身体が資本なので、心身共に今はあまり無理をせずカラダと相談しながら練習を続けています。走って汗を流した後に飲むビールの味はまた格別です。これだけは今も止められません。

「人生は一度きり」、僕は常にそう思いながら暮らすようにしています。その原動力が「心」、すなわち気持ちだと思うのです。何事も無理だと思った時点で、物事は終わってしまいます。ハンディは不幸ではなく少し不便(不自由)なだけ。聞こえない、会話ができないからといって諦めていては、何も始まりません。決して無理だとは考えない。そんなちょっとした前向きな「心」が、僕を走らせ、世界へと導いてくれました。「永井さんは凄いね。真似できない」とたまに言われることがあります。そんなことはありません。ただちょっと頑固で、少しやる気があるだけなのです。心の扉を開き、一歩前に踏み出してみる。たったそれだけで、物事が前に動き始めます。そのことを教えてくれたのがマラソンであり、結果は小さな僕が証明しています。

マラソン大会での経験。悔しい思いもしてきました

僕はろうあ者ですが、身障者限定のスポーツ大会には出場していません。あくまで市民レース、一般のマラソン大会を走っています。ですから、いつも苦しい。でも日常生活はもちろん、勝負の世界においてそれは当たり前のことです。だれもゴルフのハンディのようなものは与えてはくれません。

僕が以前、ろうあ者フルマラソンの日本記録を樹立してすぐに、ある事情から一線を離れた時期がありました。十年前後のブランクの後、再び走り始めたのが四十一才の時です。息子の小児がんがきっかけでした。走ることで息子に勇気を与えられれば。僕には何もないが走ることはできる。その後、これまでに海外の大会を含め何百の大会に参加し、そのうち百回を超える優勝を重ねることができました。息子の病気も幸いすっかり回復し、今は立派に成人しています。

僕は自身のマラソンをよく「競走馬」に例えています。ただひたすらゴールを目指し、死ぬ気で走るもの、それが僕のマラソンです。特にラストスパートは、いつも必死です。マラソンは身体以上に、「心との戦い」でもあり、勝つまで、ゴールするまで我慢しなければならないスポーツです。諦め

たりしたら、そこで終わり。みんなに抜かれてしまいます。それだけ過酷、大変だからこそ人生にも例えられるのではないでしょうか。

多くのろうあ者は「勝つ必要はない」「無理するとよくない」「ゆっくりでいい」「がんばればいい」などと自分自身も周りもそう思いがちです。それはなぜでしょうか。ろうあ者は、普段、しゃべることがないので肺活量も少なく（発達し辛い）、聞こえないことでの情報量の制限など、健聴者と比べ、いろいろなハンディを背負っています。ともすれば諦めてしまいそうになる、ハンディという名のその〝壁〟を、乗り越えるには「心」との戦いに勝つより方法がありませんでした。一度、心が折れてしまえば、人はそれに慣れてしまいます。それでは進歩はありません。

走り始めた頃は、マラソンや駅伝大会の主催者から「聞こえないから危ない」「交通事故に遭うと困る」などを口実に、参加を断られたことも一度や二度ではありません。その時は、「ろうあ者は、マラソンのスタートラインにさえ、立たせてもらえないのか」と、本当に悔しい思いをしました。しかし、そうした数々の経験のお陰で、精神的にこれまで以上に強くなることができました。それが、その後のマラソンの成績、人生にも大いに役立ったと思っています。せっかく大会での優勝を目指し練習を積んで来たのに、定員オーバーによる抽選漏れなどはともかく、たいした理由もなしに門前払いを食らうほど辛いことはありません。それだけにレースに出られることの喜びは人一倍でした。

主催者側はもちろん、他の選手たちも聞こえない選手が優勝することに驚きを感じていたと思います。でも僕は聞こえる・聞こえないに関係なく、生きている以上、夢や目標を持ってがんばれば（努力すれば）、きっとその夢は叶う……と信じて暮らしてきました。「無理」と感じた時点、そう口に出した時点で、叶えられる夢も「無理」になってしまいます。何度も言うようですが、それを教えてくれたのもマラソンです。

僕は二千七年に、あと一県（岡山県）となっていた四十七都道府県の大会での優勝を六回目の挑戦でやっと達成することができました。リーチがかかってから、六度も岡山に通わなければならないとは、その頃は思ってもみませんでした。プレッシャーもあり、旅費などの問題も含め、成し遂げるまでにはかなり苦しい思いをしました。産みの苦しみは嫌というほど味わいましたが、夢を実現できたことは大きな人生の宝物、財産となりました。これからも、ろうあ者初の一般大会でのフルマラソン優勝をはじめ、前人未到の記録にチャレンジし続けていくつもりでいます。

もっと知ってほしいことがあります

健常者（聞こえる人）は、幼い頃から周りの人の話す声（言葉）を聞き、それを蓄積・学習することで自然に言葉（言語・国語）を身に付けていくものでしょう。

しかし、聞こえない人（ろうあ者）は、言葉を耳で聞いた経験がないのですから、言葉を文章にする際にも間違ったり、言葉足らずになったり、不自然な表現になることもあります。でも、ろうあ者、聞こえない人たちが言葉、日本語の習得に苦労していることは、社会一般にはあまりよく知られていません。聞こえない人が、周りの人とコミュニケーションをとり、言葉や文章に自信を持ち、社会の中で自分の力を発揮できる、そうなることをいつも頭の中で考えています。

生きることは、常に「心」との戦いです。背も低く、生まれつき音を知らない僕が、ここまでマラソンで成績を残せたこと、人生を生き抜いてこられたのは、断られても、ダメだと言われても、前向きに、ひたむきに、折れることなくチャレンジし続けてきた「心」があったからこそだと思います。ただそれだけです。

日本にいれば、健聴者の方は、通訳は必要ないでしょう。でも中国や韓国、アメリカなどに旅行をされる際は、語学が堪能でない限り、その地元の通訳が必要となります。それと同じで僕たちろうあ者にも健聴者と会話する際には、手話通訳が必要なのです。外国映画に字幕や吹き替えが必要なのと同じです。

もし日本で外国語の通訳を雇うとするとかなりのお金がかかるでしょう。しかし、手話通訳のほとんどがボランティアです。そうなると手話を職業にすることは難しくなり、人数なども限られてきます。それが手話通訳者を増やすことを妨げている要因のひとつでもあります。外国語の通訳をする人が、その国の文化や習慣などを習い・覚えるように、手話を学ぶ際にも、ろうあ者のことを最低限、理解する必要があります。僕は海外に出かける度に、時間があれば必ず養護学校やろう学校を訪問しています。その国や地域の現状を知り、日本で活かすためです。しかし、残念ながら手話ができる人の数は外国に比べても日本は少ないと言えるでしょう。

コミュニケーションの大切さ

僕が日本の各地のマラソンレースに出場する際にも、手話通訳を依頼することがありますが、いないケースもしばしばあります。大会の時、手話通訳者の存在は僕たちろうあ者にとっては本当にありがたいものです。しかし、健聴者からすれば余計なものだという思いから、ともすれば、その必要性も排除されがちです。

また、ツアーで国内外のマラソン大会に参加することがよくあります。そんな時、地方や海外の小さなレースなどでは、宿泊施設の関係で相部屋を頼まれることがあります。でも、そこで僕と相部屋になった人からクレームが来たと旅行会社の人から後で言われることがあります。僕は音が聞こえないため、ドアを閉める時、シャワーなどがどれぐらいの音なのか、どんな音なのかよくわかりません。その加減がわからないのです。後で聞くと、その音が僕と相部屋になった方を不快にさせたということでした。面倒だし、言っても無駄とい

う理由でその方は、僕には直接クレームを言われませんでした。もう少しコミュニケーションをとってもらえれば解決できたことかもしれません。もし皆さんがろうあ者と相部屋になったり、電車などで隣の席に座ったらどうですか？　嫌ですか？　それとも。

ろうあ者の会話手段は、手話と文字です。手話ができない方とはノートに文字を書いたりして会話します。つまり目で会話するしかありません。自宅で相手を呼ぶ際は床を足や手で叩くことで気付いてもらっています。ですから、ろうあ者だけが集まり、話をしている時は、しゃべってはいませんが、時折、大きな音がなったり振動したりして、周りの方に迷惑をかけているかもしれません。でも、それが僕たちの会話の手段なのです。ですから、皆さんに迷惑がかかるようなことがあれば、注意してほしい。そうすることで互いの意思疎通がはかれ、不快感も取り除かれると思うのです。

僕は、大会に出席する度に以下のような文章を主催者側に送らせてもらっています。

※※※※※

主催者様

はじめまして。今回の大会に参加できることを、とても楽しみにしております。

私は永井　恒（ながい　ひさし）と申します。聴覚障害者（ろう者）で、手話をコミュニケーション手段としております。私たち、ろうあ者は耳が聞こえないゆえに、多くの情報が入らず不便や、苦しい思いや、悔しい思いをしています。主催者の方々に、そのことをご理解いただきたくご連絡いたしました。

＊当日は、●●の部に出場します。

今まで私は、各地のマラソン大会に出場してきました。その際には必ず、手話通訳者の手配をお願いしているのですが、断られる事が多くとても残念に思っております。健聴者の皆さんと同じようにマラソンを楽しむためには、開会式の挨拶から始まり、ルールの説明、諸注意、閉会式、抽選会、救護所など全ての場面で情報・コミュニケーションが不可欠となります。そのためには、手話通訳者が必要なのです。

ところが、手話通訳者がおらずアナウンスも聞こえないために、先頭を走っていて誘導に気付かずにコースからそれてしまったり、スタート時間の変更を知らずに、トラブルになるなどの悔しい経験をしてきました。入賞してコメントを求められたときに手話通訳者がいないために、喜びや感謝の気持ちをお伝えできないこともありました。（手話を読み取れる人が必要です。）

また、参加者同士の情報交換やコミュニケーションも大会参加の楽しみの一つです。その楽しみさえも、半減してしまいます。この様に、たくさんの場面で手話通訳者がいないために、不便や不利益が生じます。会場には、もしかしたら他にも私のような方がおられるかもしれません。年をとれば誰

もが多少なりとも耳が遠くなりますし病気や事故で障害を負うこともあります。是非、身近な問題として考えていただければ嬉しく思います。

もし手話通訳者が見つからない場合には、最寄りの市役所・県庁の障害福祉課、または福祉事務所、社会福祉協議会などにご連絡いただくと探していただける可能性が高いと思います。楽しく安心して大会に参加させていただくために、是非、手話通訳者の手配をご検討いただきますようお願いいたします。

お忙しいとは存じますが、早めにＦＡＸまたメールにてお返事いただければ助かります。よろしくお願いいたします。

静岡県浜松市在住　　永井恒

マラソンを通じて伝えたいこと

近年は、マラソンブームなどともあいまって、手話通訳者はもちろんのこと、大会の運営そのものもバリアフリー化が進み、僕たちのようなろうあ者でも安心して参加できるレースが増えてきているように思います。

しかし、まだ、それも十分とは言えません。中には、何千人も出場する大きな大会でも、手話通訳者を用意してもらえない大会もあります。

ある大会で、ゴール後、サービスステーションでアイシングをしている際に、ひどい足の痙攣を起こし、病院に運ばれるということがありました。その時も、手話通訳者が不在だったこともあり、本来なら、その場の手当てで済んでいたかもしれませんが、病院で点滴を受けるという大げさなことになってしまいました。

箱根駅伝など大きなレースなどをテレビで見ていても、大学の若い一流選手でもフラフラになってゴールするシーンをよく見かけます。いくら強豪でも、レースでは何が起こるか分からないのがマラソンです。だからこそ、僕たちには手話通訳者が必要なのです。

こういったことも、誰かに声をあげなければ、わかってもらえないのが現状です。その声を僕たちろうあ者は持ちません。だからこそ文章で伝えていかなければと思っています。

東京五輪、パラリンピックも開催され、障害を持ちながらスポーツに打ち込む人々にスポットが当たるようになりました。そうした今だからこそ、いろいろと訴えていかなければと思っていますし、それが僕たちスポーツ、マラソンを愛する者の役割だと思っています。

何も僕は特殊な存在ではありません。身長百五十六センチの小さなおじさん（おじいちゃん）です。それでも目標を持ってマラソンに打ち込み、海外旅行にも出かけ人生を前向きに楽しんでいます。

大切なのは諦めないこと、前向きな心を持つことです。壁にぶつかっても、何度断られても、自分が正しいと思ったこと（自分よがりではいけませんが、本当に正しいこと）なら、

とことんやってみる。定年後、あと何年かしたらではなく、今すぐにでも手を付ける。人生は待ってはくれません。あわてたり、焦ったりする必要はないけれど、心に決めたこと、目標に定めたことを、後回しにする必要もありません。僕も来年で六十歳になります。しかし、元気な限り、まだまだマラソン、海外旅行をやめるつもりはありません。フルマラソン優勝、海外百ケ国訪問を目標にこれからも歩んでいくつもりです。

僕が普段から考えていることや思っていることを書かせていただきました。たわいもない話だったかもしれません。でもこれが、僕が生きてきた道、これから歩む道を支えてきた礎なのです。雨が降ろうが雪が降ろうが練習を休むことはほとんどありません。きっと明日も、いつものコースをいつものように走っていると思います。

（中央区）

［市民文芸賞］

（創作）戦国時代遠つ淡海・女傑列伝

内山文久

今川義元は西暦千五百六十年（永禄三年）まで室町幕府から完全に独立した戦国大名（守護大名）として、駿河・遠江・三河を治めつつ更に勢力を尾張以西に伸ばそうとしていた。しかしこの年、尾張に進攻した義元は六月十二日桶狭間の戦いで織田信長の奇襲？にあえなく敗れ、以後今川の勢力は急激に衰微していく事となる。それに従い、この地「遠江地方」は暫くの間（実質上）守護不在とも言える不明な時代（遠州錯乱）が続いていた。

＊

お田鶴の方

今川義元が討ち取られてから一年後、梅雨時の事であった。縁側でそぼ降る雨を眺めている夫の引間城主飯尾連龍の背後、板の間に座していた継室お田鶴の方が問いかけた。

「御館様、桶狭間にて義元公もお義父上もお亡くなりになられました。あの事が起きて以来、この遠つ淡海の地には様々な噂が飛び交っております。そのなか、確かな言伝手に寄りますと、井伊殿は松平に、犬居の天野・また北の奥山殿は武田に付こうとしているとの事でございます。私は今川の出でございます。あなた様はこれからどのようになされるのでしょうか」

「田鶴よ、某（それがし）、実の所迷っているのじゃ。義元様ご存命中、この地の民はまだ穏やかに暮らしていた。ただ今は全てが変わり始めている。それゆえ某がやむなく諸々の事情により、この地の民を戦いの渦に巻き込み、たとえ運良く勝利を収めたとしても、必ず後の戦いが待ち受けている。更に、もしその戦いに負ければ、民達も某達も悲惨な事となる」

「おっしゃる通りでございます。ただ私共には今川に多くの恩義がございます。この戦の世とはいえ長年義元様には守ら

れてきたのでございます。お願いです。どうか怨敵織田・松平だけにはつかないで頂きたいのです」

「田鶴よ、おまえの事、そして同胞(はらから)の事も重々に解っておる。某もかくありたいと思っている。しかし昨今の織田・松平の勢いは思いのほか増している。信長は尾張を平定せんとし、更に美濃以西へ、いや日の本の覇権を目論んでいる。一方、今川を捨てた元康は信長との和睦を目論み、三河の岡崎城にいて、そこからあたかも三河の守護のごとき勢いで吉良を、吉田を配下に置こうとし、更に東へと意欲を示している。元康はつまり三河はもとより、遠江・駿河を狙っているのだ。元康の勢いに促され、確かに井伊家は既に松平へと傾いているようじゃ。またその動きに呼応して、守護職今川氏真様は（今川の家臣達の様々な動揺を知ってか知らずか）とりわけ遠江・三河の家臣・地頭全てに対して、謀反の疑いを持っているのじゃ」

「なんと言う事でしょうか。私の父は今川の重鎮鵜殿長持、母は亡き叔父上、義元様の妹なのです。それなのに疑いを持つという事は配下の者を全く信じないという事に等しいのです。これではもはや今川は内から崩れていくだけの事ではないでしょうか。これもまた私の聞くところですが、義元様から命を受け、幼かった井伊の次郎法師祐円様の代わりに「質」として参られた井伊の佐名姫様は、義元様のご寵愛を受けた後、義理の妹とされ、さらに今川の重臣関口家に嫁いでいかれました。その夫であられる関口親永殿は義元様亡き後、今川家を守るべく、命がけで度々、氏真様に御進言申しあげているというのです。親永様はもとより、親永様に甲斐甲斐しく添うていらっしゃる佐名姫様のご心中はいかばかりでしょう。更にあの裏切りによって元康の妻であらせられる佐名姫様の御子、瀬名姫様は駿河に幽閉されてしまいました。これではもはや佐名姫様・瀬名姫様お二人とも井伊からも今川からも疎まれてしまっている有様です。何よりも嘆かわしいことですが氏真様は、関口殿はもとより、義元様の母であられる寿桂尼様の諌言にさえ真面目に耳を貸さないとの事です。このままであれば、氏真様の気まぐれ次第で我が飯尾家は井伊家と更なる争いを強いられ、この遠つ淡海が分断され、果てには双方共衰弱してしまう事となります」

「田鶴よ、某、その事も気になっている。ただこの所井伊家の中で内紛があるとはいえ、三方ヶ原の北我等引間に対抗し生きている井伊家を押さえ込むには、従来井伊家が同盟しそれを破棄した武田殿との同盟を、井伊の代わりに我等が結ぶ事によって確と牽制は出来ようが」

「御館様、それでも今川の力が衰えている昨今、武田殿は駿府に攻め入るのではありますまいか」

「確かにその通りじゃ。然るに我等が正々堂々と生き延びる為には何があっても（今川様に付く）これしかない。田鶴よ大義は守らねばならないのだ」

「良く解っております。それでも余りにも理不尽で、田鶴は口惜しいのです」

氏真に対するお田鶴の方の怒りには激しいものがあった。駿府今川の館に父親と共に義元公お目通りをした子供の頃、三歳程年上の氏真を悉に見ていた。祖母寿桂尼は京の公家生まれであり、それ故父義元と同様に氏真も歌を嗜み、また氏真本人は蹴鞠の名手とも云われ宮中でもその名を知られていた。その氏真が二十三歳の若さで突然父を失い、駿河・遠州の守護となったのである。父の姿を見ていたものの敗戦国の守護の役目など到底出来るはずもなく、その器でさえもなかった。芸に優れ理屈には長けていたがそれ以上のものは無く、単に義元公の跡継ぎ・嫡男という事で取り巻きの家臣に守られていたのである。つまり、傍から見れば、ひ弱で我が儘な「坊や」が出来上がっていたのである。その京かぶれの「坊や」氏真が、俄に守護として擁立されたのである。行く末は見えていた。その事はお田鶴の方にも容易に推し量ることの出来る事であった。

お田鶴の方は小さいころから気の強い、芯のしっかりした、男勝りのおなごであった。おなごの身でありながら、父の真似をして大石を抱えたり、おのこ達と武芸に励み、弓矢また薙刀を操ったりして常に戦に備えていた。それゆえ飯尾家に嫁ぐ頃には美貌もさることながら、武芸にも秀でたおなごともなっていたのである。

連龍の先妻正室は六年前に三人目の子供辰次郎を生んだが産後の肥立ちが悪く、それが昂じて亡くなっていた。それ故五年前、お田鶴の方は今川家の願いもあって継室として輿入れした。連龍三十歳、お田鶴の方十六歳の事であった。お田鶴の方は若い上器量も良く、明るい性格であったがゆえ連龍は人一倍愛しく思い、家族は仲睦まじかった。

それから三年後千五百六十四年の夏、今川氏真は突然引間城を攻めた。理由は連龍が松平つまり徳川に通じて「謀反」を企てているという事であった。確かに連龍と松平元康を改名した徳川家康との会談はこの年の春に行なわれた。しかし実の所連龍が家康に向かって述べた事は（飯尾家は徳川には付かない、また氏真にも付かず独自の道を歩む）と言う事であった。形の上では桶狭間の戦い以降氏真の命に従いながら引間城を守るべく、静かに着実にもののふの訓育と行動をしてきたのであった。無論（状況を判断する）という兵法研鑽にも連龍達に抜かりはなかった。

「連龍を捕えよ」しかしこの命令は連龍お田鶴の方にとって「寝耳に水」という状態であった。それゆえ絶えず飛び込んで来る弓矢に対して只管防戦する以外手立てはなかった。ただそれでもこの飯尾夫妻は氏真にとって、それぞれ手ごわい相手であった。戦略家の連龍は女丈夫のお田鶴の方と一緒に守りの堅い城内周りを盾にしながら入手したばかりの僅かな数の鉄砲また弓矢をうまく使い、攻撃が（今川から）と判っていながら堂々と戦い敵の主力部隊を退け、更に土地勘のある地元の農民兵達と共に分流する天龍川の流れを巧みに利用しながら小規模な戦いを繰り返し行い、結果全今川軍を撤退させ、しかも今川家の重臣三浦正俊また今川応援軍の井伊

家重臣中野直由を討ち取る事に成功していた。
この思いもかけぬ敗戦に動揺したのは誰でもない、今川氏真本人であった。
「何故じゃ。相手の軍勢は僅か千も満たないというのに。我が三千の軍が、この今川の軍があの飯尾に負けるとは、敗れるとは」
またこの戦には「飯尾家謀反」の疑いが根も葉もない事を知りつつ（自らが三河の松平に付くという底意を知られぬ事がその本意であったが）表面上氏真への疑惑を晴らす為、井伊当主次郎法師・祐円は「これ好機」とばかり中野直由に「引間城を攻め、連龍を捕えよ」と命じたのだがあえなく敗れてしまい結果井伊家では多くの兵が戦死し、祐円にとっては逆臣、奸智である筆頭家老小野道好からの圧迫を容易にしてしまう羽目となった。祐円は前年の今川家家臣朝比奈泰朝の襲撃による井伊家当主直親の死を乗り越えるべく手を打ったのだが、却って自らを苦しめることとなったのである。
どうにも苛立ちを抑えきれない氏真であったが、己を取り巻く様々な情勢対処することにやっきになって、再び直ちに引間の城を攻める事を断念した。それ故暫くの間、鳴りを潜めていたのであったが、祖母寿桂尼の差し金だったのだろう、程なく「和議」という甘言を弄んで連龍を駿府に呼びつける事とした。一年後、千五百六十五年の初冬の事だった。
氏真へ連龍からの上申書は既に届いていた。（連龍には謀反の意思のない事、徳川には決して付かぬ事）を明確に示した書状であった。しかし自ら打って出た戦とはいえ、面子の立たない氏真の怒りは収まらなかった。（戦いが人の心をかくも不明にしてしまう事）飯尾連龍もお田鶴の方もこうなってしまう氏真の心持ちは少なからず解っていた。不埒であるとはいえ、また覚悟は出来ていたというものの、二人の共通の気懸かりは引間城下の民の行く末にあり、氏真からの「和議」の申し入れには安閑たる思いであった。
その日連龍はこの「和議」の申し入れに応じ、引間城を出立しようとしていた。
「御館様、行ってはなりませぬ。あの氏真様、知は優れておいでですが疑いの心が「この御時世の事ゆえ」誰よりも激しいと思われます。歌など詠まれます時は極めて穏やかなのですが、こと政事となると不得手なるがゆえに、血が上り、苛立ち、何をするか解りません」
「田鶴よ、解っておる。我々には何の落ち度はない。疑いをかけたのは氏真殿であるし、不意打ちであったが故に皆の命を守るため対抗し、相手に損害を与えもしたのだ。左様それが故、某は今川の命に従うのだ」
「御館様それでは「最早これまで」と言う事なのでしょう。私は嫌でございます。私はあなたを失う事など絶対に出来かねるのでございます。嫌でございます」
「田鶴よ、確かに某が駿府に赴き、直々氏真様に釈明したとてこの戦の世の中で戦国大名である守護が一家臣の言う事をどうして心から理解するというのだ。しかも戦いの姿はどう

であれ、我等が今川家に損害を与えたのは確かなのじゃ」
「本当に理不尽、理不尽極まりない事です」
「これが戦の世の中と言うもの、某はそれをそのまま受取るのだ。きちんと裁きを受ける事以外、おまえを始め、この城下の者達を安寧にする事は出来ないのだ」
「御館様。あなた！」
「田鶴よ、決して挫けてはならぬ。善廣のため、来たるべき時のため、家臣と共にこの城と民を守るのだ」
「あなた」
「田鶴」
二人はひしと強く抱擁をした。お田鶴の方の身体は小刻みに震えていた。嗚咽が暫く続いた。
　お田鶴の方は館の東北、元目側の門を出、新川堀を渡って、東の中野町、天龍川方面へと向かう連龍と先妻の長男辰之助それに警護役のもののふ達の後ろ姿を見送った。これが最期の別れであろう事は重々解っていた。戦乱の世の慣わしを日々目にしていたお田鶴の方であったが、城主であり慕い続けている夫が遠ざかる姿を見、今は自らがその場に立つ事になったのだと思い知らされていた。お田鶴の方の大粒の涙は白くたおやかな頬を伝った。お田鶴の方の見る磐田原の向こう駿河の峰々の後ろには既に富士の山が峰近く雪が積もり白く聳えていた。
　連龍は覚悟をもって駿府に赴き、氏真公に目通りをすべく駿府の飯尾屋敷で嫡男辰之助、及び僅かな兵士達と共にその時を待ち受けていた。しかし自身とお田鶴の方の恐れていた通り、今川氏真の命を受けた重臣新野親矩の奇襲を受けた。両陣営が対峙する中、重臣として連龍と面識のある親矩が
「連龍殿の志は今川家臣として重々受け止めたく存じます。ただ氏真様のご意向には抗えません。願わくば御自害願いたく申しあげる」
親矩がこう大声で言い放つと、意を決した連龍は
「解りもうした。ただ後の事を思うに、返す返す氏真様にお目通り出来ないのが心残り、慚愧に耐えませぬ」
と言い、親矩の指示に従って連龍は嫡男辰之助、部下共々切腹・自害した。連龍の潔い最期を看取った親矩は氏真に事の顛末を語り、連龍の首を捧げた後、自らの屋敷に戻った。
「もはやこれまで」
新野親矩は母屋の板の間に端座し涙を流した。連龍親子を始めその忠臣達が敢然と自害し、また介錯されていく姿を見、断腸の思いの中、自らも切腹し命を絶ったのである。
　五日後、引間の城に「連龍自害」の知らせが届いた。（今川方にも酌量の余地あり）との一縷の望みも失われてしまったのである。お田鶴の方の心中余りある事であった。知らせを受けたお田鶴の方は
「おのれ、氏真よ。私はうぬを二度と我がこの地に踏み入れる事はさせぬ。江間の時成よ、泰顕よ、心してこの引間の砦を守らん。よいか」
「私はおめおめ城を開いて降参するつもりは毛頭ない。継室

の身とはいえ亡き夫の恨み、果たさずにおくものか」

お田鶴の方の強い志が更に固まったのはこの時であった。お田鶴の方はこれ以降引間の地を守る為、夫の遺志通り、どの勢力にも属さない引間城単独で、世の流れに抗すると同時に身を任せる決断をしたのである。

お田鶴の方の生まれはおそらく天文十年（千五百四十一年）頃であろう。お田鶴の方は広治二年（千五百五十六年）浜松引間城主飯尾連龍に嫁いだ。弱冠十六歳。しかし当時十六歳の輿入れは普通の事であり「初潮が確認されると婚姻」が当たり前の事として行われていた。平均寿命が短かった事、死産の確率が高かった事も相俟って若いうちの出産が子供の無事誕生の可能性として有利であり、その為の早婚であったのだろう。因みに十八歳の時長男善廣を出産している。また二十歳の時姫君が生まれたらしいのだが（あの事件）以来二人の子供がどうなったのか定かではない。話は前後するのだが正室であった辰之助の母は辰之助六歳の時なくなっていた。その一年後、妻となったお田鶴の方であった。政略結婚でありまた継室とはいえ新妻お田鶴の方と連龍の仲も、また辰之助や二人の子供ともまるで姉弟・姉妹のように睦まじく、世も今川家全盛期であった為、恐らく家族揃って毎日の慣わしとして、元目口の門の遙か向こうに聳える富士に向かい今川家の繁栄を祈念していたであろう。令和の現在も続く（その真偽はともかく）凧揚げ祭りはお田鶴の方の遺長子善廣の誕生を祝い、その成長を祈願する為に始まったとする言い伝えがある。ただこの幸せも長くは続かなかった。

先述したように西暦千五百六十年（永禄三年）六月十二日の桶狭間の戦いによって今川義元の首ははねられ、織田・豊臣・徳川の時代へと世の中は動き出していた。義元居城の駿河は東に北条、北に武田が控えている。従来はこの二大勢力との協定によってその領地の均衡は守られていたのであるがそれも揺らぎ、大井川以西、尾張には織田、三河には吉良、新参の松平が（武田・北条の勢力に比べ）圧倒的に京の都に近いこともあってか各々の勢力を増すばかりであった。

＊

次郎法師・祐円とお田鶴の方

千五百六十八年の井伊家では徳政令が施行された。一揆を起こさんとする農民を引き連れ井伊の南を纏める奸臣の家老小野道好は井伊谷城を取り囲み、祐円に井伊家の城主交代を迫った。それを拒否した祐円達は南渓禅師の計らいで幼い城主虎松をやっとのことで逃がしたものの道好の圧迫に屈し開城し、自らは引間の城に幽閉された。というのは祐円が生粋の今川方であり、もし小野道好が祐円を殺害すれば今川を倒したことになる。それでは道好は今川に顔が立たない。何より当時祐円は寿桂尼のお気に入りだったのである。それ故小野道好は虎松逃亡と祐円引間城幽閉をそのまま氏真に報告し、氏真の権威と力を称える為に

「氏真様、井伊城は某小野道好が奪い取りました。既にこの井伊谷と都田の地は間違いなく氏真様直々の領地となりまし

たのでございます」
その報告に氏真は束の間の喜びを感じた。
「この春、御婆寿桂尼様は亡くなった。苦しいと思っていた要素がひとつ消え、更に井伊を我が手中にしたのじゃ」
と思った。―しかし喜びも束の間、その直後に現実はそうではないことを氏真は身をもって知る事となる―
　当時引間の城は井伊と各々の利害関係から敵対と融和を繰返していた。今川に付く事によって自らの益を得ようとした道好には（祐円引間の城幽閉）はうってつけであった。
「この際祐円を引間に預けるしか他はない。あやつのことだ、反逆の狼煙を上げることもあろうが、それも先の事」
そう思った道好は穏便に幽閉したのである。秋も深まる霜月のことであった。お田鶴の方より年上とはいえ内輪揉めに敗れ幽閉された祐円であった。一方お田鶴の方は祐円の姿に自分を重ねていた。
「小野政直といい、子の小野道好といい、井伊家に恩義があるものが小野という豊かな領地を持ちながら、飽きもせず傲慢にも領主の批判を繰り返し、その挙げ句の果てに領主祐円をこの地まで送り出すとは」
「祐円の無念さは解らぬ訳でもない。あれ程人の裏切りを心に身体に感じたおなごはいないかも知れぬ」
　小野道好の要請で引間に幽閉された祐円であったが、お田鶴の方は道理をもって対処していた。その計らいでおなじ今川の出である祐円は幽閉とはいえお田鶴の方の近くに不自由さを感ずる事少なく住まう事ができていた。それ故感謝を申すべく祐円はお目通りを願った。
「祐円殿は如何お住まいか。暫し安生にしなされ」
お田鶴の方がこう尋ねると
「恐れ多いことです。申しわけありません。お田鶴の方様。ただ祐円はもう疲れて果ててしまいました。余りの悲しみが続いた故に、尼となってみたものの、また井伊谷の当主となってみたものの、全てが思うように進まずこの通り配下であった小野道好に城まで奪われてしまいました」
「それは致し方のない事ともいえるかもしれません。あなたは多少武芸を身につけたとは言えおなごの身です、ましてや戦には直に縁がありません。幾ら気丈夫とはいえ、おのこを充分に従えるという事は難しいというものでしょう」
「お田鶴の方様、虎松を育てる中、それは嫌というほど良く解りました。それ故私は逆に虎松を当主として前に立たせ、己は見守るという事に致しました。幸い今虎松は小野道好の刃から逃れ、密かに三河の鳳来寺に身を寄せております。ただこれからのことを思いますと、不安に心も身も潰される思いがするのです」
「私とて同じ心地です。でも私とは異なってあなたは小野を討ち取るべく、菅沼忠久・鈴木重時・近藤康用といった散逸した臣下を、も一度集め、更に徳川に援軍を仰ごうとしているのでしょう」
真意をずばりと突かれ次郎法師祐円は押し黙った。ここ半世

紀の間、井伊家の人々は謀反の咎や今川家の為の戦で数知れぬ災禍・不運を受けていた。祐円の周りでは祖父、父、兄弟、そして元許婚者であった直親まで殺され亡くなっていた。更にこの度の虎松殺害の企て。祐円の氏真、いや今川に対する怨恨は計り知れなくなっていた。ただ確かに祐円は幽閉される直前密書を徳川家康宛に送り、援軍を要請していた。

暫く押し黙っていた祐円であったが意を決し、お田鶴の方に申し上げた。

「恐れ多いことです。その通りでございます。お田鶴の方様のお心を深く察することは出来ませんが御存知の通りこの時まで私自身に今川の仕打ちがあったこと、その上氏真に唆されて虎松を殺さんとする小野の企みにはもはや耐えられなくなりました。どうか私の思いも察して頂きたいのです。私として今川の・・・」

「祐円殿、それ以上おっしゃらないでください。あなたの心根は良く解っています。私でさえ今川の出であったのに、疑心暗鬼に満ちたあのにっくき氏真の奴がれは、我が夫を殺してしまいました。しかも私に（降伏し、今川につけ）と言ってきておるのです。そして今、徳川の家康からもこの城を開け放てと言われているのです。しかし私はどちらにも付こうとは思いませぬ。ただ祐円殿の立場を思いますと、心持ちとしては嫌なのですが致し方ありません、あなたは徳川と手を結ぶのがよろしいでしょう。私には最早自らを失おうが、この地の民を自ら守ること以外、心にないのです」

「私はもののふ達と共に戦います。二度と民を戦いに巻き込むことはしません。祐円殿、あなたも同じ心ということは解っています。もし私が戦に敗れたとしても民だけにはその咎を味わわせたくないのです」

「お田鶴の方様。お気持ちはよく解りました。私は、も一度家康殿に書状を送り小野道好を成敗して頂くよう嘆願致します。そしてこの地の民の為、家康殿に引間の城の明け渡しを思い留まるようにお願いして行く所存です」

「左様ですか、そうしていただければ幸いです。無念ですが今川はこれまでです。これからは信長様の時代となるでしょう。それでも私は亡き夫連龍と同じ心持ちで、この地の一城主として、最期を迎えたいと思っています」

「お田鶴の方様」

祐円はそう小さく叫んで滂沱した。祐円は自らを恥じた。（四年前今川の命を受けるがまま引間の城を攻めた事、それに対して引間の城の者、また民が勇敢に反撃し井伊家の重臣までが討ち取られた事。自らの愚かさと、若いながらお田鶴の方を始めとする引間の人々の並々ならぬこの地を守り抜こうとする意思の強さに対して）恥じたのだった。

「この後の事は、我が身を賭しても、井伊を、虎松を守る事以外にない。お田鶴の方の覚悟を我がものとし、いち早く忠臣を集めて立ち向かう以外ない」

と腹の底から悟ったのだった。

お田鶴の方の思いもまた乱れていた。

「私も祐円も今川の出じゃ。されどおなごの身ゆえ、理不尽に次ぐ理不尽に苛まれている。叔父とはいえ氏真の指示で夫に自害を命じた新野親矩の姪である祐円を匿い、桶狭間にて殺された義父の宿敵である織田家、それに追従する徳川家にその援護を促す事を許す身となるとは」

それにも増して、お田鶴の方も祐円・次郎法師も家康がこの遠州の地に対して単なる一地方として考えていない事は解っていた。家康には信長という先鞭がいた。信長は尾張国で勢力を振るうことが出来た。そこには木曽川・揖斐川・長良川による肥沃で広大な平野があり、しかも良港の築ける海に面していた。そこでは多くの民を養い、また戦にも応じるもののふを育てることが出来た。しかし岡崎と言う地勢は信長の支配する尾張平野の東端に過ぎなかった。家康の願望は新天地を求めることであった。しかし、元々「質」として住んでいた駿府は三方山で囲まれた平地であり、守るためには好適な場所ではあったが、攻める場所としては不適なものであった。三河の守護として認められる為に打って出るには、東しかない。初めは国府である磐田に築城を試みたが地勢的に城下を築き、また防御することは不適と判断した。そこで目をつけたのが引間の城のある遠つ淡海であった。暴れ天龍の名を持つ天龍川は今川・武田からの攻撃を遅らせることが出来ると同時に、その治水によって尾張の三川の如く田畑に出来る。作ろうとすれば港も、当然、城郭もより広く築く事が出来る。東に向かい、広さも岡崎以東と比べ遙かに雄大である。今川・武田・北条政略のための拠点として信長の重臣としての役割をも充分果たせる。何よりも信長から距離を置くことが出来る。岡崎にいるより遙かに自由に己が望みを更に広げられるのだ。それ故引間の城は家康にとって喉から手が出るほどの城であった。その頃の情勢として天龍川を越えると今川の重鎮朝比奈氏の守る掛川城があり、さしあたり家康にとって、天龍川以西を勢力下に置くことが先決であった。

「ゆくゆくは今川を倒し、武田を、更に北条を打ち破るのだ」

家康の野望は明確だった。

＊

次郎法師祐円

祐円にしてみれば氏真とその祖母寿桂尼による永禄九年（西暦千五百六十六年）の徳政令は井伊家を滅ぼす命令としか思えなかった。農民達の負担を軽くすること。つまり徳政令は民を第一に考え、そこを支配する領主に課せられたものであることは熟知していた。しかしこの徳政令を直ちに受け入れると井伊家の財政は圧迫され、つまり商人達からの借り入れがそれ以降全く不可能となり、井伊家の財政が破綻してしまうことになる。小野道好はそれを知りながら今川の甘言を信じ（自分が今川の重臣、つまり井伊城の城主となることを目論む事）によって、この都田川流域と井伊平全域を掌握しようとし始めたのだ。祐円はこの命令に対し二年の猶予を乞うた。商人達にその借財を返還しつつ農民にもその内実を知らしめ、徐々に徳政令を実施すべく心身を駆使していた。

思いがけず氏真からの徳政令の命が出されたのに従い、延期を願うべく直ちに駿府に赴いた祐円であったがそこで立ち会ったのは氏真ではなく氏真の祖母寿桂尼であった。お目通りの挨拶をする前に、寿桂尼が言い放った。

「祐円、そちは今川の意を解さぬか。そちの爺様直平は氏真に従わず命を落としたというのに」

「滅相もございません。私は爺様の事情は良く存じ上げないのであります。噂では謀反を企てたと言われておりますが、私の目からはその気配は全くございませんでしたし、私が確かめられた事はただ爺様の亡くなられた姿とその事実だけでございます。隠し立ては致しません。私には（今川の熱い血）が流れていることを寿桂尼様も充分に御存知の事と思います。何故井伊と私にそのような疑いの目を向けられるのですか」

「だが此度の達しを氏真共々命じておるに、幾度も受け入れず、そのまま捨て置いているのは何故じゃ」

「恐れながら、そうではございません。我が井伊家は、商人達から井伊谷と都田を拓き、多くの民達に土地を与え、食を満たすための資金を賄いました。その為に我が井伊家のみが借り入れたものが多くあります。しかしながら今それを御破算にする徳政を行いますれば商人達の信用を失い、我が井伊家は滅びてしまいます。それ故暫しお待ちください。（私が何とか致しますゆえ）と氏真様に度々お願いを致しておるのでございます」

「ほほう、おなごの祐円、そちが井伊谷と都田の地の借財を丸く収めてみせるというのか」

「はい寿桂尼様、その通りでございます。私の思い・志をお解りになって頂けるのは、同じおなごであらせられる、あなた様しかいらっしゃいません。何卒ご了解ください」

「あの多額の借財を返せるとでもいうのか。そうかそうか祐円よ、まあいいじゃろう。この事は氏真に申しておく。しかしおまえの約束通り、徳政の発布は二年の後に必ず果たすことじゃ。よいか」

「寿桂尼様、お言葉有り難く承ります。祐円、身を挺してこの令を成就してみせます」

謁見の間から静々と離れていく祐円の気配を感じながら寿桂尼は思った。

「あの祐円、初めて会った娘の頃から、ひどく気の強いおなごじゃと思っていたが、それ以上に頭の働くおなごになったものじゃ。祐円の二年の猶予の申し出を聞いて氏真は怒りちらすであろうが、この二人がどのようにこの時期を乗り越えるか見るのも悪くはない。思うに氏真の命を即実行すれば井伊はなくなる。だが小野の頭領では井伊谷は纏まらぬ。さすればその隙間を縫って、あの勘の鋭い家康が井伊につけ込むであろう。それは目に見えている。しかし据え置けば、祐円は自力で立ち直り、今川の元に馳せ参じよう。それを待つのも一考じゃ」

当然氏真は祖母寿桂尼の指図には我慢できなかった。駿府

にいて顔を合わせる祖母には従順な態度で接していたが、裏では家臣に命じて井伊家の重臣小野道好を「当主」にとの甘言で、徳政令推進の筆頭とさせ、農民達を抱き込み、祐円に、またその養子虎松に対して恐喝を繰り返していた。

氏真の目論見は二年後、祖母寿桂尼が亡くなった春以降いよいよその激しさを増し、祐円に対抗する先鋒小野道好は武力を持って脅迫を繰り返し、遂に十一月徳政令は発布され、祐円は引間城に幽閉され、虎松は南渓禅師の助けを借り逃亡したのだった。

*

お田鶴の方　再び

当時、井伊家・飯尾家は今川、天野家は徳川という流れではいたのだが、これも腑に落ちる。地勢上、交易の中継地・通路に住む遠州人は昔から畢竟「長いものには巻かれる」的傾向があり、当時はまだ「今川で良し」と楽観さえしていた。天野氏はその点情報通、また「奸智」であり「これからは織田・徳川」と信長・家康に擦り寄る姿勢を見せながら、自分の領地と国境を接している信濃武田とも通じていた。

ただお田鶴の方は違っていた。

「私は生粋の今川の一人じゃ。とはいえ氏真の哀れな姿を耳にし、もはや私は今川には頼ろうとはせぬ、あやつは愚かにも忠臣である我が夫を殺し、己が力のみを示そうとこの城を攻めてきたのだ。私はここ引間の城と民を守る事のみが私の本懐・宿命なのだ。ただ民を戦には巻き込む事だけは避けよう。この地は今川のものでも徳川のものでもない。この地はこの地の民のものじゃ」

井伊谷に家康の軍が入り小野道好が殺害された事を知って引間の城にいた祐円を井伊谷に送り返したお田鶴の方であった。更に祐円の家康への忠言が受け入れられ、家康軍が天竜川を越えたという事を耳にすると

「何ということ、家康は朝比奈殿を討とうとするのか」

「家康の正室は築山様、築山様には嫡男の信康様がいらっしゃる。この為体、家康は今川を全く大事にしないのか」

と驚きを隠せなかった。しかし実情は違っていた。祐円の早馬で（引間城開城取りやめ）という上申の書状は家康に届いていたものの家康の意思は変わらなかった。井伊谷に戻った祐円に知らされたのは、引間城占領の命であった。祐円は自らの愚かさを再び味わった。

四日前、家康は信長の信と依頼を受け、遠江を攻略し支配下に置くべく直ちに三千人の兵を送っていた。兵はまず三河から井伊谷へと向かい、井伊の忠臣近藤康用、鈴木重時、菅沼忠久らとともに小野道好を討った。更に引間城から戻った次郎法師祐円を懐柔し龍潭寺に幽閉、その足で都田、麁玉、鹿島に出、天竜川を渡り池田へと南下、そして反転し、再度天竜川を渡った。軍勢は中野町から天龍川町に入り妙恩寺に陣を張り、早馬で陣を張った事を引間城に伝え、更に松下常慶、後藤太郎左衛門を軍使として引間城の城主お田鶴の方及び重臣達と交渉に入った。

「お田鶴の方様、家康殿は飯尾家の者達その家臣並びに民の事を鑑み、この城を開け放てば皆を配下に加え安静な暮らしができる事を約束するとおっしゃっているのです。如何なものでしょうか」

「ほほう、家康殿はそうおっしゃっているのですか。然るに私にはそのつもりは全くありません。今私はこの引間の城の者達と城下の者達とともにこの地の繁栄に向けて、自らと家臣達の手のみでそれを成し遂げる所存です」

「そうはおっしゃっても奥方様、この所、家康殿はもとより信長様もその力を大いに延ばしておられることを御存知でしょう。このお二人に従った方があなた様にも皆のためにもよろしい事かと」

「何という事を言うのです。義元様亡き後家康殿が今川にした事、我々にした事、それは何なのか。そち達は人づてに聞いて知っていようが。その屈辱を受けた者の誠の思いは到底知るまい。そしてその事は下克上の世とはいえ決して受け入れられるものではないのだ。そち達の勧告には応じられぬ。戻って家康殿に伝えよ。私は死を賭しておまえと戦う。見よ、私達の姿が民と城を守る者の本来の姿だと。民への心がなければ家康殿、そちの望みは己の欲以外にはないのだと」

翌日岡崎城にいて早馬にてその返事を受けた家康は一瞬たじろいだ。城主とはいってもおなごゆえ、従順ですんなりと自分の命を受け入れるだろうと思っていた。しかも戦うというのだ。本意としてこれから向かう将来に向けての拠点に血を流したくはなかったのであるが他に選択肢はなかった。

「致し方ない。松下、後藤に告げよ。引間を直ちに攻めよと」

翌々日の千五百六十八年十二月二十二日は家康が浜松の地で初めて行った軍事行為、引間城への攻撃の日である。酒井忠次と石川数正の軍が先ず引間城を攻めた。お田鶴の方は城下の民に三方ヶ原に身を隠すように伝えた。お田鶴の方を始め城に立て籠もり・また城下に潜んでいた家臣兵士の数は八百名程、彼等は勇ましく家康軍に反撃した。それゆえ後に徳川四天王ともいわれた酒井・石川両氏もこの城の堅い守りを崩せなかった。と言うより「もとより降伏以外なし」と高を括っていた為戦意は弱く、相手の戦力をも見くびっていた。相手の逆襲を受け二人は敗走し、やむなく妙恩寺へと戻った。再び早馬にて知らせを受けた家康は不甲斐ない戦いに怒りを顕わにした。その怒りは自軍にもお田鶴の方にも向けられた。

翌々日再び、徳川軍の総攻撃が始まった。雪が舞う寒い日であった。既に徳川軍は三百名の戦死者を出していたが家康の叱責に徳川軍は死を覚悟して戦ったのである。戦いの中、家康軍の勢いは次第に三の門二の門と打ち破って主の館に迫っていた。

「お田鶴の方様、このままでは元目門が開けられてしまい、この場所にも兵が入りましょう」

と筆頭侍女の（こまめ）が告げると、お田鶴の方は

「皆のもの、もはやこれまでじゃ。打って出ようぞ。我々の

地は我々が守り、この場で死して最期とするのじゃ」
緋威の鎧・兜を着け、黒々とした長髪を振り乱したお田鶴の方はこう叫び薙刀を持って、侍女十八名を自らの左右に従え自兵に命じ元目門を開け、城外へ突進した。降りしきる雪の中、おなごとはいえ武芸に秀でたお田鶴の方の潔さに怯んだ兵士はいたが、多勢に無勢、間もなく十八名の侍女もろとも敵の兵の白刃の下に打ち倒されてしまった。

＊

築山御前・瀬名姫

夫家康の岡崎城入城によって、皮肉にも嫡男信康とともに駿河で今川氏真の人質となっていた瀬名姫は、元亀元年（千五百七十年）人質の交換によってようやく解放され岡崎に入ったものの家康、いや於大の方を始め徳川家との折合いが悪く、築山という場所に「別居」という形で住居を構えざるを得なかった。その期間は長く、周囲の人々からは築山殿と呼ばれる迄になっていた。それ故九年後（千五百七十九年）家康から「共に浜松城入城」の要請を聞き、いそいそと浜松の城に来て、住まいしていた。今までの仕打ちのことを思うと疑心暗鬼ではあったが少しでも駿府に近づいた心地はいささかとはいえ、慰めでもあった。しかしその滞在期間は半月ももたなかった。夫家康は別棟にいて、目通りすることも叶わなかった。築山殿の不安は増していたが曖にも出さなかった。

築山殿が入城してつぎの日、城の北を眺めるとやや離れてはいるが、あかあかと夕日を受けている小さな林があった。

「あの林は三方ヶ原の南の端じゃと思うが、刈り取られた場所に塚らしきものが見える。ひょっとしてあの塚は亡きお田鶴の方のものか」

「築山殿、左様でございます。今から十年程前の永禄十一年御館様がこの城を攻めた折、亡くなられたお田鶴の方が葬られた塚でございます」

引間城下に詳しいお付きの侍女が申しあげると

「酷く荒れ果てているではないか。何と哀れなことじゃ。御館様は戦に明け暮れているがゆえ致し方ないのじゃが、それでもこれでは余りにもお田鶴の方が不憫じゃ」

「お田鶴の方は私と腹違いとはいえ姉妹であった。美しい義姉であった。今川を愛し、誇りに思い、身罷ったおなごじゃ。何としても私が弔おう。そうじゃ、あの林の塚の周りに百本の椿を植え、お田鶴の方を慰めるのじゃ」

そう言って家臣に椿の苗を手配し植える事を命じた。

入城から十日程経った日、信長からの書状が届き、家康から重臣を経て築山殿に沙汰があった。そこには嫡男信康の切腹命令があった。築山殿は愕然とした。

「信長よ、何ということを御館様に命を発するのだ。しかも御館様はこの命を受け止め、嫡男である息子を亡き者とするのか。信長はかくも恐れねばならない奴がれか」

「あの憎っくきおなご、徳姫よ、父が信長という（威を借りて）義理の母である私を憎み、自らの夫である信康を亡き者

にしようとするのか」
「いやいや、そうではない。御館様は妻とはいえ蟄居させていた（今川である）私と信康を亡き者にするため、徳姫という駒を使って、私をこの引間に呼び寄せたのに違いない。しかしその事を素知らぬふりをしている私ではない」
　築山殿・瀬名は決意していた。家康の家臣の中には今川家と関係深い者達がいた。今川の全盛から時を経たことは知ってはいたが築山殿は昔の忠臣達の心根を信じ密かに従者達を連れ浜松城を出、蟄居している息子信康を守るため、北にある二俣城に向かおうとしていた。
　天正七年（千五百七十九年）八月二十九日の朝早く築山殿は引間城を出、西に向かって名残の坂道を登っていった。普済寺の脇を通り一旦下り坂になりまた上り坂となった道を登りつめてみるとやや深い谷の気配となった。その頂から見ると向かいの丘は北東遙か三方ヶ原に繋がり、南西に向かって崩れるよう地平に落ち込んでいた。谷には小川が流れ下流に向かって両岸に葦原が続きその先に佐鳴湖が広がっている。築山殿は（三方ヶ原を真北に進むことは山賊・物取りが多くしかも真面な道なき場所であったため）岡崎から浜松城へと向かう経路を逆方向つまり佐鳴湖から新川、更に浜名湖を北上し、祐円の住む井伊谷を経由し都田川沿いに二俣城へと赴こうとしていた。しかしお供の重臣、野中重政、岡本時仲、石川義房のうちの一人、家康の密命を受けていた野中重政は小川に沿って道を下っている築山殿の前を進んでいたが、湖の渡し船が待ち受ける場所の手前で振り返り
「築山殿、お命頂戴致す」
と声を上げ腰から太刀を抜き上段に構え、築山殿に襲いかかろうとした。しかし築山殿は右手を掲げ
「お待ちあれ。ほほう、御館様のご意向は左様であったか。まあよい、かねてからの覚悟でもある、ささ、斬ってみるがいい」
と、築山殿は薄紅の下衣の上に、黄の縞衣を着た姿で、静かに佐鳴湖畔の草原の上に端座し、両の手を咽の前で合わせた。その厳とした姿に居合わせた家来達は
「如何に上意とは申せ、このような姿の奥方様の首を掻く刃はござりませぬ」
と、泣き、躊躇って誰一人、斬ろうとする者がいなかった。それを見た築山殿は
「さすれば、わらわは・・・」
と、手早く懐刀を抜いて咽に刺した。夏の青々とした草原の上に血潮が吹き出すと同時に身体が前に崩れ伏す所を、命を受けた家康の家来、野中重政が必死の形相で
「ええいっ」
と首をはね、絶命させた。無残にもその首のない亡骸は近くの西来院に運ばれ荼毘に付された。妻の殺害―家康はそれを知っていただけではなく、そうなるべく企てていた。それ故重臣野中重政に殺害を一任した。ただ報告を受けた家康は
「築山はおなごじゃ。手はずを整え、髪を切らせその上で、

尼にでもすれば良かったろうに。殺さなかった由は徳姫にも信長殿にも申し開きは出来たというもの。まあそれでも殺したのなら致し方あるまい」

と重政に伝えたという。結局、何もかも家康の腹づもりの内に進んだのだった。要するに家康は信康が家康の指示によって、岡崎から大浜城、堀江城へと移っていく事に危惧を抱いていた築山殿の心を逆に操り、その死を迎えさせたのである。覚悟を決めていた築山殿の一行は井伊谷を経て都田川沿いに東上し二俣城に行くことを目指したのだが、家康の企てはその行動を容認し、ここ佐鳴湖東端の小藪で築山殿を亡き者としその首を佐鳴湖とそれに続く宇津山城のある浜名の湖を経て陸路、岡崎に届けんとする事だった。岡崎には於大の方、徳姫と家康側の家臣達が居たのである。築山殿の首級を見ることは織田にも徳川にも謀反を犯す事への物言わぬ忠言となったのである。家康の計略は此処まで奸智であったといえよう。家康は、かくも用意周到、狡猾・冷徹な男だった。

野中重政は家康の計らった企て通りの行動を取り、石川数正に築山殿の首を托し、家康の指示を全うした。重政は近くにあった池に誅殺に使用した太刀を沈め、血糊を洗い、浜松城に帰った。しかし城主家康に報告した折の家康の言動と表情に言い知れぬ怒りと憂いを感じてそそくさと城下へと下がり、その後築山殿誅殺の事には沈黙しつづけ蟄居し、静かに生涯を終えた。この事もまた家康の築山殺害の隠蔽工作或いは自己保全の策でもあったのだろうか。

築山殿は以前より、自らは言うまでもなく信康が狙われるかもしれないと恐れていた。思えば我が子信康は夫家康より遙かに勇猛な武士となっていた。更に義父今川義元よりも知恵は働き兵法にも長けていた。信康は自身今川の血をひしひしと感じ、それを誰よりも分かっていた。戦国の世である。父子といえども互いの器の大きさ、動きによっては敵対せねばならない。家康も信康もその心は抱いていた。ただ信康はその時岡崎城の一城主にすぎなかった。更に信長・家康に責められてはその意向に従わざるをえなかった。二十一歳の信康である。信康の心中は如何ばかりだったろうか。

「父上は何故私を自害に追い込んだのだ。何故母を殺してしまったのだ。今川ゆえか。既に今川は失せてしまったというのに。母も某も何も出来ない状態であったのに。今此処、天龍川の汀で己が命をたたねばならぬとは」

城とはいえ、平地に築かれた城とは違い、山の上に築かれた小規模な二俣城であり周囲は緑豊かな大地である。本丸内の地面に敷かれた莚の上で信康が割腹すると忍びの者である服部半蔵は、その潔さに介錯する事が出来ず、検死役の天方道綱が代って執り行った。

＊

次郎法師祐円　再び

千五百六十八年徳川家康の侵攻によって井伊谷の地は完全に今川から離脱した。次郎法師祐円は龍潭寺に蟄居を命じられ、城代として家康の臣下が勤めるようになっていた。

転機は千五百七十四年（天正二年）に訪れた。三河鳳来寺に身を寄せていた養子虎松が父直親の年忌法要の為龍潭寺に戻った折、直親の母祐椿尼、次郎法師祐円、直親の妻ひよ、龍潭寺住職・南渓瑞聞等の話し合いにより、虎松がそのまま井伊谷に留まる事が出来るよう計らったのだ。その計らいとは、松平に忠誠を誓う証とする為、虎松の母ひよが松平家臣の松下清景に嫁ぎ、虎松を松下家の養子にするというものであった。家康がそうであったように、ひよと虎松は松平家に「質」として入ったのである。翌天正三年、松下家を通じて家康に見出された虎松はその美貌と才能を見込まれ、井伊氏に復することを許され、元服をし、名を井伊万千代と改め、家康の「小姓」として取り立てられたという。その後、旧領地である井伊谷の領有を認められ、二十代城主となった。

ただそれまでの七年間、祐円に尚不遇は続いた。龍潭寺で蟄居の身となった翌年今川は滅びその三年後武田の遠州侵攻によって井伊谷城は焼かれ、祐円は母祐春尼の松岳院に避難していた。祐円は井伊の再興を願って只管般若心経を朝晩唱え、仏道修行に邁進する事だけしか叶わなかった。かくして直親の忘れ形見直政の武勲と無事を祈り続けるおなご・祐円尼は井伊谷の片隅、禅寺松岳院で千五百八十二年、四十三歳の生涯を静かに閉じた。それは表だった姿勢で政事に勤しんだ今川の寿桂尼とは正反対の、静かにしかも強かに戦乱の世を生きたおなごとしての祐円の生き方であったのかも知れない。祐円自らの身命を賭して守ろうとした直親の忘れ形見、虎松・万千代は後の井伊直政であり、幕末の井伊直弼へと続く徳川家の重鎮として、江戸時代における井伊家初代となるのである。

（中央区）

［入　選］

蠅

ヨリタユウコ

八月の暑い夜だった。電気代を節約したいから私はなるべくエアコンを使わない派なのだが、この日は扇風機だけではなかなか寝つけなかった。アパートの部屋は二階だけれど、朝まで窓を開けたまま寝るのはなんとなく恐くて、真夏でも夜はいつも閉めてしまう。リツはさして暑くなくてもすぐエアコンをつける。汗をかくと皮膚がかゆくなるからだそうだ。生後まもなくアトピー性皮膚炎と診断されたリツには手を焼いた。成長するにつれてだんだん快癒したかに見えたが、高校で不登校になってからまた悪くなってきてしまっていた。

夜中、突然ケイタイの着信音が鳴った。

「誰？こんな時間に。」時計を見ると二時半。発信者はアキラ君だった。

「もしもし？ねえちゃんごめんこんな時間に。今、兄貴が亡くなって、ごめん、本当はもっと早く知らせなきゃって思ってたんだけど。」

「え？」

「六月ぐらいから入院してたんだ。突然足が動かなくなって救急車呼んで。脊髄にウイルスが入ったとか言われて、だんだん体が動かなくなってきちゃって、それで・・・。」

「今どこにいるの？」

「医療センターのＩＣＵの前の廊下。」

「わかった。とりあえずリツを連れてそこに行くわ。詳しい話はあとで教えて。」

「リツ！起きて！ファーザーが死んだって！起きて！医療センターへ行くよ！」ふだんは非常に寝起きの悪いリツが、このときばかりはぱちっと目を開いた。「え？」「六月から入院してたんだって。今、アキラ君から電話があった。」「え？お父さん死んじゃったの？」「うん。そうらしい。リツも早く着替えて。」リツが素早くベッドから起き上がった。

ファーザーの名はマサノリという。結婚する前はマサ君と呼んでいたが、リツが生まれてパパに変化し、古くなったヨリタ家を建て直して義父母と同居し始めてからは旦那様とかあの人とか呼んでいた。そもそも家族の会話に登場する回数も減っていったから、どんなふうに呼んでいたかあまり思い出せない。

医療センターの守衛のおじさんは「ＩＣＵは廊下をまっすぐ行って突き当たりを右ね。」と教えてくれたけれど、深夜の

病院の廊下は静かで真っ暗で非常口の緑色の明かりだけがぼんやり足元に映って、とても長く感じた。私は（たぶんリツもそうだっただろう）あまりにも非日常な今この瞬間に少し興奮していた。突き当たりを曲がったら、壁際のベンチにアキラ君が座っているのが見えた。「お待たせ。」「うん・・・俺も最期には間に合わなくて・・・。」声に力がない。「夕方、ドクターから電話があってさ。兄貴の容態が芳しくないって言われたんだけど、俺が先週見舞いに来たときはまだわりと元気だったんだ。だからまだいいかなって思ってたら、十二時頃すぐ来てくれって。」そのときベンチの横のドアからマスミちゃんが顔だけ出して「中に入ってもらったら。」と囁いた。私達は促されて部屋に入った。そこには白いベッドに横たわるファーザーがいた。髪は刈られて坊主頭になっており、顔の皮膚は皺々で、私の知っているあの人ではなかった。首から下は白い布団がかけられてあって見えない。ああ、本当に死んだんだ。ただそう思った。ただそう思っただけで、私の心は1ミリも動かなかった。悲しくもなく嬉しくもなく。恨みでもなく哀れみでもなく。ざまあみろでも、ありがとうでもなかった。サーッと感情が静まりかえり、凪いだ湖面のように、私は自分でも不思議なくらい平常心でいた。けれども、リツがどんな表情でこの遺体を見つめているのかを、振り返って確かめてみる勇気はなかった。

「悪かったね、ユウコちゃん。」振り返るとお義父さんもいた。「あ、ご無沙汰してます。」お義父さん、小さくなったな。しばらく見ない間に一回りも二回りも小さくなったようだ。

「ヨシエが逝って半年も経たないのにマサノリまでこんなことになっちゃって。まったくどうかしてるよ。」頭を振るお義父さんにそっとマスミちゃんが寄り添う。「お義姉さんもリツ君もこっちの椅子どうぞ。」マスミちゃんは離婚したことを知った後も私のことをお義姉さんと呼んでくれている。アキラ君とマスミちゃんは会社の同期結婚で私と同い年だから「私のことはユウコって呼んでね。」と初めから言ってあるのだが、律儀で真面目なマスミちゃんはずっと「お義姉さん。」だ。

すすめられた椅子に腰かけようとしたとき、コンコンと控えめなノックをした看護師さんが入ってきて「支度をするからいったん部屋の外に出てくれ。」というようなことを言った。私達はまた廊下のベンチに座った。アキラ君がリツを見つめて言う。「ごめんよ、リツ。やっぱリツにだけは兄貴の病気のこともっと早く伝えるべきだったんだ。」リツがアキラ君を見る。「兄貴に止められてたんだよ。入院してること、誰にも言うなって。最初はまだ上半身起こしてテレビ見たり出来てたんだけど、だんだん手も動かなくなってきちゃって。だからスマホも俺が預かってて。でもここんとこ少し良くなってきてたから、これなら退院できるかも、って思ってたんだ。」「だからお父さんからＬＩＮＥの返事が来なかったんだね。」リツと私は顔を見合わせた。

リツは七月に入ってからファーザーにＬＩＮＥを送っていた。「ばあばの初盆って俺も行ったほうがいいのかな？」三月の末にお義母さんは亡くなっていた。巨細胞性動脈炎という難病だったそうだ。その前の年に医大病院に入院していて、でも退院して家にいるとリツから聞いていたからてっきり治ったのだと私は思っていた。しかしそうではなかったらしい。私は葬儀には出席しなかった（お世話になったお義母さん。本当は感謝を伝えたかったよ）が、リツには行かせた。通夜からずっと、お義父さん・ファーザー・アキラ君・リツの男四人で一連の行事を執り行ったようだ。そのときにアドレスを交換したのだろう。そのＬＩＮＥが既読にならないのでリツはしばらく気にかけていたけれど、初盆の連絡は誰からも来なかった。「まいっか。八月にやるのかもしれないしね。」などと私達は呑気にそのことを忘れていった。

看護師さんが部屋から出てきて「お荷物などまとめてあります。」と言いアキラ君に何かしら説明していた。目をつぶってうなだれていたお義父さんが「わしはもう帰るよ。」と立ち上がった。「リツ、ユウコちゃん、ありがとね。」と弱々しくも笑顔を作ってくれた。何と返事したらよいのか言葉がみつからず、立ち上がってお辞儀するのが精一杯だった。リツは「じいじ、大丈夫？」と祖父の手をとり一緒に廊下を歩いていった。「お義父さんは私が送りますね。」とマスミちゃんが私に言った。お義父さんもお義母さんもとても常識的な善いひとたちで、私は恵まれていたと思う。同居をし始めるとき、「お互いそれぞれ自分のやり方で暮らしてきたんだから、そのままを通してたらぶつかっちゃうよね。だから全員ちょっとずつ我慢したら、うまくいくんじゃないのかな。」と提案してくれたのはお義父さんだ。私がパートに出たいと言ったときも、お義母さんは快く家事を引き受けてくれた。私もいろいろと我慢をしていたが、この老いた二人も相当耐えていたに違いない。

暗かった廊下がうっすら明るくなっていた。医療センターの玄関を出ると、もわっとした湿気が気持ち悪く肌にまとわりついた。中にいた何分かの間に雨が降ったのだろう、アスファルトが濡れていた。どうりで昨夜は蒸し暑かったわけだ。お義父さんとマスミちゃんを見送ったあと、駐車場にもどる横断歩道の赤信号で立ち止まったリツが、振り向いて病棟を見上げながら呟いた。「ばあばが天国で寂しくて、ファーザーを連れて行っちゃったのかもしれないね。」「そうね。そうかもね。」そうかもね。私は心の中でもう一度繰り返した。朝もやなのか霧なのか、白く濁った街を私達はアパートへと帰った。

医療センターから帰ってきて、リツが「俺は疲れたから寝るわ。」と言ってベッドにもぐり込んだので、私はリツを放置

して仕事へ行った。時給で働いているのだ。稼がねば家賃も払えなくなる。リツはというと、ここ何年か働いていない。大学受験に失敗して「もう一度受験する。」と浪人したが二度目も上手くいかなかった。それからいくつかアルバイトもしてみた（させてみたと言ったほうが正しいか）が長くは続かなかった。アトピーの症状が悪化したこともあり、見知らぬ他人・第三者との接触を拒んでひきこもり状態でいる。どんな職業でもいいから働いてみればいいのに、理想が高く妥協点が低いために最初の一歩を踏み出せずにいる。ある程度のポテンシャルは持っていると思うから、親の私はもったいないなと感じてしまう。そしてそれをリツにストレートにぶつけてしまうから、それこそがアトピー悪化の原因になっているのかもしれない。

仕事の昼休みにケイタイを見るとリツからメッセージが届いていた。「告別式は日曜日。お通夜は明日だって。」アキラ君から連絡をもらったのだろう。「黒いスーツ、クローゼットから出して風を通しておいてね。」と返信した。お義母さんの通夜に着ていく礼服を持っていなかったリツ、その日ファーザーがスーツ屋へ一緒に行って買ってくれた、それをまたリツは明日着ることになってしまった。

お通夜は六時始まりだったが、リツは朝からヨリタ家へ行っていた。私は頼まれた写真を探すため、アパートの押入れからアルバムを引っ張り出して広げていた。高校時代からの私の写真。吹奏楽の大会。短大の文化祭。成人式の振袖。スキー場のリフト。どれを見てもそのときの光景が思い浮かぶ。どれも二人で写っている。写真の中のマサノリは笑顔で楽しそうだ。そういえばもう何年もそんな表情は見てなかったなと気付いて、苦々しくなる。アルバムを放り出しそうになったが、いやいやそうはいかない。故人の半生の写真を所持しているのは私なのだから、告別式場に飾る写真を選ばなければ。そうだリツと二人で写っているのがいいだろうと思い、探したが、少ない。赤ちゃんのリツを抱いている一枚、写真館で撮った七五三、幼稚園の運動会。あと小学一年の三学期の始業式をさぼってＴＤＬへ遊びに行ったときのもの。それだけだ。そもそもリツが生まれてからの写真はアルバムにも貼っておらず、現像した店の袋にばさっと入れたままだった。二十三年前の私には撮った写真を整理する時間も心の余裕も無かったし、レストランの仕事が忙しかったあの人は家ではひたすら眠るだけだったから、息子と一緒に写真に納まるどころか会話すら少なかった。まあこの四枚を持っていってもらえばいいだろう。これが私達三人のヒストリーだ。

午後、リツが写真と着替えを取りに戻ってきた。今夜は通夜会場に泊まるという。「アキラにいにが、明日お母さんも来て、って言ってたよ。」と言い残してすぐまた出かけて行った。アキラ君からも直接電話をもらっていた。告別式にねえ

ちゃんも出席して欲しいのだと。義姉を尊重してくれている、その申し出は素直に嬉しかった。しかし私はどうしても行く気にはならなかった。今更どんな顔をしてあの遺体と向き合うというのか。ヨリタ家の親戚たちから何を言われるか。あの人と私の両方を知っている友人たちは戸惑うに違いない。何よりも、弔う意味がない。私の中ではその存在はとっくの昔に消滅しているのだから。アキラ君の心遣いには本当に申し訳ないと思ったが、丁重にお断りした。

日曜日、私は朝からキッチンの掃除をしていた。よく晴れて、外は暑そうだ。私は昨夜から一人なのにエアコンをつけっ放しにしている。涼しいと気持ちが落ち着くし、作業もはかどる。告別式は十一時から始まるらしい。リツは少しは眠れただろうか。昨夜遅くにリツから通夜の様子の報告メッセージが届いていた。ファーザーの同級生がたくさん来てくれたこと、皆に「お父さんそっくりだね。」と言われたこと、飾られた写真を見て盛り上がっていたこと。リツの知らないファーザーの一面を垣間見ただろう。リツは本当に父親に似た顔立ちに育った。顔だけではない。髪の量が多いことや足の指の形や皮膚が荒れる部分、歯磨きしなくても虫歯にならない性質までそっくりだ。寝顔などは瓜二つと言っていい。だから時々、リツが寝ている姿を見ると腹が立つことがあった。休日に遊びに行こうと約束していたのにファーザーが朝なかなか起きなくて結局出掛けられなかった、ということが度々あって、そのときの気持ちを思い出すからだ。リツは寝起きの悪いところまで似てしまった。

キッチンの流しや排水口はかろうじて清潔を保っているが、窓だの床だのの掃除はいつも後回しになってしまう。今日こそフローリングの床に水玉模様みたいについた汚れをきれいにしよう。片膝をついてウェットティッシュでごしごししていたら、汗が床に落ちてしまった。タオルに手を伸ばそうとしたその時、ぶ――んと羽音がして小さな黒いものが通り過ぎた。あれ？蚊が入っちゃったのかな？でも今朝は窓は開けてないし、どこから入ってきたんだろ。と考えていたその瞬間、私の目の前の床に一センチほどの黒い蠅がとまった。

蠅？

黒い蠅は体の向きを変え、私に正対した。そしてそのコンマ一秒の間に、昔、母から聞いたあのことばを思い出した！

おばあちゃんの葬儀の精進落としの席。テーブルに並べられた助六寿司にどこからともなく蠅がやってきて、ひとつひとつ寿司から寿司へと飛び回っている。小さかった私は気になって手でその蠅を振り払おうとしたら、それを母が制止して「あのハエさんはね、ばあばが姿を変えてあらわれているんだよ。ここにいるみんなにね、最後のお別れを言いに来てるんだから、追い払っちゃだめだよ。」と静かに言ったのだった。私は蠅と目が合った。そして次の瞬間、頭の後ろから、呼ば

れた。
「ユウコ。」
聞き覚えのある声だった。いや実際には誰もいないから声など聞こえるわけがないのだけれど、私には分かった。確かに、呼ばれた。私の後頭部のうしろに後光が差しているかのような〈声〉の気配を感じた。蠅が私を見ている。私は蠅に何か言わなければと思った。蠅は目を逸らさず私を見ている。でも私は「ありがとう。」も「ごめんね。」も言いたくなかった。その蠅に、最後に言いたいこと・・・
思いつかなかった。流れ星を見つけた瞬間とっさに願い事を唱えられるのはいつもその想いが心に在るからだ。心に存在しない想いは、口には出てこない。心の底に沈殿していた白く濁った感情さえ時間の経過とともに消滅して、私は既に解き放たれている。
私の口から出たのは「リツを一緒に連れて行かないでね。」だった。考えて思いついたことばではない。それが私の願いだったのか、と言ったあと気付いた。蠅はジロッと私を睨んで、そして何も言わず飛んで行った。ぶ――んとキッチンを一周してリツの部屋へ向かったような気がしたが、追いかけることはしなかった。その後どこにも蠅はいなかった。今日はずっと窓は開けていないのに。

「あーさっぱりした。」と言って、バスタオルで髪をわしゃわしゃ拭きながらリツがキッチンまで歩いてきた。「ずっとさぁお線香の中にいると服にも髪にもお線香の匂いが染みついちゃうんだよねぇ。」「お疲れ様だったね。いろいろありがと。」と言いながら、髪から飛んだ滴がいくつも床に着地するのを目撃してしまった。これが水玉模様の原因か。リツは冷蔵庫から炭酸水を取り出して、らっぱでぐびぐび飲む。「ちょっとぉ。冷蔵庫のドア閉めてから飲んでよね。」リツのお風呂上がりはビールではなく炭酸水だ。飲めない体質ではないが家でも滅多にアルコールは飲まない。たまに友達から誘われて飲み会に行くくらいだ。ファーザーはお酒が大好きな人間だった。皆と大騒ぎして楽しくあおるのも好きだったし、家で日本酒をちびちびやるのも好きだった。私は全くの下戸だからそれらの場につきあうのは苦手だったが、リツは嫌ではなかったらしい。そういえばファーザーはしょっちゅう「リツが大きくなったら二人で飲みに行こうな。」と幼いリツに絡んでいたっけ。私達がヨリタ家を出て以降、二人が二人で会うことは無かったから、その夢は叶っていなかった。けれど、お義母さんの四十九日に集まった日の夜、リツはファーザーとアキラ君と三人で鮨屋へ行っている。赤い顔して御機嫌でアパートに帰ってきたから、きっと楽しく飲んだんだろうなと思った。二人きりではないにせよ、親子で杯を酌み交わす機会を持てて良かった。お義母さんが引き合わせたのだろうか。今にして思えばファーザーがアキラ君と兄弟で飲みに行くことも珍しかったかもしれない。三か月後に

こうなるとは当人も予想していなかっただろう。本当に、冥土の土産になってしまったね。

パジャマを着てどかっとソファに座ったリツが「あのさ、お母さん。」と話しかけてきた。

「アキラにいにに言っておいたよ。」

「何を。」

「お父さんが死んじゃう前に会えなかったこと、にいにが申し訳ながってたでしょ。だけど俺はそれで良かったんじゃないかって思ってる、って言ったの。お父さんは自分のカッコ悪いとこ見られたくなかったと思うしさ。俺だってもし手も足も動かなくなっちゃって髭も髪もボーボーだったら、誰にも会いたくなくなると思うもん。」

「私にも？」

「んーお母さんは別。」

「そしたらさ、ファーザーにとってリツはそういう特別な存在だったんじゃないの？」

炭酸水を飲んでいたリツの手が一瞬止まって

「・・・特別な存在、って感じしたことないけどね、俺。」

だよね、と私は即答してしまいそうになったが、やめた。問うたのは私だった。ごめん。

「でもいいんだよ、それで。お父さんの意思に従ったってことにしとけば。そうすれば、アキラにいにの気持ちも楽になるでしょ。」

リツは炭酸水を飲み干してソファから立ち上がり、自分の部屋へ戻って行った。ドアの向こうから「俺、もう寝るわ。おやすみ、お母さん。」と聞こえた。リツは心の優しい子なのだ。私なんかよりずっと。

真夏だと東向きの窓際に置いてある私のベッドには早朝から朝日が強烈に差し込むので、否応にも暑くて目が覚めるのだけれど、秋分を過ぎるとさすがにそれもなくなる。今朝は休日用にセットした目覚まし音が柔らかすぎたのか気付かず寝坊してしまった。慌てて洗濯機を回して、ベランダへ干しに出たら、今シーズン初めての金木犀の香りを感知した。私にとっては無条件に幸福な気分になる香りだ。十月が誕生月の私は、誕生日を祝ってもらうワクワク感と金木犀の香りは記憶の中でリンクしているのだ。金木犀の木はヨリタ家の隣家にある。ファーザーの三回忌のあと、私達は先月アパートを引き払い、ヨリタ家に引越してきた。

ファーザーが入院してから、お義父さんは生まれて初めての単身生活を頑張っていた（実際にお義父さんからそう聞いたわけではないがきっとそうだ）と思う。同居していた頃のお義父さんの担当家事は風呂掃除くらいで料理洗濯をしているのは見たことがなかったから、お義母さんが亡くなったあと、毎日の暮らしの細かなあれこれに苦労したことだろう。

「ヨシエの遺品整理もやってたんだけどね、マサノリが倒れてからはもうやる気がなくなっちゃって、途中なんだよ。」とあとから聞いた。本当の一人暮らしになってからも、アキラ君のサポートもあり、しばらくはなんとか過ごしていたみたいだけれど、ある日お義父さんは買い物帰りに道で転んで骨折してしまった。折れたのは右肩で、幸い一か月ちょっとで退院できたが、きき腕を上げられなくなったから一人で出来ない事が多くて、アキラ君の家に住むことになった。マスミちゃんは献身的にお義父さんの世話をしてくれていたようだけれども、やはり思春期の孫娘や反抗期の孫息子らとの同居は気を遣うようで、ほどなくしてお義父さんはアキラ君の家から至近の施設に入所した。

お義父さんの三回忌の集まりから帰ってきたリツから「お母さん、じいじがね、俺達にヨリタの家に住んで欲しいって言ってたよ。」と聞いた。人が住まなくなった家は傷んでくるから、と心配していると。空き家になってボロボロになる前にリツ達が住んだらいいじゃないか、と言っていたと。「リツはどう思う？」「いや、俺は別にどこでも同じだし。」「アキラ君は何て言ってた？」「お母さんが嫌じゃなければいいんじゃない、って。」アキラ君は結婚するとき、一人娘のマスミちゃんの家の養子になっていた。苗字も変え、ゆくゆくは地元の名家であるマスミちゃんの実家の跡取りになることを選択していた。そうか、ヨリタ家の跡取りはリツか。私もヨリタ家に住むことは嫌ではなかった。この家を建て直すとき設計の段階から打ち合わせに同席させてもらっていたこともあり、家そのものには愛着がある。もともと過去にこだわらないタイプ、思い出など取るに足らぬ。

アパートの家賃が浮くという経済的なメリットも大きく、話はトントンと進み、リツはヨリタの家に住むこととなった。私はおまけで居候させてもらうということで落ち着いた。大量にあったお義母さんの服やバッグを処分し、手つかずだったファーザーの部屋はリツにいろいろ説明（ファーザーは吹奏楽部でパーカッションだったから太鼓のバチを何本も持っていたとか、実は鉄道好きで時刻表をコレクションしていたとか）しながら片付けた。お義父さんのものはそのままに、いつ戻ってきても大丈夫なようにしておいた。そうして数か月かかってキレイにして、私達は戻ってきた。

リビングの一角にある仏壇に、毎朝お水とお茶を供えるのが私のおつとめだ。鴨居にはお義母さんとファーザーの遺影が並んでかけられている。お義母さんは、お気に入りの着物で新年会に出掛けたときの写真。病気になる前の写真だからちょっと若い。ファーザーは晩年の写真が見つからず、結局リツの七五三でスーツを着ているものが遺影で使われたから、だいぶ若い。二人とも笑顔だ。私は毎朝「おはようございます。」とだけ言い、手を合わせたりはしない。それでいいと

思っている。リツは豪華なスイーツや珍しいフルーツなどの頂き物は必ず「お仏壇に上げてから食べよう。」と言う。そのたび私は遺影を見上げる。二人とも笑顔だ。リツが優しい子で良かった。リツがそばにいてくれてよかった。

リツの黒いスーツは明日クリーニングに出そう。しばらく出番はこなくていい。

リビングの窓を開けたら、金木犀の香りがふわっと、この家に入ってきた。

（中央区）

［入 選］

接 合

鈴木 篠千

「…四十三才ね？」

遠鉄スーパー積志店の店長、黒木はさっきまでの人の良さそうな顔を歪めた。

「あ、あの。く、口はふ、不自由なんですけど、か、身体は大丈夫です、す…」

「病気、したんだね？」

「は、はい。も、もう十年前ですけど、脳腫瘍になりまして…」

その経緯は履歴書に書いてある。黒木はさらに唸った。

２０２２年の４月２６日。

俺はこのスーパーの品出しバイトに応募し、こうして面接を受けに来ていた。

先日、街中の飲み屋のカウンターで、黒はんぺんなどを摘まみながら、スマホでこの求人を見つけた。そして、すぐに応募した。

「今、昼間は病院で働いているんだね？」
「は、はい」
「で、それが終わり次第、こちらに来るって事かな？」
「は、はい。ご、五時には向こうの、の、仕事が終わるんで、六時には間に合うと、と、思います」
「六時から九時までだけど、良いの？」
「は、はい。か、構いません」
黒木店長は俺の顔をジロリと見た。人当たりの良さそうな印象だったが、やはり商売や仕事となれば話は違う。シビアになる。

昼間の休憩時間にテレビを観た。
厚生労働省が有効求人倍率を発表した。前年度比０・０６ポイント上昇の１・１６倍で、改善は３年ぶり。完全失業率は０・１ポイント低下の２・８％となり、二年ぶりに改善したらしい。
バイトの採用率も改善しているだろうか。
物価が高騰している。国は「総合緊急対策」を決定した。高くなるガソリン価格抑制のため、石油元売り会社に支給する補助金を拡大するらしい。これもロシアのウクライナ侵攻のせいなのか。
俺はそれどころではない。
派遣社員からの脱却と、実家から離れる為に俺は去年から新しい仕事を探していたが、なかなか見つからなかった。俺は仕方なく、今の病院での派遣仕事は継続しながら、独り暮らしの資金を確保する為、短時間のバイトする事に決めた。
ここ数年、俺はこのパターンで貧困に喘いでいる。去年は夏に三方原の加工工場でバイトしていた。

「病院からここまでは、どのくらい？」
「げ、原付で、で、十五分くらいです」
「週、どのくらい入れそう？」
「…ふ、二日か、三日ですかね。シフトは、お、お任せします」
「接客業は初めてじゃないんだよね？」
「は、はい」
『経験者かな？』
『だ、大学そ、卒業直後に、に、販売業、し、してました…』
そこはいわゆる『ブラック企業』で俺は心身ともボロボロにされたのだが、もちろんそんな話はしない。
「わかりました。…面接は、大体、こんなところで良いでしょう」
黒木は面接を打ち切った。意外とあっさりと終わった印象だった。不安になる。
「鈴木さん、ご結婚は？」
立ち上がり、お礼を述べようとした俺に黒木店長が尋ねてきた。俺は今年で四十四歳になる。当然、そんな疑問を持たれる。

「…いや、ま、まだ未婚で」と俺は苦笑いで答えた。未婚はダメなのか。

「…そうか、そうか。大変だからねぇ」

何が大変なのか、俺には分からなかった。俺の嫌いな同情か。

合否は連休明けに知らせてくれるらしい。

俺は実家に戻ると、母親に新しくバイトを始める予定を話した。

母は顔をしかめた。

「アンタねぇ、そんな事している場合?」

「な、何だよ?」

「結婚よ。…全く、ナオトはとっくに結婚して子供がいるのよ。アンタはいつまで独りでいる気?」

「…」

「もう病気は、治っているんだから、早く身を固めてよ」

「…」

「スーパーでバイトしている場合?」

「じ、じゃ、どうす、すりゃ、良いんだよ?」

「だから、結婚よ。いい人、いないの?」

「…だ、誰が、よ、四十過ぎの、こんなおっさんの相手、してくれるんだよ…」

「もう自分でどうにかしなさいよ…」

「だ、だから、バイトで、金貯めて…」

「そんな事より、結婚でしょ!」

「だ、だから――!」

年老いた母親は、しきりに俺が身を固める事を望んでくる。

無論、俺にもその気持ちはある。

だが、四十過ぎて、未だに実家暮らしの口の不自由な俺に振り向く異性などいるのか。

まずはこの状況から出ないと、どうにもならない。その為のバイトなのだが、母親はそこが分からず、とにかく『すぐに結婚!』と求めてくる。俺に『明日すぐにでも結婚しろ』と言わんばかりだ。年老いてくると自分の願望を早く叶えようとするらしい。

この母のうるささも、俺が実家を出たい一因である。

隣の部屋では、父親が暢気にテレビを見ている。漏らしているらしく、小便臭い。こんなところにくる嫁がいるのか。

最近、父親は定年退職後に勤めていたシルバー人材の仕事を辞めてしまった。そして、毎日テレビを観て、近所に住む弟の家に顔を出し、孫の様子をみるだけの生活になった。身体の衰えも目立ってきた。

弟はダメな俺とは違い、有名企業に就職し、家族を持ち、近所に家を建てて自立している。

「アンタ、合コンとかないの?」

「はあ?」

母親から『合コン』という若者のワードが出て驚いた。合コンなど若い頃からもう何年も参加していない。尤も誘ってくれる人間もいない。

「ほら、今、マチグとかていうの、あるんでしょ、あれは？」
『マッチングアプリ』の事だろうか。
「あ、あのなー、そ、そんなもん…」
「それで早く見つけたら？」
母はどうもマッチングアプリを新手の結婚相談所と間違っているようだ。
隣の部屋で親父が大きなあくびをした。
「そ、そんなもん使っても、も、お、俺みたいなのに振り向く奴が…」
「じゃ、どうすんの？　このままずっと一人でいるの？　それが心配で、心配で…」
母の話はいつもこうなる。最後は「どうにかして」「すぐに「アンタが心配」と愚痴り出す。そして俺が怒る。最後には口論だ。
また親父がテレビを観てあくびした。
俺の頭の中には、この両親の先々に不安がある。両親のどちらかが介護状態（特に父）になったら、かなり厳しい。
このままだと結婚など出来ない。俺は自分の人生を自分の力で変えたい。ここから抜け出したい。まずはアルバイトだ。
俺は母親に「飯などいらん！」と怒鳴りつけて、自宅を飛び出した。夕飯は近所のファミレスで済ますことにした。
あそこなら、今後の俺自身の事をじっくり考えられるだろう。
同じような境遇の友人、会を誘おうかと思ったが、止めた。日雇い仕事が終わった頃で疲れているだろう。
そして、ファミレスの座席に着き、タッチパネルで注文を選びながら、俺はここまでの自分の事を振り返っていた。
俺は約九年ほど前に脳腫瘍を患った。
大脳と小脳の間に出来たこの厄介な腫瘍は、二回の手術で除去されたが、俺から発音時の滑舌と言葉を奪った。以来、理学療法で多少改善されたが、俺は会話が苦手になった。言葉が少し出しにくくなったからだ。呂律が上手く回らない。
腫瘍が奪ったのは、それだけでは無い。
仕事と恋人も奪った。
俺は当時、勤めていた某公的保険事務所を辞め、さらには交際中の恋人と別れた。
年金事務所を辞めたのは俺からであり、恋人に別れを告げたのも俺からだから、『腫瘍が奪った』は正しくはないが。
職を失った（手放した）俺は、退院後、浜松市内（時には市外）の様々な仕事の求人に応募し、ことごとく落ちた。三十半ばの病み上がりの男を雇う会社は無かった。
病気になる前は、市内の求人誌の編集部にいたりもしたが、そこはリーマンショックで解雇された。
ここ数年は、高校野球の有望な選手を救ったり、離散した

一家を結びつけたり、その原因になったおかしなスピリチュアルカウンセラーを潰したり、大学の研究室で悪どい教授に操られていた事務員の女をお節介にも助けたりした。ＤＶ騒動に巻き込まれたり、元カノの為に半グレなどと争ったりもした。

また、市内の倉庫や三方原の加工で働き、中国人の女の子と仲良くなったりして、工場側と揉めたりした。

今は、自宅近くの病院で派遣社員として、院内清掃の仕事をしている。四十歳を越えてもフリーターとして働いている『下流』のおじさんだ。

タッチパネルで注文していたピザが来た。金の無い俺は一番安いこのピザとドリンクバーが精一杯だ。

（…マッチングアプリかぁ）

確かにネットなどを見ていると、やたらと宣伝してくるし、テレビでもその話題をよく観る。若者の中にはそれで交際したり、結婚する者もいるらしい。

だが、トラブルもよく聞く。詐欺が横行している。怪しい印象がある。

それに、四十三才、派遣社員。月収十二万円弱の俺に好意を持つ異性がいるだろうか。

俺はピザを食べながら、スマホでネット記事を読んでいた。そして何気なくそのマッチングアプリにアクセスしてしまった。

調べるだけなら良いだろう、と思った。

そして、少し驚いた。

登録に金が掛かるのだ。しかも男性のみ。女性は無料。これは『出会い系』というやつではないのか。

俺は改めてネット検索して『マッチングアプリ』を調べてみた。アプリは複数あったが、みんな同じだった。やはりどれも男性のみ二千円前後の金が掛かる。

いつの間にか、男女の出会い自体に金銭が発生するようになってしまっていた。

（…なんだ、こりゃ?）と俺は心から思った。馬鹿馬鹿しいとはこの事だ。ここまでして異性と出会いたいのか。怪しさしかない。

だが、未婚の俺がこうして検索している。需要はあるのだろう。

と、同時にまた俺の悪い癖が出てきた。

『調べてみたい』が『探りたい』に変わったのである。おかしな奴が連絡してきたら、無視すりゃ良い。金銭を要求するような女には一円も払わない。それにひょっとしたら本当に俺に振り向いてくれる女性が現れるかもしれない。

改めて『マッチングアプリ　４０代　浜松』で検索した。

『Ｏ－ｆｕｌｌ（オーフル）』というアプリが出てきた。

『３０、４０、５０代』『五人に一人がペアに』『本気で出会いたいなら、ココ』という文字が飛び込んできた。俺は『男性登録』という文字にタッチしてみた。

「鈴木さーん、ドリンクの補助終わったら、次はアルコールね？」

ドリンクの台車を引いて、売場へ出ようとした俺に、黒木店長が声を掛けてきた。

俺は無言で頷いた。

「鈴木さん、私、お手伝いしますか？」と同僚のバイトで、専門学校生の丸田さんが俺に尋ねてきた。マスクで口元は分からないが、なかなかの美人だ。

「だ、大丈夫だ、よ」と俺もマスク越しに小さく答え、補充を急ぐ事にした。

5月の連休が終わり、俺は遠鉄スーパー積志店に採用された。午後六時から九時までの短時間で、週二日の勤務である。

品出し作業に戸惑いがある俺に、この若い同僚である丸田という女の子が、いつもフォローしてくれる。

初日に「お、俺、病気で少し言葉が、が不自由で、で」と言ってあるので、彼女なりに気を遣っているのかもしれない。有り難いが少し恥ずかしい。

丸田さんは二十代の若者。今年の春にバイトとして入社したばかりらしい。

俺は四十三才のフリーター（無職）のおじさんだ。

彼女は優しいが、内心では（…このおじさん、しっかりしてよ）などと思っているだろう。俺はそう思っていた。

今年の浜松まつりは、練り禁止で開催され、5月4日にはロシア外務省が日本政府に対し対ロシア制裁への報復措置として、岸田文雄首相ら日本人六十三人の入国禁止を発表した。

7日、北朝鮮が日本海に向け、短距離の潜水艦発射弾道ミサイルを放った。あの国は相変わらずだ。12日にはまた短距離弾道ミサイル三発を発射した。

新型コロナの波がまた来そうだが、もう皆慣れ始めていて、毎日の感染者数も次第に話題にならなくなっていた。

そんな感じで、二週間が過ぎた。

世の中は激しく動いていたが、俺は病院での仕事とスーパーでのバイトに忙しかった。独り暮らしへと気持ちを高めていた。

ここに入社する前に、俺はオーフルに登録していた。

最初に本人情報の登録画面があった。俺は『四十三歳、フリーター、実家暮らし』という現状を正直に登録した。とても異性が惹かれる状況ではないが、嘘はつけない。趣味も偽りなく登録した。脳腫瘍の事は『過去に病気しまして…』とだけ書いておいた。

言葉の事は書けなかった。

登録するとアプリ内に登録している異性の情報が自由に閲覧出来て、気になったら『興味あり』という通告が送れる。それに対し、相手も『興味あり』と応えると『マッチング成立』となる。

俺は数人の女性のプロフィールを読んだが、自分の状況と

は差があり過ぎて、何の行動も起こす気にならなかった。
そして、女性側からも何の連絡もなかった。
当たり前である。
だが、俺はまだ期待していた。
（今はこんなだが、独り暮らしを始め、正規の仕事に就いたら？）と密かに思っていた。

オーフルに登録して二週間、俺は微かな期待をして、毎日アプリを開いたりしたが全く連絡が無い。
たまに、明らかに詐欺らしき登録者から『興味あり』のメールが来たりした。開くと『投資サークルで儲けています』とか『貴方が素敵な人だとすぐに思いました』『お金を払うのでお会いしたい』と書かれていた。
さすがにそんなものには引っかからない。
そんなメッセージしか来なかった。

5月も半ば。新型コロナウイルス感染症による国内の死者が累計で三万人を超えたり、ベテラン芸人が亡くなったりした中、俺はマッチングアプリの反応より、病院での仕事と、スーパーでの品出しに必死だった。
俺は金を貯めて、実家を出て、派遣社員から脱することに集中する事にした。

ところが驚いた事に、そんな俺に詐欺以外のメールが来た。

それは『プロフィールを拝見しました。私も同じような生活をしています』という短いメッセージだった。
磐田在住の小笠原明美という三十二才の女性。俺はそのプロフィールを見た。
写真が貼られていた。部屋のような背景で、髪の長い女性が緊張した顔でこちらを見ていた。マスクはしていない。
怪しいメッセージを送ってくる女性のプロフィール写真の背景は、大体が花畑のような場所や豪華なマンションの室内で、不自然な程に笑顔であり、そして何故かマスクをしていて、顔半分が分からなかった。
その小笠原明美という女性の写真は、素顔を晒していた。不自然な笑顔も無く、何だかリアリティーがあった。真顔だった。
（…本当に来た！）
俺は色めき立った。
ちなみに、俺のプロフィール写真は病気をする前に交際していた女性が撮影した、かなり格好をつけた写真を貼っていた。
写真には『かなり前の自分です』と注意書きを加えてある。
（これはダメかな？）とも思ったが、自分の姿を出す勇気がなかった。
その小笠原という女性のプロフィールには、『磐田在住。主に家事手伝い。友人が少なく、新しい出逢いを求めて登録。趣味は読書』と記されていた。仕事は書いていないが、彼女

も非正規の仕事をしていたりするのだろうか。
おかしな人間ではなさそうだった。
ページにはプライベート写真があり、どこかの喫茶店の店内で撮った写真と、『たまに作ります』と脚注が付いたドリアが盛られた器の写真があった。
俺は『四十三歳のおじさんです。どうぞよろしく』と素っ気ない返事をあえて送った。
すると『プロフィールにフリーターってありましたけど、何のお仕事をしているのですか?』と尋ねてきた。積極的な女性だ。
俺は『病院で清掃の仕事しています』と正直に返し、『月収は十二万くらい（笑）』と付け加えた。普通の女性ならこれで手を引くだろう。
だが、小笠原というこの女性は、『あら、私なんて十万いってないですよ（笑）』と返してきた。
俺は彼女に興味を持って、やり取りを始めた。
小笠原さんは、以前、派遣会社で働いていたが、あまりに過酷な労働環境に心が折れ、退職したらしい。それでここ数年はバイトや派遣などをして働いてきたらしい。だが、同居する彼女の両親は、その現状を良しとせず、正社員になることと、さらに結婚を求めてきていた。彼女はそこまで教えてくれた。
そのプレッシャーから、彼女はこのアプリに登録した、という経緯も俺に送ってきた。
『私と似ている人のような気がして…、ご迷惑でした?』と彼女は尋ねてきた。
俺は『いやいや。俺よりマシですよ』と返した。俺の病気の事を細かく伝えようとしたが、止めた。まだ早い。
『私もそんなことないですよ』と小笠原さんはさらにメッセージを送ってきた。
そして『私もたまに釣りとか昔のゲームしますよ―』『プロレスも観ます』などと追加で送信してきた。
俺は趣味の欄に『下手な釣り・レトロゲーム・プロレス観戦』と書いていたからだ。俺に合わせてくれたのだろう。優しい女性だ。

「鈴木さん、何だか嬉しそうですねぇ?」
ジュースのペットボトルを出していた俺に、缶酎ハイを出していた丸田さんがニコニコしながら話しかけてきた。いつもは黙々と作業している俺だが、丸田さんは何故かこんな風に話しかけてきたりする。何故だろう。
店長が見たら注意されるかもしれない。
俺は「…そう?」と答えながら、笑っている自分に気が付いていた。
昨日のやり取りのせいだろう。
去年は短期間のバイトしていた工場で中国人の女の子と親しくなった。
俺にモテキというやつが来ているのか。

遠鉄スーパーでの品出しの仕事にはすぐに慣れた。バックヤードにあるペットボトルやアルコール類、ドライというカップ麺やレトルト商品を売り場に補充する。これを午後六時から九時まで繰り返すだけである。

出勤は週二日だが、これを四日ほどに増やしたい。そうなれば給料は三万円程になる。

俺は、敷金や礼金無しで、その金額で月々借りられそうな市内のアパートを既に調べていた。思いの外、早く独り立ちできそうだった、と思っていた。

だが、ここの給料は月末締めの翌月払いなので、引っ越しはまだ先だ。貯まれば、実家から出よう。もうすぐだ。

さらに俺の頭の片隅には、昨日からやり取りしている小笠原さんがいた。

何か、状況は明るくなってきた気がした。

瞬く間に6月に入った。

世間の話題は、先月、山口県阿武町が新型コロナウイルス対策関連の給付金４６３０万円を誤送金した問題で騒いでいた。そして同町に住む無職の若者が逮捕されていた。彼はその金をネットカジノに送金したらしい。

新型コロナの給付金や補助金などを詐欺で手にしようとするニュースが増えた。

世の中には働かず稼ごうとする奴が多い。

俺は真面目にコツコツと働いて、少しずつ状況を変えて行くつもりだ。

俺は、小笠原さんとのやり取りを続けていた。口が不自由な事を告げずに脳腫瘍の話をした。

彼女は「大変ですけど、別に良いんじゃないですか？」と送ってきた。

その言葉が俺には嬉しかった。

俺は彼女が同情せずに肯定してくれた事に好印象を持った。

これまで出会った人間は、俺の病気の話や声を聞くと同情するか、表面上は同情して俺に関わらないようにした。

もう同情はたくさんだ。

この俺の現実をもう肯定するしかない。

俺は病気になった事を後悔していた。いろんなものを失ったからだ。だか、そこからもう解放されたい。だから肯定したい。

俺は彼女に会いたくなった。

そろそろ食事とかに誘おうか。

だが、口が不自由な事は伝えられなかった。

6月１５日、参議院が解散し、東海地方が梅雨入りした日。

俺は思いきって、小笠原さんに無料通信アプリのアドレスを送って、直のやり取りへ誘ってみた。

少し緊張した。少し強引だったか。ここまで踏み込むと嫌われないだろうか。
だが、小笠原さんは気軽に応じてくれた。
俺は確信めいた感情を得ていた。

「あの人、鈴木さんの知り合いですか?」
品出し中、丸田さんが俺の隣にきた。指差した方には背の高い女性がいた。
俺がそちらを向くと、その女性は俺の視線を避けるように店内の奥に姿を消した。
「…?」
少し変わった女性だった。青いジャージの上着にタイトなデニムのズボンを穿いていたのが分かった。何だか、野暮ったい格好をした女性だった。
俺は、その女性の姿を追ったが見失った。
「お知り合いでした? あの女の人、ずっと鈴木さんを見てましたよ?」
丸田さんは戻ってきた俺に尋ねてきた。
「だ、誰か、かな?」ととぼけながら、俺は(まさか小笠原さん?)と思っていた。彼女には『積志駅近くのスーパーで品出しのバイトしてます』とは知らせていた。俺を確認にしに来たのか。今の女性は、どこか彼女のプロフィール写真に似ていないか。
俺は清涼飲料を補充しながら、ニヤニヤしてしまった。

その日、帰宅してからスマホを見て俺は驚いた。オーフルから新規のメッセージが来ていたからだ。
それは小笠原さんではなかった。
『勝間田芽郁、三十四才』から『プロフィールを拝見させていただきました。私も同様な生活をしています』という短いメッセージだった。
(…?)
既視感のあるメッセージだった。
(…これ、小笠原さんと同じ?)
俺は軽いパニックになり、その勝間田という女性のプロフィールを見た。
さらに驚いた。
『磐田市在住、主に家事手伝い。友人が少なく、新しい出逢いを求めて登録。趣味はドライブ』と記されていた。
彼女のページにも、プライベート写真があり、山道でサングラスをかけた女性と、ロールキャベツの写真が載せられていた。
小笠原さんのプロフィールとの類似性を感じなくもない。マスクもしていない。
その勝間田さんに返信することにした。
『鈴木と申します。こんな自分ですが、よろしくお願いします』と送った。
すぐに返信がきた。

『思わずメッセージを送ってしまいました。ご迷惑ならすいません』

俺は、これに対し『どうぞよろしく』とだけ返した。これも似ている。

彼女は自分の現状を簡単に伝えてきた。

数年前まで派遣社員として働いていたが、上司のパワハラなど、人間関係に疲れて退職。磐田の実家に戻り、今はバイトなどをしながら、細々と暮らしている。両親からは「早く結婚しなさい」と急かされ、このアプリに登録したという。

やはり、どこか既視感のある話だった。

俺は考えてしまった。

『鈴木さんは、どんなお仕事されているんですか?』と尋ねられ、俺は小笠原さんにした話と同じ事を語り、また言葉の事は黙っておいた。

（…まさか）と思った。

「鈴木さんって、病院で働いているんですよね?」と、バイトの時、マスク越しに丸田さんから話しかけられた。

俺は無言で頷いた。

「まさか男のナースさんとか?」

『病院で働いている』と聴くと、皆が医療従事者と思う。だが、俺は院内清掃（ゴミ回収）をする『医療関係者』である。

俺は呂律の悪い言葉でそれを伝えた。彼女は少し笑った。

そして「大変ですねー」と言った。俺は首を振りつつ、「ま、まあ、い、今はコロナ、だからね、ね」と言った。

実のところ、俺は別の事で悩んでいた。

炭酸のボトルを補充しようとしていた俺は、丸田さんに訊いてみた。

「あ、あのさー?」

「はい?」

彼女が振り向いた。

「この前の女の人みたく、ほ、他にお、俺を見ていたり、り、した人、い、いた?」

丸田さんは「はあ?」と首をひねった。そして「鈴木さん、女の人に追われているんですか?」と笑いながら訊いてきた。

「…す、少し、き、気になってね」

「追われているんですか?（笑）」

「別に、だ、誰にもお、追われちゃい、いないよ（笑）」

俺は無理やり笑ってみた。引きつった苦笑いになった。

「なんか、怖ーい」と丸田さんはおどけて言った。

そして「ビールの台車、持って来ますねー」と言って、バックヤードに向かった。

俺はドリンクの品出し作業に戻った。

数分もしないうちに、ビールが積まれた台車を曳いた丸田さんが来た。重そうだったので、俺は思わず手伝おうと彼女と台車に近付いた。

丸田さんは「有り難うございまーす」と可愛らしく頭を下

げ、お礼を述べた。
彼女は顔を上げながら、小声で言った。
「…鈴木さん、私、マッチングアプリ、やっているんですよ。…鈴木さんもやってますよね？」
思わず、台車を押す手が滑り、新品のビール缶を落としそうになった。
（何故、それを！）と思ったが、声が出せなかった。彼女の顔を見つめてしまった。
さらに「今夜、連絡しますね？」と丸田さんは小さく言った。
「…えっ、…は？、あ、アプリで？」
俺はロクな言葉を返せなかった。
丸田さんは笑いながら、台車をひいて反対側のアルコールコーナーへ消えた。
俺は激しく動揺していた。
何度か反対側の丸田さんに「どういう事か？」と尋ねに行こうかと思った。
だが、出来なかった。
一時間もすると、彼女はカップ麺の補充へと移った。俺はお茶の補充に手間取り、まだそこから動けなかった。
労働時間の三時間はすぐに過ぎてしまう。
閉店時間になると、レジ締め担当以外のパートはすぐに帰宅する。
俺が話しかけようとすると、彼女はまた小さく微笑んで女性更衣室へ消えた。それを待ち構えようかと思ったが、俺のようなおじさんが若いバイトの子を待ち伏せするのは、あまり見栄えが良くない。
俺は着替えて、帰宅することにした。
自宅までの帰り道、原付を飛ばしながら、俺の頭では丸田さんと、あの青いジャージの女性、勝間田という女のメッセージがグルグルと巡っていた。そして『今夜、連絡しますね』と笑っていた丸田さんの顔が何度も繰り返された。

帰宅した俺は、遅い夕飯を済ませ、自室でオーフルのアプリを開いて、丸田さんからの連絡を待った。
なかなか来なかった。
俺は『丸田』という名前でアプリ内の検索をした。
丸田という姓の女性は何人かいたが、本人ではなかった。
連絡もなかった。
俺は諦めて、風呂に入ることにした。
「出るとき、湯船の窓、開けておきなさいよ！」と母が怒鳴って言った。
洗面所で服を脱ぎながら、俺は鏡に映る自身を見た。
髪はボサボサ。髭をそったのは昨日だ。一年前に折れた左下の前歯はそのまま。身体は太ってはいないが、筋肉質でもない。髪の前の方が薄いし、白髪が多い。髪を短くすると手術の痕が見えてしまうので、ある程度伸ばしている。それが

汚く見える。
（…おっさんだなあ）
改めて思う。俺も今年で四十四歳になる。時間は進み、身体は衰えていく。
これが俺なのだ。
若い女性が振り向くはずがない。嘘や誇張は張ってはないが、これが俺の真実だ。
風呂で身体中を擦り上げ、俺は暗い気持ちで自室に戻った。
スマホを見たら、通知が来ていた。
すぐ開くと勝間田芽郁さんからだった。
『鈴木さん、お仕事終わりました?』と尋ねてきた。
俺は、これは無視することにした。

丸田さんからのメッセージを待った。
日付が変わる頃、『遅くなりました』という題名のメッセージがアプリで来た。
『遅くなりました。ごめんなさい。いきなりあんな事言われて、驚きました?』
その通りだった。
俺はこのままアプリの通信機能でやり取りする事にした。
『なんで俺がマッチングアプリをしていると？　というか、なんで貴方がここに?』
俺は、彼女に一気に疑問をぶつけた。
『落ち着いて。鈴木さん』と丸田さんはかわした。笑われた気がした。
よく見ると、アプリでの登録名は『丸田』ではなく、『円山真緒』だった。このアプリ内での仮名らしい。
『鈴木さん、ちょっと前に磐田で占い師さんと揉めたりしませんでした?』
（…占い師?）
思い出した。
あれは五年前、磐田のスピリチュアルカウンセラーを潰した事があった。
あの女を『占い師』というなら、そう言えなくもない。
『鈴木さんに連絡してきている女性は、皆、その時の信者ですよ』
「はあ?」
思わず声が出てしまった。
『たぶんですけど、鈴木さんとマッチングしたのは偶然かと思います。それでマッチングアプリで鈴木さんの名前を見つけて、接触してきただけだと思います』
『偶然?』
『ええ、あの人たち、普段からこういう交流系のアプリを周回していて、カモになる人を探しているんですよ』
『カモ？　目的は金?』
『…それもありますけど、たぶん目的は他人を動かす訓練、練習かな?』
（…訓練）

俺はさらに思い出した。
そのカウンセラーの女性は、とにかく他人を自分の思い通りに動かす事ばかりを考えていた。正論を振りかざし、他人（信者）を縛り、自分の思い通りに動かして、それを喜ぶおかしな女性だった。
あのカウンセラーは俺にごくごく当たり前な事を主張して、取り込もうとしていた。
それを俺が潰してやった。
ネットで、彼女の印象を盛って書き込んで、依頼者（信者）を増やし、パンクさせてやったのだ。
何年か前に曳馬の居酒屋で見た。その時は人間が変わったようだったな。
『カモって？』
『あの人の弟子だった人たちが、未だに活動しているんですよ。こうした婚活アプリとかで網を張っていて、言いなりになりそうな人を探しているですよ』
『何で、そんな事を？』
『最終目標はお金なのかもしれないけど、やはり、その練習。もしくは準備かな？』
『それって、言いなりになる人を捕まえて、アプリから離れてから、詐欺を仕掛ける、という事？』
『私はそれを止めているんです。昔の鈴木さんみたいに（笑）』
彼女は俺の過去を知っているようだ。
『あのジャージ姿の女性は？』
『あの人は小笠原って人ではなくて、そのグループの一人で、鈴木さんを確認しにきたんですよ。アプリに登録しているのは一人ですけど、それを複数で見ているんですよ』
『何で、それをあなたが知ってんの？』
丸田なのか、円山なのか分からない彼女に尋ねてみた。
『実は、私も元信者です。あのカウンセラーのところに通ってました。高校の時、私、不登校で、お母さんの知り合いに紹介されて、ちょっとの期間、顔を出してました』
『そうなんだ』
俺は驚いた。丸田さんもいたのだ。
『で、そのうちに（何か変だな？）と思ってきて、同じような人と離れたんですよ。そうしたら信者が急に増えてきて、あの人がおかしくなって…。後から「鈴木っていう人がネットで褒めまくって、それが原因でカウンセラーを辞めた」と聞きました』
『そうだったんだ。丸田ってのは偽名？』
『いえ、本名です。この円山って方が偽名で、これでこのアプリを探ってました。他の元信者と一緒に』
丸田さんの話では、彼女と同じ時期に離れた元信者と一緒に、カウンセラーの手法を悪用しようとする元信者らを見つけ、止めたりしているらしい。
丸田さんと一緒にこのアプリを探っている男性の元信者がいて、かねてから小笠原をマークしていたのだ。

アプリ内では異性との会話は他者には分からないが、『興味ありリスト』があり、どんな異性とマッチングしているか、分かる仕組みになっていた。そこで俺の名前を見つけたらしい。

『勝間田って人も？』

『たぶん元信者ですね（笑）』

何ということだ。

『でも、なんで二人で分かれて、あんなおかしな接触の仕方を？』

『それはたぶん、向こうの方で仲間割れみたいな事になっているみたい』

『仲間割れ？』

『詳しくは私もわかんないんですけど、「どこまで騙すか？」みたいな考えの違いで分裂したみたいです』

『分裂？』

『騙すだけか、お金まで取るか』

『怖いな』

『本当ですね。鈴木さんはお金とか取られてません？』

『大丈夫。そんな話はしてないよ』

『良かった』

『教えてくれて、ありがとう』

『これからも普通にバイトしましょうね。この話はバイト中は秘密で（笑）』

俺は了承して、やり取りを打ち切った。

若い丸田さんとじっくり話せた事より、ここ1ヶ月、完全に魅了されていた小笠原さんが存在しない、という事に愕然としていた。

俺は何をしていたのか。

淡い期待は、本当に淡く儚く消えた…。

同時に、怒りが沸いてきた。

6月19日、俺は練り上げた計画を行動に移した。

仕事からの帰宅後、小笠原さんに無料アプリでメッセージを送った。

『すいません。病気がちだった親父がいよいよ体調を悪くしてきました。しばらく連絡出来ないと思います。お金の事とかで』

嘘では無い。

数年前に浜名湖で溺れた親父は、それから体調が悪い。自宅でひたすらテレビを観て、酒を飲んで小便を漏らす日々を送っている。その頻度は増えている。本人は認めないが。

そして数分後、今度は勝間田さんにオーフルでメッセージを送った。

『親父がお金（遺産？）の事で、いろいろ言ってきて今、大変です。しばらく連絡できないようです。メッセージ無視したらごめんなさい』と送ってみた。

これも嘘では無い。

ギャンブル好きな親父には遺産など無いとは思うが、俺の

顔を見ると「おい、千円あるか？」などとねだってくる。
俺は二人のリアクションを比べた。
小笠原さんは『大変ですね。分かりました』と簡素な返事が来た。
勝間田さんからは『お金の事は後まわしにするとややこしいから、今のうちにしっかりしておくと良いですよ』とアドバイスのような返事が来た。怪しいか。
俺は双方に『ありがとうございます』と送った。そして『親父はかなり参っているみたいです。今日も遺産の事とか、いろいろと言って来ました』と追加を双方に送った。
これも嘘ではない。
帰宅した俺に酔った親父は、あれこれと話をしてきた。借金も遺産のはずだ。

その後、参院選が公示された日、小笠原さんから連絡が来た。
『鈴木さん、今はお忙しいですか？』と『お父様は大丈夫ですか？』と尋ねて来た。
俺が『大丈夫です。親父は安定しています』と返したら、『今度会いませんか？』と誘ってきた。
俺は内心で（…かかった！）と思った。
俺は『スーパーでの仕事終わりで良ければ…』と送った。
近くのコインランドリーで落ち合う約束をした。あそこは夜中まで開いている。
そして、今度は円山真緒こと、丸田さんにメッセージを送った。
ちなみに、親父は安定して小便を漏らしている。

その女性はランドリーに静かに現れた。
薄手の半袖シャツにマキシ丈のロングスカート。以前、スーパー内で見た女性とは別人だった。やはり複数で動いているようだ。
俺はテーブルの上の古い週刊誌を読んで気付かないふりをした。
「…あの、鈴木さんですか？」と尋ねてきたので、週刊誌を置いて、そちらを見た。その女性は見た目で二十代に見えた。
「…あ、あの私、小笠原と…」と言いかけた彼女の声に被せるように「あ、あー、か、勝間田、た、さん？」
小笠原さんらしき女性の顔が止まった。
「カツマタ？」と驚いていた。
「お、俺、か、会って言うんですが…。あ、あなたは？」
「はあ？」
小笠原らしき女はパニックになった。
「…あの、お父様が病気で」
「は、はあ？　お、父は、げ、元気ですが？　な、何故？」
「へ？」
戸惑う彼女に、俺は畳み掛ける事にした。

「か、勝間田芽郁さ、さんですよね、ね？オーフルで、ご連絡、し、した？」
小笠原らしき女が複雑な顔をした。瞬間的に考えを巡らせているようだ。
「…病気で口が不自由なんでしょ？　あなたは鈴木さんですよね？」
「す、鈴木って人が誰なのか、俺はわ、分かりませんが、そうなんですか？　か、勝間田さんとそんな話、し、しましたっけ？」
「私は、カツマタの方では？」
「ほ、方？」
小笠原さんらしき女性が『しまった』という顔をした。
そこに誰かランドリーに入って来た。
小笠原らしき女は、それを見て、すぐに身体をひねった。
予定通り、丸田さんが入ってきたのだ。
彼女は俺を見て、大声で「会さんですか？私、勝間田芽郁って言います」と言った。俺は頷いた。彼女は中に入り、「今日はわざわざ…」と言いかけて、顔を伏せている小笠原らしき女に目を向けた。「あれ？」と言うと、俺の方を見て、「この方は？」と訊いてきた。芝居が上手い。
俺は苦笑をこらえ、「お、小笠原、さんと言う方らしいですよ。俺は知らないです、け、けど…」と言った。
「は？」
「は？」
と、女性二人は同時に言った。
丸田さんは不思議そうな顔で「小笠原？…いやいや、タナカさんでしょ？」と女の本名をバラした。
タナカは伏せていた顔を丸田さんに向け、「アンタこそ、勝間田じゃないでしょ！」と吠えた。こんな声を出すのか。驚いた。
「ど、どういう、こ、ことですか？」と俺は二人に尋ねた。
彼女はいたずらっぽく微笑んでいた。
「アンタも鈴木でしょ！」とタナカは今度は俺に吠えた。
俺はわざと顔をしかめ、首をひねった。
「もう！」と怒り、タナカは足早にコインランドリーから出て行った。
「鈴木さん、ありがとうございます」
丸田さんが改めて丁寧にお礼をしてきた。
「あ、あれで良かったの？　あ、アプリの会社につ、通報したら良かった、たんじゃ」
「…それだと、また名前を変えて、やるだけですよ」
「そ、そう？」
「あーやって、仲間割れしているグループの人間の名前を出したら、かなりパニックになると思います。たぶん『向こうはアイツらと組んだぞ』って…」
俺には何が『向こう』で『アイツら』なのか、分からなかったが、たぶん、例の元信者らのグループの事なのだろう。

『小笠原』というのが、お金目的で、『勝間田』っていうのが訓練目的のグループですね。それもわかって良かったです」

（なるほど）と俺は思った。

俺は二人へ、同様に親父の体調不良の話と金の話をして、二人を誘きだし、『接合』といったか、対面させ、そこに丸田さんを同席させようとしたが、彼女から別の案を提言された。

どちらかを誘きだし、来たら、丸田さんが片方として現れ、パニックにさせ、もう一つのグループへの不信感を煽る。彼女がいうには、これが「効果的」らしい。

俺も散々振り回されたことに対して、やり返せたので良かった。

「今の人、タナカって言って、お金にがめつい人でした。たぶん、彼女が仲間割れした原因ですかね？」

丸田さんはまた微笑んだ。

「鈴木さん、…残念でしたね」

「へ？」

「小笠原さん、いなかったですね？」

丸田さんは小さく笑った。俺の淡い期待を見抜いていたようだ。

「あの、…私、もう少しであのスーパーのバイト、辞めようと思います」

「そ、そうなの？」

「ええ。彼氏が別のバイト、紹介してくれるみたいで…」

彼女はまた笑って言った。

俺のもう1つの淡い期待も消えた。

6月も、もう今日で終わりだ。

コインランドリーでタナカを撃退した次の週、丸田さんはバイトを辞めていた。

彼女が辞め、俺の仕事量が増えた。これから大変になりそうだった。黒木店長から「鈴木さん、これから頼むよ」と言われた。

あれからあのマッチングアプリは開いていない。登録はそのままだから、また時期をみて再開してみようと思っていた。

だが、機械で他人と接合する方法はあまり良くないのかもしれない。

人と繋がろうとしたら、直にふれ合うしかない。情報は情報でしかない。

俺は、改めて独り立ちしようと思っていた。独りになり、そこから他人と繋がる。

そこから始めよう。

もうアプリは懲りた。

それが、俺の調査で分かった事だ。

【了】

（中央区）

［入　選］

登記されていないことの証明

嘉山春夫

戸籍謄本、住民票、公立病院の健康診断書、登記されていないことの証明書、教員免許状の写し等が必要だった。公立高等学校臨時教員応募に際し、県教育委員会へ提出する書類だ。このうち「登記されていないことの証明」は法務局に申請するものだとネットで知った。六十歳過ぎて初めて聞く証明書名だ。申請書をダウンロードした。指定の項目に記載をして法務局宛に郵送した。ついでに市役所の発行する「身分証明書」についてもネットを覗いた。法務局は成年後見人が付いていない証明で、市役所は禁治産者、準禁治産者ではない証明だった。どちらも「普通の人」の証明だ。踏み込んで、誰が何をもって登記、登録をするのかは未調査のままにした。一般に「登記」には不動産登記、法人登記等がある。これらは司法書士などの専門職に依頼するから、直接経験することはほとんど無い。「登記」と「登録」の違いは未だ判然としない。

間もなく「登記されていないことの証明書」が手元に届いた。すでに揃った書類と共に、四百字の小論文を加えて県教育委員会に郵送した。小論文は「理科教育法」について述べた。物理学の様々な現象に潜む原理、原則はそれぞれ独立したものではない。多くは一つの法則に収束する。しかし、高校までの理科教育はこれらが独立しているかのような誤解を与える。定性的な原理原則の理解はせず、現象や公式の記憶に留め、これを試験する。高校までの理科教育こそ演繹的な分析力、理解力、類推力、構成力、表現力などの知力を養う好適な教科だと論じた。書類審査を通過すると、教育委員会に求人要請した高等学校長の裁量により採否が決まる。

橋本は民間企業の定年を六十二歳で迎えた。会社にはその後三年間の雇用延長制度がある。身体的には延長勤務可能だと思ったが、居残りは気が進まなかった。「昨日の上司は今日の部下」になる。元部下にとって、元上司はどんな人でも鬱陶しい。一人でこなす事務処理や、生産業務の一部を担う専門職であれば、逆転現象は気にならない。しかし橋本の業務は独創的な知力と、広く人々の社会生活を見極める洞察力が必要だった。その新商品開発事業部の最後の十年間は「思いついたら直ぐ試作」のミッションを持つ集団を任された。天才が一人居れば、それなりに解決できる命題だ。通常は「普通の人々」が頭を寄せ合ってチーム力で熟す。枯れて堅くなった橋本には過酷な業務だ。新鮮で柔軟なセンスを持つ牽引役が必要だと判断した。

橋本は定年後使えそうな保有資格を探した。普通自動車運

転免許証と中学、高校理科教員免許状の二つだけだった。車の運転総距離は月を一回周って来たからもう嫌だった。教職には燻ぶるものがあった。会社務めで得た知恵を青少年に提供したいと思った。

「いやいや、おいでいただいて有難うございます。あなたのお勤めの会社は私の住んでいる町にも大きな工場があります。沢山の雇用を頂いています。優良企業として高い評判です。これが今回おいで頂きました理由です」校長面接の一声は面映ゆいものだった。

「君達は入社したら、毎日会社の看板を背負って生活する。どんな場面でも社是の『誠実なりや』に応える生活を送って欲しい。世に『誠実』と言う社是は掃いて捨てるほど額に掛かって居る。当社の社是はその下に『そのようにできたか』と問い掛けがある。今日一日、どんな場面も自他に誠実であったか自問して欲しい」

入社間もないころ上司から聴く訓話だった。橋本の勤務した会社の製品は最終ユーザーに直接届かない。例えば電線は電気工事会社に納品される、自動車部品は自動車製造会社に収まる。個人が家を建てる時、施主は電線メーカーを指定しない。客は運転席の速度計を見て車種を選ばない。速度計製造会社が自動車製造会社に誠実に接すると、その速度計は採用される。最終ユーザーと直接交渉は無いが、速度計はユーザーお気に入り車種の運転席の目前にドヤ顔で座っている。

「誠実、誠実」と簡単に言うけど、そりゃあ、解いていくと葛藤が幾らでも出て来る。こちらが誠実のつもりでも、相手方には不実に映る事もある。迷ったら、自分が損をする手立てを選べば良い。すると大体「誠実な対応」になる。この原理は交渉事に大変具合が良い。橋本が入社したころの上司の十八番（おはこ）だった。

校長面接は三十八年後に「社是」が単なるお題目では無かった証明になった。

校長は丁寧に校内を案内しながら「奥様はご健壮ですか」と尋ねた。「はい。元気に年を重ねております」と答えた。ただの世間話だと思った。

教室、実験実習室、パソコン室、体育館、農場など時間を掛けた案内だった。

「面接はこれで終わります。一両日中に県教育委員会から電話連絡が有ると思います」

橋本は笑む校長と別れ、校門を出たところで妻の健康状態を問われた理由に思い当たった。十年前、配偶者が若年性認知症に罹り、早期退社した同僚がいた。校長には就職する本人だけでなく、家族の健康状態チェックも重要項目だったに違いない。

翌日、県教育委員会から電話があった。

「ご経歴から総合高校工業科からの採用希望がありました

が、あなたのお持ちの教員免許状は高校『理科』です。そこで『工業』の臨時免許状をお出しします。ついては二千八百円の手数料が自己負担になりますが如何でしょうか。臨時免許状は三年間有効です」

「そのようにお願いします」

「昨日、学校長から面接試験は『合格』との連絡がありました。よろしければ臨時免許状の発行手数料を県証紙でお送りください」

「分かりました。早速お送りいたします。有難うございました」

「赴任日程など、詳細は直接高等学校と話し合ってください」

面接試験のため、初めて車で訪ねた時、橋本は道に迷った。道路脇にバイクを止めていた婦人に道順を訊ねた。「一寸難しいから私の後に付いてください」と案内して貰った。それ故、教育委員会の「採用」の電話連絡に、何の躊躇いも無かった。

橋本は三月で定年退職を希望する旨、本社人事部に書面連絡をした。三日後、秘書室から日時指定の社長室訪問指示の電話があった。退社のための社長面接に気が重くなった。

「私の頂いた生涯給と会社への貢献額を天秤に掛けると、どちらに傾くでしょうか。自信はありません」と述べた。社長は笑いながら激励の書物を餞（はなむけ）に手渡した。「またな」の別れの声を背に退室した。信徒でもないのに「神の祝福を」と、ふと浮かび胸が詰まった。

橋本は四月初旬、県立総合高校、工業科の教員として赴任した。工業科には十名の教員が在籍している。その内、企業経験者が四名居た。一年毎に契約更新をしていくフルタイム勤務の臨時教員は「常勤講師」と呼ぶ。常勤講師は公立学校共済組合に加入できない。引き続き厚生年金機構に年金を納付する。労働災害保険は民間の傷害保険で代替する。出張業務は原則として無い。企業で「立ち寄り」程度の業務も学校では「出張」になる。部活動指導がある。校務分掌もある。学級の受け持ちは無い。行動範囲は企業活動に比べ、狭小であるが教育業務には十分である。これらは赴任してから日毎に判明していった職務内容だ。給料は初回に貰うまで分からなかった。民間企業ではあり得ない。就職を決断する被雇用者にとって、給与額は重要な条件だ。民間は最初に雇い主から給料の説明がある。公務員は給料が公表されている。それを承知しての応募だと解釈すれば、非提示に納得する。様々な手当の計算は赴任後に行うから、面接時には提示出来ないとも思える。橋本は「教職者はお金に無頓着」であれと装い給与明細は支給金額しか見なかった。どうやら職歴を考慮した気配もあり、思いの外の額だった。通常、常勤講師は教諭のおおよそ半分の給与額だと随分後から知った。これは民間企業の定年延長後の給料が現役時代の半分になる絡繰りと同じだ。しかし、公立学校の常勤講師は採用試験不合格の若者

が多い。定年延長の老人達と同じ給与体系では気の毒だ。

教員採用試験の合格者は「普通の人」で、不合格者は不適合者だと思っていた。橋本には教員不適合に見える教諭も何人か居た。逆に「普通の人」が何年も常勤講師のままだった。契約期間が終了する一年毎に、面識もない雇用主の学校長にコンタクトを取る電話姿は痛々しかった。

お金に無頓着な業界では妙なことが起こる。退職した先輩の地元公立学校での経験談を聞いた。町の名士の先輩は乞われて海外勤務の体験談を生徒、父母の前で語った。事の前後に講演料の話は一切出なかったと言う。もし問われれば「お役に立てばそれで十分です」と辞退して、良い格好をしたかったらしい。一般には、講演そのものに加え、事前の画像編集、父母向けレジュメ作りなどの拘束時間も考慮して、即物的な謝意を示す。

非常識を通す人々は「大人の発達障害」かも知れない。そこで「普通の人々ではない」として、保健所辺りに登録する。その人々の振る舞いはたぶん寛容される。同情されて世の中に散見される鋭角は丸くなる。しかも管理職昇任試験の書類審査では「大人の発達障害の傾向有り」と言う登録から、不合格になる。周囲は一安心する。否、もしかすると「大人の発達障害」と言うほどの大げさな話ではない気もする。元々「普通の人」だった先生が幼気（いたいけ）な「弱者」である児童、生徒の上に立ち続け、ついつい「裸の王様」になってしまったのかも知れない。それを不快に思う「普通の人」は近づかなければ良い。「心広い人」は微笑みを持って接するが良い。「正義の人は」非常識だと怒り続ければ良い。子供達への悪影響はさほど心配することも無い。大人になれば「社是」なども あって、価値観の修正は利く。取り立てて目くじらをたて不安を煽る必要は全く無い。

橋本の担当教科は、電磁気、電気・電子回路、電子回路実験、機械実習、機械製図等、週二十二コマだ。校務分掌は保健課、部活はメカトロニクス部、課外で電気工事士資格取得講座を担当した。

職員室の他に各科の準備室がある。職員朝礼は全教員集合の職員室で行われる。終了後はそれぞれの科の準備室に集い濃密な専門教員のディスカッションが始まる。橋本は上下が少し分かっても、右や左は何も分からない。その学校の文化風習を見聞きし倣った。

工業科主任教諭は科長とも呼ぶ。地元国立大学工学部を終えて、自動車製造会社に入社した。五年ほど経て、世界の技術部門への転勤は不可能だとして退社した。親と同居するには市役所、郵便局、学校等が適職だと考えた。科長は工学部で付加的に取得した工業教員免許状を生かし教員になった。「私は早めに会社を辞めて両親との同居生活を選びました。三世代同居は経済的に楽になり、親孝行の真似事もできますが、自分の世界を狭くした気がします。橋本先生はどうして

メインの大仕事を終えてから、異業種の教員を始めようと思い立ったのですか。定年後は子会社役員に滑り込む手もあったでしょう」

「実は私はついでに取った教員免許ではありません。大学受験一辺倒の高校生活になじめませんでした。点数争いの毎日でした。そこで『ラジオ少年』に逃避しました。好奇心が牽引する工学分野を経験して、創造力を育む教員を妄想しました」

「へえー、高校時代に、もう目標の教員像をお持ちだったのですか」

「いやいや、二股掛けただけです。それを正当化しました。高校の仲間達の内、教員希望者は成績優秀者ばかりで、国立大学教育学部に進みました。私は大学受験高校の落ちこぼれです。うまくすれば工学部出の教員に、だめなら工員にと、軽佻浮薄な二股です」

「じゃあ新卒で採用試験を受験しましたか」

「はい、落ちました。高校時代の成績優秀者が採用試験会場にお揃いでした。彼等は四年間教員採用試験対策をしたはずです」

「落ちこぼれ高校生にとって、大学生活は如何でしたか」

「はい。これぞ学園生活だと。毎日が青春のトキメキでした。大正から昭和にかけて興った文部省に盾つく『新教育運動』の実践校として、初等学校創立からのようです。今は幼稚園から大学院までの総合学園です。教授陣はそれぞれの学術分野で、一流と言われる方々ばかりでした。卒業後それを知って、自分も一流かも知れないと錯覚し、勇気凛々の時期がありました」

科長は昼休みの雑談を終え、午後一番の旋盤実習授業に橋本を伴った。

「上手、下手は問いません。ケガをさせない指導をお願いします。技能向上の訓練は彼等の就職先の仕事です」

「回転体に巻き込まれない注意ですね」

「そうです。軍手は着けないこと。袖口のボタンを掛ける事。キャップの庇は、これ以上機械に近づいて覗き込むなと言う警告センサーです。それに安全靴を履いているか、全員の服装を確認してください」

製造工場の作業者はキャップを被ることが多い。作業服のトータルファッションでも、連帯感の高揚でもなかった。そう言えば高職のニッカボッカの裾の「だぶつき」は足元の「物(ぶつ)」との接触センサーだったと記憶する。

あっという間に実習時間は終了した。生徒達の整列と、きびきびした終業の挨拶は気持ちが良かった。準備室に帰る廊下を歩きながら、橋本は科長に尋ねた。

「工業の教員免状には、機械工学、電気工学、建築、土木、窯業までと幅広いですね」

「理科の免状だって、物理、化学、生物、地学、天文を担当しますでしょ」

「でも実際は、各分野の専門の先生がいらっしゃるように伺

えますが」
「稀に、機械の先生が建築を教えることもあるそうです。授業に迫力が無いそうです」
「私の担当教科に『機械製図』がありますが、電子回路図面は寸法無用です。私の機械製図の授業も迫力がなくなりますね」
「でも筐体や基盤図は寸法が入るでしょ」
「回路基板や、これを収めるケース類はトレーサーが図面に興します。今はすべてＣＡＤです。電子回路設計もコンピューターです。欲しい機能を入力すると、その回路図が出力されます。電子部品の動作原理を知らない回路設計者が挙って育ちます」

三年生の座学が始まった。橋本は教科書の目次しか見ない。しかも教科書の先頭から授業を始めない。生徒達は訝しく思いながら指示する頁を繰った。
「電気工学を始めるに当たり『発電』について話をします。電気エネルギーはとても便利で芸達者です。キャンプで飯盒炊爨する加熱エネルギー源は薪です。家で夕飯を炊くのは電気炊飯器です。電気炊飯器にはマイコンが内蔵されています。最初にスイッチを入れると、火加減を変えながら、炊き上がるとピーピー叫びます。放置すれば保温作業に入ります。石川さん、薪で飯を炊いたことありますか。始めチョロチョロ中パッパ赤子泣いても蓋取るな。竈炊飯の火加減です。噴いたら薪を引いて藁を一掴み焼べます。電気炊飯器はこの竈炊きに似せた制御をマイコンが致します。電源の電熱線や制御に使う「電気」はどの様に作りますか」
「一富士二鷹三茄子薪の竈は見たこと無い。でも先生、電気炊飯器は米研ぎを致しません」
「家康好みを初夢にした縁起ものですね」

老齢にして新任の橋本先生は高校生を全員「さん付け」で呼ぶ。生徒はこれにも戸惑った。橋本は高校生に大人の対応をしていることを知って欲しかった。が、そんな説明はしない。「さん付け」呼称は橋本の勤務した企業文化だ。役職名を敬称に使うと組織内の上下関係が強調される。「管理職の皆さんには仲間内に覚られないよう、『いつの間にかリーダー役』を望みます。権力の誇示は害を招きます」二代目オーナー社長の戒めだった。

「では『電気』で諸君が思い付く言葉を連想ゲームにしてみましょう。誰でも構いません。電気に紐付く言葉を挙げてください」
「佐久間ダム」「養鰻池の太陽電池」「浜岡原発」「電気自動車」「エアコン」「乾電池」「電灯」「雷」「静電気」「オームの法則」
「沢山出てきましたね。良いですね。それでは発電所の電力発生の仕組みを一席。次に発電所で作る電気と電池の電気を較べてみます」

発電所で作る電気エネルギーは重力の位置や運動のエネルギー、あるいは熱エネルギーで発電機を回転させて得る。発電機は磁界と電線の直交運動により電線に電気が発生する。磁気的位置エネルギーが重力の運動を経て電気エネルギーに変換されたことになる。発電所の電気は電圧が振動する「交流」で、社会インフラの商用電力として配電される。他にも振動する電気は沢山種類がある。作り方は発電所と異なりそれぞれだ。乾電池など「電池」の電気は電圧が振動しない「直流」だ。

「先生。電気を起こすのは磁石と電線の運動なら、地球の北極、南極を繋ぐ磁力と地球の自転運動が使えませんか。赤道に電線を置いとけば電気が起こりませんか。自然発電です」
「石川さん。壮大な発電所です。しかし赤道に敷いた電線も地球の引力に引かれて自転運動をしますから、電線が地磁気を切る運動が存在しません。残念ですが発電できません」
「だめですか。それなら電線を地球の引力の届かない宇宙に置けばいいですか。先生、現実に不可能なことでも漫画なら出来ます。俺、漫画でやってみます」
「石川さん。良いですね。とても良いです。漫画が出来たら見せてください。今日は頼もしいあなたに、質問を集中的にします。世間では二酸化炭素が４００ｐｐｍを越えたと騒いでいます」
「先生、それはニュースの『温室効果ガス』が『地球温暖化』になると言う話ですか」
「その通りです。温暖化の解決策の『カーボンニュートラル』とはどの様なことですか」
「二つとも分かりません」
「良いですね。分かったふりをするより、『分からない』と、潔く事実を言う事はとても大切です。私は石川さんの実情を知ります。その隙間を埋めるのが私の仕事です。今ここに四十人の皆さんが居ます。『分からない』と発言する人が一人居ると、この集団には他に十二人程、分からない人が居ます。選挙速報の出口調査で『当選確実』を推定するようなものです。統計学の妙技、数学の推論です。
「先生、この前、政治家が『仮定の話には答えません』と答えたと、テレビが言っていました。これって推論のことですか」
「夢や希望や目標は仮定の話です。推論が駄目だと、天気予報、先物買いの商社、保険会社、仮説で始まる学問などはお手上げです」
「先生、ＳＦ、占い師、パチプロも駄目です」
「温室効果ガスとカーボンニュートラルは宿題にします。図書室の新聞を探すのも一つです。ネットの検索も有りです。担任や部活の顧問と議論してみたらどうでしょう」
「先生、その宿題は保健室の白衣の先生に聞いても良いですか。生物と化学のような気がします。ほんとうに電気の問題

ですか」
「石川さんは保健室の先生と仲良しですか。電気の教科書には出て来ませんが電気と大いに関係があります。現在、日本は75％が火力発電です。石炭、石油、天然ガスを燃やして熱を得て発電機を回しています。副次的に二酸化炭素製造装置にもなっています」
「それじゃ保健室は無理かな。先生。保健室の廊下にこの学校の生徒の平均体重と身長が全国平均と較べて貼ってあります」
「保健室繋がりの飛んだ話題ですね。私もあの模造紙のグラフは不思議でした。全学年とも、身長も体重も全国平均より小粒でしたね」
「先生はどうしてだと思いますか」
「保健の先生に聞いてみようと思っています」
「先生、不思議に思ったらすぐ聞いてください。理由は『報徳思想』です。その中の『分度』の教えは身の丈に合った質素、倹約です。その生活を続けて来たら、身の丈を決める遺伝子が『小柄な人間』に変異しました」
「石川さんは保健室、白衣の先生と相当仲良しですね。でも、二宮金次郎さんの藩政経済立て直しから、今日までの短い期間に、人の体格を決める遺伝子が変異するでしょうか」
「突然の変異です。コロナウィールスは生き延びるため、半年で変異します。やっぱり温室効果ガスの宿題は保健室に聞きに行きます」
「今日は服部さんの独り舞台にしましょう。服部さん、温室効果の説明をお願いします」
「はい。温室と言えばクラウンメロンです。メロンが熟し始めると、エチレンガスが出ます。このガスが温室の中に漂うと、室内の未熟なメロンも雪崩のように熟します。自分達が出すエチレンガスによる温室熟々効果です」
「良いですね、この学校の温室も旨いメロンが出来ます。農業科の腕が良いからです。だけど残念でした。服部さん。温室効果ガスのガスはエチレンガスではありません。炭酸ガスです。他にメタンガスや水蒸気にも温室効果はあります。これらのガスや空気が適度に地表を覆っているので、地球上に生物が生存出来ます。地表の炭酸ガス濃度が『適度』を越すと地球がガラス温室内のように熱くなります。服部さんは一切調べず、自分が今持っている知識だけで、推測して解答しました。さすが十八歳、選挙権を持っているだけのことはあります。想像は高度な思考です」
「先生、間違っても褒めるのですか」
「知識は、先人の受け売りです。正しく伝達したいですが、時に間違いも起こります。気づいた時に直せば良いです。炭酸ガス、二酸化炭素はどう言う気体でしたか。服部さん」
「人が吐く息にいっぱい入っています。石灰水の中にストローで息をボコボコ吹き込むと透明な石灰水が白く濁る実験を中学でやりました。石灰水は酸性になって、水中のカルシュ

ウムとくっ付いて鍾乳洞になります」
「覚えていましたね。植物は太陽光と水と炭酸ガスから炭素化合物の「でんぷん」と「酸素」を作り出します。光合成、炭酸同化です。動物はでんぷんを食べ、呼吸で得る酸素で、燃焼します。これが生命の活動エネルギーです。その結果、二酸化炭素と水を吐き出します。異化作用です。炭酸ガスと酸素は動物と植物の間を渡り歩きます。植物も活動エネルギーは光の弱い時の呼吸で得られます」
「先生。でんぷんが燃えて、活動するエネルギーになる筋道は分かりました。生物の体が出来る所を一席お願いします」
「生命活動と個体組織生成つまり細胞作りは同時進行です。植物は生命エネルギーの『生産者』動物は『消費者』でしたね。この間を微生物の『分解者』が取り持って『閉じた』食物連鎖になります。生物の体組成は炭素化合物の有機物です。植物は分解者の微生物が作る無機物の窒素、リン、カリ等を根から吸い、植物体組成の炭素化合物である有機物を作ります。動物は植物体である有機物を食べ、動物体を成す有機物を作ります。植物も動物も自分の体組織にしてしまうヒトは、生物恒常性を保ちながら生命活動を続けます。動植物の命を略奪し続けたヒトは宗教が必要になったのでしょうか。話が飛んだかな」
「先生、飛び過ぎです。地球上の人口が増えたので二酸化炭素が増えたのかも知れません」
「炭酸ガスの増加は人口のせいだとは考えません。化石燃料を燃焼する車や発電所、工業製品を製造する工場は、廃熱と二酸化炭素を大気中に撒き散らします。生物の生命維持で吐く炭酸ガスだけなら、植物の光合成で使い切るでしょう。余れば海水が吸収します。生物的生命活動以外にエネルギーを消費するのは人間だけです。人間の経済、産業活動が大量の炭素エネルギーを消費し、二酸化炭素を山ほど発生させています」
「じゃあ先生、産業活動に炭素のない物を燃やせば二酸化炭素は増えませんか。それに炭酸ガスはまだ炭素が残っているのだから、もう一回燃やして使えば良いと思います」
「燃料には炭素化合物の他に、水素化合物、硫黄化合物があります。人類は長い間、体内でも体外でも炭素化合物を燃やして熱エネルギーを得てきました。水素化合物を安く作ったり、安全に運んだり、効率よく燃やす技術は今、急いで研究開発しています。二つ目の炭酸ガスを燃やせと言う服部さんの提案ですが、二酸化炭素は燃焼結果の物質です。とても安定した物質で、それ以上酸化反応が起こりません。でも、マグネシュウムと反応して炭素と熱を出します。随分お金のかかる発熱です。
「先生。水素を燃やす技術が進むと人間も水素化合物を食って、それを酸素で燃やして生きるようになるのですか」
「人が炭素化合物の主食『でんぷん』を止めて、水素化合物を酸化させながら生命活動を維持する。良いですね。空想科学物語です。人間の生命活動の仕組みはそう簡単に変わりま

せん。でんぷんに酸素を吹いて茫々燃やしている訳ではありません。体内で『燃やす』とは色々な酵素、つまり触媒が作用し、何段階もの緩やかな生物化学反応が起きる状態です。この生命活動の仕組みは何億年もかけて出来ました。突然変異はおそらく無いでしょう」

「だけど先生、人間は水だけで一ヶ月も生きられます。水は水素と酸素で出来ています。この水素を体の中で燃やして一ヶ月生きている気がしませんか。それに水素を吸うと元気になるって、ネットにいっぱい出ています」

「炭素化合物が酸化して炭酸ガスと水に変化する時、熱エネルギーが放出されます。完全燃焼の結果である水も炭酸ガスも熱量ゼロカロリーです。一ヶ月の生命維持は体内に蓄えたでんぷんによる糖や、脂肪の持つエネルギーです。体内の水はナトリウム濃度０．９％の生理食塩水を作り、生体の物理作用、化学反応に不可欠な溶媒になります。水素を吸入する原理は知りません。栄養補助食品（サプリメント）の様な商業目的じゃないでしょうか。暫らく放って置きましょう」

車の排気筒、火力発電所や生産工場の煙突から放出される気体の二酸化炭素は電磁波である可視光線や熱線に対して、個体のガラスと同じ透過特性を持つ。ガラス温室では高い振動数の電磁波である可視光線はガラスを通過して温室内に入る。これは植物の光合成の他に、室内の空気や地面、植物体を温める。温まった室内の物質はそれに応じた低い振動数の電磁波である熱線を放射する。ガラスや二酸化炭素は可視光線の振動数は通過するが、物体から放射する低い振動数の熱線は遮る。温室の中は可視光線が当たるほど熱がこもる。地球が沢山の炭酸ガスに覆われると、ガラス温室内の空気やメロンのように昇温する。これを「温室効果ガスによる地球温暖化」と言う。熱くなった地表は異常気象を起こし、自然界のバランスは崩れ、生態系が壊れる。現在この仮説が多くの人々に支持されている。

「先生。熱や光も電気や磁気の仲間ですか」

「商用電力も、スマホの無線電波も、温度を感じる熱線も、物が見える可視光線も、日焼けする紫外線も、骨を映すエックス線も、滅菌に使うガンマ線も、みんな振動する電磁波です。振動数によって性質が変わります」

「振動するならブーかピーか聞こえますか」

「電磁波と音波は物理量が違います。音の伝わる媒質は物質です。電磁波は空間を媒質として伝わります。電磁波の伝わる量はその空間を満たす物質や電磁波の振動数によって異なります。振動数が高くなると、真空や空気の詰まった空間では良く伝わります。水や土の満たされた空間、例えば洞窟の中は電磁波の減衰量が大きいので、真っ暗で携帯電話は通じません。振動数の超低い商用電力は金属類の空間を良く伝わります。また、熱には空間を伝わる『放射熱、輻射熱、熱線』と物質間を伝わる『伝導熱』があります。放射熱の伝わる速

度は秒速三十万キロ、地球七回り半です。伝導熱の速度は物質類によって違います。放射熱とは比べようも無い鈍さです」
「先生。ガラスや二酸化炭素は高い振動数の可視光線は透すのに、低い振動数の熱線は透さない訳が分かりません」
「物質は格子構造、網目模様を作って粒々の原子、分子が繋がっていると考えます。ガラスや炭酸ガスは網目が小さいので低い振動数の熱線は通り抜け出来ません。高い振動数の光は通り抜けます。ビニールは網目が大きいので振動数が高くても、低くても通過します」
「先生。ミカンの大きさを分ける昔の選果機は大中小の穴が開いていました。穴の大きさが網目で、光や熱がミカンで良いですか」
「楽しい例えです。可視光線はS、熱線はLです」
「先生。また話は農業ですか。授業時間が半分終わりました」
「分かった、急ごう。ガラスの温室でキュウリは作らない。何故だろうか、服部さん」
「先生。ガラスの温室を建てるには大金がかかります。ビニールハウスはもっと安く建てられます。メロンは高く売れます。キュウリは安いです。だから、どちらを建てるかは作物の値段で決まります」
「服部さん、それは経済学の根本原理です。メロンは日常的には食べません。病気見舞いなど、高級贈答品です。キュウリは日々の食生活の立役者です」
「先生。それって差別っす。金持ちメロンと、貧乏キュウリって」
「榊原さん、メロンとキュウリは親戚ですが種が違います。私達は『野菜格』を尊重して、それぞれの種が持つ特徴を活用します。差別では無く分類です。個性、特性を知ります。ところで、榊原さんは陸上競技の強化候補選手だそうですね」
「俺、駆けっこだけっす。勉強はバカ痛いっす。テストで十点以上取ったこと無いっす」
「テストの点数はともかく、走る苦しさが楽しい。記録に挑戦するのが心地良い、それが一番です。皆も榊原さんの記録更新に期待します。服部さんは論理的な考え方が得意です。その服部さんが榊原さんと同じになろうと、百メーターを十秒目標にして練習したら、間もなく怪我や病気になるかもしれません」
「先生。服部に俺と同じ陸上の記録を出せってのは平等じゃないっす。俺がテストで百点取れって、攻め立てられたら死ぬっす。死ぬ前にチョコッとグレルっす」
「話が電気から逸れっ放しです。カーボンニュートラルは来週にしましょう。今日は『温室効果』とはガラスや炭酸ガスが持っている、電磁波の振動数による『選択透過特性』だと理解してください。ビニールには電磁波の振動数による選択透過特性はありません。風除けと伝導熱の断熱保温特性です。私達の着衣の様なものです」
「先生もう一つ、温室とビニールハウスは建っている向きが違う訳を教えてください」

「知らなかったですね。帰り道眺めてみます」
「先生、ビニールハウスの棟は南北に向いていて、ガラス温室の棟は東西だそうです」
「理由どころか、状態を知りません。そうだと方位磁石になりますね。私の車はカーナビがついていません。車は走る、止まる、曲がるのが基本機能です。他は無くても困りません」
「棟の向きが違う理由は忘れました。地球が二十三度傾いているのと、日本が北緯三十五度だってことが関係していた気がします」
「四季ですね。よく数値を覚えていましたね」
「刃物の角度と同じです。剃刀は二三度、斧は三十五度。俺ん家は金物屋、道具屋です」
「良いですね。家業の手伝いをしていますね。生活から得た知識は堅いです。ガラス温室とビニールハウスの向きが違う理由は皆で調べましょう。調査に行くのであれば保健室より農業科を勧めます」

「それでは、ビニールハウスとガラス温室は棟の向きが直角になっている理由を、鳥居さんに説明して貰います」
「近所のメロン農家のじっちゃんに教わって来ました。ノートに書いて来たので読みます。ビニールハウスの中の作物は季節によって変える。ガラス温室の作物はメロンだけを一年に四回作る。『ビニールハウス』は太陽が屋根の斜面を東西に横切る。ハウス内の一日の『温度変化の幅』は大体路地と同じだけど、温度の値は断熱保温効果で路地より全体に高くなる。温度が温いと作物は速く育つ。『ガラスの温室』では冬場、太陽の一日の移動は屋根南斜面を移動する。夏場では屋根の北斜面を照らしながら、日の出から日没まで移動する。夏場より冬場の方が、温室効果は大きくなる。だから、温室内の一年の『温度変化の幅』は路地より小さい。温度の値は路地よりずっと暑くなる。だからメロンは一年中温い温度に浸る。先生、合っていますか」
　橋本は季節毎のガラス温室とビニールハウスそれぞれ、屋根面の太陽移動軌跡を板書した。再度ビニールは伝導熱の遮断で、ガラスは放射熱の遮断であるとした。また冬場、太陽光だけで温度が不足すると、暖房をする。夏場温度が高過ぎると遮光と換気をする。ガラス温室は一年に四回、適度な『夏』を作る。
　メロン、スイカ、キュウリはウリ科の作物で、原産地は南アフリカ地方。動物の水分補給食糧として、砂漠地帯を経て日本にも届いた。農場実習講師の受け売りだった。

「先生。黒板の絵も字も上手くないですね」
「『上手くない』は『下手だ』に較べて、優しい言い方です。『劣る状態』を『勝る否定』で言うと、中々穏やかになります」
「先生はエジソンだのアインシュタインのＬＥＤじゃないですか。違うなあ、ＡＥＤだったっけ。ＡＥＤは赤いハートマ

ークか」
「ウゥン。鳥居さん、それ、ＬＤのことじゃないかな。読み書き算盤の学習（ラーニング）の一つが極端に苦手の状態です。私は『書字』のＬＤ『学習障碍（ラーニングディスアビリティー）』かも知れません」
「先生はホワイトボードに慣れていないのだと思います。マジックペンがツーツー滑っています。だから思う様に行きません。俺の青春と同じです。摩擦があればブレーキがかかって、思う所で止まります。動摩擦は生活するのに大事だと物理で習いました」
「グッドです。鳥居さんの青春の哲学です」

橋本はカーボンニュートラルの話をした。地球は太陽光を受けながら、何億年も掛けて、自然界の酸素濃度や二酸化炭素濃度、地表温度、食物連鎖等の平衡（バランス）がとれるようになった。しかし近年、人間が化石燃料の石油、石炭を大量燃焼したため、二酸化炭素が増加し、自然界のガス濃度のバランスが崩れた。このバランスを取り戻すため、産業によるエネルギー消費は脱炭素を目指す。炭素ガスのやり取りは動植物間だけの「カーボンニュートラル」状態に戻そうとしている。
「先生。もともと地球はカーボンニュートラルだったのに、どうして動植物の一部が石炭、石油の化石になって残っちゃったのですか」
「食物連鎖の平衡から外れた動植物が化石燃料になった説がある。『分解者』である微生物が大量に不足した時代があったらしい」

橋本は文科省の「学習指導要領」に記載のない解説が多く、雑駁に過ぎたと振り返った。加えて、新教育運動のさなか、童話「青い鳥」一冊で全教科の授業をやりのけたと言う、伝説の先生をうろ覚えに辿った。

橋本は部活動でメカトロニクス部を担当した。年に一度、県下高校工業科ロボットコンクールが実施される。各校工業科はこの出場を目標にしている。
科長に商品開発の経験談を、部活で話すよう依頼された。電気の話は止めて、単純な機械要素だけの失敗談を話した。屋根の除雪用「雪堀スコップ」の開発経緯だ。アルミニュウムの溶接やプレスの自社生産技術に沿うものだった。屋根の除雪方法に関する特許公開公報を取り寄せると、Ａ４紙で厚さ六センチあった。
その年、日本海側は豪雪に見舞われた。屋根の除雪は人力に頼らざるを得ない。太平洋側の新聞でさえ除雪中の落下死亡事故を二十五件報じた。屋根の除雪作業は「雪堀」や「雪下ろし」とも言う。人力の土木作業と同じように重労働だ。雪堀スコップは可能な限り軽くありたい。二人の若者が市販のアルミスコップを使って屋根の雪下ろしを体験した。屋根の左の妻から始め、雪のブロックを切り出す。雪ブロックになる奥側の積雪にスコップの底面の長さ分、刃先を垂直に差

し込む。切れ目を入れただけでスコップは上に抜く。次にブロックの右側に刃を差し込んで抜く。二面に垂直に刃を入れた積雪の底面に水平に刃を差し込む。最初に入れた背面の切れ目に到達した辺りで、水平のスコップの柄を下におろす、テコの作用点になるスコップ底面は上に動き、雪ブロックが現れる。三回の切り出し作業で出来た雪ブロックを持ち上げて、軒下に放り投げる。四回の作業で雪ブロック一つを捨てる。作業リズムは、背、横、底、もち上げて投げる、の四拍子だ。会社に戻って動画を見ながら雪堀作業の効率化を七名のメンバーが議論した。既成のアルミスコップの右側面へ水平面と直角に直角三角形のアルミ板を溶接する試作案に辿り着いた。垂直の「羽根付きスコップ」と呼んだ。このスコップは雪のブロックを切り取る作業が背面切り、側面と底面の同時切り、もち上げて捨てる、の三工程になる。二人の若者は試作部門に製作してもらった、垂直羽根付きスコップを担ぎ雪国に向かった。

湿った積雪一メートルの大屋根を豪雪地帯に借りた。雪下ろしを始めるタイミングは室内の板戸の滑りが軋み始めた時だと聞く。必ず二人組で屋根に上がる。しかし昨今は人手に余裕がない。やむなく一人で屋根に上がる。屋根から落ちたら誰にも気づかれない。夕刻までに冷凍人間になると言う。日本海側の天気予報は、勤務先の太平洋側と随分違っていた。この情報差を知って雪堀スコップへの情熱は引けた。気を取り直して、試作の羽根付きスコップの雪下ろし性能を試した。重心のバランスを取るため、あちこちに穴を開けた羽根付きスコップの欠点が判明した。一連の作業にリズムが生まれない。「すぐ疲れる。続かない」「羽根付きは餃子に限る」と二人はそろって否定的だった。積雪の側面切断作業が省略され、作業工程は減ったものの「ヨイトマケ」が口ずさめない。ささやかな作業効率を求めた結果、作業の繋ぎ目に「間が抜け」た。手仕事道具の実用性に劣った。この愚かな工夫は特許庁に『無益登録』の項目を新設して、同じ間違いが起こらないようにしたい。工業所有権、特許登録はその発明品の「新規性」「進歩性」「産業上の有効性」などが問われる。しかし「無益」と分類される登録があれば、経済ロスは激減する。

部活の生徒達は失敗談を思いの外喜んだ。

先ず、昨年のロボコン競技の動画を見た。一の動作から二の動作に移る時、前動作の慣性力が残っていた。この外乱は随所に見られた。安定動作には『間』が必要だ。しかし間を取り過ぎるとタイムレースは不利になる。

自律ロボットの課題動作は、コンクリートブロックと同じ形の発泡スチロール製ブロックを、指定の出発点から運び出し、離れた別の定点まで移動し、積み上げる。この繰り返しにより一定時間内での積み上げ個数を競う。

「今年は積み上げるブロックの目標数をはじめに決めておこう。去年の優勝チームは十個だそうだから、今年の目標は

三個四列で十二個にしてみたらどうだろう。ロボットアームの移動高さは六十センチ。支柱の高さは六十センチよりチョイ長で良くないだろうか」

「先生、積み上げ数は決めないで、積んだブロックが崩れるまでにしませんか。上から積み上げると、アームの高さで積み上げ個数が決まるけど、下から積み上げればアームは低くても積み上げ個数に決まりが有りません」

「うん、そうか。まず一つ置いて、そのブロックを一個分の高さだけ持ち上げて、その隙間に二個目のブロックを差し込むってことか。良いな。とても良い。動作は一工程増えるが、ロボットの重心が低くなって、動作が安定する。下から積み上げる。なかなかのものだ」

提案した一年生はうれしそうに笑んだ。三年生が去年のロボットを動かしながら、移送動作についても議論した。

「今年も四輪駆動で走らせるか」

「はい。直角に曲がるので移動距離が最短になります。先週土曜日に、父さんの工場の自走ロボットを見て来ました。アルミテープに光を当ててその反射光をセンサーで拾いながら、テープに沿って走っていました。天井の照明は感じないみたいです」

「やるな、みんな。なかなか熱心だ。去年までのロボットの走行は時間による予測制御だった。これだと左右のモーターに回転数の違いが出ると、道からどんどん外れて行く」

「先生、課題が自律制御ロボットになってから、ずっと一回戦落ちです。もう十年です。そろそろ二回戦に進みたいです」

「各要素の動きの流れ図を書いて、位置を検出するセンサーの数と機械要素を動かすモーターの数で、工業用演算器（シーケンサー）の入力点数と出力点数が決まる。動かしているうちに追加したくなるから、それぞれ四点の予備を持つ。シーケンサーのソフトはブロックの引き出し、移送、積載の三つの動作に分けてそれぞれチームに分けて開発する」

「先生、機械部品はどうやって分けますか」

「アルミの板金加工だが、車体、支柱、アーム類は図面を書いてから自作する。モーター、ギヤボックス、充電電池、位置センサー類、電子部品、シーケンサーなどの購入部品は一覧表を作って、購入担当者を決めよう」

制御には、予測制御（フィードフォアード）と帰還制御（フィードバック）がある。ブロックの引き出し動作や積載動作は予測制御、つまり、予め狙い定めた位置に到達するよう、機械的ガイドや位置検出センサー、動作時間等でアーム類を順次（シーケンシャル）動作させる。その位置が目標から外れても自動修正は利かない。帰還制御には「負」と「正」がある。アルミテープを光学系で探して行く車体走行は負の帰還制御になる。いつも走行結果を見て、車体がテープから外れたら戻す動作をする。

「先生。『負』はやる気がないみたいです」

「この場合『負』とは反対方向を意味する。一定速度二〇キ

ロの目標を持つ自転車が、下り坂に来た。そのまま漕ぐと速度は二十キロを超す。どうすれば良いか。本多さん」
「漕ぐのを止めて、ブレーキを掛けます」
「上り坂に来た。今までの漕ぎ方だと速度は二十キロより落ちる。夏目さん、どうする」
「力いっぱい踏み込んで、自転車が速くなるように立ち漕ぎします」
「下り坂、上り坂と言う一定速度の保持を妨げる『外乱』が発生した時、下り坂なら速くなったので遅くする修正操作をする。上り坂では遅くなったので、速くする修正操作をする。結果を見て目標値とズレたら、ズレと反対方向の修正操作で目標値二十キロを保つ。この『反対方向の操作』を『負（ネガティブ）』と言う」
「先生、『外乱』と『雑音』は違いますか」
「同じだ。どちらも目標を果たすには邪魔物だ。電気音響分野では雑音（ノイズ）、機械動作を含む制御分野は外乱と言う」
「先生、俺の高校生活は外乱だらけです」
「目標が有って、修正は利いているかな」
「修正が利かないほど大きな外乱です」
「正帰還動作は目標値から測定結果がズレたら、ズレと『同じ方向、正（ポジティブ）の操作』をします。下り坂で速くなったら、もっと速くなるように漕ぎ、上り坂で遅くなったらさらに遅くなるようにブレーキを掛けます。自転車はどうなるか、酒井さん」
「下り坂ならスピードが出過ぎて、ブッ転ぶし、上り坂なら急停車してブッ転びます」
「ブッ転ばなくても良いです。下り坂で自転車は上限値の速度になる。上り坂なら速度の下限値、つまり停止する。正帰還を掛けると、最高速度か停止か二つの『極限状態』に行き着きます。負帰還はその両極限値間の設定した一つの『目標値』に収まります」
「先生。車体が床に貼ったアルミテープの反射光を拾いながら、その道を外れないで走るには、右に逸れたら反射光が来なくなるので、左の車輪の回転数を落として、車体を左に向けて反射光を拾えるようにします。その後、両輪の回転数を同じにすればいいですか」
「結果と修正が逆方向の負帰還制御だ。この帰還理論は重要にして簡単な公式で表せる。戦前、東北大学が行った『帰還理論』の学術発表は一寸だけアメリカに遅れをとってしまった。国内では静岡大学に伝播し、日本が一時期電子立国と言われた礎になったそうだ」
「先生。このロボットに正帰還はありますか」
「スタートスイッチはどうだろう。スイッチはオンかオフの二位置しか無い。中間位置で止めようとしても、必ずどっちかに倒れる。中間位置があるとオン、オフに迷いが出る。電灯用スイッチなら電灯が点滅してしまう。これを避けるため、接点板のシーソー動作にバネの正帰還が掛けてある。試しにスナップスイッチを中間位置で止めてみよう」

「先生。負帰還と正帰還の違いは分かりました。さっきから予測制御と帰還制御の違いを探しています。電車はレールに車輪を嵌めて走ります。車輪がレールから外れないと仮定して、浜松駅を出ると、予め敷いたレールの先の天竜川駅に着きます。レールの予定が無い御前崎には行けません。車が道路を走る時、人は道路を目で見て、手でハンドルを回して、車道から外れないようにします。百五十号線を選んで御前崎にも行けます。電車は車輪がレールから外れないとした予測制御。車は道路を外れないように、人の目と、脳と、手を使った帰還制御。先生、これで良いですか」

前頭葉が発達した文明人は主として負帰還（ネガティブフィードバック）制御が掛かっている。五感と脳と筋肉が神経で繋がり、閉回路（クローズドループ）を構成している。目標や基準と結果の差を無くす修正を繰り返す。「褒められて伸びる人」は正帰還（ポジティブフィードバック）も掛かっている。また過去のデーターを基にした推定、予想、妄想は開回路（オープンループ）の予測制御だ。「普通の人」は意識、無意識の内にこれら複数の組み合わせ制御をしながら日々生活している。

部活動は二学期になると、年末のコンクールに向け、毎晩七時、八時まで続いた。科長は牛乳と餡パンを差し入れた。橋本が担当した一年目、初戦敗退だった。二年目は準々決勝に進み、三年目には準決勝まで進んだ。橋本は工業の臨時免許状が無効になる四年目に退職した。その年メカトロ部は優勝した。大騒ぎする会場から、電話連絡があった。科長からだった。まるで絵に描いた戦歴だった。橋本は部活の生徒達宛に祝電を打った。「メカトロ部の皆さんやりましたね。おめでとう」

登記や登録は人権や財産権の擁護、保護の目的を持つ。「成年後見人が付いていない」「禁治産者ではない」冗談に橋本が登録を提案する「大人の発達障害を患っていない」「無益な特許申請ではない」「学習指導要領に無記載ではない」等「あること」の代わりの「ないこと」の証明は普通状態の証明だ。橋本の普通とは、心身共に様々な要素の凹凸が嚙み合い、恒常的に平衡を保つ状態を言う。

それから一年経った。橋本の日々は外で語ることの無い生活だった。いつもの時間に起床すると、いきなり冷蔵庫の扉を開けた。立ったまま缶ビールを嚥下した。うつろな目だった。さらに半年が過ぎた。早めの夕食だった。刺身にみそ汁を浸けて茶碗に乗せた。おぼつかない箸捌きで白飯を一塊包んだ。諦念の目だった。橋本は「登記されていないことの証明」等望むべくもない、達観の生活に入って行った。

（中央区）

小説選評

竹腰幸夫

昨年の選評で、私は「浜松の歴史に材をとった作品を得意とした本誌の傾向は過去のものとなったようである」と述べた。が、訂正しなければならない。ＮＨＫの大河ドラマに触発されたのかもしれないが、今年十一編の応募作品中、歴史物が三編。久々に心躍った。他、自伝あるいは自伝的な作品が四編。青春、ファンタジー、定年後の再生物語がそれぞれ一編。変わり種の落語脚本一編。

若い方々（１０～３０代）の応募がなかった。例年数編は、感性ゆたかな応募があり、わくわくしながら読ませていただくのだが、どうしたことだろう、今年はそれが皆無でまことに残念だった。よどんだこの時代の空気の中で、いろんなもの思いがあるはずである。完成度は問わないのでぜひチャレンジしていただきたい。いきぐるしい現実だからこそ「物語」の出番だ。フィクションを駆け巡る遊びを楽しんでほしい。

以下、印象に残った作品を紹介する。

『聞こえなくても僕には足がある。』「生まれつき音（耳）が聞こえ」ない主人公。「小さい頃はいじめられ」る日々。挫折や転職を繰り返す。しかし、中学生時代から始めたマラソンで、その後全国四十七都道府県マラソン大会のすべてに出場、しかも制覇（優勝）する。

六十歳目前の今、思うことは、全国のマラソン主催者にお願いしたい一点だ。それらの大会に「手話通訳」を置いてほしいこと。大会では、前泊の相部屋同宿者とのコミュニケーションをはじめ、しばしば起こるスタート時間の変更、喜びや感謝、参加者同士の情報交換等に不便不利益が数限りなく生ずる。また、レースでは何が起こるかわからない。選手の怪我は日常だ。緊急事態に「手話通訳」は欠かせない。――この作者のことはＮＨＫやＳＢＳのテレビ番組で拝見した事がある。実話をもとにした自伝作品だろう。胸を打つ。

『エラーから始まる』高校球児の物語。甲子園を目指しての決勝の舞台。自分のエラーで涙を飲む。チームの面々は正面切っては何も言わないが、一つのエラーで夢を失った悔しさをにじませている。気持ちを入れ替え、あらたなステージへ向かわねば。友人の一人は大学野球を目指す。自分は？受験勉強へ図書館通いを始める。そこで出会った人、また祖父の農業の手伝いなどをきっかけに、あらたな生き方が見え始める。

『（創作）戦国時代遠つ淡海・女傑列伝』ＮＨＫ大河ドラマの描く家康像に対して、疑問を叩きつける意図を秘めた力作。家康周辺の女性たちを主人公に物語は展開。引間城（後の浜松城）主の継室お田鶴の方、井伊家当主、次郎法師・祐円、今川氏真の祖母寿桂尼、家康の正室・築山殿瀬名姫らが「列伝」の面々。意欲は溢れているのだが、ここに、そのすべてを描こうとするのはやや困難か。お田鶴一人に絞ったほうがよかったかもしれない。次作に期待。

『登記されていないことの証明』県下優良会社を定年退職後、公立高校臨時教員に応募する主人公。応募書類の煩雑さ、さらに高校という空間の「常識」の非常識さに驚かされる。しかし、世代の異なるはずの工業高校生たちには受け入れられ、みごとな授業（課外授業）を展開して見せる。痛快作。

小説選評

柳本宗春

今年は十一作品。枚数が少なめのものが例年よりも多くありました。昨年も書かせていただきましたが、書こうとする内容と枚数のバランスがよいものがやはり面白く読めます。また、文章にするべき経験や考えを持っていらっしゃることは、どの作品からも感じます。ただ「小説」の審査という枠で考えると物足りないものもあります。構成と表現の更なる工夫を創作の醍醐味としていただけると良いのではないでしょうか。

「聞こえなくても僕には足がある。」

生まれつき耳の不自由な主人公が、マラソン挑戦を続ける中での思いを綴っている。エッセイとして読めば感ずるところの多い作品であった。

「接合」

マッチングアプリ流行の中で、その内部にある問題点を身近な所から突く佳作。中盤からの展開が面白いが終盤はやや強引な感じもあった。少し長い作品にすると良くなると思う。

「江戸の農民」

江戸時代中期の農民の生活と自然災害を題材にした作品。もっと人物の直面する問題やその心理を描いて欲しかった。

「ＢＩ」

外国の昔話として読んでいると伊豆の海岸が出てくるなど、展開や描写に混乱が見られる。お伽噺としてしっかりと読者をその世界に引き込むよう、丁寧な創作を御願いしたい。

「エラーから始まる」

高校野球夏の県大会、自分のミスで優勝を逃した少年が抱えた傷と新しい道へ進むまでの過程を描く。様々な要素がうまく紙数に収まっており、興味深く読むことができた。

「（創作）戦国時代遠つ淡海・女傑列伝」

戦国時代に己の生き方を通した女性、お田鶴の方・次郎法師祐円・築山御前とその関わりに焦点を当てた作品。一人一人の物語をしっかりと読んでみたいと思った。

「登記されていないことの証明」

メーカーを早期退職した男が県立高校の工業科教師となる。授業の内容自体は興味深いが、生徒とのやりとりが主体で、説明のための会話劇になってしまっているのが惜しい。

「天正の人々」

家康と秀吉の微妙な関係に関わってくる人物絵巻。歴史の妙味が味わえるが、後半になるにつれ文が簡略になり、展開も速くて味わいが薄くなってしまう感がある。

「創作落語出来あがりました」

創作落語（小咄）三編とそれを書くに至った事情が書かれている。小説としての評価は難しいが、落語の創作はどんどん続けていただきたい。

「ＳａＷａｒｔ（サワート）～妻の夢、俺の夢～」

東日本大震災の日をスタートに、浜松で働く主人公と家族に訪れる不幸と新たな希望への道筋を、ＳＮＳの発達を背景にして描き出す力作。各人物像が明確で読み応えがある。

「蝿」

引きこもり気味の息子と暮らす主人公に突然、元夫の死が知らされる。元夫の家族と息子とのつながりを軸に、繊細な感情の動きがさりげない描写に生きており、胸が揺さぶられた。

児童文学
［市民文芸賞］

音楽っていいな

金指芙美代

「ならんで、ならんで、はい！　ならんで」
ここは、ふしぎな森の中。
クマの、くまえもん先生は、トレードマークの少し大きめの赤い蝶ネクタイをして、口をとがらせながら、動物の子供たちに声をかけています。
今日は、くまえもん先生の歌のレッスンの日なのです。
「みんな集合！」
動物たちは、木の上からとびおりたり、枝の影から走ってきたり、ゾロゾロと集まってくる生徒たちは、あっちにいったり、こっちにきたり、ふざけあったりと、落ちつきがありません。
「ならんで、ならんで、はい！　ならんで、えっ！　だれ、だれ、いないの？」
「先生、サルのさすけと、キツネのつねおがどこかにいっちゃったよ」
きちんと、くまえもん先生のいうことをきく、級長のイヌのたろうは、
「さっきまでいたのに…」
困ったようにいいました。
くまえもん先生は、黒いふちどりの丸メガネを鼻の下におとして、目にゴミが入ったのか、たれ目の目をこすってから、メガネをきちんとかけなおすと、遠くをみわたしました。
「しょうがないなぁ。いつも、サルのさすけと、キツネのつねおはこうなんだから。さあもう、歌おう。ならんで、ならんで、はじめるよ」
そういうと、くまえもん先生は、おきにいりの蝶ネクタイを両手で持って直すと、背広の内ポケットから、手鏡をとり、ネクタイをみて、うんうんとうなずきます。

ついでに、ちょびひげを、整えるようにさすっては、ニヤッと笑います。
ちょっと、おかしな、くまえもん先生です。
美しいうさぎのラビット先生のピアノの伴奏に合わせて、みんなで歌います。
くまえもん先生は、お得意の大きな太い声で、
「一、二、三、ハイ！」
「ぼくは人間♪君は動物♪みたとこ少しちがうけど…♪♪」
くまえもん先生は、ピアノの伴奏に合わせ、歌ったあと、
「ハイ、ここまで…　いいかい？」
生徒たちは、一せいに歌います。
モゾモゾ、ゴソゴソ、ザワザワ、ウィウィ、キャッキャッ、グゥーグゥー、ウォーン、モォー、ヒヒーン、ニャーゴォ。
ふしぎな森の中は、いろんな声が混じりあって、もうメチャクチャ。
すると、その声をきいたもぐらたちは、一匹、ピョコン。二匹、ピョコン、ピョコン。三匹、ピョコン、ピョコン、ピョコンと、つぎからつぎに、地面に顔を出して、楽しそうに首をふります。
そのうち、歌いながら歩きだす、なまけものの、なまちゃん。
「あっ、おいおい、なまちゃん歩いちゃだめだよ。ならんで、ならんで」
くまえもん先生が、手まねきしても知らん顔して、なまちゃんは、両手をふってどんどん行ってしまいました。まるで行進しているようです。
なまちゃんに、ふんづけられないように、もぐらたちは、そのたびに地面にもぐりこみます。
イヌのたろうは、
「なまけもののなまちゃん、いつも歌いだすと楽しそうに歩きだすのさ」
「ウフッ、なまちゃん毎日、木の枝にぶらさがって動かないのにね」
と、ピアノの先生の娘のノコちゃんが、笑いながら、なまちゃんをふり返って困ったようにみつめます。
くまえもん先生は、イライラしながらも、また、蝶ネクタイをビシッと直して
「おーい、なまちゃん、帰っておいで！」
大きな声で呼びました。
でも、なまちゃんは、もどってきません。
すると、ラビット先生が、ピアノの音を鳴らしました。
「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド・」
「ド・シ・ラ・ソ・ファ・ミ・レ・ド・」
このピアノの音がしているうちに、生徒たちに、きちんとならぶように、教えてあるのでした。
他の生徒たちは、しっかりならびました。
やっと、なまちゃんも、ノソノソと、自分の席に、もどってきました。

（帰ってきた）

級長のイヌのたろうは、ほっとしたように、うさぎのノコちゃんにウインクをすると、ノコちゃんも、にっこり笑ってウインク。

でも、サルのさすけと、キツネのつねおはいません。

いったい、どこにいってしまったのでしょう。

「みんな、サルのさすけと、キツネのつねおを知らないか？」

「知らなーい」

「わかんなーい」

生徒たちは、顔をみあわせ、ザワザワ、コソコソと、答えます。

「困ったもんだ」

と、くまえもん先生は、つぶやきました。

そして、あちらこちらと、みまわしながら、いつもの口ぐせの

「ならんで、ならんで、ならんだかな。さあつづけるよ」

やっとならんだ生徒たちは、くまえもん先生の大きな声につづき、歌います。

「ぼくは人間♪君は動物……♪♪」

その頃、サルのさすけと、キツネのつねおは、森の中でとびまわって遊んだあと、町の小学校にきていました。

なにやら、人間の子供たちの歌う声がきこえます。音楽室のほうからです。

さすけとつねおが、耳をすますと、聞いたことのあるメロディーです。

「ぼくは人間♪君は動物♪みたとこ少しちがうけど…♪♪」

「上手だね」

と、さすけ。

「うん。人間ってきれいな声で歌うね」

と、つねお。

さすけは、うなずき

「そうだね、ぼくたちも、あんなふうに歌えたらなぁ」

さすけとつねおは、ソロリソロリと音楽室の中に入り、いちばんうしろのイスの下にかくれて、息をひそめました。

「整列して下さい」

音楽室に入ってきた人間の先生は、生徒たちに声をかけます。

どうやら休けい時間は終わり、また練習に入るようです。

小学校二年生の生徒たちは、すばやくならんでいます。

「ねぇさすけ、整列！って先生がいったら、しっかりならぶ人間て、かっこういいね」

「うん、すごいね。くまえもん先生も、ならんで、ならんで、じゃなく、整列！っていわないのかなぁ」

と、さすけが言うと、

「整列っていえば、ぼくら、しっかりならぶのかな」

さすけとつねおは、小声で、そんな話をしながら、練習の

ようすをみました。
人間の先生は、中年のショートカットの、やさしそうな目をした美しい女の人です。
音楽の本を片手に持ち、ほほえんでいます。
「さっき習ったところ、もういちど歌いましょう」
「はい」
人間の生徒たちは、音楽の本のページをめくりました。
先生の弾くピアノ伴奏に合わせ、生徒たちは歌います。
「ぼくは人間♪君は動物♪みたとこ少しちがうけど…　心の中は、おんなじだ、心の中はおんなじだ♪♪…」
さすけと、つねおは、生徒たちの歌声に、うっとりと、ききいっていました。
そして、くまえもん先生が森で教えてくれた、たった今、人間の生徒たちが歌っている、同じ歌を、思わず歌いだしたのです。
さすけとつねおは、楽しくて、自然と大きな声で歌ってしまいました。
すると、ピアノの伴奏をやめた先生は、立ち上がって、
「だれですか？　音がちがってますよ」
そういいながら生徒たちを、みわたしました。
あたまをイスの下にかくし、コソコソと動く、さすけとつねお。
「ガタン」
イスがとなりのイスにぶつかります。
さすけとつねおは、イスの下に、はいつくばるようにして、息をひそめます。
「イスの下にかくれているのはだれですか?」
先生は、イスの下をのぞきこみます。
イスの間から、ゆっくりとあたまをもちあげる、さすけとつねお。
「あらあら、おサルさんとキツネさんね。ようこそ」
さすけとつねおは、すぐみつけられてしまいました。
「いらっしゃいませ」
人間の音楽の先生は、金ブチのメガネを少しあげ、にっこり笑いました。
人間の生徒たちは、ふり返って、さすけとつねおをみて、びっくりしています。
さすけは、
（先生が笑っている）
つねおも
（先生、やさしそう）
さすけとつねおは、高なる胸をおさえて、立ちあがり
「ごめんなさい」
ペコリとおじぎをします。
「ごめんなさい。ぼくたち、その歌、森の中で、くまえもん先生に教えてもらいました」
さすけは、もういちど、あやまると、あたまをかいておじぎをしました。

「知ってる歌だったので、つい歌ってしまいました」
つねおも、下をむいています。
先生は、
「そうだったんですか。森の中の動物の子供の生徒たちも、この歌、歌っているのですか。みんなおんなじですね」
「はい！」
さすけとつねおは、口を揃えていいました。
「いつか、私たち人間と、一緒に歌いましょうね」
「はい！」
「きっとね！」
先生は、やさしくほほえみました。
「はい！　頑張って練習します」
そして、先生は、さすけとつねおをイスに座らせて、二年生の生徒たちの歌をきかせてくれました。
さすけとつねおは、胸がいっぱいになりました。
人間ってすばらしい！
整列っていったら、しっかり並ぶ。
歌も、バラバラでなく、そろった美しい声。

サルのさすけとキツネのつねおは、森の中から遊び歩いて、町の小学校の音楽室で、自分たちがクマのくまえもん先生に教えてもらった、おなじ曲の音楽と、めぐり合ったのでした。
そして、森に帰ると、くまえもん先生に、人間の小学校のできごとを話してあげました。

森の中の教室では、いつもの赤い蝶ネクタイをして、ピシッと立つくまえもん先生は、
「人間の子供たちと一緒に歌えるように、私たちも、しっかり練習をして歌おう」
真剣な顔で、動物の生徒たちにいいました。
いつもよりきびしくいう、くまえもん先生の話を聞いて、生徒たちは不安そうです。
「人間の子供たちと歌えるの？」
「人間って、こわくなぁい？」
「だいじょうぶかなぁ」
「動物の私たちと、ほんとに歌ってくれるのかなぁ」
「でも、人間と歌えるなんてすてき！」
「一緒に歌ってくれるといいなぁ」
「モォー、ぼくも歌いたいな」
「いいよ」
「わたしも…」
牛も、そして、モグラも他の動物たちも、そんなことを口々にいっています。
「整列！　はい、ならんでならんで、はい！整列！」
くまえもん先生が、覚えたての「整列」を口に出して、シャキッと背すじを伸ばし、歌の練習をはじめます。
あちらこちらから集まってきた動物の生徒たちと、懸命

に、練習をつづけます。
生徒は、イヌ、クマ、サル、キツネを始めウサギやタヌキにヤギも。それから、なまけもののなまちゃん。
一番前には、モグラもいっぱい地面から顔をだして並んでいます。
うしろのほうには、ウシもウマも、ウマの背中に、かわいいネコが三匹乗っています。
くまえもん先生の「整列」のかけ声で、森の動物たちは、すばやく並び、毎日、日が暮れるまで練習に励みます。

何日も何日も練習はつづきました。
そして、動物の生徒たちの歌声は、美しく明るい空にひびきわたるようになりました。

やがて時が流れ、町の小学校から、招待状のお手紙がきました。

「森の中の動物たちへ
音楽会を開きます。
是非、一緒にうたいましょう
町の小学校より」

くまえもん先生も、森の動物たちも、みんな、バンザイして大よろこび。

そして、待ちに待った音楽会がやってきました。
ショートカットの音楽の先生が、くまえもん先生や、ピアノのラビット先生、そして、動物の生徒たちを、にこにこと、トンネルの花飾りの音楽室に迎え入れてくれました。
人間の生徒たちは、三年生になり、少し、大人っぽくなっています。
代表の生徒が
「ようこそ、私たち人間の小学校に！　おまちしていました。これから一緒に歌をうたいましょう」
しっかりマイクを持って挨拶をしました。
森の中の動物の生徒たちは、みんな緊張して、舞台にあがりました。
舞台の上では、人間の生徒たちが、きちんと整列をしています。
「招待してくれてありがとう。今日の日まで私たちは頑張って練習をしてきました。一緒に歌って下さい。よろしくお願いします」
はじめてマイクを持ったイヌのたろうが、マイクを鼻のあたまにあてながら、ブルブルふるえて挨拶をしました。
たくさんのお客さんがきています。
人間のお父さんはカメラを持っています。
隣で赤ちゃんを抱っこしたお母さん。腰のまがったおじいさん、つえをついてるおばあさん。

そして、森からきた動物のお父さん、お母さん、親せきの動物のおじさん、おばさん、
みんなさそいあい楽しそうに集まってきました。
音楽室の中は、人間と動物がなかよく笑いあって、おしゃべりをしています。
どこからきいたのか、スズメや、ツバメも窓の外からのぞいています。
さすけが横にいるつねおにいいました。
「みんな、なかよしだね」
「うん」
つねおが片目をつぶってにっこり。
「よかった！」
さすけも片目をつぶってにっこり。

「ブブー」
始まりのベルが鳴りました。
やがて、人間と動物の子供たちの合唱が、始まります。
音楽室は、シィーンとなりました。
指揮者は、イヌのたろうです。
くまえもん先生から猛特訓を受けた、動物の生徒たちも、きちんと整列をしています。
人間の生徒たちも、たろうの指揮に合わせてうたいます。
にこやかにピアノに向かう、ショートカットの先生。
「ぼくは人間♪君は動物♪みたとこ少しちがうけど♪　心の中はおんなじだ♪
心の中はおんなじだ♪♪
さみしいことも知っている♪
うれしいことも知っている♪
おんなじ、地球のなかまだもん♪
声をそろえてうたおうよ…♪♪」
さいごまで、人間と動物の子供たちは、心を合わせて、しっかりうたいました。
音楽室は、拍手が鳴りやみません。
一番前の席で座っていた、くまえもん先生の、丸く黒いふちどりのメガネの中は、感動の涙でいっぱいです。
隣に座っていた、うさぎのラビット先生が白いハンカチを、くまえもん先生にさしだしました。
くまえもん先生は、ありがとうというように、ラビット先生におじぎをして、ハンカチを受けとると、涙をふき、ついでにメガネもいっしょにふいて、背広の内ポケットから、いつも持っている手鏡を出し、もういちど、涙をふきました。
そして、堂々と舞台にあがったくまえもん先生は、
「すばらしい音楽会でした。こんなに嬉しいことはありません。本当に一緒に歌ってくれてありがとうございました」
真剣な顔で、そういい深くおじぎをした、しゅんかん、コツンと、マイクにあたまをぶつけてしまいました。
「こちらこそ最高の思いでを作ってくださってありがとう。また一緒に歌いましょうね」

ショートカットの女の人間の先生と、くまえもん先生は、固い握手をしました。

人間の生徒たちの輝いた明るい笑顔に、動物の生徒たちは、

「私たちと一緒に歌ってくれてありがとう」

にっこり笑っておじぎをして、幕をとじました。

小学校の音楽室の屋根では、楽しそうに、カラスの子供たちが、カァカァカァーと、歌っていました。

付記

「地球の仲間」やなせたかし作

参考にしました。

（中央区）

［入選］

けんちゃんと鬼の子もんちゃん

河島憲代

節分の日です。

ルルルルル　ルルルルル　ルルルルル

けんちゃんが、居間でグローブをみがいていると、電話がかかってきました。

けんちゃんが電話に出ると、近くに住んでいる、おばあちゃんからでした。

「けんちゃん、いり豆をたくさん作ったから、とりにおいで」

「うん。ちょっとまってておばあちゃん。ママにいうから」

そういって、けんちゃんは、

「ママ、おばあちゃんがいり豆くれるって」

と、台所にいるママに声をかけます。

「あら、うれしい。けんちゃん、行って来てくれる？」

「いいよ」

けんちゃんは、電話でおばあちゃんに返事をします。

「いまから、ぼくが自転車で行くね」

けんちゃんの家では、節分の日、豆をいっておいしく食べて、ふたご山の鬼にお礼をするのです。

「その昔、けんちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんが、キノコを採りに行って山で迷子になったそうだ」

と、前におばあちゃんが話してくれたことがありました。

その時、ふたご山の鬼の子が道案内をしてくれて、ケガもせずに帰れたことから、けんちゃんの家では、昔から節分の日に豆はまきません。おばあちゃんの家もです。

さっそく、けんちゃんは、赤い野球帽をかぶります。けんちゃんが練習している山里少年野球チームの帽子です。

「車に気をつけて行くのよ」

ママが、窓からのぞいていいました。

「近道行くからだいじょうぶ」

けんちゃんは、自転車にまたがって手をふりました。

おばあちゃんの家は、二つの高い峰をもつふたご山のふもとにあります。まだ、お山の頂上はうっすらと雪をかぶっています。

でも、今日は、お日さまがポカポカと当たって少しも寒くありません。

けんちゃんの家からは、大きな田んぼをいくつかはさんだ向こう側に、おばあちゃんの家の黒い屋根が見えています。

田んぼは、若草がちょっぴりのびてきていて、まるで、水でうすめた黄緑色の絵の具をこぼしたみたいです。

おばあちゃんの家まで、ずっとつながった田んぼ道が、けんちゃんの近道なのです。

（おばあちゃんのいり豆、ぼく、すきなんだ。年の数っていうけどさ。ぼく、毎年どっさり食べちゃうよ）

けんちゃんは、そう思いながら、スイスイと自転車をこいで行きます。

田んぼ道には、タンポポが並んで咲いていました。

「けんちゃん、こんにちは」

「けんちゃん、いいお天気ね」

「けんちゃん、どこいくの？」

なんだかそういっているようですから、けんちゃんもつい、

「タンポポさん、あのね、ぼく、おばあちゃんの家にいくんだよ。だって、おばあちゃんがいり豆を作ってくれたんだ」

なんて、ひとりごとをいいました。

ふたご山が、だんだん近くなってきます。

「ふたご山には、鬼たちが住んでいるのかあ」

けんちゃんは、ちょっと会ってみたいとおもいます。

きれいな青い空に、丸いおもちみたいな白い雲が、ふたご山の方からいくつも並んでゆっくりと動いていました。

（あの雲でケンケンパができそうじゃん）

けんちゃんが、空を見上げていたそのとき。

ガシャン！

「うわうわあっ！」

とつぜん、なにかが自転車にぶつかったのです。

けんちゃんは、自転車ごと道ばたにたおれてしまいました。

地面の上で横倒しになった自転車の車輪がカラカラとまわっています。

「いててっ」

かがんで、ひざ小僧をおさえます。

ふいに、けんちゃんの後ろで声がしました。

「ご、ごめんなさい」

とても小さなかすれた声です。

けんちゃんは、ハッとします。

（いけない。ぼく、よそ見しててだれかに自転車をあてちゃったんだ）

「ぼ、ぼくだって、ごめんなさい」

あわてて言って、ふりむいたとたん、

（ううっ）

けんちゃんは、目の前にポツンと立っている子を見て、いきをのみました。

その子の金色のかみの毛から、肌色の角が一本ツンとのびていたからです。

けんちゃんの胸がドキンドキンとたかなります。でも、立ち上がって、

「き、きみ・・・・けがをしていない？」

ビクビクして聞きました。

「へいきだい」

「ああ、よかった」

けれど、けんちゃんを見つめるその子は、口をへの字にしていまにも泣きそうです。

「どこか痛いんじゃあない？」
「けがなんかしていないやい」
「ああの・・・、君はどこからきたの？」
思いきって聞きました。
「おいら、雲とびしてておちちゃったんだい」
「くもって、空の雲？　ええっ、じゃあ雷様の子？」
「ちがわい。おいらは、鬼の子だい」
「おおっ鬼の子！あの、ふたご山の！」
あんまりびっくりして、けんちゃんの目がまん丸になりました。
（ぼく、夢をみているの？）
夢なんかじゃありません。すりむいたひざこぞうが、ヒリヒリいたいのですから。けんちゃんは、ドキドキする胸をおさえて、
「雲とびなんて、すごい遊びをするんだね」
と、いいました。
「遊びじゃないやい。雲とびは、りっぱな鬼になる修行だぞ」
と、いばってみせます。
「だけど、おいら、おちてばっかり。へたっぴいさ」
鬼の子が、急にしゅんとしてうつむきます。
「それに、おいらの姿、見えるだろ」
「なんで？　見えるけど」
「やっぱりだ」
とたんに、鬼の子の大きな目からなみだがあふれてあふれて流れ出しました。
「ねえ、君どうしたの？」
「おいら、雲とびの失敗ばかりしていたんで、とうとう鬼のパワーが消えちゃったんだな。『鬼はふつう、人間には見えないのだぞ』って、父ちゃんがいったもの」
そういって、おいおい泣きだしたのです。
「そんなあ・」
けんちゃんは、肩をふるわせて泣いている鬼の子に胸がキュンとなりました。
なんだか、自分とよくにているように思えたのです。
野球が大好きなのに、ボールを打つのも、投げるのも、キャッチするのも、ミスばかりして、うまくなりません。
レギュラーになかなかなれなくて、グランドのすみでめそめそしてばかり。
でも、そんな時は、いつも応援にきてくれる、おばあちゃんのおいしいお弁当を食べて元気になるのです。
（あっ！）けんちゃんは、大事なことを思い出しました。
「ぼく、おばあちゃんの家に行くところなんだ。いっしょに行こう」
すると、鬼の子が、なみだでぬれた顔をあげて目をぱちくりします。
それから、けんちゃんをまじまじと見て
「おいら、行ってもいいの？」
と、小さな声でいいました。

こくんとうなずいた、けんちゃん。
「おばあちゃん、喜ぶよ」
そういって、けんちゃんは、自転車をおこします。それから、
「ぼく、けんた。けんちゃんてよばれてる」
と、鬼の子にいいました。
すると、鬼の子は、なみだを手でこすり、鼻をすすってこたえます。
「お、おいら、もんじゅ」
「じゃあ、もんちゃんだ」
「うん」
ふたりで顔を見あって、にっこりしました。
「ねえ、もんちゃんの角を見て、おばあちゃんがびっくりしないように、これをかぶってね」
けんちゃんは、赤い野球帽を、もんちゃんにかぶせてあげました。
けんちゃんと、もんちゃんは、おしゃべりしながら歩きます。
けんちゃんは、もんちゃんの足を見つめて聞きました。
「もんちゃん、足痛くないの？　はだしで」
「ぜんぜん。山道も、岩も、雲の上だってへいちゃらだよ」
「すごいね、もんちゃんは」
けんちゃんは、元気に歩くもんちゃんにホッとします。
「雲とびしてたなんて、ほんとうにおどろいたよ。ぼく、ケンケンパならうまいんだ」
「ケンケンパ？」
「おばあちゃんに教えてもらったんだ」
「ふーん」
けんちゃんのおばあちゃんの家はすぐそこです。かきねのツバキの赤い花が、咲いているのが見えます。
「そうだ！　おばあちゃんの家の庭でやろうよ。ケンケンパを」
田んぼ道に吹く風は、もんちゃんのなみだでぬれたほっぺを、かわかしてふいていきました。

けんちゃんは、おばあちゃんの家の庭につくと、すみのほうに、自転車を止めました。
それから、地面に石ころで、大きいのやら小さいのやら、丸をいくつもかいていきます。
かきおわると、はじめに、けんちゃんがやって見せます。
「ケンケンと片足で丸をとんで行くよ。次の丸に両足でパね。このくりかえしだよ」
すると、もんちゃんも、同じようにけんちゃんのあとからとんできます。
ケンケン　パ　ケンケン　パ
ふたりの声が、あたりにひろがります。
「もんちゃん、もっとはやくとぶよ」
「わかったあ」

ケンケンパ　ケンケンパ
「もんちゃん、うまいよ」
「うれしいな。うれしいな」
「つぎのまるは、ちょっとはなれているからね。おもいきりとんで、両足でパだよ」
「とべるよ。ええい、パ」
「じょうず！　もんちゃん」
庭で、いったりきたりしてあそびます。
けんちゃんのほっぺも、もんちゃんのほっぺもあからんで、とってもたのしそうです。
「おやまあまあ。にぎやかだと思ったら、けんちゃんのお友だちも来ていたのかい」
窓を開けた、おばあちゃんがほほえんでいます。家の中から、いり豆のいいにおいがしてきました。

そのころ、ふたご山ではもんちゃんの家族がおおさわぎをしていました。
「大変だ、大変だ」
「大変だ！　もんじゅが雲とび練習から帰って来ないぞ」
「どこにいるんだい？」
「また、雲から落ちてしまったか」
「でも、あちこちさがしても見つからない」
「とうとう、鬼のパワーがなくなって帰ってこれないのでは」
と、みんなでオロオロしながらさがしていました。

すると、
「心配ない」
と、もんちゃんのお父さんは、ふたご山のように、どっしりかまえていいました。
「わしも、子どものころよく雲から落ちたものだ。山の中で鬼のパワーがなくなったこともあったさ。もんじゅは、いまに、ここに上って来るわい」
そういって、ワハハと笑いました。

もんちゃんが、ふたご山の鬼の家族に見つからないわけです。けんちゃんの赤い野球帽をかぶって、けんちゃんとケンケンパをしていましたからね。
それから、けんちゃんのおばあちゃんの家で節分の、のりまきと、いり豆を食べていたのです。
おばあちゃんの家からの帰り道、おなかがいっぱいになったもんちゃんは、けんちゃんに赤い野球帽をかえします。
「ありがとう。おいら、あきらめないで、父ちゃんみたいになれるように、いろいろな修行するよ。雲とびだって」
「ぼくは、野球の練習をがんばるね」
けんちゃんは、おばあちゃんにもらったいり豆の入った袋を一つさしだしました。
「これ、おばあちゃんが『お友だちにあげてね』って」
「お友だちって、おいらのこと？」
「そうさ」

けんちゃんは、そう言ってにっこりします。
もんちゃんの顔がぱっと、かがやきました。
「でも、せっかくもんちゃんにあえたのに、鬼のパワーがもどったら、ぼく、もんちゃんの姿が見えないんだよね」
と、けんちゃんは、さみしくなってそう言いました。
すると、もんちゃんが胸を張って、
「けんちゃんには、おいらの姿がわかる術も父ちゃんに教えてもらって修行するんだ」
と、いいます。
「ほんとう?」
「おいら、雲とびうまくなったら、けんちゃんに知らせるからさ。ぜったいだよ」
そういうと、鬼の子もんちゃんは、けんちゃんにもらったいり豆の入ったふくろを、胸にかかえます。
「いいにおい」
いり豆のこうばしいにおいをおもいっきりすいこみました。
そして、元気よくふたご山にむかって歩いていきます。
もんちゃんの金色のかみの毛が、春の風にふかれてふんわり揺れて、小さな角が、また見えました。
振り返って、けんちゃんに手を振ると、もんちゃんは、春を待つ新しい芽を吹きだしている雑木林の山道を登って行きます。
そのとき、
「父ちゃんだ！　父ーちゃーん」
大きな声でそういうと、もんちゃんは山道をかけだしました。
でも、けんちゃんには、飛び跳ねるように走って行くもんちゃんのうしろ姿しか見えませんでした。
それから、なん日もすぎていきました。
やがて、ふたご山は、赤や黄色の木々の葉っぱでそまります。
田んぼでは、お米がいっぱい実って黄金色のイネが秋の風の中で、サワサワしています。
すきとおるような青い空に、ぽっかり、ぽっかりと丸い白い雲がうかんでいました。
けんちゃんは、朝から小学校のグランドで野球の試合にでていました。
赤い帽子が、けんちゃんの里山チームです。
けんちゃんは、ヒットを打って二塁にすすんでいました。
カキーン
と、気持ちの良い音をのこして、里山チームの子が打ったボールが、けんちゃんの頭の上をこえていきます。
「けんちゃーん、走れ！　走れ！」
「まわれー　三塁もまわれ！」
「けんちゃん、ホームだ！　ホームまで走れ！」
「行ける、行けるぞ！」

ベンチは大騒ぎ。
みんなの応援の声がとびかいます。
けんちゃんは、三塁ベースをふんで、そのまま走りに走ってホームにすべりこみました。
「セーフ」
審判の声がひびきました。
「やったー！」
けんちゃんは、はねおきておもわずガッツポーズ。だって、初めてホームベースをふんだのです。
そのとき。
けんちゃんの耳に空のほうから、あの、ふたご山の鬼の子、もんちゃんの声が聞こえてきたではありませんか。
ケンケンパ　ケンケンパ
ケンケンパ　ケンケンパ
ケンパ　ケンパ
空いっぱいに、なんと楽しそう。
「あっ！　もんちゃんの声！」
声だけではありません。
見上げるけんちゃんの目には、ぽっかりと浮かぶ白い雲の中から、もんちゃんの金色のかみの毛と角が、まぶしく見えます。
「やったね！　けんちゃーん。おいら、ここでずっと見ていたんだよー」
と、もんちゃんは、雲の上からけんちゃんにむかってさけんでいました。
それはけんちゃんにだけ、わかる術です。
けんちゃんは、白い雲にむかって赤い野球帽を大きく大きくふりました。
（ありがとうーもんちゃーん。
もんちゃんだって、すごいよ！
雲とびうまくなったんだねー。
修行いっぱいしたんだねー。
ちゃんと、ぼくに見えるもーん）
けんちゃんは、嬉しくって、嬉しくって、両手を広げてピョンピョンはねました。
ちょっぴりすずしい秋風が、けんちゃんと、鬼の子もんちゃんを、やさしくつないでいました。

（中央区）

児童文学選評

住吉玲子

今回の応募数は五作品と少なかったのですが、それぞれに個性豊かな作品で、楽しく読ませていただきました。選考にあたっては大変迷いましたが、市民文芸賞一作品　入選一作品を選びました。

応募作品を読みおえて感じたことは、児童文学は対象となる読者が幼年～中学生（時に高校生）だということを、忘れてはならないということです。どの年代の読者に向けて、何を伝えたいのか、作者の思いだけが空回りしてはいないか、大人の目線になっていないかを心に留めて、推敲することが大切だと思いました。

市民文芸賞「音楽っていいな」

題名の『いいな』が、そのままふくらんだような楽しい作品です。文章のリズムが良く、夢があります。森の動物たちと町の小学校の子どもたちが一緒になって合唱する場面では、やなせたかし作詞『地球の仲間』の歌詞が、子どもたちの未来に明るい希望を感じさせてくれました。人と動物も、国の違う人どうしも、ともに住みよい地球であって欲しいと願わずにはいられません。気になった点は、動物たちの歌う歌が〈♪ぼくは人間きみは動物〉から始まることです。調べたところ『地球の仲間』の二番の歌詞は〈♪ぼくは動物きみは人間〉となっていますので、こちら（二番の歌詞）のほうが、動物たちにはふさわしかったと思います。

入選「けんちゃんと鬼の子もんちゃん」

けんちゃんと鬼の子もんちゃんが、ともに成長する物語。ふたりが出会う場面では、この先はどうなるのかな？というワクワク感が胸に広がりました。やさしさとぬくもりがあり、登場人物を見る作者の目の温かさを感じます。伏線も起承転結もしっかりしていて、わかりやすく文章が整っています。反面、結末が予想できてしまう展開に、少しもの足りない思いを持ちました。けんちゃん、もんちゃん、鬼のお父さんは、もっと個性的に濃く描いていいと思います。

以下、選外となりましたが「ケンくんのおへそ」ケンくんとみよちゃんのおへそが、夜中に散歩する楽しいお話。リズミカルで、常識にとらわれない面白さがありました。中盤のカンガルーの場面が少し長すぎて、主人公（ケンくんのおへそ）の存在がうすくなってしまいました。ケンくんのおへその姿が読者の目に浮かぶ表現が欲しいと思います。最後も、二つのおへそが別々のおなかに帰ってからのエピソードがあると、もっと読みごたえのある面白い作品になったと思います。全体に、勢いにまかせて書いた印象で、テンポはいいのですが文章が雑になってしまいました。

「ちゃあくんは一年生」とても丁寧に書かれた作品で好感を持ちました。ちゃあくんの、いきいきとした様子が目に浮かびます。郷土を愛しなつかしむ思いを強く感じました。残念なのは、語り手の視点が定まらず、大人の感覚での説明過多の作品になってしまった点です。

「インコのチーコ」　ある園で飼われているインコの自己紹介のお話。インコのチーコのひとり（一羽）語りが、親しみをこめて書かれています。これだけでは単にインコの紹介文ですので、ぜひ、ここからチーコの物語を作っていってください。

評　論

［市民文芸賞］

ノンフィクションという装い

木俣統裕

石牟礼道子の『苦海浄土』のエピグラムには、弘法大師和讃の抜き書きがそえられている。

繋がぬ沖の捨小舟
生死の苦海果もなし

この和讃には続きがあって、「ここに三地の菩薩あり　弘誓の船に櫓櫂取り　たすけ給える御慈悲の　不思議は世世に新たなり……」と続くのだが、石牟礼道子が採ったのは、この長い和讃のうちの二行だけだった。どうもこのエピグラムでは、「弘誓」や「櫓櫂」や「慈悲」などの「浄土」を連想させるタームが意図的に避けられたように感じられる。石牟礼道子は水俣病患者とその家族をとりまく悲惨な現実、つまり「苦海」という現実を前にして立ちすくんでいる。タイトルに反して作中では具体的に「浄土」の世界は表現されていない。いや、水俣病患者とその家族をつぶさに観察するほどに表現できなかっただろうし、するべきでもなかった。だから、願いとしてのタイトルと現実としてのエピグラムが、印象として少し乖離している。そこに何か表現者としての葛藤のようなものを見る思いがする。

タイトルに「浄土」を冠しながらも、それが具体的に描かれないところに、意外ともいうべき石牟礼道子の近代的な視点が垣間見られる。もの言わぬ水俣病患者たちの内面へと乗りうつり、思念の塊を言語化する彼女とは異なる一面。口寄せのような書きぶりで巫女になぞらえられた彼女とは異なる一面。素朴な風景や方言を豊富に用いることで、近代と前近代のコントラストを強める姿勢とは異なる一面である。とりわけ水俣病患者を抱えて苦しむ家族の描写には、私たちと似

た感覚、それも極めて近代的な感覚を有していたように思われる。

「ゆりは水子でもなし、ぶどう子でもなし、うちが産んだ人間の子じゃった。生きとる途中でゆくえ不明のごつなった魂は、どけ行ったち思うな、とうちゃん」
「おれにわかろうかい、神さんにきいてくれい」
「神さんも当てにはならんばい。この世は神さんの創ってくれらした世の中ちゅうが、人間は神さんの創りものちゅうが、会社やユーキスイギンちゅうもんは、神さんの創りもんじゃあるめ。まさか神さんの心で創らしたものではあるめ」
（『苦海浄土』）

我が子の行方不明になってしまった魂は、いかにして安息を得られるのか。因果の理屈から外れた圧倒的な理不尽を前にして、患者の家族は神仏の作為と不作為へ疑義を挟む。人が神という概念を創造して以来、神の意図に対する懐疑と確信とはいつでも緊張関係にあった。旧約聖書中、ヨブ記における義人ヨブの物語はその代表例である。もちろんヨブの抱く一神教的な苛烈な信仰心と、水俣病患者の家族が有するであろうアニミズム的な崇拝を同一視するものではないが、しかし、世界の成立が、目の前のこの苦難が、上位者の何らかの意図をもって引き起こされているはずだという確信があればこそ、魂の安息もまた上位者の意図を期待することができる。この信念について水俣病患者の家族も義人ヨブも、ほとんど差がないであろう。

もし信仰の強度において何らかの差異があるとすれば、次の事柄である。少なくともヨブは救済をあきらめることはなかったし、ましてや神の存在そのものを疑うことなどありえなかった。だから義人と称された。一方で水俣病患者の家族のように、キリスト教的な試練も、仏教的な宿業による因果も信じられなくなったとき、つまり彷徨える魂と上位者―この場合は世間も自然も概念として含まれる上位者―との関係が断たれたことが確定したとき、懐疑そのものは霧散し、そして、死に至る病ともいうべき絶望が確信されてしまう。

「ただの病気で、寿命で死ぬものならば、魂は仏さんの引きとってやらすというというけれど、ユーキ水銀で溶けてしもうた魂ちゅうもんは、誰が引きとってくるるもんじゃろか。会社が引きとってくれたもんじゃろか？」
（『苦海浄土』）

ここに至りもはや原理的に魂の救済がなされないことが顕わになる。「会社」という名の近代が水俣病患者の魂を引きとらないことは明確であるから、最後の一文は反語である。つまり魂の引きとり先はない。チッソが人知れず有機水銀を不知火海へ排出することは、国や地域の経済的発展と自らの

資本の増殖のためであり、漁民たちへ何らかの意図があったわけではない。この不知火海における因果関係について我々に判ることは、ただ近代的な仕組みが地域に備わっているという理由だけで、けっして救われない誰かを確実に存在させてしまうということだけである。

近代とは一面でこの救済の不在という怖れに自覚的であることをいう。近代以前においては、神とサタンの共犯関係によって殺害されたヨブの息子たちは、問題にすらならない。殺害された彼ら魂の安息は、ヨブの物語とは別の地平の文脈で解決されるべき事柄だからである。試練の後にどれほどヨブへの祝福があろうとも、亡くなった息子たちはもう戻らない。神は新たに創造した息子を授けるだけだった。ヨブもそれをもって救済と受けとめた。

一方で一九世紀以降は事情が少しことなる。いやが応にも、救済の不在に向き合わざるをえない時代となっていく。そのことは、たとえば『カラマーゾフの兄弟』に顕著に現れている。次兄イワンの疑念は時代に特有なものだった。イワン―この場合は作者ドストエフスキー自身といってもいい―は、ロシアの幼い子供たちが虐げられる事件について極めて敏感である。イワンは幼い子が虐待された実例を三男のアリョーシャへ数多く披露する。そのひとつに、地方の領主がいたずらの罰として領民の男の子を裸にし、獰猛な猟犬をけしかけ、逃げるところを噛み殺させるという事件がある。しかもあえて男の子の母親の眼前でことに及ぶのである。温厚なキリスト者のアリョーシャですら、感情を爆発させる悪辣なケーススタディである。

イワンは認める、男の子を殺害された母親と男の子を殺害した領主との和解は、確かに神の名のもと天上において成立しうるであろう。しかし、現実に殺害された男の子の魂はどのようにして救われるのか。イワンに言わせれば「子供の涙が何ひとつ償われていない」し、「そうでなきゃ、調和なんてものはありえない」のだ。この場合、領主と母親と男の子の三者は必ずや同一の地平で解決されるべき課題として扱われている。それら調和の不可能性は、イワンによる悪を許す神への問いを生み、セヴィリアの大審問官をめぐる有名な作中作を生んだ。

石牟礼道子の視点は前近代に置かれているだけでなく、同時に近代主義者のイワンに近いところにも置かれている。日本の政治と産業構造と水俣病患者たちを同じ地平に置いて同時に観察している。日本の政治と産業構造、つまりこの国の資本主義社会と言い換えてもいいが、その資本主義社会そのものが断罪されることはありうるか。または、資本主義社会がこれまで犠牲にしてきた者たちと和解することはありうるのか。犠牲者と同時代の人々および後継する私たちは、決定的な矛盾を免れるために時代の要請に従って社会の仕組みとルールを刻々と変化させている。そのとき水俣病という名のいち地方の奇病は、ある社会変革のための契機にすぎず、この社会そのものは明確に罰せられることも、和解の機会を与

えられることもなく、現在進行的に営まれつづけている。

上京した水俣病患者たちと石牟礼道子が丸の内で繰り広げた抗議活動の描写は、水俣病患者たちとこの社会とが究極的に交わることがないことを顕わにしている。石牟礼道子には水俣病患者の魂に安息がもたらされないことが明瞭に判ってしまっている。

安らかにねむって下さい、などという言葉は、しばしば、生者たちの欺瞞のために使われる。

このとき釜鶴松の死につつあったまなざしは、まさに魂魄この世にとどまり、決して安らかになど往生しきれぬまなざしであったのである。

（『苦海浄土』）

今の時代に分かりやすい極めてリアリスティックな描写だと思う。このような幻想を抱かせない徹底的で呵責ない描写が、多くの人々に『苦海浄土』が告発の書と思われることを誘発したのは当然だった。その点に関して慎重になるべきだと渡辺京二は読者へ注意を喚起している。

具体的な救済はなくとも、それでも石牟礼道子はタイトルに「浄土」を付した。少なくとも「浄土」への願いと祈りは確実に作中へ織り込まれている。しかしその希求はいまいち見えにくい。見えにくくなっている理由の一端は、『苦海浄土』がノンフィクションを装っていること、そしてその装いに寄せる周囲の強い肯定にある。

渡辺京二は『苦海浄土』はあくまでも石牟礼道子の私小説であると解説して綺麗に読者の眼をくらませた。ここで渡辺京二が私小説と解釈した理由はいくつかあるだろう。まず、既存のどのジャンルにも『苦海浄土』が属さなかったということである。『苦海浄土』をカテゴライズするにあたり、苦しまぎれに最も近いジャンルとして私小説を当てはめたように感じられる。

そしてもうひとつは、私小説であれば、それ自体が私小説であるという理由によって外部からの批判を免れうることを狙ったと思われる。確信犯的に私小説というコーティングが作品全体に施された。渡辺京二は石牟礼道子のプロデューサーともいえる。『苦海浄土』を世に広く知らしめたい。だから、石牟礼道子の特殊な作家性の訴求を後回しにしてでも、私小説という分かりやすい解釈と説明が選ばれたのだと思う。

かくして『苦海浄土』は外部からの干渉を拒む閉じたテキストへと書き換えられた。渡辺京二が張った論を真に受けたと思われるのが、池澤夏樹である。まず、次の池澤夏樹の評には全面的に賛同する。

石牟礼道子の世界には近代と前近代の他にもう一つ、異界という項目がある。二項対立ではなく三角形。

この人に出会った者は、とんでもないものに遭遇してしまったと思う。強く惹かれるのに、それでいてどうやっても合理で解明できない大きすぎる存在。それが目の前に立ちはだかる。抱えようとしても余るのだ。

（『されく魂　わが石牟礼道子抄』）

一言一句まったくもってそのとおりだと思う。我々は水俣病患者の描写に圧倒される。とんでもなく神々しいもの、異界めいたもの、そして美しいものを垣間見てしまったという強烈な幻視体験をする。しかしその幻視をただの幻視で終わらせないためであろう、池澤夏樹は次のような言い回しを繰り返すことで渡辺京二とはことなる方法で我々の視点をずらそうとする。

石牟礼道子の文学は常に声に満ちている。『苦海浄土』を読んだ者が聞き書きと勘違いした理由の一つはそこに明らかに患者たちの声が聞こえていたからだ。

（『されく魂　わが石牟礼道子抄』）

読んだ者が迂闊にも「聞き書きと勘違い」したのだという。石牟礼道子がまったくの無謬とは言わないまでも、ノンフィクションとして読んだ原因はあくまでも読者側の錯誤にあるという理論。ここに至って私は言葉を継げなくなってしまう。テキストを読み違えたと宣告された私は沈黙を強いられてしまう。

そこでやむなく、こう思い直すことにする。池澤夏樹は、石牟礼道子を論じるにはあまりに彼女に近づきすぎているのだと。石牟礼道子の仕掛けた呪術に取り込まれたと言ってもいい。そして私は池澤夏樹にこう反論するだろう。『苦海浄土』には、ノンフィクションを装うことによって、若干の倫理的な疑義が生じていないだろうかと。そして池澤は疑義を希釈するために、いくばくかの責任を読者へ転嫁してはいないだろうかと。倫理的な議論の回避そのものは、それはそれで作品の純粋性を守ろうとする者の善意を動機とするナチュラルなふるまいである。ただしそれら常識的な動機からは、しごく常識的でありふれた評価しか生まれない。

「弱者の側に立つ」。それから「周縁の視点に立つ」。そして「女性の視点に立つ」。この戦後の状況を本にして、しかも非常に尽きぬ大きな力を持っている。これから先我われが生きる世界はどんどん悪くなるでしょう。良くなる理由はない。格差が広がり、もっとひどいことになる。そういうときに、みんなの心に響く強い文学がここにあるじゃないか、と。

（『池澤夏樹、文学全集を編む』）

このような評では、『苦海浄土』が時代の価値観によって評価が左右されるような凡百のテキストになり下がってしま

いかねない。引用で語られる弱者も世界の悪化も、それこそ池澤夏樹が希望する片方の価値観でしか語られない。丸の内のチッソ本社に乗り込んで凄んでみせた水俣の人々は、弱者とも強者とも断言できない別の何者かであったように見えた。私が『苦海浄土』において覗いた深淵は、時とともに移ろう価値観や特定の視点に左右される程度のものではなかった。もっと恐ろしい不可測の深淵、作中の言葉でいえば「奈落の底」とでもいうべきものだった。池澤夏樹は『苦海浄土』を世界文学全集に採った。しかしそのままでは、データベース上に並べられるだけの過去の記録にすぎない。真の意味でこれからも長く読み継がれるために、より相応しい評価がほしいと願う。

だからあえて断言したほうがいい。『苦海浄土』は、読者のミスリードを誘うことを強く意図したテキストであると。『苦海浄土』第一部は出版当時、少なくともプロモーション上ではノンフィクションの体裁をとった。大宅壮一賞にも選出された。ある種のスキャンダラスな予感を排斥する必要はない。『苦海浄土』はそれだけで十分に強靭なテキストである。そして、元来にして読者のミスリードを意図的に誘うテキストであるという前提をくぐり抜けてはじめて何事かを語ることができるはずだ。言ってしまえば、患者の心情を恣意的に選別してあたかも現実かのように描写しているという当たり前の事実。あらためて『苦海浄土』を読むためには、ここから始めるべきであろう。

では、石牟礼道子はノンフィクションという装いによって何を表現しようと目論んだのか。それは患者たちが内面と外面にまとう荘厳さである。「苦海」という深く重い現実に対抗するために、患者の姿を抽象的なイメージに留め置かず、作中における事実のレベルにまで押し上げた。

皮膚も肉も一重のようにうすい少年の頭骨と頬がわたくしのあごの下にあった。わたくしたちは、目と目でちょっと微笑みあった。

それからわたくしは彼の頭にあごをじゃりじゃりこすりつけ、さあ、といって爺さまのところに少年を持っていき、えびのように曲がって唇からぷくぷくと息を洩らしながらねむりこけた爺さまの胸と膝を押し広げ、その中に少年を置いた。

（『苦海浄土』）

水俣病患者がまとう美しさは、単に置かれた環境の醜悪さをカモフラージュするものではなく、救済のアレゴリーを構成する現実的な成果として表現されている。石牟礼道子は、近松門左衛門のドラマツルギーを参照する。『曽根崎心中』の道行きの男女が荘厳されるさまに深く思いを寄せる。水俣病患者も同様に、ノンフィクションという装置によって荘厳

された。そのため石牟礼道子の手によって、患者自身は呪詛を控えさせられている。また、他責よりも自責をより多く選択させられている。

我が食う口を養えんとは、自分の手と足で、我が口は養えと教えてくれらいた祖さまに申しわけのなか。

うちのような、こんなふうな痙攣にかかったもんのことを、昔は、オコリどんちいいよったばい。昔のオコリどんさえも、うちのようにはこげんしたふうにゃふるえよらんだったよ。

うちは情けなか。箸も握れん、茶碗もかかえられん、口もがくがく震えのくる。付添さんが食べさしてくれらすが、そりゃ大ごとばい、三度三度のことに、せっかく口に入れてもろうても飯粒は飛び出す、汁はこぼす。気の毒で気の毒で、どうせ味もわからんものを、お米さまをこぼして、もったいのうてならん。三度は一度にしてもよかばい。遊んどって食わしてもろうとじゃもね。

（『苦海浄土』）

神仏の不在の代わりに、本来神仏が有するはずの荘厳は患者ひとりひとりに分有された。それもまた、理性の個々人への拡張と似ているという意味で近代的といえようか。「苦海」が逃れられない現実だとすれば、救済の予感も現実でなければつり合いがとれない。「苦海」と同じだけ「浄土」の予感についてリアリティがなければならない。少なくとも石牟礼道子は水俣病患者を荘厳するため、そのように考えたのではなかろうか。

彼の眸は泉のかげからのぞいている野ぶどうの粒のように、どこからでもぽっちりと光っていた。

（『苦海浄土』）

石牟礼道子が表現した荘厳の先にあったものは何だろうか。それは、もう絶たれてしまった救済に代わる、別世界の創造という手向けだったのかもしれない。

ノンフィクションという装いは、「苦海」に生きるあらゆる人々へ光をあてるための装置である。アリョーシャはイワンの創作「大審問官」を終いまできいた。そしてイワンの創作の最後に、かの人がセヴィリアの大審問官にしたように、現実のイワンその人にそっと口づけをした。この行為は悩めるイワンへの慰めを目的としただけでなく、またアリョーシャ自身の決意を表明しただけでもなく、「大審問官」作中の、つまりフィクションの内部における口づけの意味をより強化する役割も兼ねていた。アリョーシャに口づけされたイワンは「実地で盗作と来たか！」「今のキス、さっきの詩の盗作じゃないか！」と有頂天になって叫ぶ。物語内の行動が現実

にコピーされ、創作の精神が着実に受容されたことの戸惑いと喜びが表されている。『カラマーゾフの兄弟』で繰り返される苦悩し絶望する者への接吻は、『苦海浄土』で現実のこととして施される荘厳と同様の役割を果たしている。たとえ言葉で救うことは叶わなくとも、接吻という行為で寄り添うことはできる。また、水俣病患者を荘厳するという手法で静かに寄り添うことができる。

石牟礼道子がフィクションだけでは眼前に広がる「苦界」に抗い難いと判断したことは、結局フィクションの可能性を信頼しえなかったということなのかもしれない。しかし、それでいいと思う。フィクションの弱さや柔らかさは、その加工のしやすさと同義である。だから、ある現実の一側面をフィクションへ投影することが可能であるように、同時にフィクションに現実へ超越させる意志を織り込むこともまた可能である。おそらく『苦海浄土』にもノンフィクションという装置によって、そのような意志が込められていた。現実と創作とを重ね隣接させ束ねられたものは、時に多くの留保や曖昧さを含む。『苦海浄土』にも石牟礼道子の深い逡巡の足跡が刻まれている。

参考

『苦海浄土　わが水俣病』　石牟礼道子　講談社
『されく魂　わが石牟礼道子抄』　池澤夏樹　河出書房新社
『池澤夏樹、文学全集を編む』　河出書房新社
『カラマーゾフの兄弟』　ドストエフスキー　亀山郁夫訳　光文社
『旧約聖書ヨブ記』　岩波文庫

（浜名区）

評　論

［市民文芸賞］

パンデミックを経験して

中村太一

パン神の叫び

「パンデミック」の語源を引くと、「パン神」が自ら恐怖の声を上げたことにある。

私は「ｐａｎ」の「ｄｅｍｏｓ」の中に巻き込まれ、「他人ごと」を自負する私も、「パンデミック」を構成する一員となっていった。

旧約聖書の『出エジプト記』にパンデミックを思わせる章がある。

モーセはヘブライ人を酷使するエジプト王に、彼らを解放しないと「禍」が起きると説いた。王はそれを拒否した。するとエジプトの都にブヨ、蛙が溢れ、疫病が蔓延していき嵐が襲った。モーセは神の指示で「過ぎ越し」の祭りを行った。

このエピソードは現代におけるパンデミックと共通する。

エジプトの繁栄がもたらしたものの象徴が、ブヨや蛙の大量発生であり、疫病の蔓延だったこと。土地を開拓すればするほど、私たちは「未知の新たなる存在」と接触するようになる。エジプト王権は、エジプト人を富ませるための「食料資源」と、生産するための「人的資源」で成り立っていた。そのために農地を広げ、生産性を上げるための多くの労働力が求められた。

パンデミックの原因は「人間」と「他の生命体」との「閾」の崩壊だという論がある。『出エジプト記』が教えているのは、その「閾」の崩壊だと考える。

神がヘブライ人に指示した「過ぎ越し」の祭りは、今でいう「ロックダウン」ではないか。『出エジプト記』に、ヘブライ人に対し神が家に閉じこもることを勧める場面がある。

神は家の扉に初子の羊の血を塗ることを教える。また種無しパンを食べて七日間を送ることを勧める。その行為に背く

ことは、死を意味した。

「種無しパン」は、今の時代で例えれば、生きるための最低限必要なもの。「家に閉じこもる」は、家族を疫病から守るだけでなく、絆を深めることのように読める。

モーセが王に、神から与えられた力を見せる場面がある。しかし、王の家臣にも魔法を使える者がいた。王は側近の「魔法使い」を根拠に、モーセはその一人だと軽んじる。現代でいうならその「魔法使い」は「情報」に置き換えられるのではないか。コロナがもたらした大量の情報は、「真実」よりも「パンデミック」という現象を煽るように動いているようだ。「パンデミック」が炙りだしたのは、社会構造そのもののように思える。

歴史のエゴイズム

教科書をめくると歴史は戦争そのものであると分かる。その事実は私たちを見つめている。

学校の授業でＮＨＫの「映像の世紀」を観た。第二次世界大戦中のその映像には、私たちと同じ目をした人間が映っていた。マリリン・モンローに魅了される彼らの欲望や、敗戦したドイツ人の後悔を映した目は、私と歴史を隔てていたものを消し去った。歴史をつくったのは人間であり、人間のもつエゴそのものであると感じた。

感染症の原因であるウイルスや細菌は、特定の地域に存在するものだった。ところが植民地政策による人口の増加によって、感染症は限られた地域ではなく広がっていった。ハンセン病は東アフリカで誕生したといわれている。しかし、民族の移動や十字軍の遠征などでヨーロッパに拡大した。また、天然痘はスペイン人がインカ帝国にもたらし、滅亡させる原因となった。

１９１８年に流行したスペイン風邪は、アメリカで初めて確認された。アメリカが第一次大戦で連合国側に参戦すると、ヨーロッパ全土に広がった。そして、日本や中国にも拡大し、世界人口の三分の一が感染したという。数でいえば約五億人。現在のコロナ感染者数と同じだった。

植民地政策と東西冷戦の終焉から生まれたのが、グローバリズムだ。世界規模で経済活動は起こり、人や物の大量移動が、可能になった。

新型コロナウイルスが瞬時に世界に蔓延したのは、そこにあるのだろう。

コロナの蔓延と死の情報は瞬く間に世界に広がっていった。ある意味で、パンデミックがグローバリズムの問題点を炙り出したともいえる。

その問題点は、「格差国家」を先進国が意図的に作ったことだ。

アフリカの歴史を辿れば「飢餓」の歴史だ。その飢えの原因をゴリラ研究者である山際寿一氏が新聞のコラムで述べていた。先進国が彼らの食の摂りかたを変えたことにあると。

彼らは狩猟採取で食を得ていた。が、先進国が農耕作物で

ある小麦を使ったパンを普及させた。小麦は地誌的にアフリカでは生産できない。自給自足ができないために、戦争や紛争になると飢えが起こると、山際氏はいう。これは「パン」は生産性を上げるが、飢えも日常的に起こるという自己矛盾を表している。

先進国は途上国を動かし自国に必要なものを得る。土地を拡張し、「閾」を越えることで、先進国は自国を豊かにした。この在り方は、かつての「植民地」と重なる。様々な感染症は必然として表れパンデミックを起こしていったのだ。

エボラ、エイズなどの感染症は発展途上国で生まれた。感染症が起こる原因の一つが他の生命体と人との接近だとしたら、生産性を上げるために「閾」を越えてしまった先進国の責任は大きい。かつての感染症は風土病としてあり地域が限定されていた。だがグローバル化がコロナをどの国家にも平等に感染させていったのだ。

二人の思想家

イタリアの思想家パオロ・ジョルダーノは、『コロナ時代の僕ら』でパンデミックに対する人間の在り方を記した。この本は２０２０年４月に出版された。彼は「運命論への反論」という章で、この感染症の急速な蔓延がもたらす「医療システム崩壊」と「人道的」なものを記述した。その「人道的」なものを、彼は「超感受性人口」と呼んでいる。それは高齢者などの健康弱者を指している。だから「感受性人口」である健康者は「流行を防ぐ隔離線」であるべきだとジョルダーノは論じる。２０２２年を生きる私たちはコロナに対する医療や対処療法の情報を得ていても、「隔離線」への認識は薄い。ジョルダーノは「僕らのすること・しないことが、自分だけの話ではなくなるのだ」という。そして彼は「このことをずっと覚えていたいものだ。今回の騒ぎが終わったあとも」と示唆した。

パンデミックの騒ぎを過ごすためには、緊急事態宣言やロックダウンのような対処療法だけでなく、「他者」と「自己」との関係に目を凝らす必要があるだろう。

ジョルダーノは「日々を数える」の章で、「自己中心的」に生きている私たちを炙りだすようにパンデミックを描いている。

私たちは、学校や社会など、整備された時間の中で生きることを強いられている。小さなウイルスが登場し、そのシステムに打撃を与えた。そこで初めて私たちは、大量消費社会の中でどれだけ時間に支配され、あらかじめ決められたタスクを一つずつこなしていたか、コロナウイルスにより考える機会を与えられた。

例えば、「学校へ行く」「友達と遊ぶ」「ご飯を食べる」こと自体が目的になっている生活ではなかったか。今日食べた朝ご飯の味、学校に行って学ぶ意味、友だちが自身に与えている影響を考えずに、ただこなしていたのではないか。自分の時間が増えたことで、その意味を考える。

『旧約聖書』の詩編第９０篇に「われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください。」とある。私たちはコロナにおいて感染者数や濃厚接触者数、低迷した株価などを数えてきた。しかし、ジョルダーノは「日々を価値あるものにする数え方を学ぶ」と捉えた。

それらの価値を数えることが私たちにはできるはずだ。

思想家スラヴォイ・ジジェクも、著書『パンデミック』で、国家単位による「利己的」な在り方を論じている。

武漢から新型コロナウイルスが発生したといわれているが、中国はそれを隠ぺいした。ジジェクはその隠ぺいに対して、武漢市民に「反消費社会主義的な考えなど全くない。」と論じる。

コロナウイルスは、言葉を換えれば消費社会のイデオロギーを覆し、新体制を築こうとする革命家のようだ。パンデミックを防ぐためには「完全な無条件の連帯と世界的に協調した対応が必要」であり、それは「あたらしい共産主義」だとジジェクは確信をもっていう。「私たちは大量消費社会に隅から隅まで浸されており、誰かを守るための自由と平等を掲げる社会は、幻想にすぎない」と。

ジョルダーノはジジェクの言葉を受けるように人間の「死」と「時間」について語った。

人は限られた時間を生きる。それは「死」に意味を持たせることだが、私たちはそのことを意識していない。そのくせ時間は価値のあるものだと信じ、無駄を極端に嫌い、移動中には耳にイヤホンをしてオーディオブックを聴き、映画を倍速で見る。

人は死を恐れるが、都合の悪いことを忘れる機能をもった脳は、その事実を日頃考えさせない。一方で生きているうちに少しでも多くの、目先の利益にありつけるよう常に高いアンテナを張り巡らせている。

コロナウイルスの到来は、危機感を与えた。「この享楽がウイルスによって妨げられようとしている」と。かつての享楽のために早く終息を願ったはずが、目の前の享楽のために我慢に耐えかねた人々が感染を拡大させてしまった。このように利己は互いにぶつかり、全体を破滅させてしまう。「生」は利己的であり、「死」を受け入れることが「利他」である、という考えが浮かぶ。

「利他」とはなんだろうか。「利他」は必ずしも「利己」の対概念として存在するものではなく、両義的なものだ。

私はジジェクの述べる「無条件の連帯」とは無意識に発生するものだと考える。現代において、アフリカ諸国にワクチンを「あげる」のではなく、「共有する」という視点が必要になるのではないか。では「死を受け入れる」とはどういうことだろうか。かつて病気にかかることは死を意味していた。しかし、医療の発達により充分に生きながらえることが可能になった。そして、人々の心の中には自分が「不死」である、という幻想が根付いてしまったのではないか。その幻想がコロナの感染を拡大させ、「超感受性人口」を危険にさ

らした。
私たちは「生」と「死」が共にあることを忘れている。その思いを取り戻すこと。それが「生きる」ことに意味を持たせるのではないか。

孤立する社会

ジジェクは「白いマスクでさえ、待ち望んだ匿名性や認知の社会的圧力からの解放を提供している」といった。それは人々の孤立を暗示させる。自粛生活によって、私たちは人と直接関わらずに生活することが可能であることを知った。同時に匿名性や不透明性をもって人と関わることにも疑問を持った。

問題として顕著に表れたのはSNSでの誹謗中傷やデマの拡散だ。コロナに感染した人を差別したり、偽の情報で人々を混乱させたりすることが、「匿名性」によっていとも簡単にできるようになった。SNSでの他人への攻撃は「孤立」が生んだ「自己表現」と捉えられる。自粛生活はパンデミック以前に抱えていた人々の孤立をさらに深めてしまったのではないか。

ネット上の匿名という存在は果たして、「自分の外」に属するものなのだろうか。人々は孤独を感じたとき、思考を自分の「内」と「外」の双方向に向けることができる。例えば直接対話をするとき、それは自分と他者と意見を交わしているので、「外」である。また「孤独」を感じる原因を見つめ直すことは、自分の内面を見つめることであり、「内」だ。しかし匿名性を帯びた相手と話すとき、私たちは彼らの不透明な部分を想像で補い、ときにそれは「偏見」と呼ばれる。つまり自分から発生する一面をもった匿名の者は、「内」と「外」を持ち合わせた、得体の知れない存在となる。

対話とは意思伝達であり、自分の考えたこと思ったことを「外」の相手に伝えようとする行為である。

「昼ご飯」を例に挙げる。私がクラスメイトと向かい合って昼ご飯を食べたのは、中2の給食が最後であった。そのとき、給食について「どんな味?」と訊かれたら、なんと答えただろうか。「うまい」の三文字だったはずだ。具体的に訊かれたとしたら（私は給食の春巻が大好きだったので）「この春巻、皮がパリッとしていて、中の肉がジューシーですね」と答えていただろう。果たしてこれは私の感想といえるのだろうか。

J．ボードリヤールは『世紀末を語る』で、大量消費が目的となった社会での私たちの思考について、「すでにわれわれは死の段階にたどりついた」と述べている。テレビで流される食品特集は、私たちの購買意欲を掻き立てるためにつくられたものだ。春巻についての感想は、テレビの食レポでよく耳にする「外はパリッと中はジューシー」というフレーズが無意識に表れたものであり、私自身が感じたものではない。あの春巻は、肉だけじゃない、細かく刻まれたにんじんや玉ねぎ、それらの個性とのバランスが完璧で、ご飯にとて

もよく合っていた。

コロナ以前ですら、対話がうまくできなかった私たちは、パンデミックを経てどうなってしまったのか。私の学校の昼休みでは、机を前にし、一言も喋らないよう念押しされている。もはや弁当の味は意識せず、家で弁当の感想を訊かれたときには「おいしかった」と笑顔でいうだけになってしまった。

ボードリヤールのいう「死」とは、自身の感受性の「死」と、自己完結で済まそうとする他者との関係の希薄さが生んだ、社会的存在としての「死」であると考える。

触れること

私の母は足音が大きいので、家全体に響く。その音は、同じ空間にいることを肌で感じさせてくれる。その音がないと「なにかあったのではないか」と考えてしまうほど、私にとって重要なものだ。空間を共有することは、生を共有することでもある。

コロナ生活の中、リモートで会話をすることが多くなった。移動の手間が省ける一方、ある問題が生じる。

私は小学4年の頃から毎年、袋井市出身の池田千尋監督が主催する「映画をつくろう」というワークショップに参加してきた。コロナ感染が拡大していた２０２０年、普段は袋井に集まり、チームの中で監督やカメラマン、役者を決め、企画や撮影を行っていたが、その年は「リモート」で映画をつくることになった。企画をＺＯＯＭで話し合い、撮影は個人が与えられたシーンをスマホで撮影する。もし現場でリアルタイムに撮影していれば、私はチーム監督がどこで納得できないかを察し、共に意見を出し合えたはずだ。「このシーンを撮って」「もうちょっとこうして」と指示のみが伝えられると、そのシーンに対して終始、疑問や不満が絶えなかった。

私たちは人の命を目だけでなく、五感をつかって把握する。画面の前の視覚で形成された人は、人ではない気がした。ちょうど自分の写真を見るときの「これは自分ではない」という錯覚と同じように「あなたは誰?」という疑問が生まれた。その疑問をもったまま果たして、対話ができるのだろうか。誰に自分の意思を伝えればよいのだろうか。

ロマンチックな映画をつくろうと、主人公に「愛する人しか触れられない」という設定をする者はいないだろう。

コロナ禍で最も失われたものの一つは「触る」ことだ。

感染症対策とは別に、日常生活で触ったものを「汚い」と感じ、手を洗う機会が家の内外で無意識のうちに増えた。むやみにものを触らないという考えが生み出した行動でもある。私が好きなロックバンドのコロナ以前のライブ映像を見ていると、観客がぶつかり合い押しつぶし合い、集団で会場に円を描いている。私は違和感と嫌悪を覚えた。なぜ「嫌悪」なのか。それは現代で「触る」ことがタブー視されているからであって、これは社会にとって危険なことだ。

「触る」ことは「受け入れる」ことだ。ファンタジー映画

でも巨大な怪物と意思疎通をする初めに、その手に触れることがある。「触らない」ことは相手に「敵意」があることを示し、同時に人やものへの敬意が失われることだ。

「マスク詐欺」という言葉が流行していた。他人のマスクで隠された部分を、理想で補ってしまうので、実際の顔と想像とのギャップにがっかりしてしまうことをいう。他人の顔にがっかりするのは失礼だが、がっかりされるのも辛い。

他人には誰にでも未知の部分があるのに、それを「偏見」という名の想像で補う。不透明性は他人に不安を与え、その不安が集団で募ると差別を生んでしまう。相手の顔に偏見を常に持つことで、私たちは相手がどんな人か理想を押し付ける習慣が付き、実際とのギャップに落胆させられる。そのことで疑いの念を持つようになり、人を信じることが難しくなるのだ。

一方でマスクをしないと差別、誹謗される時期があった。自粛警察が現れ、医療従事者への敬意が欠けていたときだ。

マスクから見える「不信」や触れ合いの「敵意」、リモートでの相手への「疑問」、そして対話の「思考停止」が、人の「孤立」を深めてしまっているのではないか。

未来のパンデミックのために

ジョルダーノは「そもそもパニックとは、ギリシャ神話のパン神のいわば自己循環的発明だ」と記した。彼のいう「自己循環的発明」は、今も進行している新型ウイルスに対する私たち人類の在り方の比喩ではないか。

人々は「見えるもの」を「見ようとしない」。そして、雑多な情報社会の中で、正しいものを「選ぶ」ことができていないのでは。

パンデミックは、国の格差、社会的格差、偏見や差別、共同体や家族の劣化などを炙り出した。私たちは今、生き方を問われている。

それらを乗り越えるためには、ジジェクのいう「無条件の連帯」が、鍵となるのだろう。

「無条件の連帯」の意味は、私たちと行政、医療専門家、学校、地域との間に生まれた不信感を取り除くことを指すと考える。それは「私」と「他者」の双方が「不信」を解くことでもある。パンデミックを終わらせるための手段はそこにあるのではないか。

しかし現代の民主主義国家や権威主義国家は、エゴイズムの中でフリーズしている。

コロナウイルスという「小さな革命家」は、私たち人間の繋がりを、「自己循環」として示した。家族や友人、共同体との関わりもまた、「自己循環」として「閉じて」いたのだと気付く。その「閉じられていた関係」を、もう一度見つめ直す必要があるのではないか。

「無条件の連帯」は「独りで立つ」ことから始められる。家族、友人、恋人たちが水平な心の距離を取る。柔らかな対話と触れる喜びの接近が、新たな空間を作る。私たちの目指

す社会はそこにあると考えたい。そのとき、日常は特別なものとなるだろう。

パンデミックは私の、私たちの写し絵だ。それは「パン神」の叫びが、自分の叫びと認識できないことでもある。

（中央区）

参考

『出エジプト記』
『コロナ時代の僕ら』パオロ・ジョルダーノ
『旧約聖書』
『パンデミック』スラヴォイ・ジジェク
『世紀末を語る』J．ボードリヤール

［入選］

映画『有りがたうさん』の清水宏監督について

小粥章司

はじめに

以前、浜松にゆかりのある童謡や唱歌を調べた際、浜松出身の作詞家清水みのるの従兄に清水宏という映画監督がいたことを知った。清水宏は明治三十六年（1903）、今の浜松市天竜区佐久間町で生まれ、小学二年から東京の小学校に転校し、卒業後、父親の希望で浜松中学に進学したという。中学では水泳部に入ったが、当時流行の活動写真（映画）に興味を持ち、中退して映画界を目指して上京したようである。

そのため浜松出身という印象は薄く、市の木下恵介記念館や文芸館でも資料収集の対象にはなっていないが、昭和十六年に浜松で撮影した『歌女おぼえ書』や、昭和十一年に伊豆の天城街道で撮影した川端康成原作の『有りがたうさん』など、静岡県内で撮影された作品が少なくないことがわかった。

浜松出身の映画監督といえば木下恵介監督が有名だが、清水監督はその一世代前、まだサイレント（無声映画）の時代の大正十三年から戦後の昭和三十年代半ばまで活躍したという。弱冠二十一歳で松竹の監督になり、戦後は独立し、生涯に百六十五本もの作品を撮った「天才的巨匠」として海外でも高く評価されている清水宏監督について調べてみた。

一、掌の小説『有難う』と映画『有りがたうさん』

川端康成の掌の小説『有難う』は、道を譲ってくれた通行人や自動車、荷車などに一々「ありがと～」と礼儀正しく声をかけることから、「有難うさん」というあだ名で呼ばれている伊豆半島の路線バスの若い誠実な運転手と、町へ身売りされることになった十七歳の娘とその母親の話である。

柿の豊年の秋。港のバス待合所で母親は有難うさんに、娘の身の上話を始める。有難うさんは黙ってうなずき、「お婆さん、一番前へ乗んなさいよ、前ほど揺れないんだ。道が遠いからね」とやさしく気遣う。母親が余程やつれていたのか、彼にはお婆さんに見えたのだろう。母親は終点の駅に着くなり有難うさんに追いすがり、「この子がお前さんを好きぢゃとよ」といい、どうせ見知らぬ人様の慰み物になるならと手を合わせて拝む。

哀れな母親の必死の願いに、有難うさんがどう答えたのかはわからないが、翌朝の母親の繰り言から、娘には泣かれ、有難うさんには叱られ、娘の身売りは来春まで半年先送りになったことがわかる。帰りのバスにはひとまず安堵した娘と母親の姿があった。（要約）

大正十四年（１９２５）発表の、文庫本でわずか四ページほどのこの超短編小説に着目し、昭和十一年（１９３６）に自ら脚本を書き、約七十六分の劇映画『有りがたうさん』に仕上げたのは浜松市天竜区佐久間町出身の清水宏監督（１９０３年３月28日～１９６６年６月23日）である。清水監督は昭和初期に松竹の筆頭監督をつとめ、生涯に百六十五本もの作品を撮っているが、女性や子供、按摩、旅芸人、酌婦などの社会的弱者を写実的に取り上げた作品が多く、また箱根や静岡県内各地でロケした作品が多いため、「ロケーション撮影の名手」「孤高の天才映画監督」、「銀幕の即興詩人」などと呼ばれている。

主な作品には『有りがたうさん』のほか、元妻の田中絹代が主演した『簪』、高峰三枝子主演の『按摩と女』、大河内傳次郎主演の『小原庄助さん』、佐野周二主演の『花形選手』、台湾で撮影した李香蘭主演の『サヨンの鐘』、朝鮮で撮影した短編映画の『ともだち』、記録映画の『京城』などがある。

近年は上映の機会が少ない「忘れられた巨匠」の一人だが、大人の事情に翻弄される子供たちを描いた坪田譲治原作の『風の中の子供』と『子供の四季』、非行少年少女の更生施設を描いた『みかへりの塔』、小児マヒによる身体障がい児の養護施設を描いた『しいのみ学園』、戦争孤児の自立を描いた『蜂の巣の子供たち』など、子供を中心にした映画を数多く撮ったため「子供映画の巨匠」ともいわれている。

二、清水宏監督の映画『有りがたうさん』

映画『有りがたうさん』は小説『有難う』をもとに、『伊豆の踊子』など川端の他の小説からの引用や田舎の路線バスならではのエピソードを折り込んで展開する典型的なロードムービー（道中記）で、当時としては画期的な全編伊豆半島でのロケーション撮影による映画である。上原謙（加山雄三の父）扮する「有りがたうさん」の運転するフォード製の小型バスには車掌はおらず、最初の乗客は、身売りされる娘（築地まゆみ）とその母親（二葉かほる）、酌婦風の黒襟の女（桑野通子）のほか、髭の紳士や数人の農民風の男たちである。

小説との一番の違いは、身売りされる娘の未来を暗示する黒襟の女を登場させたことである。彼女は各地の盛り場を渡り歩き、「今では帰る家も分からなくなってしまった」と嘆くが、威張って他の乗客に嫌われている髭の紳士をからかって、退散させてしまう気丈な女でもある。彼女は初めてこの港町に来た時も有りがたうさんのバスに乗ってきたといい、そのとき有りがたうさんからタバコをもらい親切にされたことが忘れられないという。彼女は有りがたうさんにタバコをねだったり、乗客の男たちにポケット瓶のウイスキーを振舞ったりしながら乗客たちを観察するだけでなく、沿道で有りがたうさんに親しく声をかけてくる娘たちにも観察の眼を向け、映画の観客へのナレーターの役割も果たしている。

有りがたうさんの個人情報は若くてハンサムという外見以外ほとんどないが、乗客との会話から、近くシボレーのセコ

ハン（アメリカGM社製の中古自動車）を安く手に入れ、開業を計画していることがわかる。

道中、有りがたうさんから以前「五目並べ」を教わり、「わたしたち強くなったわよ」と無邪気に話す旅芸人の娘（水戸光子）たちと出会うが、その娘の名前は「かおる」といい、川端の代表作『伊豆の踊子』の読者には主人公薫（かおる）を容易に連想させる。清水監督も映画化を熱望しながら会社の意向で実現しなかったという『伊豆の踊子』は『有りがたうさん』と同様に天城街道を行き来する物語であり、小説と映画という違いはあるが、同時代の姉妹編とも言える。

天城峠での休憩時間に、身売りされる娘が拾った小石を有りがたうさんが受け取り、それを谷間に投げるシーンや、互いに手紙を書くことを約束しあう場面が美しく詩情豊かに描かれている。観客はここで初めて二人がひそかに惹かれ合っているのではと気づかされるが、過剰な説明はない。

そのあと、信州の新しい道路工事現場へ移動する朝鮮人労働者の隊列から白い服を着た朝鮮人の娘（久原良子（くはらりょうこ））が有りがたうさんに駆け寄り、言葉少なに別れを告げる。バスに乗らず、「みんなと歩くの」という、纏綿（てんめん）とした別離が胸を打つ。娘はこの地で亡くなった父親のお墓に忘れずに花と水をあげてほしいと有りがたうさんに頼む。何があったのか、ここでも娘との関係や父親の死についての具体的説明はない。

人気者の有りがたうさんをめぐる娘たちの様々な境遇を見定めた黒襟の女は、有りがたうさんの耳元でこうささやく。

「ありがたうさん、東京にゃ狐や狸ばっかりなんだよ」
「シボレーのセコハンを買ったと思やぁ、あの娘さんはひと山いくらの女にならずに済むんだよ」
「峠を越えてった女はめったに帰っちゃこないんだよ、わかったかい、ありがたうさん」

翌日の天城街道は日本晴れ。有りがたうさんのバスは明るい表情の娘と母親を乗せ、半島の南の港町へ帰ってゆく。娘は有りがたうさんに、「きのうのあの女の人に手紙をだしてお礼が言いたいわ。あの人いい人だったわね」と話しかけ、沿道の子供たちは万歳を繰り返す。小説では身売りが半年先延ばしにされただけだが、映画ではハッピーエンドに変えられ、『伊豆の踊子』の有名な台詞（せりふ）「ほんとうにいい人ね。いい人はいいね」を引用して明るい未来を暗示している。

暗く重いテーマを孕み、映画的省略や転換も多く、観客は想像力で補うことを迫られるが、テンポの良い滑稽なシーンや作曲家堀内敬三の軽快な音楽、明るい伊豆の風景などと相俟って、詩情豊かな文芸映画になっており、清水監督の映画作家としての評価を高めた記念碑的作品でもある。

三、清水宏の出自と志向性

清水宏監督の作品は生誕一一〇周年の二〇一三年に東京のフィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）で開かれた大規模な回顧展で、現存する五十作品が二か月にわたって上映され、二一年にはパリでも同様の規模で回顧上映（末尾資料

参照）されているが、出身地の静岡県では全く顕彰の動きがない。

おそらくその原因の一つは静岡県における認知度の低さにある。確かに清水宏が生まれたのは今の浜松市天竜区佐久間町だが、当時は静岡県磐田郡山香村西渡（やまかむらにしど）という、天竜川中流域の山村であり、浜松出身というイメージは希薄で、地元の佐久間町でさえ映画監督清水宏を知る人はほとんどいない。

清水宏の父、幾三郎は佐久間の久根鉱山に赴任した古河鉱業の社員で、宏は山香村の山林の大地主（大橋定次郎家）の娘との間の一人っ子として生まれたが、小学二年から親の都合で東京芝桜川町の神明小学校（現・港区立御成門小）で学び、中学は父親の希望で浜松中学（現・浜松北高）に進んだという。小学校では餓鬼大将で、同級生に後の映画監督滝沢英輔、前進座の俳優河原崎長十郎がいたという。中学では水泳部に所属したが、浜名湖の鉄橋から飛び込んだ際、太腿に大けがを負い、その傷の後遺症に後々まで悩まされたという。

しかし、浜松中学で学んだという確証はなく、同校の卒業生名簿にも名前はない。当時、経済的理由による中学の中途退学は珍しくなかったが、宏の場合は大方、流行の映画に夢中になり、映画界を目指して中退して上京したのであろう。

また清水監督の学歴として、「札幌農学校中退」とか「北海道帝大中退」と書かれていることがあるが、当時は映画界でも、大卒の学歴が幅を利かせ始めていたので、年若い清水がついたハッタリを会社もあえて追及しなかったのだろう。

ただ北大とのわずかな縁があったとすれば、映画監督になることを夢みていた宏少年が、東京の映画館で映写技師をしながらめぐり合った映画界に縁のある人物が、北大にも縁のある科学評論家の原田三夫（みつお）（１８９０～１９７７）だったことがあげられる。子供向きの科学雑誌『子供の科学』を創刊したことで知られる原田三夫は名古屋市に生まれ、愛知一中卒、札幌農学校中退、名古屋の八高、東大理学部植物学科卒、東京府立一中教諭、北海道大学教授という経歴を持っていたので、「北大の先生」だった人に師事したことは間違いない。原田はそのころ科学教育映画への進出を考えていたので、清水宏を撮影技師として育てようとしていたのである。また原田の札幌農学校時代の恩師は当時英文学を教えていた作家の有島武雄（１８７８～１９２３）で、宏少年も有島文学に傾倒していたという。北海道への憧れがあったのは確かであろう。

映画界入りを熱望していた宏は原田の教えにしたがって熱心にシナリオを書き、自信作が松竹蒲田撮影所の選考に合格したので、原田が保証人になり、松竹に助監督として入社することができたという。清水宏は助監督を一年半勤め、一九二四年六月に二十一歳という異例の若さで監督に昇格した。同じ一九〇三年生まれで親友だった小津安二郎監督でも入社から監督に昇格するのに約四年かかっているので、異例のスピード出世でもある。普通は五年以上かかるという。

なお、清水は監督昇格前に故郷に近い二俣町（ふたまたちょう）（現・浜松市

天竜区）で徴兵検査を受けたが、太腿のけがの後遺症のためか丙種合格（実質不合格）となり、兵役は免れている。松竹では百四十本の作品を監督し、筆頭監督にまでなったが、終戦を機に松竹を退社した。

その後、清水は親譲りの天竜の山林を売って得た資金で戦争孤児を保護し、独立プロを作って『蜂の巣の子供たち』などの製作に大金をつぎ込んだと言われている。その行動を見ると、やはり親譲りの北海道ニセコ町の広大な農地を一九二二年に小作農民たちに無償で解放し、共有制の農業組合を実現させた有島武雄の共産主義的ユートピア志向の影響が感じられる。一九四九年に撮った『小原庄助さん』も先祖伝来の財産を使い果たす話であり、共感する所があったのだろう。

続編の『その後の蜂の巣の子供たち』では恩師の原田三夫が「原田先生」の役でゲスト出演しているが、清水監督ならではの恩返しだったのであろう。原田は昭和二十八年（１９５３）に火星の土地の「分譲予約証」なるものを発行する日本宇宙旅行協会という団体を作り一時話題になったが、やはりユートピア志向の人物だったのかもしれない。

清水宏は一九六〇年頃には映画界から事実上引退し、京都で陶芸や仏像巡り、後輩の作るテレビドラマなどを楽しむ悠々自適の生活を送っていたが、一九六六年六月二三日に京都市の自宅で、持病の心臓病の発作で亡くなった。享年六十三。死の前日まで次回作の構想を周囲に語っていたという。お墓は京都の大徳寺大光院に造られたが、遺灰の一部は故人の遺志に従って生まれ故郷の天竜川に流されたという。

四、清水宏監督と従弟（いとこ）の作詞家清水みのる

清水宏と童謡『森の水車』で知られる浜松市伊左地町（いさじちょう）（旧浜名郡伊佐見（いさみ）村伊左地）出身の作詞家清水みのる（１９０３～１９７９）（本名は實（みのる））が、学年は違うが、同い年生まれのいとこ同士だったことは、地元でも知る人はほとんどいない。しかし、一九六六年に宏が亡くなった翌年、清水みのるは雑誌『浜松百撰』に随筆を寄せ、自分のレコード界入りは「私の従兄で映画監督の故清水宏のすすめがキッカケだった」とはっきり書いているので、いとこ同士だったことは間違いないだろう。

清水みのるの実家は明治初期、京都府丹後地方或いは兵庫県城崎（きのさき）あたりから当時無医村だった伊左地に招かれた村医の家系で、みのるも医大への進学を期待されていた。ところがみのるは遊び仲間で、中学を中退して映画界に進んだ従兄の清水宏から悪影響を受けたといわれ、喫煙問題で一時停学処分を受け、京都予備校や広島の私立山陽中学に転校した。

その後、浜松中学の四年修了の資格を得て、立教大学英文科を卒業したみのるは、宏と同様に映画界に進むつもりで、兵役後、松竹の脚本部の採用試験を受け、幸い合格したが、宏と同じ映画界に進むことについては家族から強く反対され、仕方なく宏の勧めるレコード界に進んだという。後年、

清水みのるは歌謡曲の作詞家として成功したが、家族の強い反対に配慮したのか、映画界の清水宏とは一線を画していたようで、それぞれの作品に、協力の痕跡は確認できない。

清水みのるの母校伊佐見小学校や伊佐見協働センターなどには顕彰碑があり、小学校には資料を展示する記念室が設けられ、近くの緑地公園には「森の水車」も復元されている。

映画『蜂の巣の子供たち』の続編が撮影された熱海市網代温泉のホテル松風苑には、「蜂の巣庭園」と呼ばれる約四千坪の日本庭園があり、記念碑が残されているが、出身地浜松に清水宏監督を記念するものが何もないのが残念である。

五、清水宏監督の再評価と顕彰

清水宏監督が浜松地方で撮影した作品には、監督デビュー三年目の一九二六年に浜松や浜名湖で撮影した自伝的映画といわれる『悩ましき頃』、二九年に浜名湖でロケした田中絹代主演の『陽気な唄』、四一年に浜松や天竜川、水窪の青崩峠でロケをした女旅芸人の物語『歌女おぼえ書』などがあるが、フィルムが現存するのは『歌女おぼえ書』だけである。

（この作品はビデオ化されたが既に絶版になっている）

『映画読本・清水宏』の全作品目録によれば、静岡県内でのロケ撮影を含む作品は約五十本、全作品の約三割を占めており、特に松竹の大船撮影所から近い伊豆半島周辺の温泉地は清水監督のお気に入りだったようだ。静岡県内でこれほど多くの映画を撮った監督は他にはいないのではないだろうか。現存するフィルムは百年近い歳月を経て、今や記録映画としても貴重な映像遺産になっているといえるだろう。

二〇〇〇年代に入り、映画研究者、映画評論家らによる清水宏監督の再評価が進み、専門的な研究論文や専門書の出版が相次ぎ、主な作品のビデオ化、貴重フィルムの発掘、東京のフィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）、香港、パリなどでの大規模な回顧展、なども行われている。しかし、地方の映画館での上映やテレビでの放映、特集番組などはまだほとんどなく、一般的な知名度が高まってきたとは言い難い。

二〇二三年は清水宏生誕一二〇周年、二四年は監督デビュー一〇〇周年の節目にあたる。出身地の浜松市や静岡県内でも、より多くの清水作品がフィルムによる回顧上映されることを期待したい。

【参考文献】（発行年順）
『映画評論』「清水宏」岸松雄　１９５３年11月・12月
『思い出の七十年』原田三夫　誠文堂新光社　１９６６年
『浜松百撰』１９６７年10月号　60頁（清水みのるの随筆）
『ＦＣ㉓清水宏と石田民三』フィルムセンター　１９７４年
『今日はお墓参り』川本三郎　平凡社　１９９９年
『映画読本・清水宏』フィルムアート社　２０００年／０９年
『ＮＦＣニュースレター』52号「小津安二郎と清水宏の蒲田

時代」田中眞澄　２００３年
『川端文学への視界』川端文学研究会年報18号「掌の小説『有難う』と映画『有りがたうさん』」鄭香在　銀の鈴社　２００３年
『ポリグロシア』２００５年４月「戦時期・占領期の日本における公的世界の支配に対する祝祭的反逆―清水宏のユーモア（１）」丸毛美樹
『銀幕の即興詩人―清水宏の生涯と作品』窪田守弘　風媒社　２００９年
『放送研究と調査』「ドラマづくりは阿吽の呼吸―深町幸男氏に聞く―」松本安生　２００９年夏　深町氏は新東宝で『しいのみ学園』の助監督。のちＮＨＫディレクター。
『ＮＦＣニュースレター』109号「清水宏の映画宇宙」大澤浄　２０１３年
『映画評論家岸松雄の仕事』岸松雄　ワイズ出版　２０１５年
『川端康成スタディーズ』笠間書院　２０１６年
『映画と文学　交響する想像力』「『有りがたうさん』をめぐる追走劇」宮本明子　森話社　２０１６年

【参考映像】ビデオやネットで鑑賞できる主な清水作品

清水宏監督の全百六十五本の作品のうち、サイレントは八十六本、サウンド版は十四本、残りの六十五本がトーキーの作品である。それらのうち、フイルムが残っていて、上映できるものは五十数作品と思われる。現在、主な作品の内、ビデオ化された作品とインターネットで鑑賞できる作品には次のようなものがある。ＶＨＳとＤＶＤにはすでに絶版になっているものもある。ＤＶＤ―ＢＯＸは２００８年発売。

略号：Ｖ＝ＶＨＳ、Ｄ＝ＤＶＤ、Ⓨ＝ＹｏｕＴｕｂｅ
Ⓑ１・Ⓑ２＝ＤＶＤ―ＢＯＸ全２集に収録

『不壊（ふえ）の白珠（しらたま）』（29年）Ⓨ高田稔主演（サイレント）
『七つの海　前篇／後篇』（31／32）Ｖ、Ⓨ（サイレント）
『泣き濡れた春の女よ』（33）Ｖ、Ⓨ　岡田嘉子主演
『港の日本娘』（33）Ｖ、Ｄ、Ⓨ、Ⓑ１（サイレント）
『大学の若旦那』（33）Ｖ、Ⓨ（サウンド）藤井貢主演
『金環蝕』（34）Ｖ、Ⓨ（サウンド）藤井貢主演
『東京の英雄』（35）Ｖ、Ⓨ（サウンド）岩田祐吉主演
『有りがたうさん』（36）Ｖ、Ｄ、Ⓨ、Ⓑ１　上原謙主演
『恋も忘れて』（37）Ｖ、Ⓨ　桑野通子主演
『花形選手』（37）Ｄ、Ⓨ　佐野周二主演
『風の中の子供』（37）Ｖ、Ｄ、Ⓨ、Ⓑ２　河村黎吉主演
『金色夜叉』（37）Ｖ、Ｄ、Ⓨ　夏川大二郎主演
『按摩と女』（38）Ｖ、Ｄ、Ⓨ、Ⓑ１　高峰三枝子主演
『家庭日記』（38）Ｖ、Ⓨ　佐分利信主演
『子供の四季』（39）Ｄ、Ⓨ、Ⓑ２　河村黎吉主演
『信子』（40）Ｄ、Ⓨ、Ⓑ２　高峰三枝子主演
『歌女おぼえ書』（41）Ｖ　水谷八重子主演
『みかへりの塔』（41）Ｖ、Ｄ、Ⓨ、Ⓑ２　奈良真養主演

『簪（かんざし）』（41）V、D、Ⓨ、Ⓑ1　田中絹代主演
『女医の記録』（41）Ⓨ　田中絹代主演
『サヨンの鐘』（43）V、Ⓨ　李香蘭主演
『必勝歌』（45）V、Ⓨ　七人の共同監督作品
『蜂の巣の子供たち』（48）Ⓨ　島村俊作、戦争孤児多数出演
『明日（あす）は日本晴（にっぽんば）れ』（48）Ⓨ（25秒のみ）水島道太郎主演
『小原庄助さん』（49）D、Ⓨ　大河内傳次郎主演
『都会の横顔』（53）Ⓨ　池部良主演
『しいのみ学園』（55）V　宇野重吉主演
『次郎物語』（55）V　木暮実千代主演
『踊子』（57）V　淡島千景主演

フィルムが現存する清水監督最古の作品『森の鍛冶屋』（29年）の短縮版（約18分・サイレント）がＹｏｕＴｕｂｅで鑑賞できるほか、清水宏原作の『按摩と女』が二〇〇八年に石井克人監督、草彅剛（くさなぎつよし）主演で『山のあなた～徳市（とくいち）の恋』としてリメークされている（ＤＶＤあり）。また清水の盟友、小津安二郎監督の出世作『大学は出たけれど』（29年）や『朗らかに歩め』（30年）は清水宏の原作である。

フィルム現存作品一覧「清水宏監督特集」
主催：国立映画アーカイブ、シネマテーク・フランセーズ、パリ日本文化会館
２０２１年5月26日から7月末までパリのシネマテーク．フランセーズとパリ日本文化会館で上映された全50作品一覧
（国立映画アーカイブ提供作品）

①『森の鍛冶屋』（１９２８年）
②『親』［英語字幕付］（29年、監督：清水宏・大久保忠素）
③『不壊（ふえ）の白珠（しらたま）』［染色版］［英語字幕付］（29年）
④『銀河』［英語字幕付］（31年）
⑤『輝く愛』［活弁トーキー版］［英語字幕付］（31年、監督：清水宏・西尾佳雄）
⑥『七つの海　処女篇』［英語字幕付］（31年）
⑦『七つの海　貞操篇』［英語字幕付］（32年）
⑧『勅諭（ちょくゆ）下賜（かし）五十年記念　陸軍大行進』［一部サウンド版］（32年、監督：清水宏、佐々木康、石川和雄、松井稔、井上金太郎、渡辺哲二）
⑨『泣き濡れた春の女よ』［英語字幕付］（33年）
⑩『金環蝕』［英語字幕付］（34年）
⑪『有りがたうさん』［英語字幕付］（36年）
⑫『金色夜叉』（37年）
⑬『家庭日記』（38年）
⑭『子供の四季春夏の巻』［不完全版］（39年）
⑮『子供の四季秋冬の巻』［不完全版］（39年）
⑯『京城』（40年）朝鮮総督府鉄道局映画（24分）
⑰『ともだち』［不完全版］（40年）朝鮮総督府鉄道局映画
⑱『女医の記録』（41年）
⑲『サヨンの鐘』（43年）満洲映画協会、松竹下賀茂、台湾

総督府

⑳『情報局制定　必勝歌』（45年、監督：清水宏、田坂具隆、マキノ正博、溝口健二、大曽根辰夫、高木孝一、市川哲夫）

㉑『その後の蜂の巣の子供たち』（51年）蜂の巣映画

㉒『桃の花の咲く下で』（51年）新東宝

㉓『大仏さまと子供たち』（52年）蜂の巣映画

㉔『もぐら横丁』（53年）新東宝

㉕『何故彼女等はそうなったか』（56年）新東宝

㉖『人情馬鹿』（56年）大映東京

㉗『母を求める子ら』（56年）大映

㉘『霧の音』（56年）大映京都

㉙『踊子』（57年）大映

㉚『母の旅路』（58年）大映東京

㉛『母のおもかげ』（59年）大映東京

（シネマテーク・フランセーズ、パリ日本文化会館提供作品）

㉜『岐路に立ちて』（30年）

㉝『港の日本娘』（33年）

㉞『東京の英雄』（35年）

㉟『花形選手』（37年）

㊱『風の中の子供』（37年）

㊲『恋も忘れて』（37年）

㊳『按摩と女』（38年）

㊴『信子』（40年）

㊵『みかへりの搭』（41年）

㊶『歌女おぼえ書』（41年）

㊷『簪』（41年）

㊸『暁の合唱』（41年）

㊹『団栗と椎の実』（41年）

㊺『蜂の巣の子供たち』（48年）蜂の巣映画部

㊻『小原庄助さん』（49年）新東宝

㊼『母情』（50年）新東宝

㊽『奈良には古き仏たち』（53年）蜂の巣映画部

㊾『しいのみ学園』（55年）新東宝

㊿『次郎物語』（55年）新東宝

【以上、国立フィルムアーカイブ公式ＨＰ・「２０２１年度実績」より一部加筆修正　２０２３年11月５日閲覧】

フィルムが現存する作品にはこのほかに、『大学の若旦那』（33年）、『明日は日本晴れ』（48年）、『都会の横顔』（53年）などがある。（未確定）

『京城』は韓国映像資料院の映画データベースで公開され、ネット上で視聴することができる。24分。

（中央区）

［入　選］

三方ヶ原の戦いにおける武田軍の進軍ルートについて

神谷　司

今からおよそ四五〇年前に、三方ヶ原の戦いが行なわれた。今回は、この三方ヶ原の戦いにおける武田軍の進軍ルートに新説が出ており、それについて評論したい。

『三方ヶ原の戦いと家康伝承（浜松市博物館編集・発行）』によると、武田軍の進軍ルートについては、これまで武田信玄本隊が信濃から北遠に入り南進し、山県昌景の別動隊が信濃から三河に入り、そこから遠江に入って本隊と合流するというルートが通説となっていた。

近年の研究では、武田信玄本隊が駿河から遠江に入り西進し、山県昌景・秋山虎繁の別動隊が信濃から三河へ入り、そこから遠江に入るルートが提起されている。

この西進ルートが根拠とするのは、『当代記』と武田信玄書状「資料7」、および禁制等の武田氏の発給文書「資料3～資料6がその一部にあたる。」である。（『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行から一部引用）

これらを踏まえた武田軍の進軍ルートを引用したものを示す。

武田軍の進軍ルート

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行二十一ページより引用）

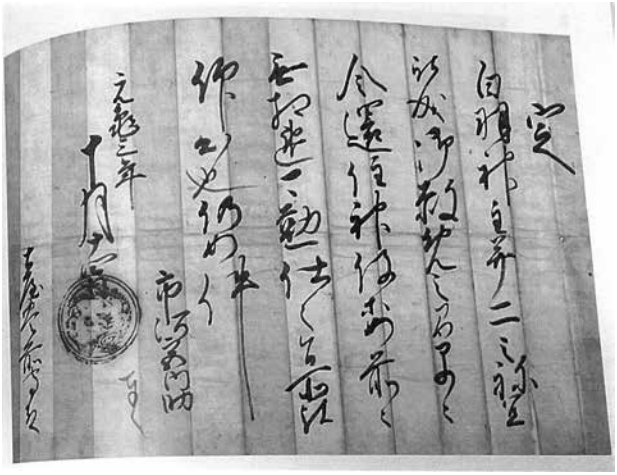
ここからは、武田軍の西進したとされるルートの道筋が分かりやすく図示されている。

続いて資料3～資料6、資料7を引用して示す。

「資料３　武田家朱印状」

この資料３からは、元亀三年十月十四日に白羽大明神（御前崎市）の付近を通過したことが読み取れる。

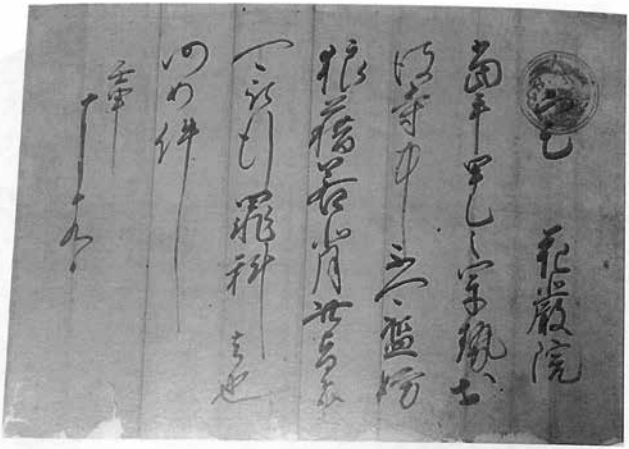
『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行十六ページより一部引用）



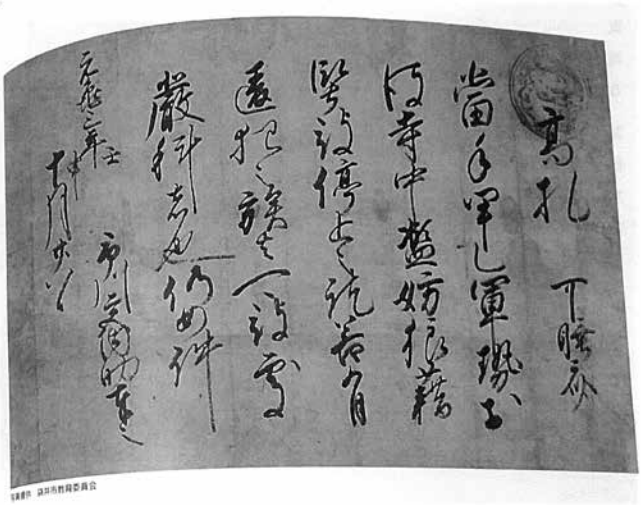
「資料４　武田家禁制」

この資料４からは、元亀三年十月下旬にかけて、高天神城付近に武田軍がいたと考えられる。

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行十七ページより一部引用）



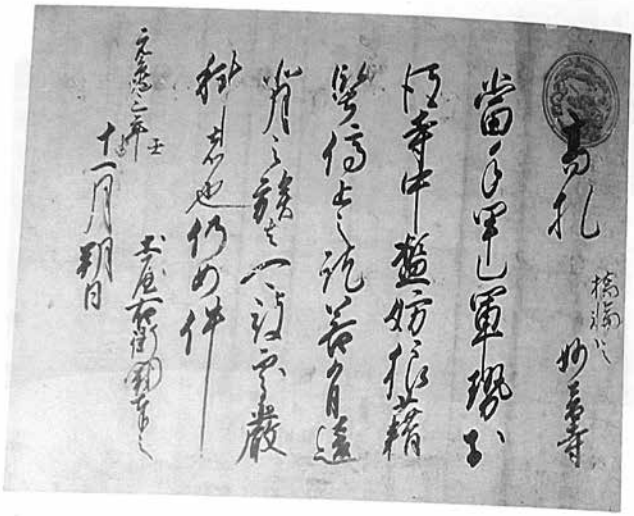
「資料5　武田家高札」



この資料5からは、元亀三年十月の末には可睡斎（袋井市）の付近まで西進していたことが読み取れる。

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行十八ページより一部引用）

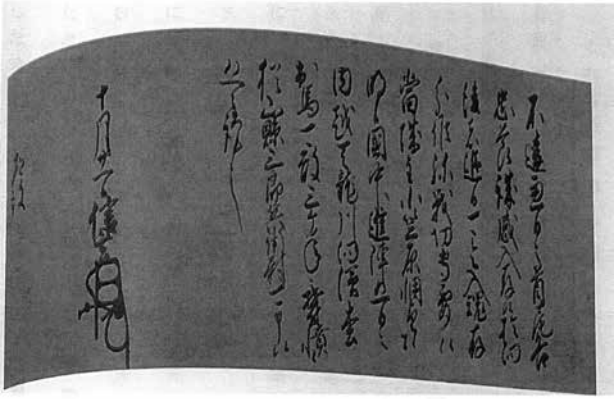
「資料6　武田家高札」



この資料6からは、元亀三年十一月一日には、妙音寺（妙恩寺）（浜松市中央区天龍川町）に対して禁制を出していることが分かる。

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行十九ページより一部引用）

「資料7　武田信玄書状」



この資料7からは、「五日の内に天竜川を越えて浜松に向かい」とある。この書状は元亀三年十月二十一日のものであり、この時期に天竜川から比較的近い所に武田軍がいたことが読み取れる。

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』（浜松市博物館編集・発行二十二ページより一部引用）

これらの資料を読み取ると、武田軍が駿河から遠江に西進したルートには根拠となる史料があり、説得力がある。

資料3から資料6から武田軍がいたとされる場所を読み取ると、駿河から遠江へと西進していると考えるのが自然である。元亀三年十月十四日には、白羽大明神（御前崎市）、元亀三年十月下旬に高天神城付近におり、元亀三年十月末に可睡斎（袋井市）にいて、元亀三年十一月一日に妙音寺（浜松市中央区天龍川町）付近にいたと読み取れることができ、移動距離や移動に要した時間にも無理はなく、資料の日付や武田軍がいた場所とその日時の経緯についても矛盾しないためである。このことも武田軍が駿河から遠江への西進ルートの新説の根拠を補強できると考えられる。なお、移動距離と移動時間についての詳細は後述する。

さらに、当時の移動手段は、徒歩以外では馬による移動がメインと考えられる。馬の走行速度は、トコトコとゆっくり歩く常歩（なみあし）で時速五キロ程度であり、1日に約五十キロ程度歩くことができ、このペースであれば何日も継続して長い距離を移動することができるとされている。駿河から馬で移動したと思われることから、移動に要した時間も計算上は合うと思われる。

先ほど示した「武田軍の進軍ルート」の一部を例に挙げる。十月十四日に白羽神社（御前崎市）におり、そこから十月十九日には花厳院にいる。白羽神社から花厳院まではおよそ二十二キロメートルであり、五日間で移動している。一日平

均四・四キロメートル程度であり、移動可能な距離である。また、花厳院を後にしてから、十月二十一日に高天神城にいることからこの距離は約四キロメートルで、移動に要した日数は二日間であり、一日あたり約二キロメートルの移動であり、ここでも移動距離と移動に要した時間に矛盾がない。武田軍は、馬に乗った武士もいるが、多くの武士が歩いて移動していた思われることから、休憩や宿泊、そして武具を持って移動したことや、禁制や高札などを出していることなどを考慮すると問題がない移動距離と移動に要した時間である。

駿河から遠江は平地が多いことから移動しやすい上に、この当時も気候が比較的温暖で穏やかな場所だったと推測され、快適に過ごすことができ、体力を温存することができる。これに対して、信濃から北遠へのルートは山がちな上に高度が高い山があり移動が大変である。また、この当時もやや寒冷な気候と推定され、体力を消耗しやすい。

このことからも〝戦さが上手〟と言われる武田信玄が比較的移動がしやすい駿河から遠江に西進ルートを選んだ可能性がある。

一方、従来の武田信玄本隊が信濃から北遠に入り、南進したルートについては、『戦国戦記三方原の戦』が根拠とされてきた。これを見ると、『戦国戦記三方原の戦（高柳光寿著）〝信玄の出陣〟』の六十七ページに「信玄は十月三日甲府を発した」……（中略）……七十一ページに「十月十日信玄は青崩を越えて信濃から遠江に入った」……（中略）……「信濃に出で、同国伊那郡から信・遠国境のこの青崩を越えて遠江に入り、犬居から森または二俣に出て浜松に迫るものである」。この進路を取った理由は、七十八ページに「犬居の城主天野景貫が早くから信玄に属していたということである」……（中略）……「天野氏の勢力範囲を通過し、その案内で中部遠江に進出することは決して困難でない」とあった。この後の武田信玄本隊の進軍ルートについては、八十ページに「信玄は水窪から南下して、景貫の犬居城に入った」……（中略）……八十二ページ「信玄の袋井方面の出陣は十月の中旬であった」……（中略）……八十五ページ「白羽神社に元亀三年十月十四日付で、信玄が同社の神主を赦免して還住させた文書が残っており、華厳寺には壬申十月十九日付の信玄の禁制が所蔵されている。」

また、『徳川家康と武田信玄（平山優著　角川選書）』によると、二百五十四ページに「十月五日は、すでに信玄は甲府を出陣し、駿河に向かって進軍中であった……（中略）……信玄は、十月十日に、遠江に侵入した」とあり、武田信玄本隊が十月十日に遠江に侵入している事実がある。

これらの史料からは、武田信玄本隊が十月三日に甲府を出発して信濃を経由して十月十日に信濃から遠江に入ったことが読み取れる。また、十月十三日あるいは十四日頃に袋井方面に進出してから白羽神社（御前崎市方面）、華厳寺と進んだと読み取れる。

これまで見てきた西進ルートと南進ルートの二つの説を読

み進めた中で、根拠となる史料があって、確実なことは以下の点である。

①十月三日に甲府から出馬した。

②十月十日に遠江に侵攻した。

この①②の根拠資料は、十一月十九日付けの『朝倉義景宛信玄書状』で、「去る月三月甲府を出で、同十日当国へ乱入し」とあることである。（徳川家康と武田氏　本多隆成著百七ページより引用）

③十月十四日に白羽大明神の付近を通過

根拠資料「資料３　武田家朱印状」

④十月下旬高天神城付近にいた

根拠資料「資料４　武田家禁制」

⑤十月末に可睡斎の付近にいた

根拠資料「資料５　武田家高札」

⑥十一月一日妙音寺の付近にいた

根拠資料「資料６　武田家高札」

西進ルートか南進ルートかが確実になるには、十月三日から十月十日までの間に、武田信玄本隊がどこにいたのか分かる根拠資料があれば足りる。あるいは、十月十日から十月十四日までに武田信玄軍本隊がいた場所がわかることでも西進ルートか南進ルートかを補強できることなる。

なお、十月十四日から十一月一日までは、③～⑥の資料により東から西へ向かったことは確実である。

十月三日から十月十日までのルートは、確実にはわかっていない。西進ルートでは、駿河から十月十日に大井川を渡って遠江に入っている。南進ルートであれば、信濃から十月十日に青崩峠を通って十月十四日には御前崎市方面まで南進し、ややUターンするような形で袋井・浜松方面に向かっていると考えられる。

ここまで、複数の史料をよく読んでみたが、確実にはわかっていない十月十日から十月十四日までの期間で、武田軍の動向の根拠となる史料を一つだけ見つけることができた。

「石雲院（牧之原市）の「歴代前住牒に、「十月十日武田勝頼放火、伽藍・什物共焼失」とあり」（『定本　徳川家康』本多隆成著　八十三ページより引用）。

この記述が正確なものであるとすれば、大井川のすぐ近くにある石雲院に十月十日に武田信玄本隊がいたことになる。それであれば、駿河から遠江へと武田信玄本隊が通過した裏付けともなり、武田信玄本隊が駿河から遠江に入り西進した説をさらに補強することとなる。

今後、十月三日から十月十日までの間に武田信玄本隊が、駿河にいたと示す根拠資料が追加で発見されると、武田信玄本隊が駿河から遠江に入り西進した説が確定となる。

この十月三日から十月十日までの間に武田信玄本隊が駿府城付近にいたことや駿河を通過した根拠資料があれば西進ルートが確定となるが、今回調べた限りではそのような資料は見つけることができなかった。

歴史は、新たに資料等が発見されることで、従来は史実と

されたものが変更されることがある。例えば、鎌倉幕府が開かれた年も研究が進み、定義が変わったことによりこれまでのものから変更されている。

今回評論した武田軍の進軍ルートについても、研究が進んだことで、駿河から遠江へ西進したという新説が出され、それが有力と考えられる。今後、さらに研究が進み、また追加で新たな資料等が発見されることで歴史の新しい事実が発見されることもあろう。今回は、その一つとなる可能性が高い武田軍の駿河から遠江への西進ルートの新説を評論させていただいた。

〈参考文献〉

『三方ヶ原の戦いと家康伝承』浜松市博物館
『戦国戦記　三方原の戦』高柳光寿　春秋社
『徳川家康と武田信玄』平山優　角川選書
『徳川家康と武田氏　信玄・勝頼との十四年戦争』本多隆成　吉川弘文館
『徳川家康　境界の領主から天下人へ』柴裕之　平凡社
『定本　徳川家康』本多隆成　吉川弘文館
『戦国・織豊期大名徳川氏の領国支配』柴裕之　岩田書院

（中央区）

評論選評

中西美沙子

評論は、「読む」「書く」という動詞的なものが基本になっています。小説、歴史書、思想書、エッセイ、紀行文などを丁寧に「読み込む」ことで、何を書くかが見えてきます。「読むこと」は、対象とするものと「対峙」することです。

そこから「書くこと」が始まり、評論へと進みます。「読む」「書く」は、双子のように離れられないものです。この双子は、冷静さと情動を併せ持ったものです。言葉を換えれば、客観と主観の闘いによって生まれ、その結果が評論となるのでしょう。それは評論に限ることではなく文芸一般にもいえることです。

スーザン・ソンタグは彼女の評論『反解釈』で「芸術とは呪文であり魔術である」と記しました。彼女の言葉からうかがえるものは、アルタミラやラスコーの原始的絵画を刻んだ「人間」の飽くなき表現への欲望です。呪文や魔術は、見えないものを形にすることの意味だといえます。それは言葉を刻むことと似ています。「抑制」しながら、精神を枯らさず「生かす」ことが、文芸であり評論だといえるでしょう。

今年は六篇の応募作があり、いずれも質の高いものでした。評論は忍耐が求められるものですが、応募者の論を読み、改めて「書くこと」への姿勢に敬意を感じました。

「ノンフィクションという装い」

石牟礼道子の『苦海浄土』を論ずる。それは、彼女の表現の中に「納まり切れないもの」を解体し、彼女の文学の特性（普遍性）を露わにするということでしょう。筆者は、石牟礼の政治的な行動や言説を意図的に論から外しています。それに代わり筆者は、「救済の不在」という概念で『苦海浄土』を論じています。そのために旧約聖書の『ヨブ記』と『カラマーゾフの兄弟』という「救済の不在」そのものの登場人物を使って、『苦海浄土』に焦点を当てました。優れた論考です。そしてその論点は、現代の私たちの生き方を問うているようです。

「パンデミックを経験して」

パンデミックの不意の到来に対して、私たち人間がどのように対処したか、「失ったもの」と「何を得たか」を、筆者は思考します。パンデミックがもたらした原因を、重層的に論じているところが面白い。使った資料の精査と、自分が感じたパンデミックへの身体感覚を併記したところに魅力を感じました。特にパオロ・ジョルダーノの『コロナの時代の僕ら』の引用に惹かれました。ジョルダーノはパンデミックに対しての人の在り方に関し、「おのが日を数えることを教えて」という旧約聖書の詩篇を引用します。パンデミックは、外からやって来るものですがパンデミックを過剰に恐れることで人が精神を枯らすことを、様々な形で筆者は論じていて

視野の広さを感じました。

「映画『有りがたうさん』の清水宏監督について」

浜松生まれの映画監督清水宏の作品を見る機会は余りありません。筆者は清水宏の生い立ちやその時代、映像への立ち位置を、過不足なく、静かな論調で論じています。

小説『伊豆の踊子』へのオマージュを思わせる記述から、見たことのない監督の作品にリリシズムさえ感じました。筆者の文章から窺えるのは、清水監督の目線が市井の人たちに注がれているということです。

浜松には木下恵介の記念館がありますが、清水宏監督の作品も併せて上映されたらと、一市民として思うに至りました。この論評は清水宏とその作品の貴重な資料ともなり得ています。

「三方ヶ原の戦いにおける武田軍の進軍ルートについて」

武田軍の進軍が三方ヶ原に至るルートの新説を丁寧に論じています。「論」というよりも「資料」を収集したところに価値があると考えます。

歴史と伝説は表裏一体というところがあります。筆者は、書かれた史実と資料に沿って武田軍の行動を記述しています。史実を拓くことで、新たな史実が発見されるという筆者の論は、是とします。が、伝説は史実の根の中にあり、両者を拮抗させることで、「歴史研究」の進歩があるかとも思いました。

「道元と日蓮を介し現代社会を考える」

道元と日蓮という大きな宗教家を論じながら、それを現代社会に落とし込むという筆者の考えには、敬意を感じます。しかし二人の思想の違いと共通性を論じて、それを現代に反映させることはかなり難しいのではと感じました。

道元・日蓮に関する本や、そこから得た知識を用い筆者は論じていますが、未だ知識の段階のままに留まっている感が否めません。「六　結語（未来に向かって）」の福岡伸一「動的平衡」論を援用したところは、面白く読ませていただきました。

「『走れメロス』論」

筆者は、小説『走れメロス』の主人公メロスの人間性やその行動を、批判的に論じています。その考えには、確かにと思わされるところもあるのですが、メロスの人間性の分析が一方向からであるため、メロスの生き方そのものが曖昧になっていると感じます。太宰治はなぜ『走れメロス』を書いたのか？その深層を探ろうと試みることにより、メロスという人物が的確に捉えられるのではないでしょうか。この作品は太宰の生き迷っている姿そのままであるように私には感じられます。矛盾を多く孕んだ、或る意味破綻しているともとれるこの作品が文芸になり得ていることにも尽きぬ興味が湧くのです。

随筆

［市民文芸賞］

あんちゃと水玉もようと

中津川久子

私は浜名湖の東岸に広がる農村地帯に生まれ育った。昭和三十年代、子どものころの夏まつりが懐かしい。

四年生になると、女子は大人の手おどりに参加できる。いや、義務づけられていたと言ったほうが正しいかもしれない。七月の本番に向けて一カ月前から練習が始まる。母は麦刈りの合間をみては私のゆかたを縫ってくれていた。赤、白、青、黄色の水玉もようは私のお気に入りだ。少しずつできあがっていくのを見るのが、学校帰りの楽しみでもあった。

「ひさこちゃん、お姉さんがお化粧してあげるからおいで」

まつりがくると、必ず声をかけてくれた東の家（ひがしのうち）のお嫁さん。東の家とは、我が家の東隣りにあるのでそう呼んでいた。お姉さんに子が無いからか、私と同じ名前からか、よく可愛がってくれた。

夕方四時を回ると、庭の柿の木の下で行水だ。たらいに溜めておいた水がほどよく温まっていて気持ちがいい。親たちも夏場はこんなだった。汗を流すとゆかたを抱えて、いざ東の家へ。にわとり小屋の脇の抜け道をそろりそろりとゆく。門の大きな柏の木の所で、ふーっと息をととのえるのもいつものこと。

「ひさこちゃんは、まぁ、きれいな二重瞼だこと。お口はおちょぼ口で、きっとすてきなお嫁さんになるわよ」

花柄のワンピースを着たお姉さんは、動くたびにいい匂いを放っていた。そして、ぽっぽっぽぽと唄うようにおしろいを叩くのであった。最後に三尺をぽんとして上がりの合図だ。私は待ってましたとばかりに、くるっと回ってみせる。お姉さんの拍手が追いかけてくる。

手おどりの会場は、農協前とか役場前とかの要所要所に設けられていた。おどりの他に、打ち上げ花火、仕掛け花火と飽きさせない。あちこちの部落からたくさんの見物客でごった返す。とりわけ、縁談が決まったであろうカップルや、アベックの品定めに熱い視線が集まっていた。

花火を合図に大音量で音頭が流れると、まつりもいよいよクライマックスだ。小学校の高学年ともなると、ぐっと大人びた子もいて、

「ほい、あのもも色のゆかたの子はどこの子ずら？」

「あー、あの子は源（げん）さの孫ずらよ」

なーんて声も飛び交ったりする。
会場から会場までは、青年団が中心になって御殿屋台と手造りの花屋台を引き回してゆく。屋台の両側にはお囃子隊が色を添える。大太鼓は村の主と決まっていて、横笛は青年団の男衆、十人ほどが当たっていた。
そのひとりに、ひとまわり歳の離れたあんちゃがいる。藍色の法被に、豆絞りの手ぬぐいをきりりと巻いて笛を吹いている姿は、実に格好がいい。そして、腰の低い位置には「若頭（わかがしら）」と書かれた提灯が揺れている。きょうだいでありながら惚れぼれだ。
特に外燈の少ない通りでは、提灯や屋台の脚下から伸びる朱色の灯がいっそう男衆を浮かび上がらせ、艶を増す。
「あの若頭、男優のTに似てるよねー」
思わずニンマリしたりして。
休憩時に、あんちゃの横笛を鳴らすのも楽しかった。
「しっかり穴を塞いで、もっともっとだ。よし、吹いてみろ」
「ピューー」
情けない音に大笑いだ。それでもあんちゃは、もう止めてというほど頭を撫でてくれた。その後は腹掛けのポケットから、溶けかかったキャラメルのごほうびだ。酒とたばこ、汗の臭いにまみれたキャラメルだったが、あんちゃがとてつもなく大人に見えた瞬間だった。
「いよいよ最後のおどりでーす。張りきっていきましょう」
拡声器からゴーサインが出ると、歓声と共に二重、三重と輪が広がっていく。こうして、籠屋、桶屋、鍛治屋のある村の銀座通りは、夜おそくまで余韻に包まれるのであった。
「ほら、いちばん格好いいのがあんちゃだよ」
「おー、おー」
「こっちの可愛い子があたしね」
何もかも忘れちまったあんちゃ。でも、あたしは見た。あんちゃの瞳に、ひとしきり、はしゃぐ水玉もようを。

執筆中、訃報届く　令和五年盛夏

（中央区）

［市民文芸賞］

マロがいた日

藤原百合子

マロは、家からそんなに遠くないホームセンターの中のペットショップのサークルの中にいました。同じくらいの小犬が数匹、こちらをじっと見つめていました。ミニチュアダックスフンドの黒のオス。

番犬は外で飼っているビーグルの雑種のオスがいて、室内で犬は絶対に飼わないと決めていたのに、マロはやってきました。それは悲しい現実と共にでした。

大阪で元気に働いていた長女に子宮癌が見つかり、大阪の大きな病院で治療を続けていたのに、手術もできなくなり浜松の総合病院に転院、マロは娘が自分はもう子供は持てないから小犬が欲しいと言ってせがまれて飼うことになった子犬でした。

一週間ごとに私が車で病院に送って、月に三回のペースで抗ガン剤の治療、それから放射線治療、主治医の先生に余命半年を告げられ、本人にも言いましょうと言われても、それだけはやめて下さいとお願いをして辛い苦しい日々は続きました。

そんな時にも小さなマロは少しづつ大きくなって、家族の気持を癒やしてくれました。

そんな中、神様はほんとに数週間、体調を良くしてくれました。そして、大学時代の友人五人と箱根へ一泊旅行に行きました。

広島、富山、兵庫、大阪、名古屋、皆遠くに住んでいる友人が、娘の分の旅行費用を出してくれて行ってくれたのです。

娘が箱根神社の霊水とお守りが欲しいと言っていて実現したのです。といっても強い痛み止めを服用し、どんなにきつい旅行だったかと思います。

その旅行が七月の下旬、それから三週間くらい後、娘は天国に旅立ちました。

二〇〇五年、二十八歳と一ヶ月、亡くなったのは朝、マロはその日から四日間、動物病院にあずけられました。娘の出棺の時連れてきて会わせました。マロの頭はストレスなのか円形脱毛の様な抜け毛が数ヶ所できていました。本当に淋しくて辛かったと思います。その後もあずけなくてはならず、かわいそうなことをしました。

娘の葬式が済んで、マロは形見になりました。夫は夕飯の後、仏壇の前に毎晩のように座り涙を流しました。そんな夫をマロはそっと見つめていました。悲しいことをいっぱい見てきたマロだから、人の流す涙を知っているのです。

マロを連れて遠州三十三ヶ所の霊場巡りを仕事の休みの度にしました。いろいろな人と出会いました。でも年を重ねるごとにその人々とも疎遠になり、娘に対する悲しみも少しづつ癒えていきました。

娘が亡くなって三年目くらいに私達は布の小売の店を始めました。毎日忙しい日々の中でもマロは私たちに寄り添い元気に動き回っていました。しかし、マロが十三才の頃、肺に病気ができ、動物病院に通院していましたが、一月の寒い朝私が台所仕事をしていた足元のカーペットの上で冷たくなっていました。

亡くなる前の晩、「マロ、ありがとうね、マロがいてくれてうれしかったよ」とマロを抱きしめてじっと見つめると、マロはつらい体なのに私を見つめて「わかったよ」というしぐさで答えてくれました。その晩、マロはいつものように私たちのフトンに入ってきましたけど、とても苦しそうで、でも私は眠けが先で朝まで寝てしまいました。

朝、夫の「オーイ、母さん！」という大声にとび起きると、マロはもう冷たくなっていました。私が台所で野菜を切っていると、キュウリやキャベツの端切れを落としてもらうのを待っていた所です。

娘が亡くなって十三年半、平成三〇年、マロ十三歳と一ヶ月でした。

今年の十一月初旬、春のような暖かな日、娘の友人五人が訪れてくれました。

亡くなる前、箱根旅行に行ってくれた人たちです。

一番近い人で名古屋、大阪、広島、兵庫、富山、平成十七年、二十八歳で亡くなった娘の大学時代の友人です。

その人たちも皆四十六歳、あるいは四十五歳の人もいるかも知れない。

浜松駅から大型タクシーで我が家にきて、私たち夫婦、次女、孫二人も乗せて近くにあるお墓におまいりをしてくれました。

タクシーから降りてきた時、自然に、加奈ちゃん、愛ちゃん、直ちゃん、千春ちゃんと言葉が出てきました。でも一人だけ名前が思い出せない、十一年前、まだマロが元気だった時、やはり五人で来てくれて、愛ちゃん、直ちゃんは子供さんが二人づついるが、共に一人づつ連れてきてくれて、名前の思い出せなかった理加さんは、大きなお腹をして、大丈夫かと心配したのに、あとで聞いた話だとその一ヶ月後に女の子を出産したとのこと。

皆んなキラキラ輝いていて、娘の話、マロの話、いっぱいお話をして夕方、浜松駅まで夫が車で送り、きっとまた近い内にきますよと私たちの車が見えなくなるまで手を振ってくれました。

（中央区）

［入選］

てんやわんや

大庭拓郎

浜辺の団地で所帯を持った時は、米穀通帳を持ってお米を買いに行った。今では、スーパーやコンビニで選り取り見取りで買える。冷たい水でごしごしやらなくても炊ける無洗米も売っている。すぐに着られるくらいに洗ってくれる洗濯機。「お風呂がわきました」とやさしく呼んでくれる風呂。夢のような時代が到来した。

折角だからと、パソコンをやることにした。鳩が豆鉄砲を食ったような店員が品定めをしてくれた。狐につままれたような面持ちで、見易い特大を茶の間に置いてくれた。ずっと若い頃にワープロをやったことが役立った。電話を掛けると、三か月無料で教えてくれるサービスが付いていた。しつっこい質問を浴びせて「パソコンの友」という自前の手引書をこしらえた。年賀状も作れるし、デジカメの写真を取り込んで編集なども出来る。

有頂天のある日、パソコンのど真ん中に奇妙きてれつな画面が居座った。「ウイルスに伝染しました。今すぐにセキュリティをして下さい。」と大書されている。驚いて、わかったを押すと戻るになった。何度やっても同じことを繰り返す。いくら頑張っても画面は消えない。

やっきりして、添えられた電話番号をクリックすると、怪しげな日本語の外国人が出た。そして、赤いマークをあちこちに付けて説明を始めた。もう少しでダメになるから直ぐにセキュリティを更新して下さいと言う。私のセキュリティは半年で五万円、一年で八万円、一生で十万円と抜かした。

お前は詐欺だろうと言うと、会社の住所と自分の顔写真を示した。真っ黒い青年だった。クレジットでなくて現金を送れば直ぐに手続きをすると促す。金が無いので家族とよく相談すると言うと、電話と画面がぱっと消えた。パソコンの店に聞くと、特殊詐欺だと教えてくれた。しばらく電源を切ってから再開すれば良いと教えてくれた。

固定電話の時は、じっと黙っている。相手が「わかりましたか」と尋ねたら、「わかりません」と答える。くどくど話して、「聞いていますか」と言われたら、「聞いていません」と答える。すると、ガチャンと切れる。やっぱり、沈黙は金だ。

縁側で日向ぼっこをしていると、玄関で「こんちは！」の声がした。実に爽やかな声だった。ひょっこり覗くと笑顔の青年が立っていた。「スーパーの新装開店のご案内に参りました」と、広告のチラシと景品交換券を差し出した。景品を交換する指定場所に行くと、日用雑貨が詰まったポリバケツをくれた。

二時間後にもっと豪華な景品をくれると言うのでいそいそと出掛けた。すると、漫談や愉快な歌で盛り上げて別会場へ案内された。移動中に突然、大男が現

れて包丁を振り上げた。「これも差し上げたいが、刃物は屋内でと警察に言われた」と言った。近くの薄暗いガレージに入れられて、二十人ほどが正座させられた。

ボスらしき男が話し出した時に、だまされたと気づいた。閉鎖的な空間に閉じ込めて、布団を法外な値段で売り付ける悪徳商法だった。「便所はどこだ、出ちゃう！」と叫んで、近くの人と脱出した。布団を積んだトラックが出入口に横付けされる寸前だった。劇場型の特殊詐欺だ。

電話は沈黙作戦で撃退出来る。パソコンは電源を切ればいい。しかし、劇場型は名優ぞろいなので手強い。欲垢煩悩との闘いになる。あの手この手で迫るので、百歳人生も大変だ。イタチごっこではあるが、不届き者は取っ捕まえて懲らしめて欲しい。善良な市民をたぶらかすとは、とんでもない。怒髪天を衝く。即座に銭形平次を呼んでもらいたい。

（完）

（中央区）

［入　選］

T君の訃報

加藤　喬

T君の訃報を告げる電話が入った。昨年は秋の暮れのこと。覚悟はしていたものの、後戻りのきかない宣告がついに。無為の数時間の後、生花を持ってT君の家へ向かった。

ご家族にあっては、悲しみに暮れながらもあわただしい時の只中だ。花を託して失礼しようと思っていたところ、娘さんが彼の元へいざなってくれた。そこは彼の部屋で、六十三年間の最後の時間を過ごした気配がまだ色濃く残っている。彼の最後の息さえ漂っていたかもしれない。顔が露になると、シミの色さえそのままに濃く、彼が死の底に沈んでいるようには思えなかった。

「T、つらかったなあ」と語り掛けるや、堰を切ったように涙が流れた。

Tは死という最後の難事にあたり、どれだけの辛さを呑み込んできたのだろう。

命の助からぬ病だと知った時のつらさ
抗がん剤の副作用に堪えてさえ、病状が好転していかないつらさ
一級建築士の仕事に体力が追いついていかないつらさ
御からだの不自由な奥様の施設入所を決断した時の気持ち。その心情を推して言葉にすることなど到底できない。

T君の奥様は若くして病に倒れ、不自由な御身となった。彼は家事のほとんどすべてを背負ったが、それについて彼が愚痴をこぼしたことは一度としてない。それどころかTは料理の腕を上げ、友の会では料理をふるまった。彼が生地から作って焼き上げたピザは絶品であった。趣味の幅を音楽に広め、僕達の友の会ではオカリナを演奏した。照れたように赤らめたTの顔が、昨日の事のように思い出される。

彼の元には人が集まった。その輪は、

友達に限ったものではない。営む建築会社の庭にミュージシャンを招き、コンサートを開いては、お客さんや地域の人たちに夢見心地を醸した。人の輪を作り、その和を生き、生き抜いた人。気骨を優しさで包んだような人であった。

彼から一つの金言をもらった。建築会社を経営しているT君に、職人気質さながらの大工さんたちを束ねてゆく秘訣は何かと問うた。「自分が馬鹿になることだな」即答であった。それは自虐の言葉ではない。和を成して福を呼ぶ、大人らしい大人の信条だと思う。

僕は自分が馬鹿になるのが、いかにも苦手な類の人間だ。しっぺ返しを受けた。同居していた次男夫婦が、かわいい盛りの孫を連れて、ある日突然家を出た。自分が馬鹿になって惚けに徹していれば、愛おしい孫が目の前からいなくなることは無かったろうにと、後の祭りだ。食事もろくにのどを通らず、仕事の忙しさも伴って、一か月で七キロやせた。それも何もかも人生だ、呑み込め。とTなら言うかもしれない。

その後、体重はリバウンドした。持て余していたところ、二年前からスポーツジムに通い始めると、今度は理想的にやせた。体重は六キロ減り、ウエストは十cm縮み、体脂肪率は十%以上の減少を見た。そんな数字も心地よいが、ジムに張り付くにはそれ以上の訳がある。マシンに向かい力をこめれば筋肉が応える、明日も生きていけそうだ。少しずつやせ細っていく精神には、そんな気休めがほのぼのと暖かい。

T君ごめん、君の訃報を知ったその日にさえ、僕はジムに行ってしまった。申し訳ない。今日もジムへ行った。ジムから帰り、T君の建ててくれた家の中でこれを書いている。

（中央区）

［入選］

マスク作り教室

ほりうちよしひろ

コロナウイルスが大変だと騒がれ始めたのは四年も前のことだ。浜松にも患者が一人出たとか。飲食業の店名が公表されるなどバッシングの嵐だった。行き過ぎ、同調圧力であることも平気でされた。マスク争奪戦もあり、その夏は、マスクがどこの薬局やスーパーでも足りず、私もはしごして買い回った。

中国からのコンテナ船でマスクを取り扱うからさばいてほしいとか、逆に中国の医療機関に日本の高性能マスクを送ってほしいなどの話も身近で出た。年末近くには、マスクがない、マスクがないと世の中は大騒ぎ……。

不織布のマスクも知り合いは、製造工程が心配だからと、湯通し、干して使う

など、不安と工夫が入り交ったりしていた時だった。

妻は母親に我が家のマスク作りをお願いした。はじめは、冷感素材で顔前面を垂れ下がり覆うタイプ。まるで、盗賊の顔隠しのようで、特に黒色の生地を使ったりすると怪しげな雰囲気が否応なくする。

次は、布製のマスクが注目された。マスクを毎回捨てるのはもったいない。通気性もあり、メガネが曇らない。布製は洗って使える、肌にも優しいし、何よりオリジナルデザインを楽しめるのだ。

母が長年、洋裁を生業にしてきたことをいいことに妻は、「お母さん、ボケ防止だから」と、取ってつけたような理由を持ち出す。「手作りしてね」と半ば強制である。六十を過ぎた妻を、小さいころから洋裁で育ててきた母。「面倒くさいねえ」と言いながらも窓辺にある業務用ミシンに向かい、コツコツとやりだした。

母には、少しでも励みになればいい、それに、無理を頼むので手間賃を渡そうとするが受け取ろうとしなかった。

妻は東京の知人からどんどん布地を取り寄せる。バーバリー柄やシルクの生地だ。しまいにはレースのものまで。色といい素材といい種類が随分とある。マスク専門店ができそうなくらいだ。

ひとり娘は容赦なく母親に材料を差し出す。それでも母は、「まあ、まあ」と言いながら受け取ってくれる。ミシンに向かっている母の背中を見て、嬉しいような申し訳ないような気持ちになる。

浜松市北区にある食事処と縁が出来た。ここは引佐の奥の方にあたり、愛知県新城へ抜けていく峠のような場所である。ここで手作りマスク教室を母にしてほしいと依頼があった。それまでに、母の作品をいくつか置いてもらっていたからだ。

数人からの要望であるという。その時は世間でもあまり型紙などが出回らない時期であった。母に少しでも活躍の場をと思った。

「米寿の花子さん（母の名前）のマスク教室」

なんておしゃれではないか。勝手に想像していた。

ところが、妻からの打診に母はすぐに断ったという。「私は人に教えることは出来んよ。職人で、ずっと来たから」と頑として拒んでいるのだという。ああ、まずいことになった。母の機嫌は損ねるし、マスク教室も出来なくなってしまうではないか。

母は目立つことが嫌いなようだ。そういう生き方になったのだ。戦中の少女時代を含め、兄妹が多かったので、子守をしながらの毎日だったという。

私たち夫婦は協力し、珍しく妻は「善弘さん(夫である私)も言っているから」と母に頼む。「私の顔も立ててください、大丈夫だから」を連発し、「まあ、見ているくらいなら」と渋々の母の承諾を取りつけた。

マスク作り教室の当日、車に乗ってもらった母の心中を想うと、やすやすと声が掛けづらかった。マスク作り教室に到着した。

ミシンを六台、受講者が持ちより、畳

くらいの大きなテーブルが三台、会場は貸し切りである。店主の六十代半ばの女性、受講者は五十代後半から七十代だ。

会場に母と妻を案内して直ぐに感じた。皆さん、母に対して、自分の母親や姉のように感じてくれているのだろう。そんな目の表情「教えて、おかあさん」と今にも語っているような表情でやる気が満々なのだ。

マスク作りが始まった。皆は、充分出来るようではある。母はテーブルの間を見て回る。「ああ、いいね」とか「ここは、こうした方が」などとまんざらでもなさそう。窓辺に長椅子があり、母は監督官のようにドンと座る。

なんといっても八十八歳。もともと大柄であった母は、座っているだけでなかなか貫禄がある。そこへ次々と受講生が作りかけの布マスクを持ち寄る。「布のしつけをするには、爪でこうして伸ばすといいよ」マスクの出来具合を母は評価、助言している。

女店主は「お母さん、お若い！　お肌がつやつやしている」なんていうものだから、母も悪い気はしないようだ。ずっと笑顔だった。

母の指先は長年の洋裁で指紋が消えるほどすり減ってツルツルになっている。「みんな見て、お母さんの指先」と店主が言う。近寄る女性たちは「スゴーイ！」となる。

母は爪を立てながら布を伸ばす。「指でこうして、こうするから、こうなっちゃった」と指紋の消えた指を見せ、はにかみながら応える。私はこの光景を見ていて嬉しくてたまらなくなった。

一時間半位で、マスク作りを終えた。先生としての母を囲み、妻も入っての集合写真。ああ、この人は家庭の状況が許せば先生という職業にもついていただろうなと思った。

コロナ禍は嫌であったけれど、素敵な想い出がつくられた。マスク作り教室はたったの一回であったけれど、母にしてもらえて本当に良かった。

私が妻の実家の玄関を出る時、必ず車のところへ来て見送ってくれる母。おしゃれなデザインの前掛けをいつもしている。洋裁で身を立てた母のセンスが光るなあといつも思う。それも、けっこう大胆な柄と色使いだ。似合っている。私にとっては仏さまのような存在だ。出かける私は車の中から手を振る。母は見送りに手を振ってくれる。この関係をいつまで続けられるだろうかと思うと、少し胸が苦しくなる。

母はせっせと作ってくれ、作られたマスクが妻と住む我が家の居間に山積みになった。マスクの優しい触感、色やデザイン、素材は多様だ。男性用、女性用、更には子ども用といろいろと手作りを母はしてくれた。耳に掛けるゴム紐を通す作業は妻の役割だ。しかしこれが滞ることのうえない。母にあれだけ催促しておきながら、妻は、忙しいからなどとうそぶき、すぐに取り掛からない。で、我が家では、いつの間にかマスクがいろいろな場所を占拠している。

九十一歳になった母は気の向いた時に、窓に向かう作業台で今も布マスクの手作りを続けてくれている。

（中央区）

［入　選］

お酒の神さま

松　田　　健

今は昔……。

終戦後の混乱も漸く収まってきた一九五〇年代半ばのことである。安寧な世の中になる兆しを受けて、巷には次代を担う多くの子どもたちが溢れ活気に満ちていた。

そんな中、京都府下のある田舎町に、地元の小学校に入学して初めてもらった通信簿の成績評価が全科目最低点で、子ども心に激しいショックを受けてしまった男の子がいた。

入学式の当日、校長も担任教諭のおばさん先生も共に、「おめでとう。君たちあなたたちは、本当に良い時代に生まれてきた幸せな世代の皆さんです」「これからは平和で楽しい未来が待ち受けています」などと、明るい調子で語ってくれていたものである。

そんな訓辞を聞いていた男の子は、自分にもいよいよこれから希望に満ち溢れた未来が、待ち受けているのだと信じ切っていた。

ところが、そんな気分でいられたのも束の間、これから初めての楽しい夏休みが始まるというその日に、早くも人生の落伍者のような烙印を押されてしまったのである。

自分だけダメ人間として、蚊帳の外に放り出されてしまったような暗い気分に陥ってしまった男の子は、いっぺんに学校嫌いになり、二学期からは授業にも全くヤル気を無くしてしまった。

稀に成功を収めた人物の手記の中にも、著者が子どもの頃、学校の成績でオール一をつけられていたと、センセーショナルに記述されているものがあるが、よくよく読んでみると、主要科目の全てが一だったというだけで、せめて体育とか図工だけは、それでも二を付けられていたと明かされている。

後にも先にも全科目が最低点という、ここまで酷い成績を付けられていたのは、この男の子を除いて聞いたことも見たことも無かった。やがてそんな彼は十五の春には故郷を追われ、移り住んだ京都市内の町工場で、汗にまみれて働くというハメになったのだったが……。

就労と共に酒の味を覚えたことで少年の人生が一変した。暗澹たる前途しかないだろうと思い込んでいたところに、酒との出会いが一筋の光明を見出してくれたのである。

少しでも酒を口に含めば、目の前が一気にバラ色に輝き、身体がふわふわと雲の上を漂う様な心地よい気分になれるのだった。少年にとって酒は究極の精神安定剤代わりとなり、そればかりか精神高揚の特効薬、媚薬ともなってくれたのである。

少年を哀れんだお酒の神さまが、そういう体質にしてくれたのだろう。また当時は、年齢を楯に先輩からの勧めを頑な

に拒否したりすると、付き合いが悪いと責められるので、少年にとってはそれも勿怪の幸いだった。

そして唯一の趣味だったギターを酒の席での伴とした途端、少年の運命が飛躍的に好転した。たかがギター一本のことでも周りからチヤホヤされだし、宴会ともなれば重宝に扱われるので、少なからず人間としての自信も付いてきて、その相乗効果で他の苦手なことまで、徐々に克服できるようになっていったのだった。

その頃、たまたま同じ下宿に住んでいた同年輩の某大生たちと、ギターを通じて交流出来たのも大きな転機となった。当時、大学は学生運動で大荒れしていて、ノンポリの彼らは登校もままならず暇を持て余していた。

少年は、そんな彼らにギターの手ほどきをし、そのお返しに、ここまでギターの弾ける君が絶対にバカな筈が無い。楽譜を読むのは英語や数式を理解することよりも難しい。君は天才かも知れないなど、何度も励まされるようになった。

やがて彼らからの後押しで、少年は夜間の定時制高校だけでも卒業を果たし、二十歳の頃には、かなりの読書家にまでなっていた。

★

その後、男は縁あって東京そして浜松と移り住み、それなりの人生を過ごしてきたが、浜松に来て約二〇年後、五〇代になって当時の勤務先から突然リストラされ、人生の危機に晒された時も、再び、お酒の神さまによって救われた。

何と地元浜松の某老舗酒造会社に、酒造りの職人、蔵人として拾われるという幸運に恵まれたのである。人生も最終章に差し掛かろうかという時期に、それこそ己の好きな酒造りの世界で働かせてもらえることになろうとは、これも間違いなくお酒の神さまからの、お導きに違いなかった。

酒造りに携わる蔵人は社内でも特別待遇で恵まれていた。朝昼、賄いつきの食事を会社から無償で提供され、男はそれだけでも有難かったが、それ以上に研鑽の為という大義名分の下に、たっぷりと利き酒が嗜めるのも密かな楽しみだった。

そしてここでも男は、やはり酒の力と共にギターにも助けられた。二十歳そこそこの若者ならいざ知らず、いい歳こいた大の大人が神聖な職場にギターを持ち込むとは言語道断だと、当初は顰蹙を買っていたが、次第に関心を示されることの方がより多くなり、まさに芸は身を助くであった。

更にそんなある時、男には思いがけない追い風まで吹いてくれた。会社で購読していた日本醸造協会の業界専門誌に、某大学の教授で応用微生物学の研究を続けていた、男の兄の日本酒の酵母に関する学術論文が掲載されたのである。

自分とは真逆の生き方をしていた学者の兄が、日本酒にまで関わっていたことを、この時に初めて知って嬉しくなった男は、これまで自分の無学を棚に上げて、こんな実兄がいることなど他人には一切話せないでいたが、この時ばかり

は、後に次期社長となる有力な同僚の一人に明かした。

これ以降、そんな学者の兄がいただけで、男まで買い被られるという恩恵に預かり、定年まで愉しく働かせてもらえることが出来たのだった。

何時の世も、酒に溺れ身を崩す者が多々いる一方で、その酒によって救われた者も少なからずいるものである。

早くも幼少期に躓き、その後の人生まで棒に振ってしまいそうな男だったが、多感な思春期に酒と出会い、それを機に人生も好転に変えることが出来たのだった。

ただ現代では、どんな児童でも、いきなり本人の心を傷つけることのない様、最初からオール一とかオール下という極端な成績評価は、下されないのではないだろうか。

今は昔の物語……。

（浜名区）

［入　選］

それが始まりだった

雨宮智彦

五月の初め、浜松まつりも終わって、街も静かになった夜だった。ぼくは、二階の自室で布団の上に座って本を読んでいた。時計を見ると午後十一時半頃だ。それまで毎日やっていた深夜の配達作業の仕事を、しばらく前に止めていたのだが、頼まれてまだ週に一日だけその仕事をしていた。

布団の上で立ち上がろうとしたとたん、足がふらついて立ち上がれない。あれっ？ともう一度立ち上がろうとしたが、右足が動かない。どうして？と驚いて何度立ち上がろうとしても右足と右手がどうしても動かない。慌てて、隣りの部屋で寝ていた妻の則子さんを大声で呼んだ。それが始まりだった。

「おーい！則子さん（来て）‼」

「なーに、どうしたの？」

「手足の右側が動かない、救急車呼んで！」

則子さんに手伝ってもらって、階段をお尻をついて二階からなんとか降りた。右半身は、動かないが、意識は、しっかりしていたし、その時は話も普通にできていた。

「事務所にも電話して仕事は、できない、代わりを頼むって伝えて」と則子さんに頼んだ。

数分して着いた救急車に生まれて初めて乗った。暗い救急車の中で隊員と話した記憶も聖隷浜松病院の深夜の処置室での記憶もあるのだが、その後の記憶が全くない。気が付くと、翌日、昼間の聖隷浜松病院の患者部屋だった。しばらく後で則子さんが言っていた。

「あの夜、途中から言葉が変になったので心配になった。」

「言葉が変って？」

「ろれつが回らなくなって、何を言おう

としているのかわからない、このまま、回復しなかったら、どうしようって思ったよ。」
「覚えがないなあ。自分に都合の悪いことは忘れちゃうのかもね。」
その後、会話は、ほぼ普通にできる様になった。症状は、一応、安定したということなのか、入院して一週間で住吉の聖隷病院から和合町のリハビリテーション病院へ転院となった。
四人部屋だった。ぼくの症状は脳出血で、出血場所は脳の中心に近く手術はできなかったということだった。
右手と右足は、あまり動かず、指がかろうじて動く程度だ。唇の右側も麻痺があるので食べる時に口から食べ物が洩れたり、よだれが出て困った。
リハビリ病院では、すぐにリハビリが始まった。右半身の麻痺があるので、杖をついて廊下を歩く訓練や広い訓練室で毎日の訓練があった。食事は、病室から食堂へ杖をついて歩いていった。
一番、困ったのは身体の事より、日常的な話し言葉がなぜかでてこない事だった。物を見ても対応する言葉が出てこないのだ。リンゴとか手袋とか特に身の回りのモノの名前がすぐに出ない。最初はどうなるのかと思った。言語治療の訓練が週に何回かあった。理学療法士さんがカードを使って言葉の訓練をたくさんしてくれた。障害者になって初めて理学療法や言語療法のことを知った。科学は進歩しているんだなと感謝したくなった。字を書く訓練をしましょうと言われたので、ぼくの好きな古代史から『万葉集』を選んで、第一巻の最初から書写して週に一回、理学療法士さんに見てもらっていた。
言葉もだんだん回復してきて、倒れる前にやっていたパソコン作業も、同じ事はできないがある程度できるような気がしてきた。則子さんも毎日、病院に寄って、新聞やぼくの頼んだ本を持ってきてくれて、洗濯物を持ち帰ってくれた。
病院生活は、ぼくには退屈なので脳出血になるまでの事も考える時間があった。記憶をたどると倒れる前は、やけに身体が疲れやすいと感じていた。友達とビデオ撮影・ビデオ編集をしていたのだが、野外での撮影の途中に疲れてへたばることが多かったと思う。
覚えている一番印象的な出来事は、五月に倒れる前、その年の二月頃だった。近所のコンビニで買い物をした後、軽自動車アルトで駐車場を出た。その時、なんと駐車場の端っこに立っていた電柱に車の左ライトをぶつけてしまったのだ。すぐに修理屋に直してもらったが、その時は原因不明だった。が、今考えると、すでに脳出血へ至る異変が目に症状として出ていたのかもしれない。検査か何かすれば事前に防げたかもしれない。
春から夏へ、病院の窓から見える緑の木々や青い空がとても新鮮だった。こんな閉鎖的な生活から早く自宅へ帰りたいと切実に思ったが、ぼくがやっと退院できたのは暑さもピークを過ぎた八月の末、六十五歳の誕生日のすぐ後だった。もらった年金は、国民年金なので六万五千円、微々たるもので一人では生活できない。則子さんは、ぼくの入院中も退院してからも、数年前からの高齢者施設

での介護の仕事を続けた。

妻と娘と九十歳を越えた父親との生活が又、始まった。家の中の階段や廊下に手すりを付けた。何より右足が不自由なので、尿意を催してからトイレに行っていては間に合わない。トイレにいく回数を多くしたが、結局、紙パンツを二十四時間していることでなんとか解決した。浜松市の障害者への援助でオムツ補助があるのは助かっている。

介護保険で車椅子を借りて、出かける時はタクシーで移動、車椅子に乗って会合などに参加するようになった。幸い、心配した二回目の発作や症状の悪化は、まだ起こっていない。あれからもう七年になる。退院した後のことは、また別の物語になる。

（中央区）

随筆選評

たかはたけいこ

選者を始めた頃、応募作品に「戦争体験記」が多かった。読みながら「書き遺したい」という人の業が伝わってきた。人は伝えたいのだ、遺したいのだ、そう感じた。

やがて、書き手の年齢層が変わってきて、書かれている内容も「日常」が増えた。

戦争を知らない人たちが人口の大半を占めるようになっていた。

今年の応募作品は前年までのものと、明らかに変わった。書き手なりの「戦争」に対する思いが綴られていて、どの作品も身につまされた。

日々、ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスとの戦いの報道が、書き手の意識の底に沈んでいる。だからこそ、今回の応募作品群ではないか。

そうして、講評を書いていた時、能登半島地震が発生した。津波警報が発せられた。地震は治まったものの、インフラは壊れ、多くの避難民が出ているという。

二日、羽田空港で民間機が爆発して、火災が起きているというニュースが流れている。

テレビ画面に見入る。空は闇に覆われている。機体は黒煙に包まれているが、あちこちからチロチロと炎があがっている。

天・地・水・火・海

私は二日続きのリアルなニュースを観ている。そうしてこの現実、「昨日と今日」が、後にどう書き遺されるのだろうかと考える。

闇のなかに『火を噴く竜』が浮かんでは消えているようにみえる。

『あんちゃと水玉もようと』

今、「浜松まつり」は大きな祭りに成長して、多くの町が参加しているけれど、私の子供の頃は「マチの祭り」だった。

旧市街地外の集落は集落ごとの祭りがあり、そこに暮らす人は自分たちの祭りを作り、楽しんだものだ。

ひと時、子ども時代に思いを馳せて、私たちは今とこれからを生きていく。

『マロがいた日』

ガンに冒された娘さんの希望で、飼い始めた「マロ」。娘さんの最期を看取った後も、筆者たち夫婦と共に暮らした「マロ」。

ペットセラピーという言葉があるけれど、紛れもなく「マロ」は筆者たち夫婦の家族だった。

『てんやわんや』

高齢の筆者はパソコンを使い始める。操作しているうちにネット詐欺に遭いそうになる。やれやれと思っていたら、スーパーの新装開店を囮にした劇場型詐欺に遭うところで気づく。

てんやわんやだと筆者は言うが、だからこそ被害に遭わずに済んでいる。

『T君の訃報』

六三歳という若さで逝った、T君への筆者の鎮魂歌。彼との思い出を呼び覚ましながら、筆者にはT君の分まで生きて欲しいと、読み手は思う。

『マスク作り教室』

コロナ渦のマスク不足は、一時日本中に手作りマスクブームをもたらした。あの時、布地店からガーゼ生地が、手芸材料店からマスク紐が消えた。洋裁な得意な母を娘がたきつけてマスク作りをした。こういうことを書ける時が来た。

『お酒の神さま』

戦後生まれの筆者が、人生の節目、節目で「酒」に救われ、「酒」に導かれて、生きてきたミニ自分史。気負いなく生きて、あるものを受け入れる筆者の素直さと前向きさが、筆者の人生を切り拓いている。

『それが始まりだった』

七年前に発症した筆者の脳出血。それまで当たり前として受け取っていた日常が、特別なものになる。筆者は奥さまを始めとする周りの協力を得て、新しいスタートをきる。

『母と娘と』　　糟谷　修子

九六歳で亡くなった母への鎮魂歌。時に温かく、時に厳しかった筆者の母。断片的な母との思い出は一枚の写真のように鮮やかに、読み手に想像させる。

『ヒロ君と私』　　山田　知明

筆者の幼なじみのヒロ君は、筆者よりひとつ年上の兄貴分だった。筆者はヒロ君に誘われるまま、いたずらをし、時に畑の野菜を盗んだ。長じて、ヒロ君はオートバイに乗り、マチで遊ぶことを筆者に教える。

ひと昔前までは、こんな人間関係が確かにあった。

詩

［市民文芸賞］

いきものなまものこわれもの

乗松弘幸

玄関三和土の洗面器にドジョウ
布袋葵を浮かべた金盥に金魚と目高
予断ない　一朝一夕
廊下の隅　暗がり　ケージに家守
隣のカップ麺　空容器から
せわしないコオロギの　ざわざわ
主賓と餌が
横並びに暮らす
今夏　オレはペット屋あるじ
南を向いた二階の窓辺
水槽二つ　甕一つ
ウナギ六匹
鎮座まします

どいつも　こいつも　こぞって仲がわるい
大きいのが　小さいのを　おいたてる
塩ビパイプと竹筒ねぐらを奪いあう
一匹一城のあるじ殿
なかま顔して　いがみあう
おまえたち
ドジョウ目高金魚を腹に収める悪食輩
暮らしものさし　基本は動詞　永久現在形
尾鰭が　未練の時間を　ふきはらう
いのちの塊り
いきもの　なまもの　こわれもの
内に外に
気の利いた振舞いも　気分の傾斜も

逡巡の気配も　隙間も　乖離もない
こんな　単一　直線　肯定の　律動は
オレにはなかった
計らい　効率　成果に　そっぽむく世界
アタマをひねり
あくせく　汗かく
遠く　広く　深く
どこまでオレは　出かけてこられたかしら
野辺　水辺の　住人
ハレもケもない時空の暮らし
いま　ここ　わたし
オレもありものまにあわせ
光と風と水に
思いさま躯を漂わせていたい

（中央区）

［市民文芸賞］

旅路の果てに

竹内としみ

するりするりと
音も立てず
何かが身体から落ちていく
終わることなく
一枚一枚ふんわり剥がされていく感覚

まるで天女の羽衣のよう

身軽さに自由さを感じつつ
不安が頭を掠めていく

このまま、空を飛んでいけるだろうか
夕暮れに、温かいねぐらに戻れるだろうか

北風と太陽のおはなしのように
僕は狙われた旅人なのか

お願いだから
僕の身体で遊ばないで
僕の宝を捨てさせないで

一つ一つ階段を登っては
身につけた大切な分身たち
逞しい身体や、漲る気力、そして精一杯の知力は生きるため
喜び、悲しみ、怒りの感情はしなやかな魂の肥やしに

お願いだから
それを奪わないで

お前の長い旅はもうすぐ終わる
やがて、生まれた頃の無垢な姿に戻るのだ
北風でも太陽でもなく
お前に寄り添ってきた分身たちと別れる時

旅はいつか終わる
お前に残されるのは、辿った道の豊かな時間
それをまとって飛び立つ先は
未知なる世界

悲しむことはない
終わりの先にはやがて
はじまりの空が広がるだろう
軽やかに飛び立ち、北風と太陽を翻弄してやるがいい

そんな慈しみの言葉が
既に羽ばたきも忘れ、動くこともない幸せな骸に、優しく降り注がれていく

（中央区）

［市民文芸賞］

朝を届ける

石黒　實

僕の仕事は新聞と一緒に
朝も届けているんだ
皆が眠っている真夜中の三時
トラックから新聞束の梱包が
ポンポンと店先に落とされる
僕等はそれを待ち受けて店内に運び入れ
コースごとに区分けする
束は二、三、二、三と目で分けながら
五本の指で五、十、十五と部数を数える
二百、三百も手慣れたもの
数えるのは瞬時の早業だ
チラシを折り込むのも慣れたもの
最初「凄い」と驚いていた先輩の手さばきも
いつの間にか僕も難なくこなしている
「サア、配達だ！」
それぞれのコースに従って
パントーストの如くバイクが飛び出す

長く続いた蒸れた夏の空気も十月半ばになってやっと心地良
くなったことを頬が知る

　頭上の星は姿を消し月の灯りも薄らいで
夜明けを告げる空の時間帯
闇は紺色から薄紫色に変わる
夜が昼に変わるグラデーションの世界
ブルーアワーの中を走り抜ける
僕はこの時間帯が堪らなく好きだ
何だか胸が躍る
「サアどんな一日が始まるのだろう？」
いつもそんな期待を抱く
バイクに積んだ新聞の束も軽くなって
「もうひと踏ん張り！」
五階建ての団地が最後の配達先だ
「ハッハッハッ」息を切らして駆け上る
玄関ポストに最後の新聞を落とし込む

「配達をやり終わった」

「フー！」一息ついて
階上から振り返るとまばゆい朝の光が
フェンスの隙間から目に飛び込んで来る
オレンジ、黄緑、紫の何重もの光の輪が
団地の窓を飛び跳ねる
新聞を届けるのは僕等の仕事だけど
街の人達に朝も一緒に届けている
時には玄関の扉の向こうで
「ご苦労様」と声が掛けられる
そうして一日が始まる
僕は爽やかな気持ちで
軽くなったバイクに跨がる

（中央区）

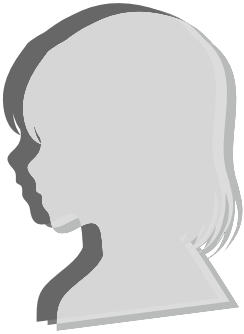
［市民文芸賞］

想い人

上村優里愛

彼の心は他人にあって
彼の想い人にはなれなくて
黄色いキクが目に留まる冬隣
彼のもとには春がきたようだ

（中央区）



［市民文芸賞］

盲目

新村優奈

一人のワタシに君は仲良くしてくれた
君はよくワタシの顔を触って
だいじょうぶという
けれど霧がかかってよく見えない

ワタシと一緒に外へいっても
君に霧がかかる
けれども君は言う
だいじょうぶと

そんな君は
みんなからのけ者にされ
目からビー玉をカラカラと落とす
ああ、なぜだろう
ワタシは君を

守りたい

（浜名区）

［入選］

アル詩

尾内甲太郎

おぎゃあ　ふんぐぅあ　けるぷぅ
から、ことばになっていった日々は
悦びだっただろう

まんま　は　母
ばば　は　父
くっく　は　靴
わんわん　は　動物
あして　は　貸して
あっこ　は　抱っこしろ
おって　は　とって
あってー　は　どいて
びーびー　は　動くもの
ぴー　は　体温計
ぼいちー　は　帽子

なにかを知ったのではなく
なにかで誰かがほほえんだ
まちがいだったかもしれない間接光
でも　なんとなく世界を照らした
光り　光ったかも　光るかも

ねんね　は　寝る
にゅうにゅう　は　牛乳
ぱん　は　パン
ぱん　は　パンダ
け　は　蜘蛛
めんめん　は　面梟
めめ　は　目
めめ　は　眼鏡
ぶーぶー　は　車
ぽちぽち　は　タブレット端末
じゃー　は　プールかお風呂
あーと　は　ありがとう
ししぶ　は　歯ブラシ
あぷ　は　怒り

ことばは悦びに彩られていた
知るよりも知った気になる悦びは
入り江へ兆す朝日だった

（中央区）

［入　選］

飛行記

ヒメ巴勢里

飛行機は雲の上を行く
雲と高さを競い合いながら

時に　雲の色に怯えながら
　鳥の呼び声に救われつつ
時に　鋭い陽光に刺されながら
　一番星の瞬きに癒されつつ

上空から見下ろす　海の緑色
深緑　蒼緑　紺緑
大地も緑、茶緑　黄緑　黒緑
これら緑を吸って人々は
生きているんだな

地図帳の地図が頭に浮かぶ
海と陸との境を肉眼でたどる
　四国の形？　高知県の弓なり？

海上に緑の固まりの幾つか
　瀬戸内の島々？　紀伊半島付近？
川も蒼く流るる
住宅街らしき間を縫って

飽きることなく凝視する
人間も人の営みのかけらも
勿論見えない
神が天空にいるとしたら
どう人の心を知り得ようか

検問所のない空を飛び続け
世界地図をたどる旅が
いつか出来たなら……

心臓の鼓動とともに
空へと飛び立った〝時〟は
飛行機の下降とともに
終わりを告げた

私を乗せない飛行機は
今日も空の上を行く
雲と高さを競い合いながら

（中央区）

［入選］

はい　及第点です

中津川久子

姉さが試験を受けた
八十年ぶりに受けた
緊張するかと問へば
大の字のまま首を振る

——ここはどこですか
——病院
——今の季節は　朝昼晩のいつ
——分かりません
——生年月日は
——昭和六年……
まあ何と
ひとつの違いもなくすらすらと
——で　何歳ですか
——分かりません
　たーんと生き過ぎてしまって
——目を開けてみて

——なんしょかんしょ面倒で
面倒？　そりゃそうよな
近ごろ頓に
見たくない事ばかりの世の中だもの
——はい　及第点です
なかなかしっかりしてますよ
質問もよく理解していて

昭和ひとけた魂が
にっと笑った
冥土のみやげずらよ　と
ベロも出た

（中央区）

［入　選］

ゆらゆら

豊田すず

ゆらゆらと　秋が来る
ゆらゆらと　木々が踊る
ゆらゆらと　落ち葉が踊る
ゆらゆらと　子どもがわらう
ゆらゆらと　日が暮れる
ゆらゆらと　家の灯りが笑う

（中央区）

［入　選］

眠　い

谷口慧真

寝ても　寝ても　眠い。
しっかり寝ているはずなのに
寝ようと思えば　いくらでも寝れる。

　気付いた時には　まぶたのシャッターは
　閉ざされている。

今は授業中だというのに。
永遠の眠りにつきたい訳ではないけど
永遠に眠っていたい。。。

（札幌市）

詩選評

橋本由紀子

二〇二三年はロシアとウクライナの戦争が続く中、イスラエルとパレスチナとの戦争勃発、停戦のないまま悲しいニュースばかり伝えられる年でした。応募作品の方は、いろんなタイプの詩が多数集まって来ましたので、入賞作品を味わっていただけたらと思います。

「いきものなまものこわれもの」ペット屋の主は「売り物」のウナギ、ドジョウ、キンギョの水槽、エサのコオロギも同じ空間の同居生活の日々。上から落ちてくるエサをもらって生殺与奪の権利は人間が握っているものの一日中泳いで過ごしていればいい生活。「こいつらの生き方も有りかも」と、思わずつぶやいてしまう。脳を肥大化させて、悩みとストレスも増やした人間からの色付きの楽しい観察ため息。「旅路の果てに」は、とても切ない詩。生命に終わりがあることは誰もが決まり事として知っているが、高齢になると身体の劣化を感じ始める。まして病気を持つと残り時間を考える。「千の風になって」〈そこに私はいません〉は有名だが「私から少しずつはぎとっていかないで下さい」。失っていく力であろうか、愛したもの、分身は分からないが、豊かな表現力を持つ身に染みる作品である。勝手な私の思い方であるが、人間も含む何億兆という生命が生まれ何億兆と日々去って行く。地球生命の大循環の中にいる。私達もその中にあって等しく原初のミクロの素粒子になって宇宙〈空〉に戻ることになる。直接の物は何も持たずに。いつか再び生命体として結合誕生するかもしれないが、植物は三億年続く生命体で人類より先輩。永遠というのは一つの個体の命でなくて遺伝子の継続の長い地球連鎖時間。何も持ってはいけないが文字や美術作品、思想、心は次世代の地球に残せるのではないか。「想い人」これはまた別の意味で何とも切ない心の痛さが伝わってくる。短すぎる四行だが、短歌にしても良かったと思う。山崎方代という放浪歌人の歌の中で私が一番好きな歌。

一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております

「朝を届ける」気持ちの良い朝の空気を巻き込み仕事の手順と共に届けられる新聞配達の充実感が伝わってくる。「盲目」は不安な気持を霧で表現。「目からビー玉をカラカラ」が面白い。

入選の「アル詩」のタイトルはもう一工夫あっても。赤ちゃん言葉表現がとてもいいので、前後の説明文も斬新な切れ味のものを少しのみ。「飛行記」以前飛行機の窓から見て体感した景色か。こんな味わい方もあるのですね。「はい　及第点です」は楽しい作品で、世相の今をピタリとまな板の上に載せています。「ゆらゆら」は簡単な動きのある言葉の繰り返しと間の使い方で作品を生かしている。「眠い」は願望が直球で伝わってくる高校生らしい詩でした。書きたいことをぶっつけるだけでなく感性と共に別表現をとりいれることで広げることができる喩〈ゆ〉という深さを含む書き方も試してみてください。

短　歌

［市民文芸賞］

過ぎゆきをみんな忘れた姑（はは）の食むバナナしあはせの「し」の字のかたち
「美人だなおまえの母さん」中学の恩師のことば夫は忘れず
テレビ台の古きマトリョーシカあるときは五人の家族あるときはひとり
もう誰も住まない家の窓を開け夫が流しのこほろぎ放つ

中央区　松浦ふみ子

やわらかなきみの寝息を眠りたい寝息のなかを岸まで泳ぐ
ブタ丼の果てにひとつの詩を見つけ七味をかけてかき込んでいる
二度折ったデニムの裾に運ばれて夜に零れる砂の粒たち

中央区　赤堀　進

中央区　高橋祐三子

懸命に本読む君は文字を知らず博士のごとく絵を読み語る
走り来て「これはクヌギのぼうし」と言う金の髪跳ね夕陽も笑う
知らざれば目には見えても見えぬもの薄暮に揺れる白曼珠沙華

浜名区　竹内　典子

竹ぼうき梯子ごみ箱風に鳴るものは夕べに響きやすくて
傾いてご隠居みたいな自販機だひつぢ田に午後の日差しあまねし
夢ならばメソポタミアの春の月人間のあばら骨を埋めて

中央区　佐藤　一央

ひら仮名を覚えたばかりのＭｏｈａｍｍｅｄ（モハメド）が〈もはめど〉と書く春の教室
もはめどはモハメドよりもやさしくていつもと違うＭｏｈａｍｍｅｄがいる
アラビア語右から書けば日本語は十字架のごと縦に交わる

〔入　選〕

中央区　桜花　ふみ

柔らかき光まとゐぬ猫じゃらしかすかにきこゆ尾の揺るる音
あじさいの色ほろほろともういない父が来てゐる光りゐる葉に
梅雨晴の青き空より降りてくる全身が風すべり台の子は

中央区　坂口　ちせ

「こんなことある筈がない」と目覚めたりひと息つけば味噌汁の香りす
考えることなきままに歩みおれば空なる我が己を嗤う
深呼吸して吐きし息の行方追う逃げてゆく鬼確かに見たり

浜名区　鈴木　弘子

五十歳を七十五歳が介護する夕闇がせかす秋の入口
目の前の我に当たるしかないキミを丸ごと受ける「うん」と「そう」とで
ここはもう本屋の無い街迷うたび本屋にかけ込む昔があった

中央区　平野　旭

鉛筆をクルクル回し講義聞くその先人としての道有り
春が来たガラスの窓を擦り抜けて若者達は青天に飛ぶ
咲き散りて咲き散りて尚山茶花の庭の片隅赤き絨毯

浜名区　峯村友香里

傷ついた君に世界は眩しくて休んでいいよ私はカーテン
喧嘩した日の翌朝は二枚目の雨戸なるべくそおっと開ける
寒いと言う子に靴下をはいてと言ういつもの冬のいつもの言葉

磐田市　渥美　朋可

もうすでに靴下までも濡れたので水たまりあるところを歩く
蛍光ペン買ったはいいが筆箱に入ってるのが終わる日遠く

中央区　井口　絹子

欠伸する吾を見詰める猫のミー膝をチョンチョン布団に誘う
ジーパンの解れ繕う婆に孫「ヒャーやめてくれ解れに価値が」

中央区　池谷　和廣

舘山寺赤き日傘の二人連れ晶子の歌を語りつつ行く
鷲津より舘山寺へと白秋の詠みし浜名湖今日も漣

中央区　石井　泰子

喜寿迎え気付きしことのそのひとつ夫はわたしに翼をくれた
寝るときもメガネ掛けてる夫に言う夢をみるのに必要なのね

中央区　石黒　實

口にしたチューインガムを膨らます萎(しぼ)む心に空気を送る
隣もぞ単一世帯昼よるも聞こえて来るはテレビ音のみ

中央区　伊藤　久子

早くねろ！我に云いつつ本を読む雨音と共に夜は更けゆく
あの世には主人と娘、母、伯母といるけどしばしいかないからね

中央区　伊藤　米子

風呂上がりターバンリボン巻きつけて歩いてみたいばあさんだって
名月へ夫は「出た出た」口ずさみ寄り添う二人ゆるりと揺れる

中央区　岩崎　芳子

亡き人のかはるがはるに現はるる桜吹雪のま昼見し夢
来る年は如何な年ならむ夕づく日背に縁側のガラス拭きつつ

中央区　梅　鉢　草

這松の陰ちょこちょこと雛雷鳥皆声ひそめ指
さして笑む
単衣着て真夏日茶会汗みずく日陰たどりてし
じまの中へ

中央区　江　間　得二

伸び伸びと今年は咲いたサルスベリ迎え火焚
くよみんな集まれ
人の名がイメージばかりで答え出ずふたり
八十過ぎ明日にしよう

浜名区　青　海　まち

扁平のイボがもりもり頬に立つ焼かれいずれ
はチチンプイプイ
靴下をぬいで痛みに合点いく真っ黒くなった
足の爪二枚

中央区　大　庭　拓　郎

しずかなり池の主なる牛蛙旅に出たらし大雨
の夜
木漏れ日にわれを見つめる野うさぎの時間を
止めるまなざしに会う

中央区　小笠原　靖　子

来る来ない八重九重の白椿花びら暗き白秋の
宵
満月に兎がいるなら降りて来よその後(あと)足をぐ
んと伸ばして

浜名区　加　藤　久　子

この宵は「花冷えするね」とストーブ焚く隠
れていた猫姿現す
「渋柿を採りにおいでよ」メール来る昨日覚
えたスタンプ送る

中央区　河　合　和　子

夕焼けは一日のすべてを消すようにゆっくり
沈む湖(うみ)を焦がして
「肩の力抜いてごらん」とゆるやかに枝垂れ
柳の緑が揺るる

中央区　木　下　文　子

年賀状の返信無き友案じらる美しき文字書く
人なりき
チェロの音が心に沁みる秋となるチェロを弾
きゐし友は認知症

中央区　寒風澤　毅

お早ようもお疲れ様もナビが言ういつしか吾
は車の一部
中古から新車に替えて今の世を活きるシルバ
ーの一人になりぬ

中央区　柴田千賀子

孫の手にのこぎりくわがたもがきおり細い足
にもぎざぎざのあり
紛らわし苔の中の草見落とせり草取りにまで
眼鏡が要るとは

浜名区　清水　孜郎

中天の月照る谷の鹿の声みかんを運ぶ吾の声
とも
抱卵の雉鳩の目の赤光る吾と対峙の肝っ玉ぶ
り

中央区　髙木　勝海

武器作り人を殺(あや)める神おらず神の名かりて行
うは人
子や孫が戦争(いくさ)知らない世界あれ神に祈(いの)るの人
に願(ねが)うの

中央区　坪井いち子

誕生日〝老い〟がスピード上げてくる黄色信
号点っているのに
蔵のカフェ身の上話する友に「このかき氷お
いしいよ」と言う

中央区　中村　照美

古着物リメイクしては手を通す私の今が母を
思いて
冬枯れの地中に眠る芽のごとく20歳の彼に熱
い未来を

中央区　名倉　智代

無花果に歯形の残る今朝の庭飼ひ猫だけが全
て見てをり
洗濯の終わるまであと二分間猫は静かに水を
飲みをり

中央区　西村みゆき

バス内のけんかを叱られ子どもらはひそひそ
声の言い合いをする
リモートの面会時間一〇分を話し続けるこち
らからだけ

浜名区　平井　要子

初夏に咲くアガパンサスの青い花長い首もち
空に近づく
目を凝らし近づけて見る針の穴静かな夜は秋
の入口

中央区　福島　正義

亡くなりし母の面影暗やみに悲しみ灯し探し
求める
めいめいが自己主張している除夜の鐘不協和
音がたのもしい

中央区　古谷聰一郎

年寄りとなめて近寄る夕べの蚊年金支給日指
折り数え
箸を止め餅食う我を妻見居り大事なればと傍
の掃除機

天竜区　美山　愛

亡き母にすれば良かった事ばかり歳老いて知
るあの日あの時
弱かりし彼の日祈りし鰯雲今ゆったりと流れ
てをりぬ

中央区　森　都子

雨上がる天を映した水たまり覗けば天から我
が見えるか
たれこめた雲も払わぬなまけ風なまけついで
に紅葉散らすな

中央区　谷野富久恵

金星の雫を集める手のごとく三日月朝までゆ
りかごになる
秋風を道案内の彼岸花出番忘れず畦道染める

中央区　山本　勝彦

目の前の小首かしげるひよどりがわれに一瞥
くれて飛び去る
全力で坂駆けくだるランドセルさまになった
な一年坊主

中央区　和久田郁江

看過とは大目にみると電子辞書我が人生も並
べて其の物
「卵かけ御飯のやうな俳句だね」師の逝き五
年伸び代如何に

中央区　相曽多加根

線香の煙り目に追い亡き人を白百合の白夏日を返す

浜名区　安藤　圭子

天竜の伏流水は豊かなり百年前に水道開かる

中央区　伊藤　早織

子供連れ夫婦で食事に来てるのに夫婦でスマホ子供見ようよ

中央区　伊藤　友治

あれ今日は既に秋かと耳澄ます七月八日法師ゼミ聞く

中央区　伊藤　雅章

夏至過ぎて目を覚ましたか次郎柿若木に新芽の二つ三つ吹く

浜名区　伊藤　美代

鳴砂山駱駝の背中(せな)で天空(そら)仰ぎ月の砂漠を声乾くまで

中央区　井浪マリヱ

花壇には朱のガーベラの五本咲き朝な夕なに水遣り弾む

浜名区　岩城　悦子

窓ぎわのトットちゃんこそ今更に地球に欲しき「トモエ学園」

中央区　内山　文久

軒先で別れ惜しむかほろほろと氷柱(つらら)の滴庭土に浸む

中央区　内山　正則

昼下がり妻に首すぢ撫でられて垂れ耳うさぎの力がぬける

中央区　遠藤ひろみ

ふたりして伸びた芝刈る冬日朝母のポケットにチョコレートのぞく

中央区　遠藤　ゆき

落ち椿さんさんと映ゆ緑苔暮れなる生を紅染めてゆく

浜名区　大城きみ子

口数が少なき吾子が我のために新しき靴買ってくれおり

中央区　大檐　一郎

死神様いつでもどうぞと思えども透ける本心別にありしも

中央区　大山　啓

病院の公衆電話に友からの入院五ヶ月の無沙汰を言ふ

中央区　岡部　澄子

子育てを終へて花に習ひしは花咲く時に花は咲くこと

中央区　岡部すみれ

鳥の歌に命の危機の叫びあり人の歓喜の歌の底に死

中央区　岡本　蓉子

大空を大きく泳ぐ鯉のぼり見上げる子らの笑顔あふれる

浜名区　小川　道子

図書館の冷気のもとで読書する行きと帰りの酷暑が憎い

中央区　加藤貴代美

一生に一回だけのお願いを何百回も願う我

中央区　神谷　司

霜降りて凍えるような寒い朝道行く人も身体固く

中央区　川合　陽子

階段をダダダダダと降りる孫私は一歩一歩と降りる

中央区　栗原　惠子

ゆっくりと説明読んで深呼吸草の香のする茅の輪をくぐる

天竜区　皐　月

幾千の言葉夜空に煌めいて今このときにすとんと落ちた

中央区　柴谷　俊行

水ぬるみ岸辺の杭に黒々と小魚狙う川鵜の群れが

中央区　清水　紫津

里帰りする度父はピアノ弾く寡黙な父の喜びの声

中央区　鈴木　和子

この星はガラスの平和だとしても明るさ淡き秋の陽暮れる

浜名区　鈴木　勝則

新緑の水の流れに身をかざす流れに任せ若葉流れる

中央区　鈴木　賢三

つぼ形の白き小花を房状に馬酔木咲きたり廃屋の庭

中央区　鈴木　善一

早咲きの桜の苗を買い求め傘寿の祝いの花咲くを待つ

中央区　鈴木　壽子

車窓より眺むる吉野の沿線に木材工場の看板目立つ

浜名区　すずきとしやす

あえかなる花と咲きたるアカヤシオ谷を点せる小さき雪洞（ぼんぼり）

中央区　鈴木由起子

耳かきをしている膝に寝転がり「かきかきしてね」せがむ幼な児

中央区　髙橋　幸

乾杯のビールを注ぐお互いの手の震えにも傘寿のあかし

中央区　髙山　紀惠

郵便のバイクの音も又嬉し八十路（やそじ）に入（い）りて便り待つ我

浜名区　竹内オリエ

田から田へおーいと呼べばおーいとね答えて清（すが）し米作りびと

澄み渡る青深深と吸い込めば弾が飛び交う同じ空かも

中央区　谷口　章子

追い越して吾の先ざき斑猫はふいと戻りて木漏れ日に消ゆ

中央区　手塚　みよ

コスモスや風にうかれて犬とゆく羅漢さまにも一輪そえて

中央区　戸田田鶴子

鰯雲すつきり晴れて道の駅久方振りの日帰り旅行

中央区　外山　加代

我が歳の母の生き方いかばかり久しくなりて指折りてみつ

中央区　鳥井　美代

日の出前落ち葉漂(ただよ)う秋湖畔水面映(みなもうつ)して陽射(ひざ)し渡(わた)るや

中央区　中野万里子

プッシュして朝晩二回マッサージ育毛剤は頭に染みる

中央区　根本　文子

集め置きしドングリ横目に子供等は木下のひとつに大声を上ぐ

中央区　野末　妙子

霜月のささやくような月明かり春待月はすぐそこですよ

中央区　袴田　成子

ざわざわと空より音の降りそそぐ我は紅葉づる木の葉の中へ

中央区　春野　温子

寄らんかねハンサムナスを差し出され歩みを止める朝の市

中央区　飛　天　女

高齢の妻は午後から介護の仕事皆から好かれ生き甲斐となる

中央区　藤原　孝志

中央区　増井　照美

倒れしが生きてるだけで丸儲けリハビリ中の
友は明るき

中央区　松本ひで子

送り火に児らの合掌うれしかり浄土へ帰る御(みや)
親ほほえむ

中央区　三　日　月

二言語で夢を語りし君の瞳(め)に描き散りばむ恒
星を見る

中央区　水野さきゑ

急な雨に傘届けやる塾帰りさっと受け取り先
に行く孫

中央区　宮澤　秀子

木洩れ日の森の小径の落とし文秘めたる想ひ
誰に届けむ

中央区　宮本　惠司

活花を支ふる器もさりながらまづあたらしき
花こそよけれ

中央区　吉川　一美

はらはらと光率いて貨車が行くあの子の寝息
繋げて伴(とも)に

中央区　由倉　典之

薔薇は棘(とげ)紫陽花は濡れ身を保つ生きる術(すべ)かな
人の世もまた

天竜区　リコリス

君が代を涙で歌うラガーマン君の背中を我々
は押す

中央区　和久田俊文

うたた寝の夢や知らねど春の日の日差し移ろ
う寝顔や愛し

中央区　渡野邉すみ子

天地(あめつち)の中に小さき我のいて生命(いのち)の尊さ思う秋
の日

短歌選評

清水正人

一〇一名の皆さんに四八三首の出詠をいただきました。ありがとうございます。折々の感慨をアトランダムに詠われたもの、一連としてのまとまりを強く意識なさっているもの、それぞれの作品にそれぞれの作者を想いながら選歌いたしました。以下の五名の皆さんを本年度の［市民文芸賞］といたします。

過ぎゆきをみんな忘れた姑（はは）の食むバナナしあはせの「し」の字のかたち
「美人だなおまえの母さん」中学の恩師のことば夫は忘れず
テレビ台の古きマトリョーシカあるときは五人の家族あるときはひとり
もう誰も住まない家の窓を開け夫が流しのこほろぎ放つ

認知症を患われている義母の存在を中心に編まれた一連である。どの一首にも一言では言い尽くせない感情の機微が、決してこれ見よがしではない落ち着いたトーンで詠い込まれている。声は、時として、低い方が遠くまで届くのだろう。

やわらかなきみの寝息を眠りたい寝息のなかを岸まで泳ぐ
ブタ丼の果てにひとつの詩を見つけ七味をかけてかき込んでいる
二度折ったデニムの裾に運ばれて夜に零れる砂の粒たち

一見雑駁を装いながら、作者の感性は実にみずみずしい。「きみの寝息を眠りたい」と詠う一首目。「ブタ丼の果てにひとつの詩を見つけ」る二首目。三首目の「二度折ったデニムの裾に運ばれ」た「砂の粒たち」は「夜に零れる」。

懸命に本読む君は文字を知らず博士のごとく絵を読み語る
走り来て「これはクヌギのぼうし」と言う金の髪跳ね夕陽も笑う
知らざれば目には見えても見えぬもの薄暮に揺れる白曼珠沙華

外国籍の児童、もしくは幼児だろうか。「絵を読み語る」「金の髪」はまさに「博士」で、「これはクヌギのぼうし」と詩人でもある。

竹ぼうき梯子ごみ箱風に鳴るものは夕べに響きやすくて
傾いてご隠居みたいな自販機だひつぢ田に午後の日差しあまねし
夢ならばメソポタミアの春の月人間のあばら骨を埋めて

一首目と三首目の結句が「～て」と、文章として閉じていないことを必ずしも瑕疵とは考えない。断じることを躊躇する作者の感覚の柔らかさをむしろ評価したい。

ひら仮名を覚えたばかりのＭｏｈａｍｍｅｄ（モハメド）が〈もはめど〉と書く春の教室
もはめどはモハメドよりもやさしくていつもと違うＭｏｈａｍｍｅｄがいる
アラビア語右から書けば日本語は十字架のごと縦に交わる

一連からチュニジア人の「モハメド」君もしくは氏を詠っているようだ。漢字、ひらがな、カタカナを持つ我々にも「アラビア語」は、表記の上でも、極めてエスニックな言語である。

定型俳句

［市民文芸賞］

夏の月家康と酌む忍冬酒　中央区　有賀　千子

新涼や湖畔の風にギターの音

迷ひ道案山子五人に出会ひけり

すき焼きや仲居の箸をじつと見る

通されし上の座にして隙間風　中央区　藤本　幸子

大根の湯気をゆたかに煮て喪中

一灯にもどれば我も火取虫

花よりも影を濃くして鶏頭花

年始め地球儀回し世界旅
鉢植えの梅一輪と妻の声
野面積み石に残暑を留めおり
年惜む宝くじ屋に長い列

中央区
山口　一郎

稲束を担ぎて君は農を継ぐ
あけぼのの雁の弧線に乱れなく
でで虫の角の決めたる道の謎
栗の毬はぜる山家に従姉妹会

中央区
尾林せい子

二階より銀河を眺め仕舞風呂
白雲と空の青さや夏薊
早稲の香を放つ炊飯箸二膳

中央区　藤井　星子

早春の大地をかじる重機かな
真新な一合升へ鬼の豆
電工の片耳ピアス桃の花
車イスの吾子と散策初燕

中央区　太田沙知子

たっぷりの花菜ゆったりゆでこぼす
啄木鳥のその仕事ぶり憚らず
引戸よりするりと入りぬ今朝の秋
脊柱の画像つくづく冬に入る

中央区
藤田　節子

海行きのバスは銀色夏に入る
コスモスの中でどの子も花の精
こぼれ萩やさしき故の嘘もあり
叶はざる夢の欠片や銀杏散る

中央区
縣　裕子

つちふるや義経主従駆け抜けり
幼帝をおなぐさめせし水母かな
皆でゐて群れることなき蛙の子
鰯雲使ひこまれし煙草盆

中央区　鈴木由紀子

若楓全く風の無き日なり
石塀と夾竹桃の抱く闇
凩や一番星を吹き上げて
枯野原一人の径は風を連れ

中央区　大平　悦子

〔入　選〕

中央区　伊藤　好子

場所取りのシートを開く花の陰
春光へ一歩踏み出す杖の音
山法師青空うばふ花の数
稲掛の陽の匂ひ立つ日暮どき

中央区　小粥　通恵

花吹雪記念写真の肩に降り
路面電車の長きカーブへ春一番
背のびして粋に生きたや杜若
冬枯の城址の守りゆるぎなく

中央区　小楠惠津子

燃え盛る炎を囲み初日待つ
老鶯や聞き比べつつ微睡みぬ
秋冷の象舎や今は象の亡く
考の部屋雪見障子をそっと上げ

中央区　小澤　幸一

豆ご飯湯気も匂ひも薄みどり
青北風や市場は糶を待つばかり
おひねりは馬尻一杯村歌舞伎
「ごめんな」のメール一言鵙日和

中央区　加藤　喬

孫らしく子は子らしくて磯遊び
卒業や母のいぬ子の背は高く
卒業や企業戦士を夢みし日
若衆を諭す長老秋祭り

中央区　河合三代子

折紙の蛙のぴよんと春隣
菜園の主は私紋白蝶
チェレスタの響きの残る春の宵
飛び箱の十段飛んだ夏休

中央区　川島　泰子

軋みつつからくり時計秋晴るる
旅支度鞄の隅に秋扇
夕餉どき祭囃子を遠く聞く
宿坊の並ぶ古町薄暑光

中央区　柴田ミドリ

定規当てたし夏の夜空の大三角
雛具出すポロンと鳴るやオルゴール
葦青むみづうみ一円縁どりて
選別の小豆は盆をこぼれ跳ね

中央区

杉田みさき

水無月や行間広くして暮す
水鉄砲父の背ナ撃ち駆けゆけり
稲穂波雀忙しやみんな来い
ブロンズの眼差しはるか雁渡る

中央区

鈴木　和

父さんとよく似て黒子桐の花
農道のスケボーの音春近し
向日葵の夕暮は物思はるる
桜落葉梢の先の観覧車

中央区

鈴木　賢三

妻亡くし涙こらえる冬の朝
紫陽花やおもいで残し妻逝きぬ
息白し湖面に浮かぶ鴨一羽
梅若葉赤石の嶺はるかなり

中央区

竹田たみ子

回覧板渡す窓辺や青すだれ
夏帽子かすかに揺るるイヤリング
日参の社の木々や初夏の風
濃き青葉広き社を囲みけり

中央区　竹平　和枝

春愁や愚陀仏庵の無きを知る
五月雨や店にショパンのプレリュード
急ブレーキ踏ませし鹿の親子かな
ひっひっと朝の窓辺に尉鶲

中央区　外山　加代

山笑ふ岬廻りの大漁旗（たいりょうき）
風去りぬ小さき流れの花筏
揚げ花火シャッターチャンススマホかな
ベランダやか細くなりし虫の声

中央区　野田　俊枝

木道の崩れや沼の群れトンボ
病葉の表を見せて裏見せて
夕凪の崎灯台や鰯雲
野ぼたんの花崩れつつ色褪せず

中央区　橋本　英夫

敗け戦さ互に触れずビール酌む
老いてなおまだ働くと牡丹鍋
二階まで小豆の香り鏡割り
姿見に立ちて今日から更衣

中央区　菱田　淡海

青空や妻は厨に栗茹でる
宙(そら)に伸ぶ蔓に蜻蛉の重さかな
散り際を見せることなく柿の花
曇天に木犀の香の浸みにけり

中央区　松本ひで子

庭椿写せし茶わん貰いけり
若葉風侍ジャパン技光る
入学や「ともだちできた」声はずむ
刈り残す露草の碧極めけり

中央区　宮澤　秀子

歩くほど足軽くなる若葉風
薫風や丸文字をどる子の便り
帰るあて無き故郷の花便り
萩乱れ乱れてなほも美しき

浜名区　山口　英男

啓蟄や大吟醸の封を切る
波よけに海鳥つどふ冬はじめ
地に帰るまでくれないの落椿
短日やあと一鍬に空動く

中央区　由倉　典之

強風を力に変えて福寿草
啓蟄やあくび聞こゆる草の中
満腹の身をよじらせて鯉のぼり
柿三つ河童頭を寄せ合って

中央区　渡辺きぬ代

春雨にきりんの睫毛濡れそぼつ
園中にライオンの声春動く
邯鄲の止むサイレンの音響く
昏睡の人の額の白き秋

磐田市　渥美　朋可

初日の出障子にはもう穴があき
銀杏を踏むなよ赤いハイヒール
パイナップル四割引きのシール付き

中央区　池田　智子

凪の湖年明け花火のサプライズ
種大根誰に見られる訳もなく
秋日和窓辺の父は微睡みて

中央区　池谷　和廣

寝つかれぬ耳に夜鷹の喧し
嵐逸(そ)れ今朝安心の鵙の声
しかみ像ここが舞台か枯れし萩

浜名区　市川　敏

若衆の粋な鉢巻き光る汗
祭唄異国の人も輪の中に
久々の祭参道寅さんも

中央区　伊奈　宜子

寒鴉歩け歩けと古希の道
あの店も潰れしままに又師走
金婚の雛もまつたり座りけり

中央区　岩崎　芳子

噴上げの止みし水面の昏さかな
祇園祭男の帯は腰を締め
十二単もかくや蟷螂翅広げ

中央区　右崎　容子

湯上がりの甚平一服の茶の間
灼熱の太陽ひまはりの孤独
初秋の空へ近づく観覧車

中央区　内山　昭子

山里の蛍とびかひ背にとまる
銭湯に母の手引くや菖蒲の湯
一人居の長閑な日々に子等招く

中央区　大村千鶴子

六年女子の子等と泣きけり敗戦忌
吾が余生身を軽くしてお白酒
コスモスや眠り入る子に子守り唄

中央区　岡田　親敬

浜名湖の光の粒や青蜜柑
ゆつくりと靴を磨きて夜長かな
小鳥来る鎮守奉仕の日曜日

中央区　小川　惠子

もどかしく帯解く今は花づかれ
身仕度の決めに冷たきイヤリング
冬ざれや一両電車橋渡る

中央区　小楠　勝代

閑座して茶の湯一服年の暮
黄昏るる家並(や)みのもみじ貴船宿
名も知らぬ小さき花咲く春の畦

中央区　小栗　道子

いま過ぎし風の一陣夏夕べ
残暑なほクロスワードは解けぬまま
シャワー浴び心の憂さを流しけり

中央区　小野田みさ子

草木に雨も春めく伊吹山
独り居の窓開け放す日永かな
大木に凭れ瞬時に蝉時雨

中央区　加藤　雅子

滑り台たんぽぽの野に飛び出す子
灼くる地にドクターヘリの降り立てり
剥落の仏像の鼻竹の春

中央区　神谷知恵子

家康像威風堂々夏兆す
野面積み武士の声秋の声
夕焼や一つの記憶炎えたたす

天竜区　笹瀬　幸代

「ママ」を辞め「母さん」と呼ぶ青林檎
スマホ見て髪を直す娘風光る
秋天やクレーン二機の対角線

浜名区　嶋田　好二

熊鈴や田貫湖めざす女旅
大木の洞伝説や七五三
木守柿へ口鉄砲の二三発

浜名区　清水　孜郎

鰡飛ぶや入江は波紋みだれなく
狩宿やまるくまん丸秋の雲
夏の日の肉体跳ねて槍のとぶ

中央区　鈴井あや子

馬込川水鳥軍団忽然と
風鈴の風首筋を通り抜け
ゴーヤー棚ティラノサウルス見つけたり

中央区　すずき

えんぴつを持つ小さき手秋の宵
初恋はいつかと問う娘天高し
日曜日ただ虫の音の中ひとり

中央区　鈴木　章子

トンネルを抜け花桃の里に入る
チューリップ遅速のありて一列に
色とりどりフリージャ光あつめいる

中央区　鈴木　敦子

水窪の帰りのバスや花辛夷
田雲雀やみすゞの世界平和なり
初日の出二階の窓に待つ夫婦

中央区　鈴木　浩子

美術館に仏像ずらり風涼し
安曇野の水と空気と花野風
ぐつぐつと塩茹でジャンボ落花生

中央区　鈴木みちゑ

よく働く右手を褒めて芋洗ふ
かろやかな歩をよろこべば小鳥くる
ほこと盛りご先祖さまに栗の飯

中央区　鈴木　嘉子

木洩日の色を重ねて落椿
芽柳の水面の影の定まらず
白雨去り鳰の潜れる濁り川

中央区　竹田　道広

まず先(さき)に落葉(おちば)をひろう測量士(そくりょうし)
山の日や立山杉はなで肩(かた)で
金継ぎの夫婦茶碗に今年酒

中央区

薫風やそぞろ歩きのそぞろ歌　舘石　照子

父の日の錫のぐい呑みまろやかに

松落葉家康像の肩に触れ

中央区

日焼の子我は遊びの優等生　田中美保子

川涸るる時の流れは止まらず

二人乗りのバイク疾走秋夕焼

中央区

折り紙のさかなのモビール夏の風　坪井いち子

つり橋のかすかに揺れて雲の峰

星飛んで新人アナのデビューかな

中央区

とろろ汁いまだ越せぬか母の味　戸田田鶴子

すき焼きの湯気が話を包みこむ

並びたる一族の墓紅葉散る

中央区

花衣解いてしばらく寂の中　中津川久子

夏めきぬ横断歩道の白ライン

夏帽子放り大の字部活の子

浜名区

港湾の赤きクレーン冬日あび　中野ふさ子

豆まきや知らぬ子もおり靴あふれ

暗やみに乳色うかべ曼珠沙華

中央区　中村つぎ子

熊野（ゆや）の藤ささやくやうに頬を撫で
吊橋といふ涼しさのど真ん中
風鈴の睡魔誘ひてゐるやうな

中央区　中村日出子

シルバーカー立ち止まりいる花野かな
折り紙の飾り冑の緒をしめる
佳きことか庭に毬栗ひとつ降り

中央区　西野久美子

さやけしやコップに注ぐ水の泡
爆笑の後に涙や村芝居
小鳥来るそのはばたきの真白かな

浜名区　二橋三千代

束ね髪解き介護士の花衣
新しき夫婦茶碗や今年米
魚板打つゆるりゆるりと秋の雲

中央区　根本　文子

夏帽子一人旅する名古屋城
境内に香る木犀四ツ葉摘む
ゆず風呂に入り一日良しとする

中央区　平野　旭

初桃にそっと触れたる若き母
金屏風その裏側の寒の闇
サーカスのさよならも無く秋を行く

中央区　古谷　とく

すぐそこと言はれし春を待つ朝
百薬にまさる外出（そとで）や風薫る
日の暮の日毎早まり木の実落つ

中央区　ま　さ　こ

暫くは吹かれていたし秋の風
わだかまり解けて寒梅ほころびぬ
吾子たちのここはふる里萩の花

中央区　松島　義徳

蓑虫や時間が解決してくれる
卒業す使い切ったるペン残し
黒南風や壬生寺参る傘の赤

中央区　松本憲資郎

橋脚の航路の文字や神の旅
日を溜し落葉時雨に抱かれぬ
一文にひかれ京都の日記買ふ

浜名区　峯村友香里

風車吹いて走って立ち止まる
子と作るゼリーに気泡入りて夏
凍蝶に物干し竿を譲りけり

中央区　宮本　惠司

弾き初めはベートーヴェンのソナタ春
深深とチェロの音ひびく秋の宵
篳篥の音の鋭し冬の夜

中央区　山川美恵子

秋晴れに水平線や沖に船
痛み止むナースの笑顔と五月晴
春風や帽子飛ばして野を駆ける

中央区　山田　知明

我が庭も探梅の人覗きけり
ランドセル開けては閉めて春を待つ
傘に落つ枝垂桜の雫かな

中央区　和久田郁江

引込線の手旗信号尾花かな
秋風に楽譜舞ひさうコンサート
鶴の昨日は来たと春の川

中央区　和久田俊文

来るたびに屋根裏さがす盆休み
蝉落ちて陽の燃えたぎる旅の空
大根の出汁沁みたりて除夜の鐘

中央区　赤堀　進

毬栗（いがぐり）に彩画教室ざわつきぬ
杣人（やまびと）の薪を割る音冬紅葉

中央区　飯塚日出子

木漏れ日に包まれ眠るハンモック
鬼灯を抱へて参る雨の寺

中央区　井口　絹子

御赤飯皿に山盛り神迎え
朝焼けの空に柏手初御空

中央区
長縄やとびはねる子ら桜東風　池谷　静子
桜舞いたったひとひらパレットに

中央区
秋空や五匹のチワワ散歩する　石井　泰子
年末や弟の声亡父（ちち）の声

中央区
樽の中野菜揃へて冬支度　伊藤アツ子
夜もすがら鳴く鈴虫に耳澄まし

中央区
他の宇宙見えねど在ると去年今年　伊藤　倭夫
馥郁とパン屋の前の小春かな

浜名区
蝸牛見遣る子どもに杜の風　伊藤　正
白秋や彼方の山へ雲動く

中央区
クロスワード解いて夜長を夜長とも　伊藤　久子
膝小僧揃へて待てり庭花火

中央区
薔薇崩る一瞬のこと見届けぬ　井浪マリヱ
揚花火余韻のままに眠りいる

浜名区
灯台の螺旋かいだん桜雨　岩城　悦子
朧夜のレトロなメリーゴーランド

中央区　岩﨑　五郎

人の来ぬ観音堂へ花の雨
遠雷や自転車こぐ児尻上がる

中央区　内山　文久

汗ばんだ頸動脈に薬指
窓外の木槿も知らぬ大待合室（おおまちあい）

浜名区　内山　正己

はるのくもめぶきのこえもえねるぎい
はるのくもほくほくごはんこっぺぱん

中央区　大田　勝子

十五夜の唐黍畑に降りて来し
尖りたる風の通りや寒の入り

中央区　岡部　澄子

落葉掃く母の歌違ひしまま歌ひ
別れ来しわが身離れぬ冬満月

中央区　岡部すみれ

抱き上げし保護犬冬の陽のにほひ
青空に胎動兆す雪解山

中央区　岡本　蓉子

風鈴や音が空までとどきそう
つゆ草や草むらの中凛として

中央区　小楠　達司

寒明や湖北五山に鐘の音
里芋のつるんと剥けて喜寿祝

中央区　おっさん

茄子の牛去年の牛より出来が良く
バイト明け屋台へダッシュおでん酒

中央区　糟谷　修子

はり絵する母の横顔山粧ふ
母と娘（こ）と旅路はるけし風薫る

中央区　勝田　洋子

還らざる軍馬の塚へ椿落つ
曇天へ野焼きの煙登りゆく

中央区　加藤貴代美

秋めいて遠く離れた子を思う
秋祭りはしゃぐ大人も童心に

中央区　加藤みえ子

雪便り届いて暑さ恋しくて
子を待って雪がちらつき鍋の湯気

中央区　要　弘子

お留守番猫に声投げ秋の暮
山紅葉ベッドの脇に舞い落ちて

中央区　金子　典子

春の再会ぽつりぽつりと邪魔な雨
沈丁の香りに背き別れゆく

中央区　嘉山　春夫

廃屋の額紫陽花の越す垣根
里山を分くる驟雨や日の光

中央区　菊地奈々子
ゴミ捨ての朝に日陰のチューリップ
黒トンボ塾に飛び込み人気モノ

中央区　切畠　正子
花散るや子も定年の年となり
早朝より草取る嫁を眺めをり

中央区　熊谷　文昭
林檎より皮降りてくるそろりそろり
つまようじ林檎は背中ばかりなる

中央区　齊藤　純子
甲子園球児の額風光る
空青く黄色コスモス光りけり

中央区　酒井　浩之
朝ぼらけ芝生掠(かす)むる夏燕
大字書(だいじしょ)の草稿を練る夜長かな

中央区　笹本　栄里
ひよどりやどこから来たか問ひてみる
シミ取りのクリーム買ひて一葉忌

中央区　清水　康成
新月や大念仏の古戦場
ウグイスの声聞き介護車椅子

浜名区　鈴木　勝則
初詣神とこころをつなぎ合う
日やわらぎ風に揺られてアゲハ舞う

石うすの水面にゆれる日々草　中央区　鈴木　京子

秋風の宅配便は茶色の絵の具

一輪の秋明菊のしをらしさ　中央区　鈴木　早苗

誰も居ぬ父母の縁側鉦叩き

地に目覚めたった七日の蝉時雨　中央区　鈴木　利定

どうするか家康オイショの凧祭り

野に遊ぶアサギマダラを見送りて　天竜区　鈴木　俊彦

病癒え宗谷岬の春の歌

紫陽花に蝉の抜け殻三つ四つ　中央区　鈴木由起子

我が剥き母が炊き上げ栗ごはん

北風や自転車漕ぎの五十年　中央区　砂間　達也

道しるべ無き杣道や雪時雨

射干の葉群に銀の雫落つ　浜名区　竹内オリエ

入道雲駆け出してゆく波打ち際

大鷹に先導されて峠道　中央区　竹平　安則

雪化粧待つイエローの八ヶ岳

中央区　田中　愛子

さくら咲きのどかに暮れる裏小路
楤(たら)の芽を揚げてにっこり食卓へ

中央区　手塚　みよ

戸の開くを待ちて秋蚊は入り込む
朝焼けの西まで染まるちぎれ雲

中央区　戸塚　郁代

流星や心わくわく夜明まで
白鳥や夫(つま)の形見の双眼鏡

中央区　戸塚　忠道

青空へ銀杏黄葉の燦燦と
市街化の旧開拓地稲架(はざ)も消ゆ

中央区　鳥井　美代

本伏せてかすかな虫の音認めけり
喜びの春風のごと届く朝

中央区　中野万里子

足元の熱波渦巻く夏きたり
白鷺(しらさぎ)の首を丸めて冬隣り

中央区　成瀬　喜義

働かぬ爪よく伸びて夏了る
エレベーター日焼けの顔を吐き出しぬ

中央区　ノーリターン新

十五夜に縁側きしむ影ひとつ
冬支度誰もが急ぐ靴の音

中央区
稲妻や畳の家にひとりきり　野田多満子

みずうみの銀鱗跳ねる小春かな

中央区
銀杏の木描く感性研ぎ澄ます　袴田　里桜

霜焼けを友と身を寄せ握り合う

中央区
廃校の馴染みの桜伐られけり　林田　昭子

月下美人移住の友の置き土産

浜名区
大相撲小兵力士の知恵と技　藤生　君江

紅葉(もみじ)の葉ほほにつけ合い遊ぶ子ら

中央区
山裾の車窓に眺む蕎麦の花　藤原　孝志

園児らの木陰に外す夏帽子

中央区
秋刀魚焼けみなでわいわい台所　古橋美由紀

久々や柿の手みやげみな笑顔

中央区
早春の空に向かひて背伸びする　松本　栖枝

椿落つ庭に立ちいで空仰ぐ

中央区
ミラー越しに虹　アクセルも軽やか　みみハム

後輩の脚本(ほん)に泣かされ秋の空

天竜区
杖ついて投票終へし目に青葉
美山　愛

深秋や（三つ葉葵の御紋）葵の手桶整然と
中央区
村松　道夫

初御空家康立てり浜松城
若き日の十湖歩みし青田道

中央区
夕焼けと真っ赤にもえる紙とペン
モハメッドマシュルール

夏課題猫はちっとも手貸さない
浜名区
あひる

セニアカー紅葉の坂超え九十越ゆ
浜名区
伊藤　美代

早く来よ秋よ早くと病む八十路

中央区
青嵐放ったままの問題集
榎本　紗希

中央区
名月にうさぎはいるかと目をほそめ
尾上　正代

中央区
鍋パーティーみんなの箸が気に障る
加々美さよ

中央区
秋空にきれいに映える碧い山
神谷　司

中央区
三婆の大いに語る梅雨晴間
川合　泰子

浜名区
パンパスグラス見れば堤防まる裸（はだか）
後藤　とも

中央区
ペダル漕ぎ月の霜照る十七時
柴田　奎哉

中央区
駐車場友来ぬままに雁渡し
杉本　仁樹

中央区
大谷君水無月のホームラン増
鈴木　和子

中央区
金柑（きんかん）に蝶卵（ちょうらんまこつ）附け果ててゆく
髙木　勝海

中央区
バレンタイン期待をよそに濡れる袖
髙田　周

中央区
口あけて反り身で浴びる尺花火
髙山　功

中央区
春浅し蛙（かわず）の鳴く音（ね）遠慮がち
髙山　紀惠

中央区
冬本番何枚着込むか勝負中
田中　菜乃

中央区
栗眺め購入迷う道の駅
永田　恵子

中央区
年末は友と集まり振り返る
中村　大洋

中央区
荒梅雨徒花と散るヘアセット
新田　佳音

中央区
善人の顔してそこに毒キノコ
春元　高

中央区　飛天女

野地植の野バラ元気で今日も咲く

浜名区　牧元久

広縁に尻だけ見えるかじけ猫

中央区　吉野民子

山門の観音拜す照紅葉

中央区　渡瀬雄介

短日の真っ赤に燃える帰り道

定型俳句選評

高柳克弘

俳句には、言いたいことをストレートに表すという良さもありますが、あえて言いたいことを伏せたり、わかりにくくしたりすることで「余白」が生まれ、読者が書かれていないことをあれこれ想像する楽しみができます。上位に入賞した句はいずれも、鑑賞する喜びを与えてくれました。

夏の月家康と酌む忍冬酒　有賀　千子

忍冬酒はスイカズラから作った薬酒で、家康が長寿を保ったのもこの酒のおかげと伝わります。この句は「家康と」というところが眼目です。「家康の酌む忍冬酒」では、蘊蓄にすぎません。「家康と酌む忍冬酒」というと、家康と自分が酌み交わしている空想上の場面となり、俄然、面白くなります。家康に肖って、自分も健康、長寿を保ちたいという願望も読み取れます。空に涼しく照る「夏の月」を配したのも気分が良いですね。

通されし上の座にして隙間風　藤本　幸子

「上の座」とは上座のことでしょう。上座に通され、丁重なもてなしを受けているのですが、あいにく隙間風がピューピュー入ってきているという展開にヒネリがあります。おそらく、家の主は、この隙間風に気づいていないのでしょう。にこにこと、満足げにもてなしているわけです。気づくべき人が気づいていないという認識のズレに可笑しみが生まれています。

野面積み石に残暑を留めおり　山口　一郎

「野面積み」とは、自然の石をそのまま積み上げる手法のこと。浜松城の石垣が、まさに野面積みの好例ですね。隙間やでっぱりが目立ち、荒々しい印象です。見ていると、残暑のうんざりした感じが募ってくるというのは、納得がいきます。ここではさらに「残暑を留めおり」と一歩踏み込んだ表現を取っています。いにしえ、城がまだ城として使われていた時代の「残暑」が、ずっと石垣にとどまっているような表現になっているのです。いま、眼前にしているものを通して、はるかな時代に心を遊ばせています。今も昔も変わらない自然や人間の真実があり、それをつかみたいという作者の意思を読み取りました。

栗の毬はぜる山家に従姉妹会　尾林せい子

「栗の毬はぜる山家」までは、隠者の住まいのような茅屋を思い浮かべますので、やや緊張感をもって読み進めるのですが、最後に「従姉妹会」と来ると、ほっと顔がほころびます。「山家」とはいっても、山の料亭やレストランといった程度なのでしょう。「従姉妹会」の開かれる場所だとすると、「はぜる」のニュアンスがちょっと変わってきます。会話がはずみ、笑いが起こっているかのような、そんな場面が想像できるのです。

二階より銀河を眺め仕舞風呂　藤井　星子

人の使った湯に入る「仕舞風呂」を厭う向きもありますが、後に控えている人を気にしないでゆっくりと浸かれるのは良いですよね。この作者のお風呂は二階にあって、夜空が眺められるのですから、なおさら「仕舞風呂」の時間が豊かになるというものです。現代社会では人工の明かりで「銀河」が現実に見えるところは限られていますが、これは澄んだ夜空に見える星々を誇張したものとみればよいでしょう。この誇張もまた、効果的でした。

紙幅の関係ですべては紹介できませんでしたが、力ある作品をたくさん投稿いただきました。ありがとうございました。

自由律俳句
［市民文芸賞］

赤とんぼの群れ夏の扉を閉めている　中央区　源　次郎

をんなめらめら遊女（めす）になってく　夜の底　中央区　中津川久子

さよならを言うと決めた唇に紅をひく　天竜区　河合　香織

〔入　選〕

天竜区　岩本 夛津子

秋づく宵和服で通夜の客となる
風に乗りエンジェルトランペット唄うジャズ
稜線陽に照り時の鐘は光明寺
能管のヒシギ舞うシテの摺り足

天竜区　河合　香織

やり残したこと数えまた年の瀬
熱こもる耳元で鳴く水枕
暦月二桁そっぽ向く扇風機
卒業文集綴られた思春期の感受性

中央区　源　次郎

北風に押され芒の斜にかまえる粋
三日月にかかる行き場なくした夏の雲
振り向いた別れぎわ金色の十三夜
虫の音が奏でる宵ゆるゆると上弦

中央区　中津川久子

ビルにはぐれたゆうひ赤電に曳かれてくる
三日月の欠片あつめて恋編んでる
風にあやされて雲の大あくび
「おいとまします」白い月の置手紙

中央区　雨宮　智彦

娘が作ったシチューに春滴る
海風に岩蔭のアザミは何度もうなづく
家の外壁ヤモリ一匹涼しさを待つ

浜名区　伊藤　正

青を碧　蒼と惑う十五の春
クロスワード解けぬまま今日は過ぎ去り
戯れにヒガンバナ摘んだ雨の中

中央区　菊川　文江

春の香り　かくれんぼ苦手な沈丁花
図書館の静かな窓に風と戯れるカーテン
おひさまに恋して背伸び皇帝ダリア

中央区　鈴木　章子

蒼天に何かの知らせ鳥大声のこし
黒日傘くるくるどこまで母と子で
石の声まだきめてないと桜蕊

中央区　鈴木　和子

大トンボ光る青き背ついと来る
侵攻に歯がゆさ抱え栗を剥く
木もれ日に石蕗黄色の風になる

中央区　戸田田鶴子

老いの手に線香花火ゆれ動き
部屋中に色を広げる冬仕度
釣竿に羽根を休める赤とんぼ

中央区　豊田　恵子

母の日の花束まるごと受け入れる大きな器
読み終えて現(うつ)つに戻らぬ心抱える
どんぶらこおいしい桃みつめて選ぶ店先

中央区　松尾　尚子

風が透き通っている街角の吹奏楽
曲げたり伸ばしたり腰の機嫌を取る
木漏れ日がころころ笑っている

中央区　井手賀代子

まとわりついた灼熱洗い流す月のひかり

稲を刈るにおいコスモスゆれる道端

中央区　伊藤アツ子

人生みたい　しゃぼん玉が飛んだ

たんぽぽの綿毛と風に乗る私がいる

浜名区　岩城悦子

すみれ色の涙零せし肩抱く星月夜

行合いの空に魚も鳥も居て平和

中央区　内山文久

項垂れて雨水溜まりに萩　オフェリアのごと

老いた桜樹（さくらぎ）「生きているに」と今年（こぞ）も笑む

中央区　岡本蓉子

防災日黄色のハンカチ風にゆれ

戻りこぬ思い出多い卒寿かな

中央区　おっさん

暑さに負けず今日も元気な自動草刈機

道端の枯蟷螂逞（かれとうろうたくま）しさの影もなく

中央区　加藤美恵子

炎暑に緑のカーテン穴だらけ猫覗く

丸い背中の小さな母浮かぶ彼岸花

浜名区　木俣史朗

暑さ朝から満ちている列島の暦の戸惑い

列島の昼へ歌のせて平和の鐘は幾つ鳴る

浜名区　竹内オリエ

熟れ柿に小鳥集う昼下がり
今日もまた喪服の女演じるわたし

天竜区　ちばつゆこ

夢うつつで聴く雷なのか爆弾か
あっけなく逝ってしまった月の欠けた日

中央区　中谷　則子

通りすがりの人に揺れる白いコスモス
初盆のお経にウグイスのうたう声

中央区　中野万里子

脳内(のうない)のお花畑(はなばたけ)の老(おい)アリス
切なさの媼(おうな)呼ぶ声風伝(つた)う

中央区　根本　文子

電話口の貴女春風に乗ってふわり横に並んだ
花びらが踏まれて押し花になった神の庭

中央区　藤井　星子

梅雨らしく雲に重みがかさなって
早朝の空気をゆらす蟬の声

中央区　本藤　一義

風吹きてすすきの海が波をうつ
満開を匂いでつげる金木犀

天竜区　リコリス

シーソーでギッタンバッタン孫と夢中のお昼前
夢広く生きる希望かアクトレス

中央区　渡辺　憲三
足を一杯上げプール歩く喜寿の夏

指を忙しく動かしウクレレの音濁る

磐田市　渥美　朋可
あかぎれになるなよと親指をにらむ

浜名区　伊藤　美代
病む部屋に〝心配するな〟三日月さんの声届く

中央区　小笠原靖子
鏡に映った鰯雲　猛暑にさよなら

中央区　尾内甲太郎
瓦礫のなかに靴の幼さ

中央区　神谷　司
暑い日もマスク武装で汗滴りて

中央区　齊藤　純子
あちこちに鈴鳴りの柿空青し

浜名区　鈴木　勝則
君はそっと僕のそばからいなくなった

中央区　鈴木由起子
病み逝き人も　歳月が経てば　恵比寿顔

浜名区　戸田　敬三
明け方に香り漂う金木犀

中央区　ヒメ巴勢里
あらし過ぎ　夏やりなおすぜ　生ビール

中央区　古谷聰一郎
コオロギになって一緒にハモりたい寂しい夜

中央区　松本　栖枝

ひっそりと読書楽しむ梅雨の昼

天竜区　美山　愛

浜松まつりノンアルコールで観るテレビ

中央区　山中　伸夫

枯れ残る　夏の名残か　芋のつる

自由律俳句選評

宮本卓郎

「自由律俳句って何でもあり?」

今回の皆さんの作品に接し、自由律俳句における「形（姿）」と「リズム」にふれておくことは時宜にかなっていると痛感したので、以下に記させていただきます。

俳句は一つの段落をもっている一行の詩である

昨年度のこの欄で、荻原井泉水の著書『自然・自己・自由』から俳句の定義として引用したものです。

まず、この中の「段落」（即ち「句切り」）に着目して、自由律俳句の「形」について述べてみましょう。

定型・自由律を問わず、俳句には一句のなかにこの「段落」というものが必ずひとつ存在することが原則となっています。

例えば

古池や蛙とびこむ水の音　　芭蕉　・・・①

これがまあ終の栖か雪五尺　　一茶　・・・②

①は上五の下、②は下五の上に段落があります。

いわゆる定型句はこのように「や・かな・けり」等の切字によって段落がわかるものがほとんどです。

一方、自由律句は段落を必ずしも切字を用いて示すわけではありません。例えば

何を求める風の中ゆく　　山頭火

空にはとんぼ。いつまでも年とらぬ子が瞼の中　　松尾敦之

小さな「〇」を入れたところが段落で、これが俳句の形です。

さて、俳句は黙読だけでなく、是非、御自分の作品を声に出して読んでみて下さい。俳句を音として味わうとき、内容的かつ音的に一箇所ポーズをおいて読みます。これが段落（句切れ）であり、ここに「ふくみ」（思い入れ・余韻）が醸しだされます。同時に、俳句は言葉の連なりが「リズム」を内在する韻文です。「段落」と「リズム」が相俟って俳句の味がでるのです。

以上は荻原井泉水の著書『自然・自己・自由』及び『新俳句入門』を手引きに自分にも言い聞かせながら記しました。皆様の句作の参考になれば幸いです。

これらの観点から次の三句を市民文芸賞に推します。

赤とんぼの群れ夏の扉を閉めている

猛暑であった夏もやっと幕が下りるか・・・との期待・希望を赤とんぼに乗せています。誰もが感じることをさりげなく表現することで読者に余韻と心地良いリズムが伝わってきます。

特に「夏の扉を閉め」の措辞は秀逸です。

をんなめらめら遊女になってく　夜の底

意識の内奥に横たわる情念の世界を見事に描きだしています。まるでホラー映画の一場面のような、得体の知れない感覚が覆いかぶさってくるようです。上句と下句の間にスペースが入っています。これは多用するものではありませんが、そこは自由律。この句の場合は「段落」を意識的に示すことで、より「ふくみ・余韻」をはっきり表出することに成功しています。

さよならを言うと決めた唇に紅をひく

決然たる心持ちを「紅をひく」の措辞が見事に言い表しています。表現のリズムも良く、読者の胸にストンと落ちるように心情が伝わってきます。哀感を底流に据えながらも小気味良さの余韻が残る句です。

ほかにも気になった句の一部を・・・

図書館の静かな窓に風と戯れるカーテン

釣竿に羽根を休める赤とんぼ

早朝の空気をゆらす蟬の声

今日もまた喪服の女演じるわたし

これからも自由律俳句に親しんでゆきましょう。

川柳

［市民文芸賞］

今日を生き明日を夢見る万華鏡　中央区　浅井　常義

伸び代があると信じて夢を追う　中央区　宮﨑　和子

生き急ぐこともあるまい浮浪雲　中央区　源　次郎

気が付くと引き摺っている捨てた過去　中央区　竹山惠一郎

〔入選〕

中央区　池田　稔

指切りの孫は余命を延ばし行く
終活にまだ捨て切れぬラブレター
ボージョレの旨さ知らない紙コップ
行政の隙間チョロチョロ土石流
好奇心まだ衰えず食う雑煮

中央区　鈴木　均

報恩の父母に並ぶは齢のみ
拘りをわが身に向けずひとの為
宿命を使命と捉え前を向く
子らの願いいつもわが家は平和基地
打ち込んだ想いに見合う晴れ姿

中央区　髙柳　龍夫

お参りの登る石段老いを知る
雨の日も代理で済まぬ医者通い
歳重ねやっと気付いた運の良さ
妄想と気づかぬままの思い込み
新聞をスマホに替えて進化とす

中央区　田中　恵子

ふと見えた母の背中に老いの影
古傷を抱えたままで伸びてく樹
手放した夢を再び追いかける
迷うも楽し最後に決めるのは私
白紙へと戻す未来を描くために

中央区　寺田喜代子

過疎進みバス停が消え店も消え
古き良き昭和の時代遠くなる
月命日寂しさつのる墓参り
ひと手間の亡母の味にはかなわない
最高の笑顔で攻める孫の知恵

中央区　徳田美知子

節くれた母の手そっと包み込む
同じこと何度でも聞くおもいやり
たわいない一瞬が好きつないだ手
共しらが時を刻んで半世紀
いま一歩苦手意識が邪魔をする

中央区　牧田　龍司

キッチンから聞こえるリズム良い調べ
温かい言葉に和みだす心
少年の夢へ肩押す父の風
引っ張って背中を押して老いの坂
人生を楽しむ術へ喜寿の風

浜名区　山口　英男

ひたむきな汗が明日の糧になる
節くれた指にドラマが詰ってる
忘れたいことはしっかり忘れない
こだわりを捨てると丸くなる余生
卒寿過ぎ歩ける足だいとおしむ

中央区　浅井　常義

消した影浮き彫りにして今を生き
日を浴びたピエロと笑う母子草
今日蒔いた種に明日を託す夢
泣き笑いピエロ立ち位置迷い出す

中央区　池谷　和廣

秋は消ゆ明日は立冬今日夏日
トマトもか価格高騰我唖然
四年前エコパの奇跡今励み
ガザは今死児を抱(いだ)きて父悲嘆

浜名区　池谷八重子

敬老会待ってたデビュー先送り
チグハグな会話も相手おればこそ
あの口へキスしたのかと若き日々
笑顔には薬に勝る力あり

浜名区　梅川　一惠

何のため生きるかよりも今日無事に
生き残るコツはあっけらかんと運
クーラーでホットコーヒー飲む平和
出来心ですと許した甘い嘘

浜名区　小川　憲雄

梅雨明けて蝉の合唱暑さ増す
ワイドショーいつも話題は大谷さ
彼岸花猛暑に負けず赤々と
猛暑過ぎ涼しさ戻り元気出る

中央区　嘉山　和美

力抜くことを覚えた生きやすさ
つるべおとし稲架(はさ)かけ急ぐ老夫婦
豆鉄砲食ったように増える歳
追い越しも出来ぬバイクのマイペース

中央区　菊川　文江

太鼓判押された腕が自信持つ
自己見つめ旅路の果ての青い空
灰色の過去を切り捨て歩く靴
決別の日を思い出す銀の雨

中央区　恭　子

飲み会の雰囲気が好きさあコーラ
奈良漬けが饒舌になる下戸始め
酒の縁恋は魔物と後で知る
飲んべいに嫁いだばかり御相伴

浜名区　鈴木　勝則

運命か今を見つめて燃えつくす
梅雨空心はいつも晴れている
蝉の音に今日の始まり良い目覚め
蝉の音に植木整えシャツの汗

中央区　鈴木　賢三

妻逝きぬアイラブユーを言い忘れ
おもしろい着想生かし苦況ぬけ
八十路すぎ負けてなるかとジム通い
ペテン師もうちのおやじにゃ歯がたたず

中央区　鈴木　敏子

失敗が甘い見通し戒める
聞きかじる噂話に付く尾ひれ
言い訳が虚しさだけを置いてゆく
少子化の縮図のような秋まつり

天竜区　鈴木　俊彦

屑籠に捨てた想いを拾い上げ
病癒え老いに日の射す夫婦旅
確執を洗い流して得た余白
賀状手に青春の日に迷い込む

中央区　竹山　容子

冬支度急かせる風が山を降り
腹八分月の品格十三夜
ためらいの荷物の重さ愚痴る腰
白髪も鏡の中で板につき

中央区　春元　高

ゴミ捨て場夏めく朝にカラスの目
秋惜しむ畑仕事の影伸びる
庫裏の庭銀杏避けて客の来る
神楽殿雪より白き巫女の足

中央区　宮﨑　和子

人並みで充分ですと日日のどか
ありのまま認め明日も前を向く
好奇心あって毎日出る元気
挑戦する意欲あるうちやってみる

天竜区　宮澤　正人

ふんわりと朝陽が香る里の朝
図書館へ言葉探しに足運ぶ
知ることでドーパミン増え若返る
ヒラメキが雑談中に降りてくる

中央区　伊熊　靖子

心根に気付かぬままに母が逝き
過ぎた日の苦楽を活かし生きる意地
厭なこと忘れ大根真っ二つ

中央区　伊藤アツ子

豆撒きを済ませた鬼が子と遊ぶ
「どっこいしょ」畦に腰かけ苗たばね
藁帽子川面に映える戻り鮎

浜名区　伊藤　正

鰻重は妻が特上ぼくは並
ぼくの恋寅さんみたいはぐれ雲
オペ終えて視界くっきり白底翳

中央区　稲垣久美子

深呼吸血圧計の前に立つ
カーディガン温度変化の必需品
十三夜近くの星も輝いて

中央区　岡本　蓉子

つかまえて乗って行きたい春の風
草の中タンポポの花凛として
熱戦の高校野球日焼顔

中央区　竹山惠一郎

善人の仮面を剥がすわが罪過
過去に蓋して語らないこと数多
片減りのヒール辛苦の過去語る

中央区　手塚　美誉

今日も又仰天ニュース花ざかり
年金で施設ゆくには足りぬ額
家屋敷渡した後は用は無し

中央区　戸田田鶴子

バーゲンの服着こなして春の街
お祭に綿菓子買った孫二十才（はたち）
今年こそ筆なめらかに初日記

中央区　根本　文子

晴れの日は手間惜しまずに布団干す
自慢する上等な生地古ズボン
身内でも断わる勇気口に出し

中央区　藤井　星子

卒寿まで如何に生きたか顧みる
子に返す親に貰った愛の数
ボケ防止関心持って挑戦す

中央区　藤原　孝志

自分こそ正義と思う独裁者
過去のこと誰にでもある言えぬこと
一言を夫婦円満がまんする

中央区　古谷聰一郎

おみくじは小吉と出たちょうど良い
賭け事の醍醐味知った愚か者
別のこと考えながら妻に添う

浜名区　谷田貝忠弘

フジバカマアサギマダラを招いてる
日本は自国の知恵で守りたい
ワクチンが何時の間にやら七回目

中央区　山中伸夫

首傾げ何を思うや猫の顔
多すぎるサプリ宣伝うんざりだ
パソコンのキーを踏みつつ猫が行く

中央区　足立和代

思い出は明日へと続く糧になる
財産は全て心の中にある

中央区　あつこ

カラオケに一人舞台の夢を見る
金婚に「感動」「感謝」ぶら下げる

浜名区　小川道子

天災の残す爪痕胸痛む
道端にひっそりと咲く露草や

中央区　神谷司

何もないほのぼの時間至福かな
休みの日好きな音楽心地良い

中央区　源次郎

仲秋に月より映える茜雲
老い先の不安かき消す百舌の声

中央区　高原　詩音

無造作に並ぶスリッパ家族の図
インフルとコロナを経ても子ら元気

中央区　髙山　紀惠

いやな事時はこれらを流し去り
人の波コロナ解除で皆笑顔

中央区　竹川美智子

あれそれで笑い絶えない日向ぼこ
若者の会話注釈入れて聴く

中央区　竹平　安則

中東の火事場泥棒中露の手
マイナンバー漏れた情報闇の中

浜名区　夏目　正樹

みかん切り丸い背中がよく喋る
床屋さん医者に行くより為になる

中央区　飛天　女

言葉には心にしみる時がある
目と舌とにおいで食す我がいる

中央区　平野　旭

花冷えや人恋しかりセルフレジ
親の背を見ていてくれた其の言葉

浜名区　藤田　盛雄

三歳児嫁の本音を言ってのけ
嘘じゃないあの一言で今本気

中央区
はしゃいだ子今は年頃すまし顔
馬塚　五朗

いいことを思い浮かべて眠る夜

中央区
十六の胸の膨らみ初ゆかた
馬渕　征矧

コトコトと個食の支度板に付き

浜名区
楽しみを今か今かと待ち望む
山田　良藏

坂登るまだ大丈夫膝が言う

中央区
心配の先回りして身を壊し
由倉　典之

大笑い不安と悩み吹き飛ばし

中央区
冬散歩お持ち帰りの湯気の糞
和久田俊文

鏡見て長年の無駄思い知り

浜名区
保冷剤フル回転の冷凍庫
伊藤　美代

浜名区
G・W忍者足りぬと観光地
岩城　悦子

中央区
春が来た黄砂が街にやって来た
内山　文久

中央区
マイナンバー覚えているかパスワード
江間　得二

地の際に母ご自慢の雲ひとつ　中央区　尾内甲太郎

体重が減って採血良き数値　中央区　加藤貴代美

此のごろはちぢむ身長ふえる幅　中央区　加藤　弘

終夜（よもすがら）君の言葉を咀嚼する　天竜区　河合　香織

涙腺の緩みて心耕せり　中央区　川上　慶子

小さくも静かな一日空蒼く　中央区　河島いずみ

赤トンボどこまで行くのスイスイと　中央区　齊藤　純子

同じヒトなのに侵攻解けぬ謎　中央区　鈴木　和子

コロナ禍で墓地の周りに枯れ尾花（おばな）　中央区　鈴木由起子

カタカナ字多く辞引きの頁繰る　中央区　Z・K

適材のはずがはずれて屋根かしぎ　中央区　髙木　勝海

笑わされ泣かされ孫の落語見る　中央区　髙山　功

浜名区
ああここは遥かな運命(さだめ)見える丘　竹内オリエ

中央区
梅満開ひねもす眺め首痛き　竹田たみ子

中央区
終活の途中で増える必読書　戸塚　忠道

中央区
人肌の強みを武器にアナログ派　中津川久子

浜名区
八十路すぎ右目で少し見える福　藤生　君江

中央区
さつま芋久かたぶりの腹いっぱい　松本　栖枝

浜名区
そうだった気づけば生きる術(すべ)もあり　芳　子

天竜区
大学でランチ楽しむ御老人　リコリス

川柳選評

今田久帆

今年は昨年より応募者が九名減り、八四名、四一二句の応募でした。その中で私の心を捉えた二五句を市民文芸賞予選句として候補に挙げ、熟考した上で、四句を市民文芸賞とさせていただきました。

三年間のコロナは私達の生活に大きな影響を与えました。面と向かって話すことさえはばかられ、自粛の生活を強いられました。その生活から解放された二〇二三年は、多くの人が人と触れ合うことの喜びを感じ、自分の思いを言葉で表現することの大切さを実感する年になりました。川柳が自分の思いを表現し互いに共感し、日常生活の喜びをかみしめるひとつの手段になっているように思います。地球変動の不安や、世界各地で続いている戦争への不安、また物価高による日常生活の叫びを句にすることで、互いに共感し合い、心を解放していくひとつの手立てにもなります。互いの思いを伝え合うことで、新たな明日が見えてくるし、新たな一歩を踏み出す力になるように思います。

市民文芸予選句

力抜くことを覚えた生きやすさ
確執を洗い流して得た余白
温かい言葉に和みだす心
言い訳が虚しさだけを置いてゆく
おもしろい着想生かし苦況ぬけ
古傷を抱えたままで伸びてく樹
月命日寂しさつのる墓参り
天災の残す爪痕胸痛む
笑顔には薬に勝る力あり
節くれた指にドラマが詰ってる
秋惜しむ畑仕事の影伸びる
指切りの孫は余命を延ばし行く
三歳児嫁の本音を言ってのけ
節くれた母の手そっと包み込む
大笑い不安と悩み吹き飛ばし
何のため生きるかよりも今日無事に
灰色の過去を切り捨て歩く靴
お参りの登る石段老いを知る
宿命を使命と捉え前を向く
一言を夫婦円満がまんする
図書館へ言葉探しに足運ぶ

市民文芸賞

◎今日を生き明日を夢見る万華鏡

万華鏡を回す度に美しい景色が現れ、その景色は二度と巡って来ません。今日を精一杯生きれば、明日の希望が湧いて来ます。

◎伸び代があると信じて夢を追う

今後まだまだ成長していくという実感があれば、たとえ失敗しても自分の可能性を信じて夢を追うことができます。

◎生き急ぐこともあるまい浮浪雲

自由気ままに生きることができれば心穏やかに暮らせます。老後はそんな生活をしたいというあこがれがあります。

◎気が付くと引き摺っている捨てた過去

過去はきっぱり捨てたはずなのに、過去のしがらみを引きずりながら生活している自分にふと気付くことがあります。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸　第70集』作品募集要項

一　趣　旨　市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸第70集」を編集・発行します。

二　発　行　浜松市

三　編　集　公益財団法人浜松市文化振興財団　浜松文芸館

四　応募資格　浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)

五　募集部門及び応募原稿

部　門	枚数等(一人)	部　門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(一編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

※　原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。

※　ワープロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。

※　原稿が複数枚になる場合はページ番号を付けてください。

六　選　者　選者の氏名は、令和六年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第70集」の作品募集要項に記載します。

七　募集期間　**令和六年九月一日(日)から十一月二十日(水)まで。(必着)**

八　応募上の注意

①　**応募作品は、本人の創作で未発表のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社、新聞等へ投稿した作品は応募できません。**

②　**応募する作品ごとに、規定の応募票（コピー可）を必ず添付**してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、中央区まちづくり推進課、市内の協働センター・支所、図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。

③　応募原稿の書き方は、別紙の「応募原稿の書き方」を御覧ください。

④　応募時に、選考結果通知のための**返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、切手110円分を貼って、**作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品の部門の数に関係なく一通で結構です。

⑤　難読の語や特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。

⑥　応募原稿は必ず**清書したものを提出**してください。

⑦　作品掲載の際には、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。

⑧　応募の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。

⑨　応募原稿は、返却いたしません。必要な方は事前にコピーをおとりください。

⑩　**応募後の、原稿の修正はできません。**

九　発表

選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で令和七年二月初旬までにお知らせします。

十　表彰

市民文芸賞及び入選の作品は、令和七年三月発行予定の第70集に掲載いたします。

市民文芸賞の方には、令和七年三月の表彰式で賞状と記念品、「浜松市民文芸第70集」を二部贈呈いたします。

入選の方には、「浜松市民文芸第70集」を一部贈呈いたします。

十一　その他

購入される場合は、一部七〇〇円です。

御提供いただいた個人情報は、応募者への連絡及び確認のために使用し、目的外に利用することはありません。また、御本人の同意なく第三者に開示・提供することはありません。

〈提出及びお問い合わせ先〉
浜松文芸館　〒四三〇－〇九一六　浜松市中央区早馬町二－一　クリエート浜松内　☎〇五三－四五三－三九三三

キリトリ線

「浜松市民文芸」第70集応募票

部門	小説 ・ 児童文学 ・ 評論 随筆 ・ 詩 ・ 短歌 ・ 定型俳句 自由律俳句 ・ 川柳 1箇所○で囲んでください	小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください 題名は、原稿用紙１枚目の右欄外にも、同じように記入してください 題 名　　原稿枚数（ページ数） 枚

ふりがな		ふりがな	
氏　名		発表名 ペンネーム	
年　齢	歳 （令和６年11月20日現在）	通学先・市外在住の方の勤務先 名　称 所在地	
住　所	〒		文芸館使用欄
電話番号			

チェックしたら☑をつけましょう	□ 作品は、未発表のものですか。（他のコンクール及び同人誌、結社、新聞等へ投稿されていないものですか） □ 返信用の封筒（110円分の切手を貼る）を用意しましたか。 □ 応募票は、作品ごとに作りましたか。

編集後記

今年度も『浜松市民文芸第69集』が多くの方々のご厚意に支えられ発刊の運びに至りましたことを、心からお礼申し上げます。クリエート浜松4階浜松文芸館講座室前の廊下の展示ケースに『浜松市民文芸』が第1号からずらっと並んでいます。見るたびに伝統とその重みを感じます。

今年の応募作品総数は、小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句・自由律俳句・川柳の九部門で一九九一点、投稿者は四八六名でした。投稿された皆さんの熱い思いが込められ、そして、浜松の文芸を愛する多くの方に支えられている『浜松市民文芸』です。市民文芸賞を受賞された作品だけでなく、応募された皆さん全ての、自ら書くことに挑戦した思いに、事務局として心から敬意を表したいと思います。

今回から応募票に『☑作品は未発表のものですか』という自己チェック欄を設けさせていただきました。自ら創造し書いたというオリジナル性を大切にしたいと考えたからです。ご協力いただきありがとうございました。

生成AIの急速な発達が進む今だからこそ、自ら書くこと、自ら読む（詠む）ことを大切に！

浜松文芸館がかかげている合言葉です。デジタルの便利さを享受するだけでなく、人として自らの創造や手作りを大切にしてほしい。先人の文芸活動を紹介する展示も、講座・講演会・朗読会も、そしてこの市民文芸の編集発行も、その思いで進めています。これからも自ら書き、自ら読み（詠み）、文学や文芸に親しみ楽しんでくださる方が増えていくことを期待しています。

なお、今回から『浜松市民文芸』の表紙見返しには、当文芸館でその文化的業績を紹介し続けている「浜松ゆかりの十人の先駆者」を掲載しました。そして、裏表紙は今回も、当文芸館の活動に参加している静岡大学地域創造学環の学生さんにお願いしました。少女が本を読む姿の上に「文芸で広がる世界」とあります。若い世代の文芸へのいっそうの参画を期待するメッセージになっています。

最後に改めて、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、ご協力に感謝し、厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館　館長　伊熊敬一

浜松市民文芸　第69集
令和六年三月十六日　発行
発行　浜松市
編集　（公財）浜松市文化振興財団
浜松文芸館
〒四三〇－〇九一六
浜松市中央区早馬町二－一
☎〇五三－四五三－三九三三
印刷　杉森印刷株式会社

浜松市民文芸　第六十九集　発行日　令和六年三月十六日　編集・（公財）浜松市文化振興財団 浜松文芸館　浜松市中央区早馬町2―1　電話053―453―3933

浜松文芸館 × 静岡大学 地域創造学環 SCHOOL OF REGIONAL DEVELOPMENT

浜松市民文芸　第69集